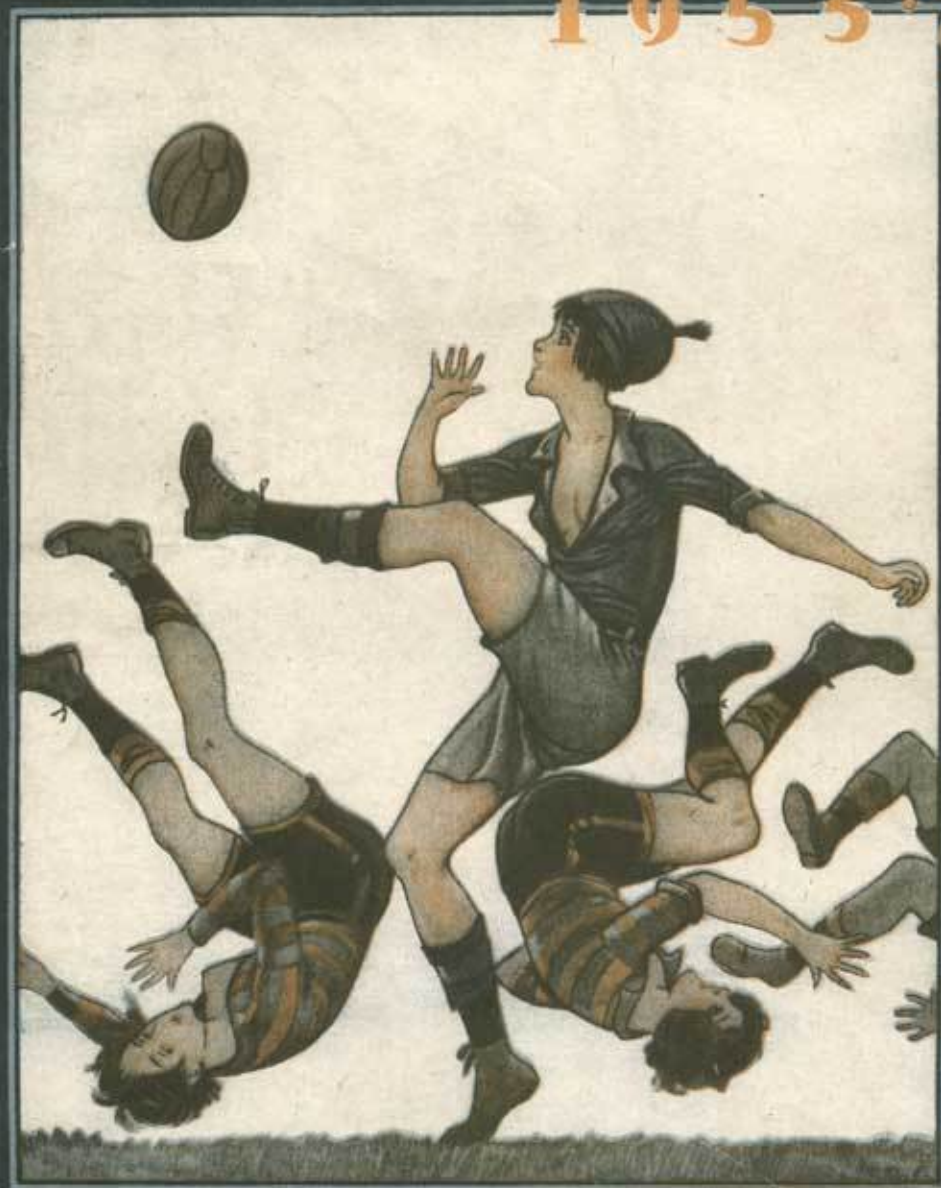


# 奇譚クラブ

1953・8



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ



8



定價 百円

地方売価 百参円





美

し

き

・構成・  
美濃村 晃

・撮映・

塚本鉄三

縛

し

め

(縛られた女ばかりの十六態)

全部未発表の特寫!

縛られた女の中、優美さと緊縛感の秀れた代表的な絢爛目をあぞむく十六態  
特アートの美術コロタイプ印刷を施した十六葉を貼付した豪華なアルバム  
痺れるような妖しい雰囲気は、素晴らしい反響を呼んでまたくうちに限定部数を突破してしまいました。其の為、切以後の御申込に對しましては取敢えず一部御返金致して居りましたが、遂に読者の要望もだし難くやむを得ず若干部数増刷しました。此の機会を逃さず今直ぐお申込下さい。  
総て新に特寫したものでありますから、従来の写真と絶対に重複することはありません。

# 縛られた女の集大成

○増刷分、  
・頒価一部 五百円・

(送料荷造費 六十円)  
○絶対市販は致しません

## 内容

エビ責	足	柳
高手小手	鞭打ち	
芋虫	蠟燭責	
くさり	滑車吊	
床の置物	観念	
紅と白	荒縄	
目の絞	犠牲台	
雁字搦目	猿轡	

各葉解説文句付

○申込所 大阪府堺局区内菅原通り四丁  
書房代理部 振替大阪三四九五六番



オムパレード  
苦笑  
林 凡流 作



Bonkara



大好評！他に類例のない本誌独特の全部未発表の素晴らしい写真集成。  
女体緊縛美の写真（本誌口繪写真に発表不能のものを含む）

第六篇（第五十一集より第六十集まで）	十集分
第七篇（第六十一集より第七十集まで）	十集分
第八篇（第七十一集より第八十集まで）	十集分

集を重ねる毎に充実、新境地を開拓して参りました写真集は同好者の間に貴重なるコレクションとしての役目を果し、更に従来多数読者の趣向を取り入れ、直接分譲用として特別に撮影致しました。何れも印刷ではなく印刷紙に焼付けヘロタイプを施したもので極めて安価な実費にて分譲しているものであります。読者の要望によりまして多くはヌードの縛られた女の各種姿態であります。其の外着衣のものや半裸のもの道具を使用したもの等多様を含んでおります。次に三篇三十集分の各姿態の概略を示しておきます。

(第六篇) 51、逆さ吊り、絞首台、椅子縛り、ハシゴ吊り、くさり、52、猪吊り、椅子、後手棒、ハシゴ吊り、高小手、緊縛、53、腰巻二態、逆手吊り、くさり、ベツド、54、吊り、ソフアー、鴨居、くさり、と縄、手摺と棒、55、絞首刑、ストツキング、ハシゴ吊り、腰巻、蒲団、56、ローソク、吊り前、くさり、ドア、逆立、57、椅子逆立、猿ぐつわ、腰巻、ハシゴ折檻、ベッド後吊、ズロ

1ス、58、ベッド、ストッキング二態、椅子、ローソク  
 59、雁字搦目三態、手摺縛り、腰巻、60、梯子逆さ吊り、  
 床柱後手、板の間、大の字、ハシゴ逆吊り第七篇 61、  
 柱しばり、十字竿、ストッキング猿轡、天秤棒、ローソ  
 ク、62、長襦袢、ローソク立、柱しばり、後手、竿、63  
 長襦袢、後手天秤棒、前向十字竿、荒縄背面、猿くつわ  
 64、梯子段、立柱しばり、エビ責、アクロバット、芋虫  
 65、立正面縛り、後手竿、拷問台、後手66、逆立、荒縄  
 正面、後手棒責め、ハシゴ責め、半吊り、67、涕泣、長  
 縄絆足、綴通、エビ責、柱しばり正面、68、階段、柱  
 竿横面、同正面坐、晒し合、竿正面、69、柱しばり、晒  
 し物、荒縄荒縄、立正面縛り、下り藤、70、高手小手  
 立エビ責、荒縄荒縄、ストッキング、高手小手棒縛り（  
 第八篇）71、拷問板二態、逆手吊り、折檻二態、72、拷  
 問台二態、吊り以前、仕置台後手、仕置台仰向、73、和  
 服襪団、長襦袢、逆手合掌、洋装蒲団、洋装高手小手、  
 洋装手足逆縛り、74、桶各種五態、75、高手小手首縄、蚕  
 鞭打、処刑、仕置台、76、吊り寸前二態、法円流縛り、  
 立膝、拷問板、77、洋装エビ責、洋装高手字手、後手俯  
 伏、寝衣二態、78、責め場五態、79、十字架、十字架逆  
 立、料理台、滑車、折檻、80、吊り準備四態と吊り

**吊り三態特選集**（第一組・第二組・第三組完成）  
 キヤビネ版 三枚一組 五百円

トリックでない本当の吊し責めの姿態の中最も興味のあるものを選んで三組を作りました。これは総て未発表のもの。で前記の女体緊縛美の写真集と重複することはありません。

**◎襲われる女** シリーズ 十二態集 五百円

此れは暴漢に襲われる美少女の恐怖の姿態を縄をアク  
 セサリーに使用して極度の緊縛感を誇張した珍しい得難  
 い作品です。

曙 書 房 代 理 部  
振替大阪第34956番





・ 奇譚クラブ 八月号 目次 ・

寫眞被縛女体の研究……………辻村 隆

口繪 戦前戦後の  
挿繪に現れたる責め及縛り繪……………村田 誠一

扉 愛慾という管の下に苦しむ女性の生涯のシンボル

口繪 苦笑オンパレード  
鞭打たれる外國の少女たち……………林 凡流

色 狼……………渡辺 彌三郎

明治期の被縛画家……………児島 光

ア—ヌスへの讃歌……………三條春彦・画

苦悶する裸像……………伊藤 晴雨

福田 英一 (56)

住田 弘志 (33)

伊藤 晴雨 (28)

三條春彦・画 (16)

女人群像……………藤安 節子 (18)

悦虐 秘帖……………信太 蓉子 (90)

クリスチ—ヌの受難 (三)……………キッドロシユトツク・作

公妃の復讐……………吾妻 新・訳

被虐の愛情……………ザッヘル・マソツホ作

甘美なるアリスの降伏 (第二)……………沼正三抄訳解説

女腹切の考察と女の切腹例……………若林 啓子 (124)

夫婦愛の表現法としての裸女緊縛について……………寒川 緑・訳 (116)

片耳傳奇 (二)……………西澤 芳造 (68)

アブノ—マル・プレイ……………田谷 敬生 (60)

手記妻は縛らず (二)……………三陰春彦・画 (168)

らぶ・すれいぶ (第8回)……………嶽 收一 (53)

あるマゾヒストの手帖から (三)……………岡田 圭介 (165)

(沼 正三氏に)……………鬼山 絢策 (154)

女のズボンについて……………沼 正三 (70)

古川裕子さんへ與える……………吾妻 新 (132)

羽村京子さんへ……………佐治 須十 (153)

或る被虐性愛者の手記より……………川端 多奈子 (46)

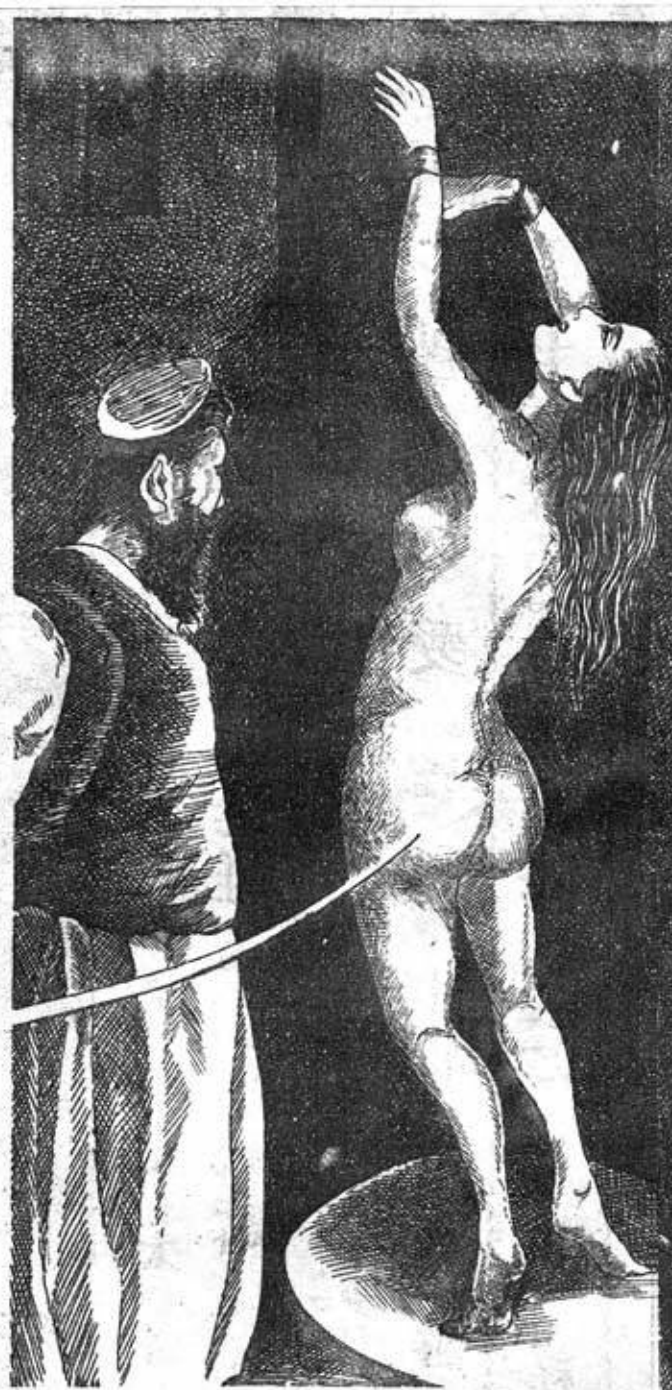
淫……………天泥 盛榮 (138)

みだらび……………松井 頼子 (91)

火……………栗原 伸・画







鞭打たれる  
外國の少女たち



Watanabe

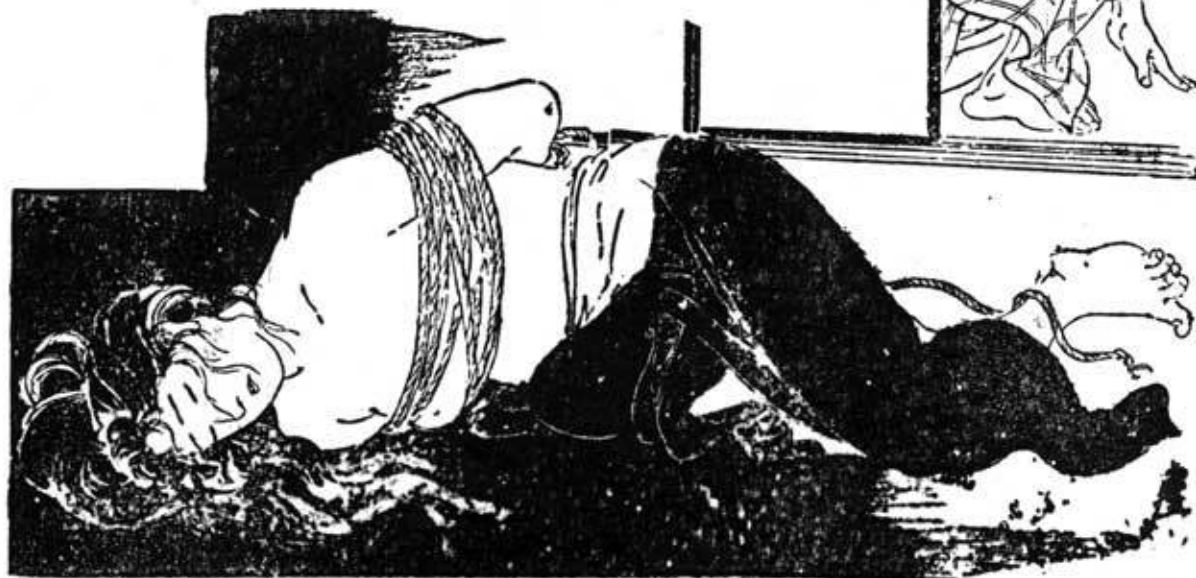


# 戦後の挿画に現われたる責め縛り繪

村田 誠一



「冬の金魚」岡本綺堂  
作。井川洗庄画。



関東大震災以後大正十三、四年頃?の「講談倶楽部」所載。神田お玉ヶ池に住む独身の俳諧師松下庵共月(四十六才)とその家の女中で色づ早いお葉(十八才)、それに弟すの其月とのもつれから、其月が焼餅をやいて、女中を責める。その情痴の世界の一節の挿画である。当時伊藤晴雨氏以外の人の縛り絵、しかも裸体のものは珍らしいものであつた。  
「……………随分手あらひ折檻をすることもある。ひどい時に

は素つ裸にして、麻縄で手足を引つくくつて、女中部屋に半日ぐらい転がして置いた事もあるそうです。然し近所の手前もあるので、そんな折檻も至極静かにする、女の方もどんな目にあつても、決して声をたてるようなことはなく不思議に歯をくいしばつて我慢を



(逸題 春彦画)

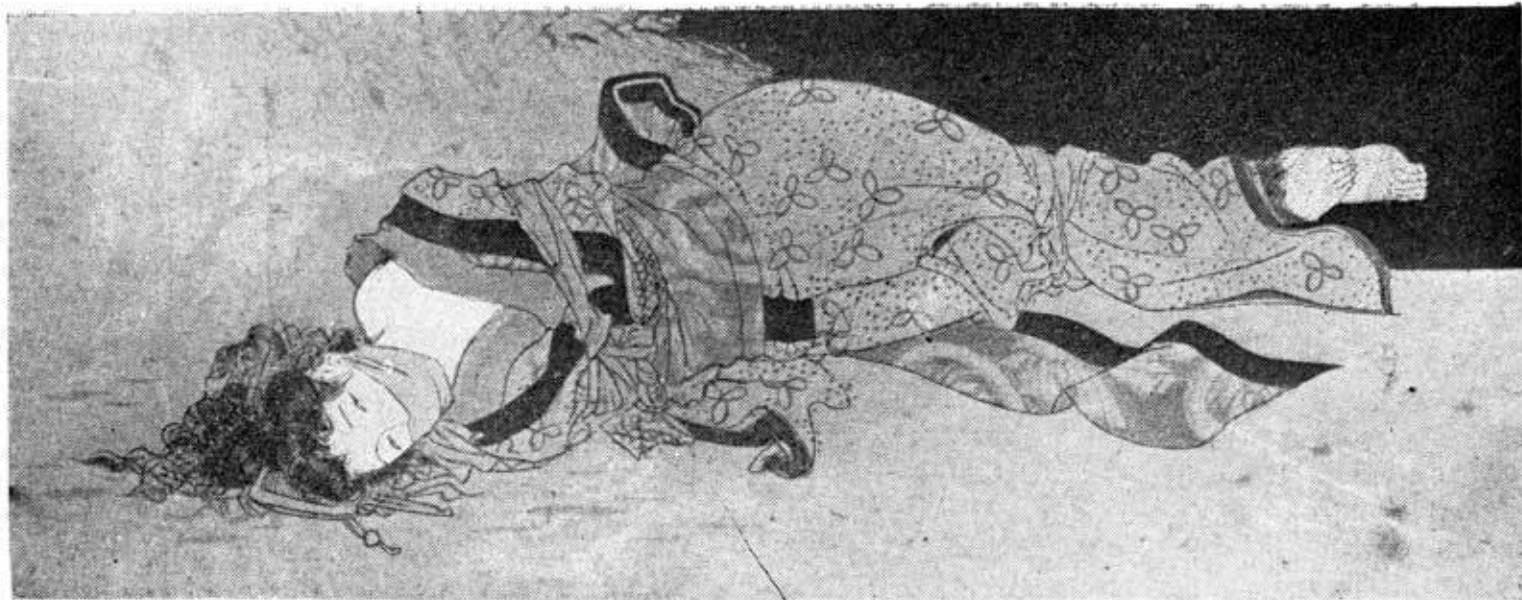


(色道大鑑)

していたそうです。……中略……打つたり蹴つたり抓つたりするものではありません。鳥渡お話にも出来ないうような、むごたらしい猥褻な刑罰を加えて



(りべらる廿二、新・所載のお富A)



## 切られお富

(東京所載)

のお富A)

苦しめるのですから「……」

「逸題」

春彦画

これも確か大正年間のだと思ふ。神戸又新報に連載された小説の挿画である。戦前のものとして、「冬の金魚」の画と共に珍しいものと思う。只切抜いておいたので、題名も筆者名も判然としていないのが残念である。

「色道大鑑」邦枝完二作。山本武夫画 昭和廿三年十一月五色文庫「邦枝完二嬌艶傑作集」所載。山本武夫の絵は小村雪岱の倅を偲ばせられ、何んとか妖艶な筆致である。

「何もそのように怯えることはないではないか、……中略……なる程余はそちを、裸身にいたした。しかし聊かも

## 舟橋聖一

岩田専太郎画



(りべらる所載のお富B)

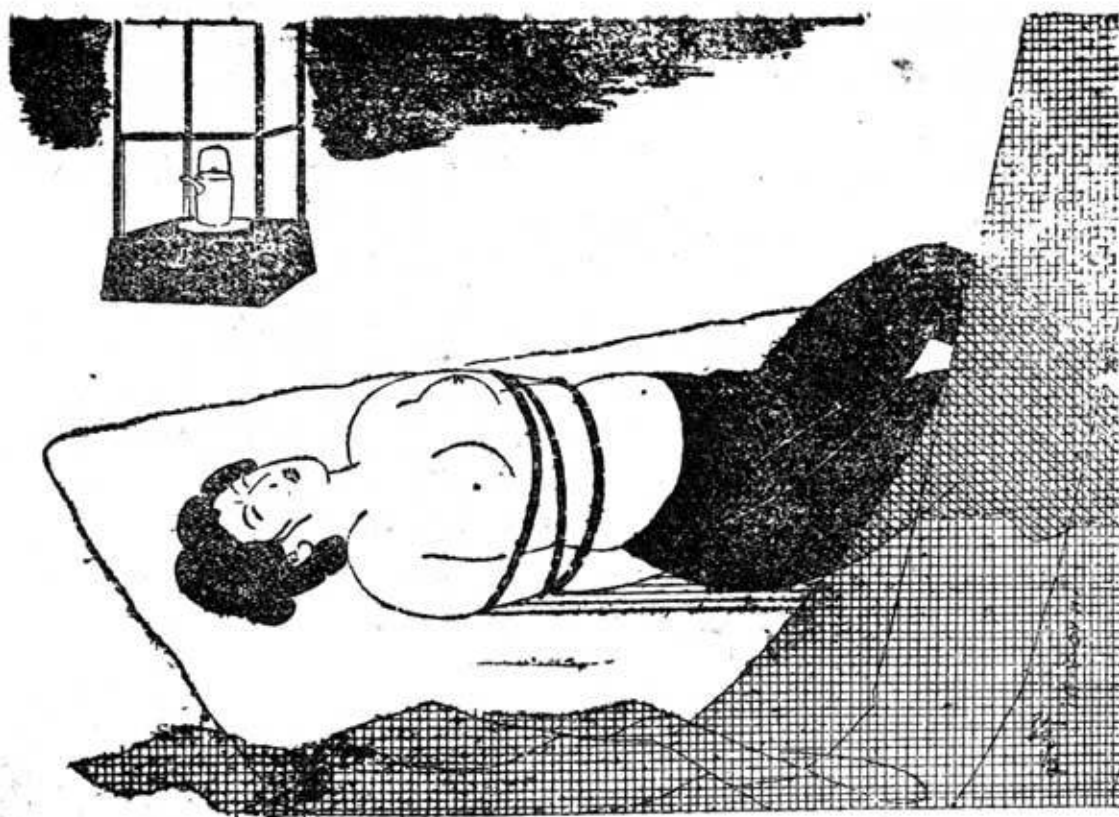
そちを苦しめんためではない。そちのその輝くばかりの肌を眺めて、生けるものゝ持つ、美の極致に酔いたいためのじや」

時は天保七年四月三日の午下り。処は銀の帯をひろげたような隅田川、六畳と三畳二間に台所迄備えた屋形船宮戸丸の中。人物は若い大名松平伊賀守忠秋とお小姓年は十八で、お鶴という小町娘。この嬌艶を覗きみする二人は為永春水と池田英泉。やがて六月頃、江戸神明の地本問屋和泉屋市兵衛方から上梓された「絵本色道大鑑」は前後十二枚の絵は英泉、文章は春水、構図の結構といい、技巧の妙といい、春戯本としての価値は歌磨の「歌枕」と共に天下の双壁と評されたという。





「切られお富」舟橋聖一作。岩田専太郎画。本誌六月号に掲載されたのは、「りべらる」昭和廿二年二月号の後半分のカットである。これはその前月号（新年号）の分と、其後昭和廿四年「東京」の新年号に所載されたものとである。文章は「りべらる」も「東京」も同一であるが、挿画が違う両誌を比較して掲載してみた。どちらも捨て難いが、「東京」の方がやゝ優っている様である。



「怪談作者」邦枝完二作、清水三重三画、昭和廿三年十一月五色文庫第一集「邦枝完二嬌艶傑作集」の中に所載。迫力に乏しい憾みはあるが、三重三の絵も亦独特な艶めかしさがある。これは本誌五月号に「鶴屋南北」の挿画として、扱帯で縛られている絵と同一のものであるが、この三重三の方が本文通り荒縄でしばられている。怪談作者四世鶴屋南北が、四谷怪談の狂言を作る苦心譚の一節である。

（東京所載のお富B）

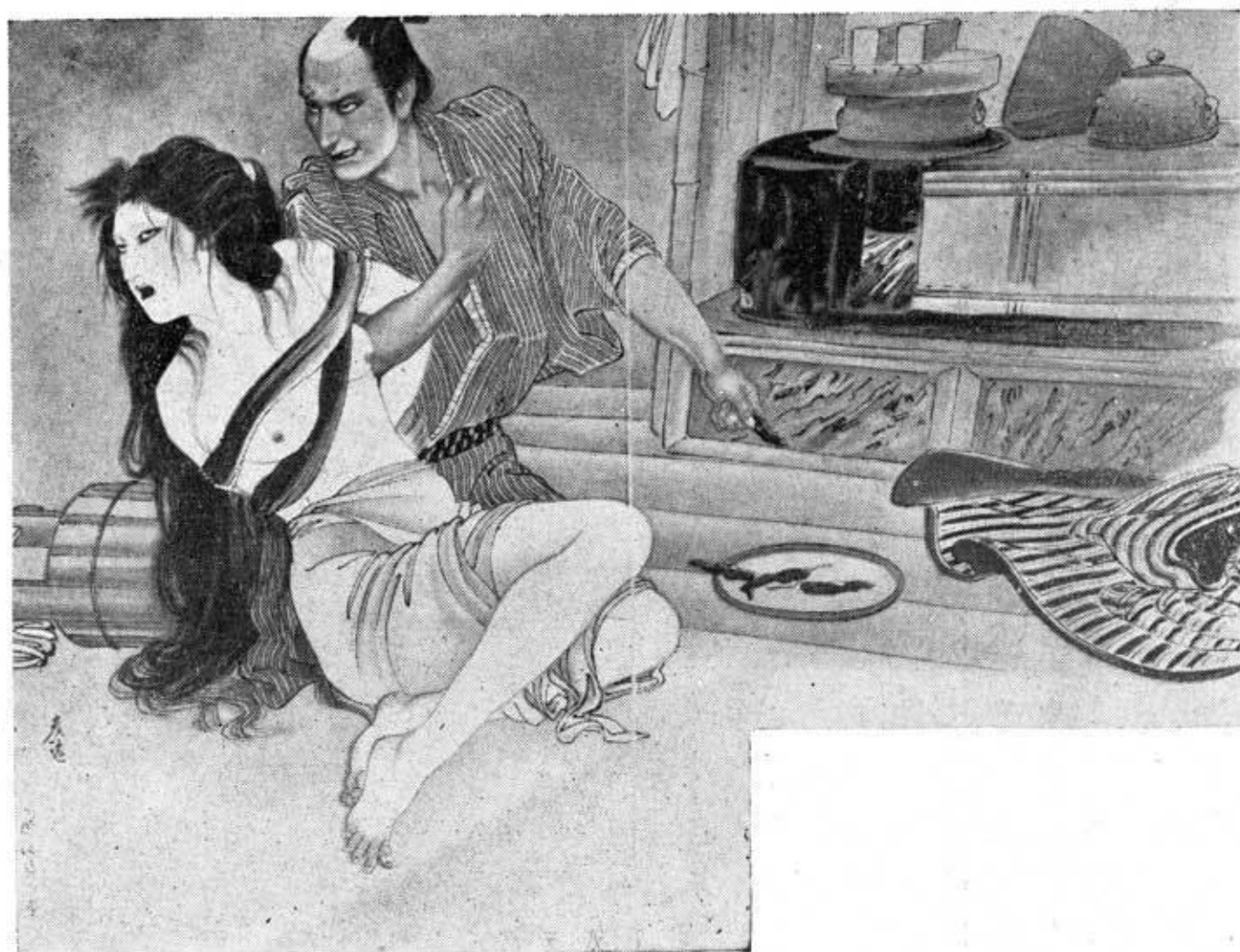


（東京所載のお富C）



「忍び込んだ南北は、一安心したように太い溜息を吐きながら、障子の穴に眼を当てて中の様子を覗いたが、それと同時に思はず「あつ」と叫ぼうとした……中略……ほの暗い行燈の下には、吉五の謂う鰻の腹のような滑らかな肌を持った美女が湯文字一枚のまゝ荒縄で縛られて、生死さえ判らぬ姿を横たえているのではないか……」





「刑罰図絵参態」 伊藤彦造画

昭和廿四年十一月小説文庫オール実話版の口絵である。伊藤晴雨と違つた味がある。「唐辛子責」の男の顔も、女の顔もよく出来ている。「野晒」の女の佻びしい顔もいゝと思う。他に晴雨のものも相当にあるが、これは追つて発表する。





愛慾という筈の下に苦しむ  
女性の生涯のシンボル

新時代の風俗雑誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

八月号

(第七卷 第八号 通巻第五十八号)



## 色

(しきろう)

## 狼



兒島 光

三條春彦・画

(一)

私とお八重が結ばれるに至つた動機を述べるには順序として、その前に妻のお八重が歩いて来た数奇な運命の道から説いてゆこう。

誰の子か判らず、捨子かそれとも何処からかさられて来たのか、それも不明で、小学校へも行かず、いや行かされず、ものごころついた時には旅の見世物小屋の泥まみれのムシロにくるまつて、ぶる／＼震えていたと云う。

其の見世物の一座は、ゲテモノの畸形者ばかりを集めた因果者達の一行で、まア半分はインチキなものだったが、主に畸形人をゆく旅の先々で、買い集めては諸国を流れ歩いていた。

一例を記すと、四肢が極端に短くて、歩行の際には四つ足で匍つて歩く牛娘を始めとし、顔面が猿のように毛むくじやらで、おまけに聲で啞、喋る時にはキヤツ／＼と猿そつくりの叫声しか出せぬ猿少年。下半身がウロコ状で蛇身、くね／＼と



軟体で奇妙にでかい乳房を持つ、通称蛇娘。

足指がアヒルと同様に水かきがあり、脇の下から羽根のような毛が生えているアヒル男。頭脳が普通人の二倍大で、等身の丈が七、八才の幼児ぐらいしかない一寸法師。等々、凡そ数え立てれば際限のないくらい、一座の太夫元である親方の源三は、犬があゝの敏感な嗅覚で餌をかき集めてくるように、見事な香具師の腕前で、種々雑多な畸形者を次々何処からか寄せ集めて来るのであった。

無論、一座で散々見世物として酷使し、寿命がつきると、仲間の香具師に二足三文の値で、さつさと売り渡してしまうのだつたが、時には仲間の香具師との賭博のカタに引取らせてしまうこともあった。源三自身も醜い独眼で、背に無気味なトカゲが蠢を呑んでいる陰惨な刺青をしていた。喉に一銭銅貨大の痣があつた。お八重はそんな世間から除け者にされた、生れついて哀れな因果者達の中で、すく／＼と育つていった。が、悪魔の悪戯か、十四五才にもなる頃には見る者の眼をあざむくような美貌の娘に成長していた。周囲の醜い畸形者達の故に美貌が惹き立つのではなく、真実、お八重は無類に美しかった。それに体も一倍大柄で、胸の脹らみなど既に成熟した女のそれよりも、もつと妖しく艶めかしかった。そんなお八重に、親方の源三が、淫らな慾心を駆りたてぬ筈はなかつた。

けれど源三が思い立つてから二年もの永い間、お八重に手につけられなかつたのは、見世物にされている一座の畸形者達の、身命を賭した庇護に依るものが多分にあつたからである。源三がどんなに巧妙な手段を弄しても、陰になり陽なたになりして、彼等はお八重の純潔を守ることに務めたのである。

彼等は各々の心の中で、美しいお八重を神が哀れな自分達に授け

てくれた天使だと信じていたのかも知れない。その天使が畜生のような源三に犯されてしまったのでは、たつた一つ残された、夢と幸福がぶち壊されて生甲斐を失うとまで思い込んでいたのだ。

## (二)

花の匂いをのせた生暖かい風がノボリをはためかせると、もう直ぐ春がやってくる。座の一行を乗せた大八車が、昨夜の雨で泥んこになつた畦道を、がたびし揺れながら、進んでいる。

牛娘のお美代と、クラゲ男の三太が、手を取り合つてとりとめのない奇妙な歌をがなつている、蛇娘の初江はぐつたりと死んだように赤毛布にくるまつたまゝ、どんよりした眼を青空に放つていた。彼女は殆んど食事も囁らないで、ヒロポンの注射ばかりしているのだその傍でアヒルの玄太は下手なハーモニカを吹いている。

春に近い陽は、そんな彼等の行手の畦の上にもう陽炎を燃えたくせている。お八重はそんな彼等を凝然と視つめていた。彼女はこれ迄に何度この仲間から脱け出して、正常な社会へ身を置きたいと願つたか知れやしない。

しかし其の計画は、殆んど実行に移すまでに、親方の源三の鋭い嗅覚に嗅ぎつけられてしまつて、その度に用心棒の見張りをつけられ猛烈な折檻を受けるのだつた。

その間、何度かの失敗を繰り返しながらも、お八重が脱走を試みたと云う事実を耳にすると、きまつて畸形者等は興奮して舞台が荒れるのだつた。そんな彼等の心根を汲みとると、お八重の心の中にも一種の悲しい諦観が生じたのである。

自分の成長を見守つてくれた不幸な彼等への御恩返しにもと、お



八重はきつぱり脱走を断念し、それから座の連中の身の廻りの世話などに専念するようになった。

が、春が来て桜の蕾が開く頃ともなると、お八重の若い血潮は燃えるのだった。花でさえ蕾を開くのなら、美しい娘の蕾が開かぬ訳はなかった。

大八車の上から眺める春のうらかな田園の風物は、まったく平和なものだった。

その時、お八重は、昨日までA町の興業場で一緒だった、映画巡回班の男の面影を、行手の陽炎の中に見出して、われ知らずはつと狼狽した。

頬が一瞬赤く染まつたようだった。

ゲテモノの源三の一座の興業のみでは、千数百の観客を収容するA町の劇場での採算が取れないと云うので、桃色映画（ストリップ）専門の巡回映画班との合同で、映画と実演の二本立のタイトルで大きく打って出たのだった。

丁度都合よく、町の紋日と重なって大入満員、予定の一週間を十日間に日延しても満員で通したのだった。

その千秋楽の日。お八重は映写室の隣の薄暗い関係者室で映画を観ていた。

と背後から熱い息を首すじに吹きかけられ、振返ると眼と鼻の先に、楽屋や廊下で顔を合せた事のある。巡回班の宣伝係をしている男が、女のような白い頬に柔らかな微笑をたゝえてたつていた。

「お八重さんつておつしやるんですつてね。いゝ名だな、死んだ僕の母さんと同じ名前なんですよ……」と

眼だけは真向うのスクリーンを視つめたまゝぽつんと云った。

未だ若い、二十一、二の男だった。

お八重には彼が何故そんなことを云うのか解らなかつたから、黙っている。

「お八重さんのような綺麗な人が、どうしてこんな一座にいるんですか……」

と不思議そうに訊ねた。

お八重は答えようがなかった。でたゞ黙つてにつこり微笑を返すと、男は矢庭に彼女の体を抱き寄せるなり、唇を重ねた。

お八重にはこの男の突飛な行動がおかしかった。何故この映画俳優のように美しい青年が、こんな暗闇の中で自分のような女に狂ほしく愛撫するのか……、お八重は彼を楽屋で初めて見かけた時から妙に心が轟いたのを覚えていた。

キリツとした太い眉、切れ長のやさしく澄んだ瞳、何時も濡れているような厚つぽたい唇、それは映画でよく見る長谷川一夫の顔によく似ていたから、最初は映画俳優かと感違いしたくらいだった。お八重は何時の間にか、心の疼く春の歓びを知っていたのだ。それは誰に手を取って教えられなくとも、肉体の開花するにつれて、自然の流れのまゝに眼を開くものなのであった。

お八重はぶる／＼震える腕を無意識のうちに、男の肩にしつかと巻きつけていた。……とその時だ。

「何をさらしやがるんでい！」

と殺気を帯びた怒声が二人を妖しい夢から破った。

親方の源三が、云いようなない物凄しい形相でそこに突つ立っていた。

折しも映画が終つて、場内にパツと灯が点いた。



その夜、お八重は源三の為に半殺しの折檻を受けた。

その劇場の奈落へ、用心棒の一味に無理矢理連れこまれると、荒縄でがんにがらめに縛られ、逆吊りに吊下げられたのだ。

源三は酒臭い息を荒々しく吹きかけながら、お八重の桜色に染まった身体を、焼火箸でも刺しあてるような淫らな眼で、じつと舐め廻した。用心棒は上手と下手の入口で、人の気配を警戒して立つてゐる。今しも吊り下げられているお八重の頭上の舞台では、実演が始まつたらしく、口上の声がきしんだレコードの曲に合わせてキンキン伝つてくる。

源三は一旦お八重をムシロの上に転がすと、焼酎のコップを片手に、濃い髭面をぐつとすり寄せ荒縄にその焼酎をふうーと吹きかける。その度に荒縄は一層ぐつと、お八重の柔らかい肌に喰い込んで血の色に染まる。

彼女はもう救いを求める声も出せなかつた。このまゝ死んでしまつた方が、どんなに楽だろうと思つた。これが日頃、義理とは云えお父つあんと呼ばせた人間のすることだろうか。源三は弄りものにするために、今日まで私を育てゝ来たのだつたのか……。

代々香具師の血を受け継いで来た源三には、薬にしたいとも、人間の情ある涙なんか一滴も持合せてはいなかつた。

「やい、お八重。手前はよくも育ての親の恩を忘れやがつて、此の俺の面に泥をぬつたな！」

「お父つあん！堪忍して下さい、もう二度とあんな真似はしやしませんから、お願いです、こゝこの縄だけは解いて下さい。」

「ふん、お前も万更ら素人娘じやアあるめえし、俺達香具師の世界の掟がどんなに怖ろしいものは、とつくと知りぬいてる筈だ。……」

……そのお前がかけがえのねえ、恩人のこの俺をだしぬきやがつて、何処の馬の骨とも判らねえ旅鴉のスカンピンといちやつきやがるには、それ相応の覚悟があつてのことだろう。さ、つべこべぬかさず今夜は俺のものになるんだ……」

源三はすつかり酔つていた。足もとがよろめくたびに、お八重のむつちり膨らんだふくらはぎのあたりを、ぐつと掴む、その度にお八重の後手に縛られた肉体は、哀れな影を奈落の壁に泳がせるのだつた。

荒縄は容赦なくぐいぐい乳房に喰いつてくる、お八重は身悶えして呻いた。

が、源三は頑として動じない、咽を鳴らしてゴクゴクと焼酎を煽り続けている。

彼の神経はこの妖しく美しい一匹の女獣を前にして、既に狂つてしまつていた。

「お父つあん、どんなことでもしてお詫びしますから。……」

「へへへ……どんなことでもつて、お前それを知つてたのかよ、美味い魚は最後に喰うとめつぼう味が濃くなるつて例えだ、それまではお前には、どんな野郎にだつて、指一本だつて触れさせるもんけえ！……だからよ、今夜は俺の云う通りにおとなしくすりやアいゝんだ。」

源三はそう云つたかと思うと、醜く突き出した太鼓腹に両腕を押しあてゝ深く息を吸いこみ、また大きくその息を吐いた。

それからお八重はがらりと性格が一変してしまつた。

今までは内気で、ロクに口もきけなかつた娘だつたのが、薄っ葉な流行歌を口ずさむようになり、町の男達を見かけると、自ら卑猥



な言辭を浴せて得意になつたり、男が夢中になつて追つかけてでも来ようものなら、散々弄つた挙句、いざとなると体だけは許さず金をしぼり取つたりもした。

体を許さなかつたのは、源三の眼が怖ろしかつたからだ。

畸形者達は墮落してしまつたお八重を哀しい目でじつと眺めているばかりだつた。彼等はいつせいにうち沈んでしまつて、芸にも精彩がなかつた。

### (三)

源三には嘗て口上を演つていた娼婦上りの中年増の女房があつたが、香具師の若い男とドロロンしてしまつてゐる、今となつてはかえつて幸せだつた。

源三は女泣かせの天才だつた、彼の腕にかゝるとどんな女でもころりと参つてしまふのである。

源三はそれをいつも自慢にしていた。

彼はお八重が、すすすくと自分の思いのまゝに成長してゆくのが何よりの楽しみで、その為には好きな酒類も節制するくらいだつた。お八重が源三のものになつてしまふと、今までおとなしかつた畸形者達は、もうお八重の云う事を素直に聞かなくなつた。

殊に猿面で啞で聾の少年の猿男が、事毎にお八重に反抗するのである。

舞台上で芸を怠けるし、ムチを振り上げて持ち前の聾を利用してボケている。

流石に親分のいる前では、そんな不逞くされた行動は見せないが一旦彼の姿が見えなくなると、目茶苦茶な暴れ方をして一同を困ら

せるのである。

猿面の少年はお八重に恋をしていたのだ。こうした騒ぎ方をするのも嫉妬の故だつた。

その事実をお八重に告げたのは蛇娘である、蛇娘は哀しそうな眼で、  
「あたいたちもモンちゃんが好きなのよ、それなのにモンちゃんたらあたいをちつともかまつて呉れないで、お八重さんに夢中なのよ、あたいたち惜しくつて、口惜しくつて、……」

と云つて無気味なウロコのある下半身を、くねくねのたうたせて咽び泣くのだつた。

畸形者はその肉体が異状であるように、精神的にもやはり変質者が多いのである、環境が正常でなく、教育も授けられないから、其の性格や行動は原始人のようになまなものであり、それに歪められた感情がマツチしているのだから、普通人の感情や生活態度をもつてして、畸形者の心理を理解する事は到底不可能なのだ。

蛇娘でも、猿少年にしても、愛される喜びは知らなかつたが、理屈抜きに、愛することは知つてゐる様子だつた。

それは畜生道の愛情かも知れないが、とにかく人を愛することは知つてゐた。

彼等も性に眼覚める年齢だつた。殊に猿少年は一人前の男としての機能をもつていたのである。

畸形者の女達も猿少年を可愛がつていた。蛇娘がその無気味な肉体に、あらわな化粧をするようになったのも、猿少年に恋知りそれだからである。

お八重は蛇娘が可愛だつた。口上の文句に、親の因果が子に報いと謳われているけれど、彼女の両親はどんなむごい真似をした人







お八重の扮した家出娘が、疲れ果て、夜の峠を昇ってくるが、空腹のあまりに、とある辻堂の前でぐったりと腰を下す、ふくろうや夜鳥が無意味な声を夜空に響かせて鳴く、うとくし始めると、其処へ、畸形者達がぞろ／＼出て来て、美しいお八重を真中において賭博を始めるのである。お八重の肉体を賭けて火花の散るような激しい取引が始まる。

やがて頭の大きい一寸法師が勝負に勝つて眠っているお八重の体を横抱きにしたまゝ、辻堂の中へ隠れる。舞台では畸形者達が、奇妙な叫び声を挙げてワイ／＼騒ぎ始める。と数分して、辻堂の扉を蹴破つて半裸にされた、乳房も露わなお八重が髪をふり乱して、悲鳴を挙げながら飛び出して来る。一寸法師が淫らな眼をぎらつかせて追いかける。

やがて力つきたお八重は、一寸法師と畸形者達に腕をとられておさえつけられる。そして辻堂の縁に紅白まんだら模様の祭礼用の縄で、がんにがらめに縛りつけられる。

あまりの苦痛にお八重は最初身悶えるが、時がたつにつれて縛られる自虐の快感に、倒錯の微笑を美しい頬に浮べ始めるのだ、苦痛の後にくる快樂の表情である。

事実お八重が話したところによると、最初は縛られることが怖ろしく嫌だったのが、回を重ね、慣れるにしたがつて、演技ではなく真実、責められる快感に陶酔するようになったという。でしまいに縛る方の畸形者達が吃驚するくらい、強く縛ってくれとお八重の方から云いだしたのだ。縛り方もお八重自身がいろ／＼工夫をこらして畸形者達にやらせるようになった。で最後にはお八重の着ている着物までも、一寸法師によつて剝がれてゆき、長縄絆もめくられて

むつちりした肌が……

お八重の肉体に畸形者のグロテスクな肉体が取巻いてゆく。其処へ源三の扮した山男が現れて畸形者を追い払つてハッピーエンドとなるのである。

なる程、源三の考え出しそうな筋書きだった。

だがお八重は、一寸法師が自分の着物を剝いでゆく時の眼色が本当に怖ろしかった。

畸形者達は舞台の上で、演技をしているとは思えなかったのだ。





真実まともな美しいお八重の肉体を虐めぬく事に或る種の快感を感じている様子だった。

だから、芝居は異常に迫力のある、すさまじいものであったから見物の人気を煽るのはあたりまえだった。

掛小屋のギョー／＼きしむ粗末な板張り舞台には、持つてこいの怪し気なストリップだったのである。

見物人達は僅かな入場料で類のない、異様なストリップドラマを観せられて、妖しい興奮に胸を躍らせたことであろう。

私がお八重と初めて逢ったのは、そんな掛小屋ではなかった。

和歌山県西牟婁郡の山深いF温泉と云えば、関西ではあまりにも有名だから説明は省略するが、其処では全国の香具師の親方達が、年に一度の顔合せを行う為に集まってくる。

その時だった。

香具師達のこうした寄り合はおゝむね秘密裡に行われる、其時には各々の獲物の売買、交換の密議が取交されるのだ。

一体、見世物生活者、即ち香具師は其の生活に伝統的な異常極まる特有性を持つていて、善悪にかゝらず普通の生活形態とは甚しく隔りのある理解し難い生活の下にある。

従つて其の人生観、恋愛観、乃至性生活等も普通一般社会人の遠く及ばぬものがある。

香具師の社会には、世間一般の社会人と異なる独特の道德が存在している。

それは一種の戒律であり、掟でもあろう。

私が何故、このような特種な香具師の世界に詳しいかは、事件の発展するにしたがつて充分納得されるであろうが……

## 香具師



私はもと／＼左翼系の某黨員だったのだ。北九州某地区の指導的位置にあつて、K県下の政治文化工作隊の急先鋒として活躍していたのであつたが、東京本部からの地下潜行指令にしたがつて、行方をくらましたのである。其の潜行先が、九州では代々相当手広く見世物興業を扱かつている、某香具師の一家だった。

私は表向き一家の顧問として、宣伝文化係長の名のもとに、約五団体あつた専属の見世物集団の動向を監視すると共に、細胞を通じて、労働組合や、文化サークルの観客動員を行つていたのである。

私には得難い潜行場所だった。党の連中でさえ、香具師に変装した私を屢々見破ることが出来なかつたくらいだから。

私は今年三十四才。元陸軍中尉で、京都のR大学政経科を中退、妻も子もなく、たゞ一途に思想に殉じてあわた／＼しい半生を過して来た男である。

女の肉体は知つてはいたが、女の心とか、まして愛情など云う



七面倒くさい問題にはかゝわり合つた経験がなかつたから、お八重に命がけで惚れこまれ、私自身も燃えてしまつた時には、普段の冷静で非情な私ではなくなつてしまつたのも致し方がないであらう。

此のF温泉では、一二と云われるホテルの地下室を借切つて、香具師の親方達は同行の女達を相手にあらん限りの遊興を演じ、果てはその座興として出たのが、お八重と一寸法師の奇妙な責めのストリップだつたのである。

一寸法師に荒縄でがんにがらめに縛られたお八重が、特別に装置された温泉の湯煙にまみれて、あまりの熱気に苦しさの余り胸を波うたせ、喘ぎ、悶え、のたうつ。挙句の果ては一寸法師に衣類を剥いでくれと哀願するのである。

湯気でしめり気を帯びた荒縄がキュキュと鳴る毎に、一寸法師は奇妙な歓声を挙げて、彼女の紫色に染つた肌を扇子で叩いたり、抓つたりする。その度にやんやの喝采である。お八重はあきらめ切つた無感動な表情で、観客席になつてゐる方を視つめてゐる。

私は戦慄した。これが果たして良心を持つた人間の為す事だろうか、と思わず唇をかまずにはいられなかつた。

彼等は仲間同志の仁義は命を的に堅く守るが、見世物にしている畸形者や芸人には、報いてやる心が皆目ないことを、私はこの時はつきりと悟ることが出来たのである。

万雷の拍手の中で、今にも倒れんばかりにくつたりとなつたお八重が、次の間へしりぞいたのを見守りながら、私は或る決心を堅く心に誓つたのであつた。

夜が更けるに及んで、宴たけなわとなり、私の傍へも、お八重が酒の接待に現れたのである。

その時、私の顔を見た彼女の表情は、今でもあり／＼と憶えてゐるが、電気にも撃たれた如く、盃を手にしたまゝ呆然と、その美しい顔をこわばらせていたものだ。

「どうしたんだい、気分でも悪くなつたの」

「……いゝえ、お客さんが、あたしの知つてゐる人にあんまり似ていらしたので」

その似てゐると云う男が、映画巡回班の男だつたのだ。

その一事がその後のお八重との夫婦生活で、何かにつけて私の神経をかき狂わせる原因にもなつたのであるが……。

お八重と私は、私が糸を繰り合せた者同志だつたのか、いつべんに意気投合してしまつた。それが私の半生を棒にふるせるきつかけであるとも知らずに。

そのあくる夜、示し合せた私達は、一行の嚴重な眼をぬすんで、大阪へ逃げたのである。

私はなんと、たつた一夜のお八重との交渉で、彼女の底知れぬ魅力に魅せられてしまつたのだつた。あれだけ生命を賭して斗つてきた党の仕事も放擲して、行ずりの女、お八重のために生命の危険をも顧みず、恋故に決死の逃避行を敢行したのだ。

私達は大阪へ着くと、京都方面へ行くと思つて、福知山線に乗り、丹波の篠山から七、八里東北の山間に位するD村に住む同志の中山某を頼つて、夜道を逃げのびたのである。

同志中山は私の無鉄砲な行動に驚き且つ呆れはしたが、そのうち熱病もおさまる事だろうと、私達二人を一時かくまつてくれる事になつた。

人口五十人足らずの、山中の寂しい農家の離屋が私とお八重の水



入らずの愛の巢となつた。其処で二人は夢のような甘い蜜月を送つた。お八重は生れ変つた女のように、香具師の世界に育つた女とは思えぬくらい、淑やかで素直であつた。

私は彼女に教養をつけてやろうと、いろいろなことを教えた。お八重は勘のいい女で、小学生のように喜々として私の教えをよくのみ込んだ。

しかし、私達の夜の生活は正常な夫婦のそれではなかつたのである。お八重は最初源三から変態的な方法で女にされ、そしてまたアブノーマルな演技を身につけた為に、ありきたりの方法では満足しなかつた。

生来丈夫でなかつた私は焦燥と過淫とに次第に健康を害していつた。お八重もむくんだ顔で、朝寝する日が多くなつた。中山夫婦の畑仕事を手伝うのが苦痛になり始めた頃、私は野良で作業中大量の血痰を吐いて倒れた。お八重は献身的に介抱してくれたのだが、肉体の悪魔に憑かれたのか、それとも彼女自身の性の不満からか、事もあるうに、中山と関係をむすんでしまつたのである。

その何度目かの交渉の場を、折悪しく野良から帰つて来た妻女に発見せられた為に、もう私は中山の世話にもなつていられなくなつた。

お八重と云う女は、天性、男を惹きつける魔力を備えていたのであろう。

私には嫉妬と、生活の不安と、生命の危険が一度にどつとふりかゝつて来たのだ。が、とうとうその力に抗し切れず、雪が音もなく降る、二月の凍るように寒い或る夜、お八重と中山が密会している所をナイフで斬りつけて彼等に重傷を負わせ、有金の一万円足らず

を懐にして、山間伝いに、名古屋へと姿を消したのであつた。

軍隊当時、教育隊勤務で名古屋にいた事のある私は、某地区の浮浪者の群へ身を投じた。

其処で私は、凡そ悪と名のつく悪事を片つぱしからやつてのけたお八重を奪われ、思想からも見放されてしまつた私にはもう生きてゆく希望も甲斐もなく、あるのは、お八重の幻覚を忘却しようとして酒と女を買うために必要な紙幣を獲得するための努力だけであつた。

その間、私の両肺は既に殆んど喰いつぶされてしまつて、絶えず嫌な悪感と、激しい咳に悩まされて、人相もすっかり変貌してしまつた。そのうち名古屋へも、どうやら手の回つたらしい事を知ると大阪へ飛んだのである。

今日も朝から、梅田界隈の仲間に分けて貰つたヒロポンを既に三十本も注ち続けているのだが、さつぱり嫌な悪感はずらず、動悸が烈しくて、歩いていても、そのまゝふわーつと息が切れて、倒れてしまひそうなのだ。

今の私にはもう死など怖ろしくはない、いや死の世界の方が私にはふさわしいだろう。

こうして苦痛にあえぎながら生きているよりも、死の世界は案外私を安らかにしてくれるかもしれない。

私はお八重との異常な夫婦生活で、哀れにもすっかり魂をぬき奪われてしまつたのだ。

お八重の正体こそは美しい一匹の色狼だ。その色狼の牙に私は滅ぼされたのだ。喰ひ荒らされて生ける屍となつてしまつたのだ。

# 我が告白の断章 (三)

須藤 律夫

その頃になると、毎年鳴きすだく蟬時雨が却つて暑さを誘つて、ジツとして居ても肌の汗ばむ八月、休みの度毎に私はよく海水浴に出かけました。行き先は主に片瀬、鎌倉、葉山など一つには私の写真趣味も手伝いましたけれど、大きな悦びは灼けつくような白日の下に晒された若人の裸像が眼の辺り見られる事、そして生来の私の変つた嗜好、豊富な女性の腹部が水着のヴェールを通してとは言い乍ら自由に、何の束縛もなく見られる事だつたかも知れません。

純毛の厚手の水着ではそんな事は無いのですが、稍薄い、然も白、又は黄色などのメリヤスの水着ですと、殊に水から上つて来た瞬間などびつたりと肌に密着して宛らナイロンの水着でも着ているかのように全裸に近い様々な曲線が描き出されたのです。乳房はもと

よりお臍の穴迄透き通つて私にはとても魅力的に感じられるのでした。海岸の砂に腹這い乍ら私は曾つて見た独逸の裸体映画や、フランスの裸体倶楽部など想い出すと共に、自分の変つた嗜好などに就いても色々と思ひ巡らすのでした。只ふくよかなその腹部に魅かれる丈なら免に角、鋭利な刃物でそれを思う存分切り割いたり、深々とした臍の穴へ短刀を突き入れたり、そうした妄想に走る私自身を顧る時そのアブノーマルな性質を自覚して我乍ら情なく思うのでした。又そんな時私は何時も水泳パンツではなく、水泳バイクを身に付けて居りました。別段の意味もなく只少しでも裸体を露出し度い意慾が働いた為かも知れません。

私も或る程度の露出症なのでしようか。毎年の夏の行事、数多い海水浴の想い出の中で

も、未だに私の脳裡を去らない一つの想い出——それは房州保田の海岸に行つた時の事でした。東海汽船の六〇〇噸の桐丸に揺られてでも保田の海岸は私の想像以上に風光明媚で沖合から眺めると恰度箱庭の様な感じでした。海洋から程近くに大小様々の岩礁があり、其処には海胆や栄螺等が数多く棲息しています。そして私が岩の蔭でそれ等のものを漁つて居た時、

「これ一体何んでしようかしら」一人の婦人が貝を手にして近づいて来ました。

「海胆ですよ、此処には随分いますね」私は説明し乍ら改めてその婦人を見直しました。年は二十八、九才身長五尺一、二寸稍小肥りのその婦人は黒いメリヤスの水着を着ていたのですが、織り方は薄手ですしそれに肥り気味なので、水着は破れそうに張り切り折柄の直射日光に照らされて大きなお臍の穴が透き通つて見えるのです。

——汝の臍は美酒の欠くる事なき円き杯の如く、汝の腹は積み重ねたる麦の廻りを、百合花もてかこめる如し——新約聖書の中でしたかそんな一節を想い出し、私の視線は数秒間その一点に注がれてしまいました、実の処私はその時迄それ程深いそして大きなお臍の



穴を見た事がなかつたのです。と同時に性的な興奮の昂まるのを押えようありませんでした。

「この様に肉体の一部をアブノーマルな性の対象として求めたり、又時には後に述べる様な自己加虐によつて張り詰めた慾求を解放したり、然も猶社会構成の一員として取り澄している事は果して許される事でしようか？よしそれが法に触れなくとも、道徳上は？更に又宗教上は果して如何のものでしよう」

「仮令性の対象が変つていたとしても、通常の性行為が可能であり然も適時営まれ配偶者もそれによつて充分満足し結果として子弟をもうけて育成している現在、勿論それは許される可きではないのでしょうか。但し徳義上は稍難色あり、況んや宗教上では五戒の一つを破るものと自認せざるを得ないのです」

時として私はそんな愚かしい自問自答を繰り返したり致します。

雨が二、三日続いて湿度の多い日等、それに伴うむし暑さもさる事乍ら、寝苦しい儘に私は夜半ふと起き上り、趣味で蒐めた刀剣類の手入れ等致します。最初は相州ものゝ太刀一振り、それから順次買い蒐めてその頃は六本ばかり持つて居りました。中でも細身の脇

差しが一本、それは造りも美事でしたが何故か私はこの脇差に迫も心を魅かれるのでした。家人の寝静つた午前二時頃、独り書齋の六畳に端坐してジツと刃先を見詰めると、その脇差には二ヶ所の刃こぼれの跡があり、私は様々な昔の出来事を想像するのでした。顔に近付けると焼刃の匂が嗅がれ丁度油の香りが何か暖かさを感じさせます。暫らくは無念無想で居りますけれど様々な幻想の果は、何時も定つた様に自らの加虐へと墮ちて行きます（茲で読者の方々は本誌四月号所載、信太さんの「開花の契機」を想い出して下さる事でしょう。）

努めて重複を避けますが私も同じ様な切腹の真似事、それは複雑な自虐症の一変形かも知れませんが。先ず型の通りに腹部を露わし、脇差の切尖を五分程残して手拭を巻きつけると右手に持ち換え、臍の下一寸位左の脇腹にそつと当てがいます。その儘氣を鎮めて静かに右脇へ約二〇センチ位刃先を滑らすのです。が痛さは殆んど感ぜず、寧ろ快い冷たさ、そして自分では軽く腹皮を撫ぜた積りなのです。が次の瞬間には紅の血潮が刃の走つた跡に滲み出て、加虐の悦びに私の鼓動は高鳴るのでした。私は脇差の切尖が案外切れるのに驚き

ました。尤もそれが初めてではなくそれ迄にも日本剃刀、西洋剃刀で試みた事もあり、又肥後守等の小刀で試みた事もありましたけれど日本刀程の切れ味ではなかつたのです。扱次にはその下を同じ様に二節、三節、軽く撫で廻しますが之は昔古老に聞いたすたね「簾腹」と言うのかも知れません。或る時は切腹に先立ち臍の穴へ切尖を突き立てる事もありますが、臍窩は御存知の様に皮下脂肪の組織を欠き又臍輪の周囲も臍乳頭の皮膚も纖弱なので余り力を加える事も出来ず、然し幽かな冷やかさと五臓に響き渡る様な疼痛とは却つて快いものに感じます。

一度冷静に立ち返つて自己を反省する時、私はこの切腹願望に就いて数々の不審を抱かずには居られません。何の原因かそれすらも判らず徒らに自虐の悦びに浸つて何の得る処があるのでしょうか。

——身体髪膚之を父母に享く——とか、それを考えると何時も私の理性は灰色の深い霧に閉じ込められてしまふのでした。けれど最近になつて（この間約十年を闊す。）私は同じ様な宿命の星の下に生れ、同じ嗜好に生き同じ人生の矛盾に悩む人達のいる事を知つたのでした。

## 其頃を語る

(三)

## 明治期の被縛画家

伊 藤 晴 雨

女の被縛画（或は絵）を厳密に、詳細に記述したならば、古代の絵巻物や天保以後弘化安政の浮世絵師の読本等から順序を追つて記すのが正しいのであるが、現在それ等の読本の挿絵や似顔絵等を文字の上で並べた処で料理屋の座敷で一品料理のメニューを見せられた直後に追い出される様なもので味も素ツ気も無いものである。甚だ悪い一例を引き合に出す様であるが春画の研究なる題目の下に或る性の専門雑誌に江戸時代の春画家の作品年表を並べた考証家があつた。学は深遠なりと敬意を表するものゝ、扱實際問題として（雑誌を商業意識の上から観て）其の並べられた春画の種目其の物は必ずしも読者周知のもの

で無いから単に製作者の名前と表題だけ並べられても読者には何の興味も起らない。故に私は被縛画の作者を並べると同時に、私は其の作家の作品の世間に公然流布されて居る範圍の限度を境界として被縛作家の伝を記す事にした。其中には老生の知人もあり、生前聞き伝えた咄もあつて被縛画家の心境を知るに便あり、又それと同時に將に煙滅し去らんとして世上に伝らざる各人の逸話を老生が先輩から聞いた儘を何等の誇張無く寸毫の作為無く率直に記しておく。時に故人の悪口に類する点があつてもそれも逸話の一部として、亦画家の性格を知る便宜にもなると思つて鶏肋も亦捨つる能わず其儘羅列する事にしたので

あるから之を以て老生の徒に先人の死屍を鞭つものと思ふし給わざらん事を希う次第である。

## 月岡芳年

まず第一に代表作として二枚続きの一つ家の図を挙げなければならぬ。これは明治末期発禁を命ぜられたもので出版当時は二枚五錢乃至六錢のものが現在古本商の仲間では千円の市価を呼んで居る。

裸体の娘に猿轡を噛ませて梁から逆に吊し老婆が下から炬の烟で娘を燻べ出刃庖丁をといで居る図で出版人は福田熊次郎であると記憶する。其他では東京日々新聞と題する（新聞の雑報を錦絵にしたもので、日々新聞の附録と思つて居る人は大間違ひである）一枚刷りの錦絵で文章は仮名垣魯文や花笠文京などという当時の一流作家（といつても所謂戯作者）の文章を加えた錦絵である。

信濃国上水内郡の百姓の娘が隣村へ使ひに行く途中悪漢に立木に縛られた強姦された跡で狼の群に身体の下半身を喰ひ取られた血痕斑々たる凄惨無比な絵である。これも亦発禁もので有価以上という程でも無いが相当高値を呼んでいる珍品である。



次は同人筆、英名「二十八衆句」の内、あんなに吊し斬の図で美しい女房の姦通を怒った博徒が裸体の女を鞠の様に天井から吊し下げ髪は乱れて蛇の如くのと打ち廻つて居るのを血刀を揮つて刺し通そうとして居る処で此絵の特色は血の色を出すのに紅の絵具で無く朱漆を用いてあるので血の部分はベタ／＼と濡れて居る様に見える。落款に一魁舟とあるのは明治初期、芳年が師国芳の門を出て間もなく同門で先輩である処の落合芳幾（よしいく）との合作で（といつても分担してかいて居る）二八枚全部が血だらけの絵で、坊間では俗に「血みどり血がいの絵」と呼んで居る。これは上野の戦争直後で人心が興奮時代の作。

それから又、少し経つて明治二四年頃、条野採菊社長のやまと新聞附録に一枚刷りの錦絵で老女村岡が幕吏に拷問されて居る一枚絵である。実際の村岡は老人であるがソコは所謂絵空事で頗る美人の中年増が片はずしの髪は乱れ、鉄扇模様の衣類に菊唐草の帯を締め縄が首と手足に喰い込んで居る頗る催情的な絵でこれは現在でも古本屋の店頭で時々見掛ける事があり、市価も左程高くないのは刷りの度数が少ない為と新聞の附録で無料で読者

に進呈したものという関係であるかも知れない。

明治十九年九月二四日第一号を発刊した京橋区三十間堀やまと新聞社は明治天皇の教育勅語の作者と伝えられる操瓢者の第一人者、福地源一郎桜痴居士を編集長として社長は錦木清方氏の父に当る条野伝平氏、連載小説は材をドイツのフレデリック大王に採つた翻案小説「松の操美人の生理」で当時日本一と評判の人情噺の泰斗、三遊亭円朝事、出淵次郎吉作の続き物で円朝は人も知る牡丹燈籠其他を此やまと新聞で発表して居る。此小説の挿絵は当時其道の第一人者、月岡芳年である。此の美人の生理の第二回目に粥河図書という山賊の隠れ家で三浦半島の一角相州浦賀の富豪、吉崎の娘おミエが縛られて殺される場面と其大団円に芸妓の小兼が山賊の窟に間諜となつて入り込み、松の木に吊り下げられて責められる二図は前記芳年の作で至極入念のものである。

其他に矢張りフランス二人皇后の翻案かと思われる円朝作の「熱海土産温泉聞書」（あたみみやげいでゆのきゝがき）の中に縛られる女がある。当時の新聞の挿画は（新聞が五段組であつた）非常に大きく時に或は半頁大

位のものさえ珍らしくなかつたので其揮毫も非常に真剣な態度で製作された。勿論現代の如く職業的なモデルは無かつたので弟子や妾をモデルにして写生をして描いたという。茲に極めて面白い。芳年の逸話が残されて居るから事のついでこれも記して置く事にする。

月岡芳年は本名米次郎、父は旧幕府の御家人であつたと伝う。嘉永三年、歌川国芳の門に入り、号を玉桜楼、一魁舟、又大蘇（大病に罹り全快後雅号とす）新聞挿画に新機軸を出し、又錦絵版画に月百種美人三三相（これは春的に近し）三六怪選等、世に著する晩年、積年の放蕩の為、脳に異常を来たし、本所亀沢町の寓に逝く。年五九、門下に水野年方あり、年方の弟子に清方あり、清方から伊東深水を出して現在風俗画の血統が連綿として続いて居るが芳年という人は生粋の江戸ツ子で居乍ら至つて吝嗇で「江戸ツ子の生れ損い金を貯め」晩年、虎の子の様に貯えた二十円を賊に取られたのを苦にして発狂した位気の小さな癖に鼻ツ張りの強い妙な男であつたと同門の新井芳宗翁が生前私に話された。

此の芳年が明治初年銀座通りが初めて出来た時、東側はズツと原ツパになつて居て俗にチャリネ（洋式曲馬）や覗きからくりや各種





見世物が沢山興行して居た。其時、ある興行師から「のぞきからくり」の絵を頼まれた。其執筆者は当時第一人者と云われた河鍋晩舟を始め月岡芳年、菊地容舟、小林清親、尾形月耕等、現代ならば契月や大観、蓬春、古経あたりに匹敵する顔触れであつたから芳年も非常な意気組みで製作にかゝつた。芳年の受持ちは茨台の仕置場で宗五郎とおみねが磔にかゝり非人の鎗を受けて苦しんで居る場面である。何が扱、断末魔の苦痛の表情を出そうというので大苦心の末、盛夏の夕暮れに弟子

の中沢年章という男（此人の作品は嘗て奇譚クラブに掲載された石抱き拷問図の筆者で此事は後に述べる事とする）瘦せて居る処が丁度宗五郎に似てゐるので夏の夕方、此男をモデルにして座敷の柱に心張棒を十文字に縛つて磔柱にして写生を初めた。当時芳年は根津七軒町、只今の不忍池から電車のカーブする処の北の処に当る一軒家で四辺は藪沢地であつたから昼間でも蚊が居る。縛られた宗五郎の年章は最初の中こそ我慢をして縛られて居たが夕方に近づくに従い蚊軍の来襲が激しくなつて来るので泣き出しそうになると芳年は苦痛の表情を見て

「ア、いゝ顔だ、鎗で突かれて居る顔をして見ろ」  
なんのかんのと云い乍ら縛られた年章の腋の下をくすぐるのツツそツつする顔を悦に入り乍ら写生をして居る処へ福田熊二

郎という芝愛宕下の絵草紙屋の主人が訪ねて来た。年章の縛られて居るのをモデルとは思わず何か失策をして叱られて居るものと早合点をした福田は

「先生どうか今日の処は私に免じてどうか許して上げて下さい」

とか何とか云つてしまつたからサア大変、芳年はいゝ心持ちになつて

「ウン、此奴は平常から己れを馬鹿にしやがるから今日は思う存分こらしめてやるんだ、打ち捨てゝおいて呉んねえ、どうだ久し振りで鰻で一杯やろうか」

とか何かで悠々と二人で酒をのみ始めた。素ツ裸の年章は蚊に刺されて遂に本当に泣き出してつた。其出来上つた絵は非常な傑作であつたという。此話は当時芳年の門下生である前記芳宗翁の直話でこれを私が田端に居られた芥川龍之介氏に話した事があつた。或は密かに思う。氏の作「地獄変」は私の話から生れたものでは無からうかと……

芳年の作としては此外に本所五人男のさしえ、水車の責等々、数え立てたら際限がないので余は省略する事にする。

小林清親



明治の版画を語る者にして小林清親を知らざる者はあるまい、清親は弘化四年江戸に生れ英人ワグマンに就いて洋画を学んだ。ワグマンの事は世人の能く知る処で実に本邦洋画の祖として紀念すべき人であるが、初め英国が我国を属国にする野望を持つて居てワグマンをロンドンの新聞特派員として横浜に在住させ、三浦半島を測量させて秘密地図を製作させた。ワグマンが戸部に居る内に野毛小大神宮の水茶屋の娘お春（先年八十余才で没した）と馴染み、お春を女房にしてからスパイの役目を怠る様になつた。ミイラ取りがミイラになつた形で、日本が好きになつたのでスパイの役目を放り出したとも伝えられる。

時の英国公使パークス（？）からは送金を止められて戸部の裏長屋で洋画を教えて居た頃清親が入門したが、ワグマンは永年の放浪生活が祟つて脳髄毒に犯されて発狂し清親を靴で蹴つたのが原因で師弟の縁を絶ち、以来独学を以て大正三年十一月没す。風景版画家として知る人多きも挿画家として知る人は少ない。清親始め芳年の門人たらんとして其門を叩く、芳年、清親の画才を見て驚き門人とするのを断つたという。其明治初年の挿画には芳年の摸倣が多く見られる。

代表作としての被縛画は出版者不明（或は日本橋馬喰町二丁目綱島亀吉の出版か？）の新白石噺（横浜にあつた仇討物語）上下二冊の合巻で女の責場が七、八枚もある。毛を持つて引摺つて物置の梁に逆吊しにすると雪の重みで物置が倒潰して縛られた儘雪中から逃げ出し、実姉が真金町（？）の遊廓で花魁となつて居る所へ行き、姉妹力を合せて父の敵の姦婦姦夫を討つという筋の合巻で押絵の大部分は責場である。清親は総て写生をした人で人体写生も洋画風で逆吊りの女が当時としては新しい描法であつた。これを其儘模倣したのが「百花園」という講談雑誌の挿画で小林永濯の門人永興が番町皿屋敷のお菊に焼き直して居る。

### 豊原国周

本姓荒川氏、名は八十八、明治時代似顔絵の大家、貧乏此上なし、夏は往来をどてらで歩き冬は単衣物を着て、年中酒の気を絶やした事が無いという変つた画家で邦枝完二氏著「松助芸談」の中に出て来るが此人被縛画をかくのが好きで、「浦星」「中将姫」「雪姫」「缺血」の責場「お万の方の責」「吉田御殿の女小姓竹尾の責」「切られ与三郎とお富の責」

等々々、芝居の似顔絵で責場の傑作が甚だ多い。梅華百種の内「皿屋敷のお菊」など傑作であろう。金羅宗匠の句に「暮るゝ鐘数へ尽ぬ皿の数」明治二十六年六月、本郷春木座で故人中村歌衛門が福助時分に演じた缺血の責場などいゝ出来で一枚物では照天姫の松葉いぶしや立絵の「狂女を折檻する母の図」などキラ摺りのいゝ絵であるが出版者が責場の絵を喜ばなかつた故もあつたらうが縄を少し斗りしか現わして居ないのが物足りない。此人女の責場をかくのが病的で酒を呑むと女の責場をかく癖があつて出版者が時々困らされて居たが、責場はとても巧みであつた。此人は自ら女の被縛画をかくのが道楽であつたらしく其作品は全く道楽気分が出来上つて居て実物を見た者でなければ判らない。

### 尾形月耕

本名田井庄之助、京橋桶町に住し若い頃は提灯屋で無学、稗史小説の口絵を描いて独特の天才を発揮して居た。被縛画は浅尾の蛇責其他無数。傑作としては東陽堂発行の代表作（月耕漫画）の「松葉いぶし」であろう。門下に多数の俊才を出したが山村耕花、柴

田耕洋など腕利が多く又尾形耕一という門人は「有喜世の花」の表紙（明治二九年三月）に雪責の傑作を描いて居るが実物を見なければ活字に表現は出来ないのが残念である。

此月耕という人は雷が大嫌い、雷の鳴る二三日前より判るという。其癖雷の絵がウマイのだから不思議である。其息子三氏は歴史画の大家である。月耕は元が提灯屋の上りだけに無学で時に思い切つた間違いをやる。「陸離」という題に風船をかいいて笑われた事があり、月耕漫画のいろはの仮名遣いなどメチャくであるが其技巧は大家として愧ずる所なくチャキ／＼の江戸ツ子であつた。

### 鳥居清忠

歌舞伎に無くてならぬ看板で大阪の芦国風と並んで東京は鳥居風を尊んで居た。画系に就いては種々の説があるので省略するが芝居の看板と番附を描いた関係上、被縛絵は無数にあるから一々之を記さない。

此人の面白い事は幽霊をかくのが大嫌いで大好きなのは素人芝居、それが頗る拙いのに本人は大得意であつた。幽霊の出る四谷怪談の看板など嫌々乍ら描くのだがそれが反つて逆効果を生む。新派の番附も沢山かいいて居る

ので責場の絵は沢山ある演劇博物館所蔵のものを見られるとよいと思う。其息子清言氏は井川洗涯氏に師事し、後又清方氏に師事して専ら大衆小説の挿画を描いて居る。筆者と交りがある。

### 富岡永洗

小林永濯の門人にして明治時代美人画家として武内桂舟と並び称さる。長野県の人、其傑作「八雲の契り」は博文館の蔵版にして明治時代唯一の春画で戦災後、某錦絵出版業者の手に依つて再版されて居るがそれは別問題として女の責場は流石に日本一、女の顔面表情などに永洗でなければならぬ色気がある。明治二九年都新聞に出た遅塚麗水（紀行文の大家）作「鷹丸」という小説の挿画の如きは素晴らしい傑作で今原本を焼失したので本誌に掲載が出来ないが上野図書館には所蔵されて居ると思う。

### 松本洗耳

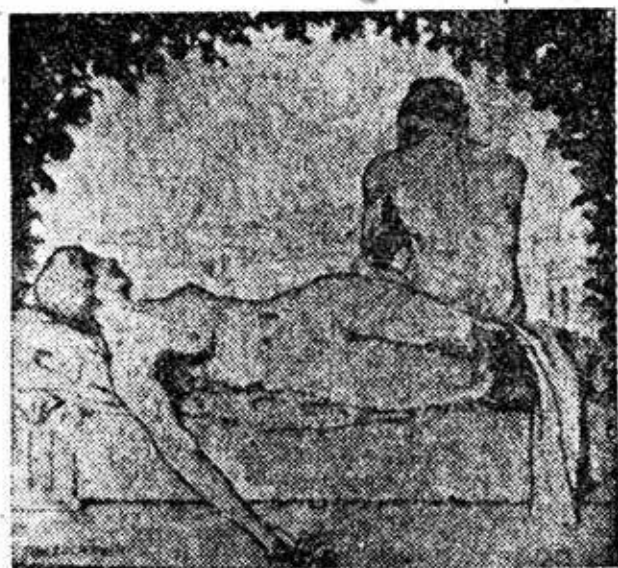
永洗の門人にして永洗歿後都新聞に入り小説の挿画を描く。「殺さば殺せと馬子の時」の小松嵐は全部此人の描く所、お時の水責や小松新三の妻滋子の酒責など沢山責場があり

続「玉とり姫」「堀のお梅」等に無数に女の責場がある。これ亦上野図書館に所蔵されて居る。此他、落合芳蔵は歌舞伎新報（明治初年の演劇雑誌）に多数責場をかいいて居るし其息落合芳鷹は明治時代の新人であつた。（辻番附の話の中に書いておいたヨシマロと落款した番附は時に古本屋の店頭で見掛ける）

### 其他の人々

小林永濯が日本初期の政治小説（雪中梅の方が先だが）として初めて劇場のライトを浴びたのは明治二五年の春、吾妻座の伊井蓉峰の初舞台千峯米坂と日本最初の男女合同演劇で依田学海作「政党美談淑女の操」七幕、其中に華族の女中が伊香保の山中で山鴛に縛られて狼に喰われ様とする件がある。此絵を小林永濯が「都の花」という雑誌に描いてある面白い図であつた。其他安達吟香の蛇責、小林清数の同、等々芳年一派の多数の挿画を一一並べた処が現物を示す事が出来ない、丁度鰻屋の前で香だけ嗅いで居る様なものだから省略する事にした。（未完）





# アーヌスへの讃歌

— 羽村京子さんへ —

住田弘志

吾妻新氏、岡田咲子さん、古川裕子さん等のライターと共に「奇ク」作家群の内で最も好きな羽村京子さんに読んでいたゞきたいと思つてペンを執りました。

チューブ(煉鹵磨)などのおしりをグル／＼巻いて押し出す時の手応え、ニユル／＼と狭い口からはみ出て来る柔い物質。その滑らかな表面に所々出ているブツブツ・チュツとしぼり出されて来る時の鈍い響き、何か嗜虐的な想いをそゝられて、齒で唇を噛みしめたいくなるような、あの疼くような痺れるような快感に魅力を感じるのは僕だけだろうか。

僕にとつて、それはセックスに迄つながるものゝように思えてならない。僕は女の体の

中、臀部とアーヌス(肛門)に最も烈しく惹かれる。つまり、はつきり云えば臀部とアーヌスが僕の性慾の対象の中核なのです。

「お前は性感の中心として臀部を感じているその又中核焦点としてアーヌスを感じているのだな。つまりはお前の性感帯は一つだ。」と云われると僕は一寸自分の考えていることゝ、そこに或る程度ニュアンスの差を感じます。僕の性慾がこの様に少し異常となるに至つた経過を僕の成長と共に辿り心理的に分析すればそういう云い方も出来るかも知れませんが、現実の僕の感覚はそれでは正しく云い現わしていません。つまり、私の心的風景は臀部は臀部、アーヌスはアーヌスで別々の魅

力を持つて夫々併立して私の性感の最高の位置をしめているのです。二つの異質な性感帯があつて、それが離れがたく人間の体の中で密接に結びついて位置しているために、反つて相乗的な強烈な魅力を放っているのです。

何故、人間の体の中の臀部だけがあのやうに割れているのだろうか？ 円々と滑らかに盛り上つた尻、中に何も臓器を含まず、ぜいたくに、それこそ脂肪をふんだんに使つて造られたこの人間の体の中でも最も分厚な筋肉は一体何のためにあるのだろうか？ それは実生活全くの余計者、人間の体の中でも最も不用品な部分です。神様が造化の仕事に熱中し、一番最後に一番手間のかゝる、一番デリケー

トで精巧なものとなるべきそれだけに一番神様にとつて可愛い人間の制作にとりかゝつた時のことを想像して下さい。あゝでもない、こうでもない、とそれこそ超音ジェット機を作るよりもなお何倍かの苦心の末、一切の無駄を省いた、最も精密で機能的な「人間」という名存在が出来上りました。神様は満足げでしたが、不図見るとまだ人間用にとつておいた素材が、一かたまり残っています。彼は難しい仕事をやり了せた嬉しさに、つい気まぐれにそれをとつて投げつけました。それは丁度後ろ向きになつた足のつけ根の所にくつついたのです。神様は上機嫌で新しく出来たその部分を愛撫し、アーンヌスに道を開けるために割れ目を作つたりなどしながら浮き／＼して申しました。

「こゝは臀部だ。そうさな、もう負わすべき役目は何もないし。こゝは美とセツ



クスに奉仕し、人間共に悦楽を与える所にしよう。」と。

私には、神が恵み給うた甘美な贈物としか思えません。その美しい弧を描いて伸びた円い曲線は見るために、滑らかで柔かな――女の臀部は、産毛もどこよりも一番少く、勿論硬い毛などなく、又浪費された脂肪のために体の中でも最も柔らかで滑らかです――肌は触れるためにその肌の遮るものもない広さは愛撫するために、唯それだけのためにあるのだと思えてなりません。更に次のような巧

緻な造化の妙によつて、臀部はより強烈でより甘美な魅力を放つています。つまり臀部はのつぺらぼうではありません。真中で深く鮮やかに割れて、しかもピタリと両側の筋肉を密着させているのです。何という神の叡智！ 白い肉の中央を深い陰影

を落して走る割れ目。そして、その割れ目の線は脚に連る手前で女の体にあつては、ものゝ付け根に左右から集る横しわのような数本の線のくびれで遮られています。女の臀部の白い冷たいしかし皮膚の下の鮮紅色の血の流れを証するうすい桃色の色合いで品よく染められた美しいヴィジョン。ガツと噛んでやりたいという衝動を起させる二つの丘のヴォリウム。

少女の羞らいを想わせて、白い上にも白かつた臀部の色も、割れ目に近づくに従つて、何かしら小麦色から焦茶色、そして陰影とも肌ともつかぬ暗黒色へと次第に人間くさい生まぐさい色合いへ微妙に移行してゆきます。私ははしなくもその肌の色合いに清純で高貴な「女性」も又逃れられない人間の運命として情慾の祕密を蔵しているという事実を昼は貴夫人、夜は淫女となつて自らの情慾に悶える雪夫人の悪魔的なそれだけに魅惑的な姿を見る思いがするのです。

芳醇な香りです！ 或いは匂い、いやむしろ臭いというべきかも知れません。しかし、女の臀部とアーンヌスへの強い魅力に魅された私にとつてはそれは香りです。臀部の割れ目からほのかに匂つて来る色々な分泌液のミツク



スされた香り。一人々の女だけが持つてゐる特有な個性的な香りがそこで最も強く芳醇な魅力を放っています。そうだ、それこそ女の体臭なのだ。ほんとうにその女を好きかどうかは、この真の体臭をかいで始めて解るのだ。

私の知っている或る女は何か肉の焦げるような、一種独特の生臭いニオイを持つていた。私はこの女をさまで好きと思わなかつたけれど、そのニオイは私に堪られないノスタルジヤを感じさせた。こんなことをしなければ生きられない自分の卑しさ、悲しさしかし又それ故の自己への愛憐の思いに、私は涙ぐみたりのような気持ちに置かされた。私だけはデリケートな感性に恵まれた私だけは神様が臀部に注いでいる愛情の祕密を理解しているのだ。//選ばれてあることの恍惚と不安と二つながら我に在り//と云つたヴェルレーヌの感傷に一寸浸つてみたりのこの時だつた。昼も夜も私の脳裡を去らぬ夢にも忘れ得ぬ美しい女王、私の全情熱に君臨するクイーン・アースがいよいよ私の眼前に現れて来ますアース!! 羽村京子さんあなたはしみじくも「可愛らしい絞り染めのような」と讃えられましたね。チヨコナンと位置をとつたあと

けないその姿は可憐です。正に「絞り染」のように、臀部のヒタはアースに於て極まりますそれは堅く恥ずかしそうにいつもつましく隠れて引き緊つています。このあたりの肌はも早や普通の皮膚ではなく粘膜と皮膚のアイの子のような微妙な触感を持つています。さて冒頭に書いたチューブの幻想は、アースに連なる連想に他ならないのです。酒でも水でもよい何か液体か或は空気を一杯詰め込んだ女のお腹をギューツと押え付けます。或は初め寝かせておいて上体を起しそれを前に倒しそれで腹を圧迫します。人間チューブです。堪りかねてチューブの口から液やガスが洩れて来ます。

水を詰め込んで長い間放つておけば尿になつても洩れて来るでしょう。羽村京子さんの「妖花」では排泄を常識的な姿勢とする所が描かれています。それよりも仰向けに縛り付けて、脚を折り……胴体の両横に夫々縛り、排泄する者にはとてもみにくいというようにした方がサディスティックな見地から云つても幾倍か刺激は強烈でしょう。

羽村京子さん、若しこの私の文章がお目にとまつたら、ドウゾお便り下さい。誌上でも結構です。感想を書いて下さい。他に私は一

般的にサディストの生れる原因について考察した小編、サディストとしての私の生い立ち記いわば(イタ・セクスアリス)、アルザス・ローレンの虐殺に想を得た小説の三つの原稿を筐底に蔵しています。尊敬する親愛なる京子さんが読んで下さるならそれらをもお送りしたいと思うのです。

京子さん、私の祕密な、不逞な望みを申しましようか。

あなたにお会いしたいのです。あなたは御主人を持つていらつしやる。幸福な生活を楽しんでおられる様子です。にも拘らず、私はいつの日かあなたにお会いする夢を捨てません。あなたを不倫の妻にしたいという罪深い幻想に日夜苦しめられています。

なんと大それた望みでしょう、あなたの幸福で平和な夫婦生活を破壊してまで、私はあなたにお逢いしたいのです。いや、お逢いすることよりも、その方により強い興味を持つてゐるのかも知れません。

こゝに私のサディストとしての本性があるのでしよう。私の大好きな京子さん、どうか御返事を下さい。

## 淫

(みだらび)

## 火

(第八回)

松井 籟子



一

話しながら来る人の足音が聞えた。小百合夫人は息を殺して、うめき声を外へもらまいとした。さつきから猿ぐつわをはめた口の中で、思わず呻めきつづけていたのだ。体中の痒さは縄がほどけないと知つても、身をもだえずにはいられたかつたがそれも一生懸命我慢した。ふき出るように脂汗がういてくる。

「ほら比処へ来ると潮が見えてきれいでしよう？」

邦彦の声だった。

「君、小百合さんとどこで別れたの？」  
雄作の声だった。

「そんなに気になる？」

「気になるということもないけれど……  
街といつてもこの辺は見に行く所もないし、そう長いこと散歩というのも変じや



ないか」

雄作は邦彦が小百合夫人を連れ出して、何か言つたのではないかと氣になった。もし自分と邦彦との關係を小百合夫人が知つたら、彼女の清純な心はその汚れにたえきれず、湖にさそわれないものでもない。

二人で散歩に出た邦彦が一人で宿へ歸えつて來たのを不審に思つて、雄作がきくと、邦彦は

「あら、まだですか、奥さんの方がさきかと思つたのに……」

と言つて、途中まで一緒だつたのだが、彼が道からはずれて小用をしている間に見えなくなつたと弁解した。そしてすぐに

「じゃあ探しに引返えしてみます。雄ちゃん、一緒に行きましょうよ」

と誘つたのだ。

雄作は邦彦の態度に何かふにおちないものがあつたが、それが何なのか、はつきりわからないまゝ、連れ立つて此処まで山道を登つて來たのだ。

「ねえ、雄ちゃん、どうしても僕と別れる氣？」

「うん」

雄作は答えた。

「ひどいなあ。僕はいやだ。僕は雄ちゃんに童貞をささげたんですよ。それだつて、最初誘惑したのは雄ちゃんからだつたんだ。雄ちゃんが僕の唇をうばつたんですよ、忘れやしないでしよう？」

小百合夫人の耳に邦彦の聲が針のようにささつてくる。

「ああ……」

と、小百合夫人は口の中で吐息したが、口におしこめられている

ハンケチがその吐息を吸つてしまつた。

「こんな道ばたでそんな話はよそうよ」

雄作が言つた。

「じゃあどこでする？此処なら奥さんに聞かれずにゆつくり出来るでしょう？」

邦彦はわざとそう言つて、道から少し入つて小百合夫人の縛られている草むらに近い石に腰をおろしてしまつた。

「君は小百合さんには何にも言わなかつたんだね」

「いうものですか」

邦彦の顔に悪魔の笑いのような皮肉な笑いがうかんだ。

「そんならあの人にだけは言わないでくれ。僕が頼むから」……

「雄ちゃんが僕と別れるなんて言わなければ、奥さんにだつて言いませんよ」

「しかし、こんな男同志の關係がいつまでつゞくものではないよ」

「どうして急にそんなに薄情になつたのだろう。よく雄ちゃん言つていたじゃありませんか。奥さんでは満足出来ないんだつて。……」

ねえ、ほらこうして……フムムムだめだめ、えらそうなこと言つても、ちやんと……フフ……」

邦彦は女のように笑つた。

小百合夫人が聞いていることを予期しての邦彦の痴態であることは夫人にはわかつた。しかし、夫と關係があるという邦彦の言葉が嘘ではないのだと氣がついた。夫人は口よりも耳に猿ぐつわをはめてもらいたいと思つた。それ以上聞くにたえなかつた。

しかししばらくすると

「さあ、もう歸えりましょう」

邦彦が雄作をうながした。

「もう奥さん帰えつていよう。それとも僕はこの道をもう少し登ってみますから、雄ちゃん、湖の方へ行ってみませんか？反対に下の方へおりて行つたのかもわかりませんよ」

それは雄作が案じていることでもあつた。

「じゃあ、そうしよう」

雄作は邦彦と別れて、ひとりになりたい気持ちもあつて、カタカタと下駄音を残しておりて行つてしまつた。

## 二

縛られたいと、あれ程夢みていたのに、小百合夫人にとつてそれは考えたほどの陶醉も喜びも伴わなかつた。

「痛かつた？」

邦彦は薄気味悪く笑いながら、小百合夫人の縄をほどいた。しびれた手が急にはもとのようにならなかつた。痛いという感覚がなかつたら、他人の手の様に小百合夫人は思つただらう。

「聞えたでしょう？僕達の話……」

邦彦がいうのに夫人は答えず、乱れた着物の前を先ず直した。

「奥さん、雄ちゃんと別れた方がいいでしょう？」

小百合夫人はだまつていた。そして、放り出されてあつた下駄をみつけようとするように、うつむいて、地面の上をとみこみして

### 前号迄の梗概

小百合夫人は被虐の喜びを味つてみたくてしかたがなかつた。それは夫の雄作にも秘している小百合夫人の体の奥底の欲求だつた。大阪の下町の盛り場新世界へ行つてみたのもその欲求にそのかされてのことだつた。そこで夫人は自分を東京から来た不良少女つる子と偽つて村山富男やその情婦松枝を知る。又、画家くずれの貴船一郎とその内妻順子に会う。貴船一郎は小百合夫人に激しく惹かれるが、夫人は一郎のサジズム的傾向を知り、それには惹かれる心が強ければ強い程、自分自身をおそれ、夫を旅に誘う。雄作は学生時分から交渉をつゞけてきた南部邦彦との情痴を清算すべく、夫人と伊豆旅行をくわだてる。しかし、邦彦は旅先まで雄作を追つて来て、その仲を清算することに反対し、雄作と小百合夫人の予定を変更させて箱根に誘い、小百合夫人と散歩に出て、夫人に雄作と自分との情事を打あける。夫人が男同志の関係を信じないので、無理にも教えてやると、夫人を草むらの中へ縛つていつてしまふ。

いた。雄作は相変らず皮肉な微笑で、わざと小百合夫人の前へ、道ばたに転つていた宿の庭下駄をきちんとそろえて出した。

「ねえ、離婚なさるでしょうね？」

それでも小百合夫人はだまつて、下駄をはき、宿の灯を目当てに道をおり出した。膝ががくがくするよう歩きにくかつた。

夫人の胸にたぎりたつてくる憤りを押さえるのに苦しかつたのだ自分は被虐の喜びを夢みていた。今、邦彦に縛られ、夫の秘密を目の前に聞かされても身動きも出来なかつた。それは喜びであるはずだつた。それなのに、今、小百合夫人の体一杯にお湯が沸騰するようにならざるものは、外へ向つて流れ出さなければはけ口のなみのものだつた。とても自分の身で内面的に、いじめられることで我慢の出来るものではなかつた。

「奥さん」



しつこく返事を求める邦彦に、小百合夫人は険だかに言った。  
それは長年、生れた時から人にかしずかれてきた小百合夫人の育ちの良さからくる気品と我がまゝさが身についている命令の様な語調になった。

「南部さん、あんまり失礼じゃございません？夫婦のことは夫婦で相談致します。おひきとり下さいませ」

邦彦の頬の引きしまるのが夜目にも感じられた。

「僕を敵にまわすおつもりですね。それもいいでしょう。今夜はもうお邪魔しないでお願いします。ゆつくりお休み下さいませ」

邦彦は足早に去って行つてしまつた。

小百合夫人は縛られた手首や腕がまだ痛かつた。宿の玄関はもうひっそりとして、男衆がひとり帳場にいるきりだつたが、明るい電燈の光に手首の紐のあとがはつきりみえるのに夫人ははつとした。そして、心の中で騒いでいた憤りの感情の上に、異様な感情が加つてきた。

小百合夫人が離れの、自分達にあてられた客室に戻ると、もう寝床がとつてあつて雄作は、片よせた机の前でぼんやりと煙草を吸つていた。

「あなた……」

小百合夫人は雄作の前に、自分の手を両手ともさし出した。

「ほら、このあと、何のあとかおわかりになる？」

驚いたように茫然と小百合夫人の顔と手首を見ている雄作に「縛られたあとなんです」

夫人は言いながら、さつきは一寸も喜びを感じなかつた縛るといふことが、言葉として口からついて出ると、再び異様なさざめきを

体におこすことに気がついた。赤くしぼり染の線のように、ただ真直な線ではなく、皮膚をしぼつたような痕が痛々しく、どんなにきつく手首が締められていたかを物語っている。それは痛さの去つた今、小百合夫人に好もしくさえ思える刺戟があつた。

しかし雄作は妻の手をとつて手許に引きよせて、その痛々しい痕をみると、急に立上るような気配を見せて

「誰にされたんだ？え？どこで？」

いつもはよそゆきのような丁寧な言葉を妻に対して使う雄作が、乱暴にそう言つたのは、よほど意外だつたからだろう。

小百合夫人はそんな夫を冷たく制して

「いいえ、もうすんだことなんです。それより、私、もつと……もつとひどいめに合わされました」

「え？」

もしや強姦されたのでは……。そう夫の目が聞いているのを、

「フフムム」

わざと夫人は笑つて、それからまるで相手の急所をぐさつとつきさすように言つた。

「現在自分の夫が、他に女の方ならともかく、男の方を可愛がつていたなんて……」

無気味な沈黙の瞬間が次にきた。それは大げさにいえば地球が静止したような空虚な、そのくせ危険を一杯にはらんだ時間だつた。

雄作は言葉をなくした人のようにだまつてしまつた。

その息づまるような時間にたえられなくなつたのは夫人の方だつた。彼女は口早やにたたみかけて言つた。

「南部さんにうかつたのですけど、私、信じられませんでしたの

すると南部さんは急に私を縛って、あのあなた達のお話しになつていらした道の横の茂みの中へ私を身動き出来ないようにくくつてしまつたのです。猿ぐつわまではめられて……。私は自分の夫の秘密をはつきりこの耳で聞いてしまつたのです。それでもまだ私にはわかりません。男の方同志で……。そんなおかしな、乱れた行いがあるのでしょうか。私、信じたくありません。そんなきたならしい……。それを知らずに今まであなたを夫と思い、そして、私までが汚れてきたのです。私までがきたなく、けがらわしい……」

「小百合さん」

雄作が叫ぶように言つた。

「僕を打つてくれ！」

雄作はもろ肌をぬいだ。

「僕の体は汚れているのだろうか。この体が……」

彼は自分の手でピシヤピシヤと自分の胸をたゝいた。

「君の思うとおりに僕を責めさいなんてくれ。君が邦彦にされたように僕を縛つてもいい。僕は今、君の手で折檻されるより他に、僕の心を晴らす方法がない。僕は苦しんでいるのだ。この心の苦しさにくらべれば、君にどんなことをされようと、そんなことはものゝ数ではないと



思う。さあ、どうにでもしてくれ」

「いゝわ、いじめてあげます」

小百合夫人は夫の手を夫の寝巻の紐で後手にくくつた。

「さあ、お立ちあそばせ」

雄作は言われた通りに立つた。寝巻がぬげて、ばさつと彼の足もとに落ちた。小百合夫人はそれを取りあげると、裸で後手に縛られ



ている雄作に着せかけて、別の紐で前をむすんだ。手のない男が着物を着ているような恰好だったが、ふところ手と見えないこともないだろう。しかし、それにしても着物の前が高くならず後が高くなっている。それを小百合夫人は自分の体でかくすようによりそうと、

「このまゝお風呂へ行きましょう」

とうながした。

長い廊下を曳かれ者のように雄作は歩いて行つた。夫人は時々彼の背をこずいた。

小百合夫人は今、自分がされたいと思つていたことを夫にしようと思つたのだ。夫の上に自分の姿を二重写しにして、夫を責め苛むことで自分の鬱憤をはらそうとした。

湯殿に入ると中から鍵をおろした。

「そこへ犬のように這つてごらんなさい」

夫人は夫の縛しめをとくと命令した。

四つん這いに這う雄作の腰をあげさせて、その背と腰の上に、水をみたした桶をのせた。

「しばらくそうして動かないでいらつしやい」

夫人は風呂に浸りゆう／＼と体を洗つた。草むらの中の痒さを感じ出したのだ。念入りに体を洗つた。雄作が妻の背中を見るのはそれがはじめての機会だったかもしれない。しかし、犬の様に這っている彼には床しか見られなかった。手と足がだん／＼だるく痛くなつてきた。しいんとした湯殿の中で、聞えるものは小百合夫人の時々流すお湯の音だけだった。ひとりの男が苦痛とた／＼かっているなど想像するものもいなかつたらう。雄作の額に汗が浮いてきた。



けれどそれは自分の求めたことなのだ。雄作は無念無想に、たゞその肉体的苦痛をこらえようとしていた。それが精神的苦痛を免れる道なのだと、痛さに救いをもとめたのだ。手がふるえ出した。やがて

「もう許してくれ」

雄作は言つた。

「いけません、そうしていらしやい」

小百合夫人は冷たく言う。

「打つなり蹴るなりしてくれ、もう駄目だ」

雄作は四つん這いのまゝ腰をおとしてしまった。桶が二つころがつて、冷たい水が彼の体をぬらした。真夏でも不意に水をあびればゾットとする。夏近いとはいえ、夜の空気の中で、下半身に水をあび

た雄作の肌は粟粒だつた。

小百合夫人はさつき雄作を縛つた紐で、もう一度彼の手を後手にくゝつた。今度は前から見えてもかまわないので残りを首に廻した。「声がもれるとうるさいから、猿ぐつわをはめますわよ」

宿の名入のタオルや手拭が、ぬれたまゝ脱衣場にかけてあるのをとつてきて、一つは口の中へ押しこみ、一つは上からかたく頬をくゝつた。まだ手拭が余つた。小百合夫人はそれをねじつて綱のようにして、さきに結びこぶを作つた。

「打つと聞えるかしら？」

言いながら、雄作の背をピシツと打つた。一回、二回、三回、雄作の背中に赤い縞が出来た。夫人はまるでそれを消そうとでもするように、洗面器に水をくんでザアツとかけた。それも一杯、二杯、三杯……。冷たい体が反対にカツカツと熱くなつた。

「やつぱり打つのは駄目、聞えるとおかしいもの」

小百合夫人は打つのに使つていた手拭でさらに雄作の足をしばつた。

「音がしないで痛いこととしてあげましょう」

何をされても無抵抗に転つてゐる雄作を風呂場のタイルの上に仰向きに寝かせると自分の髪からピンをぬいて、それで滅茶苦茶に彼の体を突つづいた。雄作は転げ廻つてピンのさきをのがれようとした。しかしうつ向けば背や尻を仰向けば胸もおなかも、横向けば二の腕を、夫人の手は容赦しなかつた。雄作が転げ廻れば廻る程、小百合夫人は両手にピンを持つて、ブスツブスツとつきさした。その小さい毛ピンは肉にまで通る程ではなかつたが、力があまつて皮膚を破り、血が出てくる所もあつた。血が出ると夫人は水を浴せた。

雄作は猿ぐつわをはめられていることがだんだん苦しくなつてきた。鼻だけで息をするには胸が波立ちすぎるのだ。犬のように舌を長くたらし、ハアハアと荒い息をつきたかつた。

「ううっ！」

と叫びた。猿ぐつわを透して息をしようとしたが口はたゞ誰が使つたかわからない手拭にしみこんでいる体臭を深く吸いこませただけだつた。

「もうやめてくれ」

そう言いたかつたが、声にはならなかつた。そして、そう叫ぶすきもない程、執拗にピンは体中を走り廻つた。まるで小さいスパイクをはいた小人が、雄作の体の上で踊つてゐるようだつた。猿ぐつわをもれる呻めき声が大きくなつた。

「どう？ いかゞ？ 苦しい？」

小百合夫人はピンを持つ手を休めずに、雄作の苦悶を面白そうに見ていた。

トントンと誰かが外からノックしなかつたら小百合夫人はまだ雄作を責め苛んだかもしれない。しかし、「トントン」とつづけてたゝく音に中の二人ははつとして、思わず身をかくした。夢魔の世界から現実に取り戻されたように、小百合夫人は雄作の猿ぐつわをはずした。外の声は遠慮深くなつた。

「お使いですか？」

「はい」

と夫人が答えると

「失礼しました」

そう言つて、足音は去つて行つたが、小百合夫人はもう再びその



遊戯をくりかえす気持にはなれなかつた。夫のいましめをとくと、手拭をもとあつた所へ片ずけて、湯舟に浸つた。何かしら夫に視線が合わされなかつた。夫婦は両方から視線の合うことをおそれるようにして、部屋へ戻つたのだつた。

## 三

朝になると小百合夫人は夫の視線から相変らず目をそらすようにして言つた。

「私、南部さんにお目にかゝりたくありません。一と足さきに帰えらしていただきます」

「帰えるつて、大阪へ？」

雄作は聞いた。瞬間夫人は迷つた。「東京へ」と言つてしまひたかつた。東京には実家がある。しかし、その実家も義理の兄が主権を握つてゐる現在、居心地のよい住み家ではなかつた。やはり芦屋へ帰えるより他にない。

「一緒に帰えろう。今すぐ発てばいい。僕も南部には会いたくないのだ」

雄作は言つた。はじめから会うまい為の旅行だつたのだ。

「とに角僕のそばにいて下さい。ね、小百合さん、頼む」

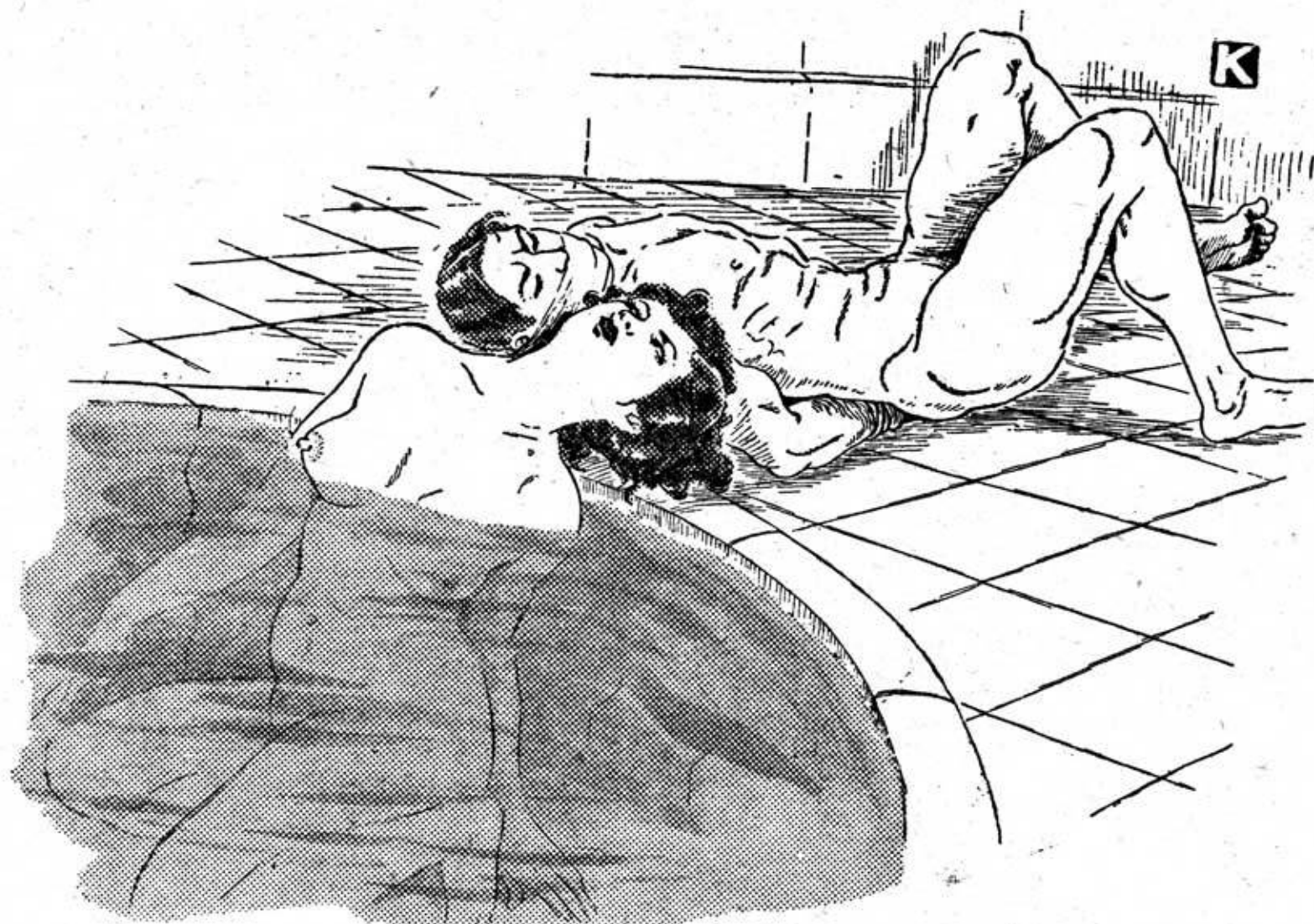
雄作は小百合夫人が離れて行くことをおそれた。つゝしみ深い夫、人がまさか離婚の理由に自分の男色を言いたてるとは思わなかつたが、女はおしやべりなものだ。女友達の耳へどう伝わらないものでもないだろう。雄作の社会的地位はそれを不名誉なことと思わせた。そしてそれよりも、雄作は昨夜はじめて、全裸の夫人を見たといつていいのだ。結婚して以来、一緒に入浴するのさえ、妻が恥しが

自分を下品な男と思ひはしないかという危懼をいだいてきた。夜の寝室でさえ、裸でたわむれるというようなことはなかつた。雄作は昨夜はじめて妻の美しい肉体を見た。そして妻はその肉体を手でおゝいもせず、雄作の目にのこらずみせて、雄作を責め苛んだ。もつと痛くされてもよかつたと彼は思うのだ。そして、全裸の美しい女によつて苛められたことは、不思議な陶醉の記憶を彼に残した。雄作は昨夜のことによつて、妻が自分から心をはなしたと知りつゝもその反面、何か今までになく近よつたものを感じたのだ。

「私、べつに急にお別れしようとは思つていません。でも、大阪までの長い時間、御一緒に汽車に乗つてゐることを考えると、私、ひとりで帰えらしていただいた方がよろしいのです」

小百合夫人は静かに言つた。夫人自身も複雑な感情の整理がつかなかつたのだ。邦彦に縛られても喜びを感じなかつた体が、夫を苛めてゐる時にふつとそれに陶醉してゐた。それは喜びとまで名づけられるものではなかつたかもしれないが、人を苛めることに厭悪感ではなかつた。そういえば新世界で、村山の手を縛つたり、肩にかみついたりした時でも、厭悪の情はなかつたのだ。むしろ波立つような刺戟があつたのだ。いったい自分はサジストなのだろうか、マゾヒストなのだろうか。小百合夫人は自分の喜びが本当にどつち側にあるのかわからなくなつた。彼女にとつてそれは新しい発見だつた。そして又、小百合夫人はやりきれない自己嫌悪をも感じてゐた。

どつちにしても何か正常でないものが自分の体に流れてゐるのだ。それを洗い清める為の旅ではなかつたか。ふと近付きかけた悦虐の世界から、身をひるがえす為に思ひ立つた旅だつた。その旅が皮肉にも小百合夫人に現実にも身をもつてサジズムもマゾヒズムも経験す



る旅になつてしまつたのだ。身を逃れようとしたら反対に引き込まれた。いつそ、その中に溺れるつもりで望んだらどうなるのだろうか。こわごわのぞいていると、背丈の立つ池が、泥沼のように深く思われるのかもしれない。手にとつてみれば小さな魚なのに、水族館の硝子越しに見ていると、大きく見える例もある。

小百合夫人はもう一度新世界へ行つてみようと思つた。再び前についた嘘が口にのぼつた。

「どうせ帰り道ですし、私、先日伺つた伊勢の先生の所へもう一度およりしてみようと思ひますの。いけませんかしら？」

雄作にそれをとめる理由もない。怒つて別れると云われてもそれまでのものを、小百合夫人はとも角、芦屋へ帰えると言つてゐるのだ。

「それじゃ僕は東京で少し会社の方の用事を片付けてからすぐ帰えるから、志摩へでも行つてゆつくり静養して来給え。何ならその先生をお誘ひしたらいいでしょう」

雄作は言つた。

伊勢に女学校の時の先生がいるという前についた嘘をうのみに信じてゐる夫に、嘘をつくことの済まなさを今度は感じなかつた。夫だつて自分に邦彦のことを嘘ついていたのだ。いくら相手が男であろうと、不義に变りはない筈だ。むしろ、相手が女であるよりもつと妻にとつて不愉快なことではないだろうか。

#### 四

みなみの貴船一部の紹介してくれた旅館へ泊るつもりで、小百合



夫人は地下鉄を難波でおりた。急に暑くなつた街には白い色が多かった。男も女も白い服を着ている。昔の日本には季節の着物にきまりがあつて、氣候の暑さ寒さよりも、何月には何という衣類のきまりが守られていた。今はそんなきまりはほとんどの若い人は知らない。奔放に氣候によつて衣服を変える。桜の咲く頃から、真夏の白い靴を履く人もある。

小百合夫人は自分の芥子色のスーツが急に厚ぼつたかと思える程、みんな薄着だつた。それゆえにとり分け目立つたのかもしれない。近づいたサンドイツチマンが、広告ビラを手渡しながら、

「つるちゃん。すぐ行くから、このさきのまがり角で待つていて下さい」

とささやいた。

小百合夫人が驚いて顔を見ると、村山富男だつた。前と後に首かせを垂らしたように広告の板をぶら下げて、罪人が自分で引き廻しの高札をかがづけているように見えた。好奇の目でみんなにじろじろ見られ、無理に笑いを作つて歩いているサンドイツチマンという職業が村山の性になつていようでおかしかつた。

村山はどこかへ預けて来たのか、広告板をおいて、身軽な白い開衿シャツで走るように来たが、小百合夫人のスーツと並んで立つては不似合な自分の身なりを恥じて

「此方へまがりましょう」

と、賑やかな通りをそれたが、一軒のパチンコ屋へ入つて行つた玉をもらうと、小百合夫人の手に半分あけて、

「こうやつて話していれば並んでいてもおかしくないだろう」  
そうつて、パチンと球をはじいた。

小百合夫人はパチンコというものはじめてだつたが、なる程そうして並んでいれば、労働者の様な村山の姿と、スマートな芥子色のスーツが不自然ではなかつた。それ程、パチンコ屋の客は種々雑多な階級を集めていた。

「あんまり気どつているので、つるちゃんと違ふかと思つたけれど俺を覚えていてくれたんで安心したよ」

村山は急にぞんざいな口調になつて言つた。

「何かもうけ口かい？」

村山は小百合夫人をやつぱり不良少女か何かだと思つていゝらしい。

「貴船さんがあんたを探しているんだ。俺もあんたに会いたかつたが、貴船さんには、俺、一寸頭の上らねえことがあつてね。ヘツヘツヘツ」

と笑うと、

「どうだい、これから行かねえか。俺の方はあと廻しにして、貴船さんに会つてやつてくれよ」

チーンとベルが鳴つて、村山の手許に玉が転り出た。それを又半分、小百合夫人の方へあけると

「いいだろう、つるちゃん。ああ、それから、何つるちゃんつていうんだい？俺、名前きかれて困つたよ。何処に住んでいるんだい？」

「そんなことどうでもいいわ」

と、小百合夫人は答えた。

「小父さん、貴船さんつれて来てくれる？」

「お前の所、教えてくれるのか？」

「いいえ、そこらの喫茶店で待っているわ」

「本当に待っているかい？」

「本当に……」

「そんなこと云つて嘘つかれると、俺、貴船さんに又怒られるし、第一、俺の言うこと本気にしないかもしれないや」

「そんなら、これ持つていくといいわ」

小百合夫人はイヤリングをはずした。

「これ本物だから、売れば相当に売れるのよ、私が気が変つて帰えつてしまえば小父さんそれでもうければいいわ。貴船さんにあげて割り前をもらうなり、どうなりとなさいよ。貴船さんだつて、たとえ嘘としても損にならなければ此処まで来たつていいじゃないの。ね、私が待つていたら、それは返えしてもらつて、別にちゃんとお使い賃あげるわ」

「さすがつるちゃん、へへッ、話がわからあ、じゃあ、ここの前のあのハニーつて喫茶店で待つて下さいよ。どこだこたというとな、又わからなくなつちやうから」

「いいわ。どの位時間かゝる？」

「大急ぎで行つて戻つて、一時間とはかゝらないね」

「そう、じゃあ、私その辺散歩して、きつちり七時に行くわ」

「へえ、承知した。じゃあ、これをおあずかりしますぜ」

「小父さんこそ嘘ついて、それをのみしろにしてしまうんじゃないの？」

「そんな……俺、そんなケチくさい男じゃねえ」

「フフ……それは冗談。小父さんいい人だつてこと、ちゃんと知つてゐるわ」

## 羽村京子さんへ

—川端多奈子より—

本当に月日の経つのは早いものと思ひますわ、一月九日付で京子さんから頂いたお手紙、ほんこの間と思つていましたのにもう蚊が出る時候になつてしまいましたのですもの、

あの時、きつと来ていたゞけますでしようね、と念を押されおられましたので、多奈子、ほんとうに胸をドキドキさせて毎日お返事お待ちしていましたのよ。若し、来て下さいいつて言われたらどうしようかしら、とでも、とうとうお返事がありませんでしたので、半ば諦め、そして、もう忘れかけた時分、突然私への呼びかけ、七月号で拝見、びつくり致しましたわ。

私、京子さんのように女専までは学校へ行つておりませんのでムツカシイことは一向に存じませんのですけれど、臍や肛門などには興味はないようです只、自分で申し上げるのは変ですけれどもお臍から下腹部へかけての美しさにはちよつと自信がございしますの、京子さんに魅力があるわ、と賞めて頂きましてたけど、京子さんでしたら、きつと私のお腹にひどい事をなさるでしようね、私、切腹とか股裂き、空気ポンプなんて嫌ですわ、たゞ、京子さんのおつしやる人肉料理、あれには少し、いや大分かな、興味を持ちましたわ、変死人なんかは必ず解剖されるんですつてね。私も、ふつと解剖されたら、と思つたりしますの、勿論、ぐねぐねと長い腸なんかも出されて——。

出来たら、これは川端多奈子のお臍だ、これは唇だ、とバラバラにされて沢山の方々に見て頂いて拳句の果、食べていたゞいたらどんなにいいだろう、なんて空想したりしますの、でも生きたまゝだつたら痛いし、死んでしまつてからだつたらつま



ほめられてく笑顔で去つて行村山の後姿を見ながら、村山のいた前にまだパチンコの玉が残っているのに気がついた。ケチくさい男じやないと言つた手前、それをタバコにかえて行くことが出来なかつたのだろう。

しかし、小百合夫人はいくつで何とかえてくれるのか。又、どうやつてかえてもらうのかも知らなかつたし、聞くのも面倒だつた。

「私、いりませんから使つて下さい」

と言うと、近くで熱心にはじいている人の受皿の中へジャラジャラと入れた。急には礼も云えず、あつけにとられたような顔をあとに小百合夫人はパチンコ屋を出た。

再び貴船一郎に会う。

何か胸のつまるような感激があつた。それを静めるように、小百合夫人は陽の傾いた空をふり仰いだ。遠い山脈の様な雲だつた。

(つづく)

(附記)

小百合夫人と貴船一郎は今日こそ会えるだろうか？運命の神はもういたずらをしないだろうか？次号を御期待下さい。

羽村京子さんからの御手紙を拝見してすっかり嬉しくなりました。それに対する返信文を早速書き上げましたが、私達のつまらないおしやべりのために貴重な誌面をさくことは一寸気がひけますので、信太蓉子が感激していたという旨だけ次号の片

隅にでも結構ですから御連絡下されば嬉しいと思います。

—以上信太蓉子さんより編集部へ宛てた書信の一部—

○羽村京子さん、お便りは拝見しましたが、本月号には間に合いかねましたので次号と一緒に纏めます。  
(編集部)

らないわ、

私、空想の世界でだつたら京子さんにどんな酷いことされてもかまいませんわ、縛るだけなら本当でもいゝの、身体に傷さえつかないなら、どんなきつい縛り方でも痛いのは辛抱しますお逢いしないつてお便りで多奈子、ほんとうはほつとしましたの、大変な恥しがりやで人前では思っていることの十分の一も話せない私ですもの、只、顔を真赤にしているばかりだと思えますわ、この間、座談会に出よ、出よ、と云われて引っぱり出されてしまいましたけれど誌上でごらんのように、人形さんで座つてお茶ばかり飲んでいましたわ。

京子さん、逆さ吊りお好きなのね、あれからも何度も逆さに吊られましたわ、あれは吊られる方が案外楽ですよ、吊る方の方が大変だと思えますわ、こんな生意気言つて、長く吊られて放つて置かれたら泣き出すかも知れませんのに——  
それから、私にわざわざお教え下さつた事、私、一向に興味ございませんので御返事出来な

いのを残念に思います。

私先日、塚本さんにお逢いした時、京子さんのこと、ちよつとお話してみましたのよ、そうしたら奇譚クラブの中で京子さんの書かれたものが一番刺戟がきついつて申して居られましたわ。でも、私にはあなたのおつしやられるあの悪戯にしたつて興味は持てませんし、又塚本さんのおつしやるように京子さんのお書きになられたものが特に刺戟がきついなんて思つた事もありません。

多奈子の事を羨ましいつて、おつしやられたの京子さんの外に大川由紀子さん、それに信太蓉子さん、その外読者の方で沢山でございましたわ、京子さんは多奈子が「可哀そう」で「いゝ気味」なんですつて、京子さんはきつとサディストよ、そうに違いないわ、縛られたいつていう私が、或る意味で可哀そうなんでしょう。本当に私は可哀そうな女かもしれないわつたらない事ばかり申し上げましたどうか又お便り下さいませ。

女

によ

人

にん

群

ぐん

像

ぞう

## 藤 安 節 子

極貧のために、不就学者であつた。

時勢から取り残された封建的な不当な圧迫や、服従の強制に、頭の足りぬ人間特有の鈍重さで、それらの耐えがたいことにもたえ、物質的にも精神的にも、劣等の地位に甘んじている下層階級であつた。

給料が千円や二千円の者もザラにあつた。

この工場は労基法を無視して、未成年者にまで残業を強いて、徹夜も珍しいことではないのである。

職工はほとんど麦ばかりの飯を喰い、一月に一度の入浴で、不潔を極め、汚れた衣服には、虱の卵をぎつしり附着させている。

いつたいに労働階級というものは、どうも歩の悪いもので、あながち環境のせいばかりではなく、先天的に頭の悪い人間が多く、容

貌もまた非常に醜悪である。単に水準に達した顔というものは一人もない。

ただ、健康だけには恵まれていた。麦ばかりの米を喰い、馬や牛のようにおなじ副食物を喰いつづけながら、粗食することによつてかえつて頑丈な肉体を養っているのが不思議なぐらいである。

まず彼らの旺盛な性欲であるが、すべてに恵まれぬ彼らを、たつぷり一人前以上のものを与えてくれるものは、この旺盛な性欲である。父祖の代からそうであるように、この工場には新三郎とか、健五郎とか、勘十郎とかいう名前が無闇と多いが、いずれも兄弟の多さを語っているように、彼らも妻帯すれば、一躍牛ダースから一ダースほどの子持ちとなる運命であつた。

その製本工場はK印刷所の下請けをしている場末にある小さな汚ない町工場なのである。折り、丁合、とじ、表紙やみかえしの張りこみ、ころがけ等、製本の過程を、この工場はいちいち手でやつているのであつた。

工場の建物は軒が低いところへ窓が西側に一つかないため一日中薄暗く、過労と營養不良のため、どの職工も顔色が悪く、一様に背を丸く曲げていた。

すこし頭の足りぬ人間は、紙箱屋とか、指物屋とか、手工業に従事するものだが、この製本工場の職工の殆んども、智脳程度の極めて低い人間の集りであつた。いわゆる痴愚で小学校も満足に出ているものは殆んどなく、



社会も、法律も、道徳も何も知らぬ彼らであるが、たゞこの方面の興味だけは異常に強く、それも上層階級のように、あからさまな性欲の醜さを、上品な外装で蔽いかくすことを知らないかわりに、下層の卑屈さを、心にも言葉にも泌みこませているのだった。

## 二

この工場には、十人ほどの女工がいた。

彼女たちも若し美しく生れついていたならば、たとえ低脳であつても、おおびらにパンパンも出来たのであろうが、親譲りの醜惡な容貌では到底パンパンにもなれないのである。

どの女工も、色が浅黒く、肌がすさみ、低い潰れた鼻と、にごつた小さな眼と、ゾツとするような黄色い歯を持つている。たゞ健康であるため、芋のようにふとつてはいるが、終戦直後の混乱期に於いてすら何度も夜の街に佇みながら、ついに一人の男にもありつかなかつたのである。

いくら男でも、こんな女に金を支払うのは馬鹿々々しいと思うのだから。

彼女たち女工も、極めて低い賃金で働らいているが、いまどき、月千円や二千円では、

いくら生活程度が低いからと云つても、喰つていけるものではない。彼女たちはいわゆる淫売女工であつた、つまり昼間は女工、夜は淫売婦である、これは生活のためと共に、女の本能でもあつた。女工たちの醜惡や容貌ではパンパンとして、一般人を相手とすることは不可能であるからそこで、職工階級に限定して、ショート・タイムで、五十円、百円の投げ売りで、蝕んだ肉体を切り売りするのである。公園で、竹藪で、納屋で、たゞ太つてゐるだけの頑健な肉体を資本に、彼女たちは口紅を下手くそに塗りつけ、あやしげな媚を浮べて、男たちを誘う。

九月も末になり、そぞろに秋風のつめたさが身に沁みる頃になると、工場の裏には、真紅のカンナの花が狂い咲く。ニワトリの鶏冠のように、――そしてこの季節が、女工たちのもつとも活潑になる時期であつた、彼女たちのホテルは、青空ホテルであるから、寒い冬がやつてくるまでにうんと稼いでおかねばならない。

工場には勿論便所はあるが、大便はともかく、小便なら皆、工場の裏で立小便をするのが職工たちの習慣であつた。ズボンのボタンに手をかけながら、裏庭に出ていくときまつ

て誰か女工たちが後からついていく。そこは塀に囲まれた陽あたりの悪い空地で、すつかり凋れた日まわりの傍らに、真紅のカンナが燃えそうに咲いていた。

女を傍らにして小便をすることに、職工たちは無上の快樂をおぼえるのである。同時に女工たちも、この機会を待つのであつた。そして今夜の交渉をはじめるのである。

出版界の苦境は、この小さな製本工場にも反映して、給料遅払で行き詰つていた。職工もいまは女どころか、その日のパンにも差し支えるありさまなのである。そして金のないことが、いつ知らず女よりも、同性愛に走る傾向となつている。同性愛ならば、ただなのである。ただより安いものはないというわけでは、職工同志がそこに旺盛な性欲のはけぐちを見出しているのであつた。

ひどいケチンボーで有名な山本修二は、以前から同性愛の讃美者であつた。彼は好んで女装する。彼のみは女のように色が白くて、華奢な身体つきであつた。

## 三

工場は誰の罪か、汚れすぎている。たがいのをのゝしりあい、さげすみあい、い

がみあわねば生きていけぬ女工たち、こうした女工たちの生活が、女工の生活として、社会から許容されているのである。

ことに最近、工場の不景気のため、男にありつくことの出来なくなつた女工たちは、ますますヒステリックになり、僅かなことで口論するようになった。

女工たちの喧嘩というものは、決してインテリのように陰気くさいものではなく、思いきり派手で肉体的で、エロチックなのである

彼女たちは甲

高い怒声をあげながら、つかまかゝり、たちまち肉体と肉体とが折れかさなりあらわになつたスカートの裾を引きめくり、直接肌へ打撃を与えあうのであつた。

或る日、ひどいチンバ娘の金子ミネは、男を



取り損なつたことから、口汚くののしりながら坂井カタエにむんずとつかみかゝつた、坂井カタエは流経剤を飲んで、墮胎したばかりなので、年令以上に老けて見えている。

打つ、なぐる、蹴る、髪をひつゝかみ、二つの薄汚れた肉体は、折れかさなり、下になり上になりして、金子ミネの片手は、坂井カタエのふくろびたスカートを引き裂きすかさず汚れきつたズロースを引きずりおろした。それを見ると、ズラリと馬鹿みたいに見物し

ている職工連中は、ワツと喚声の声をあげるのである。

坂井カタエは完全に打ちのめされ抵抗を失つていた。

威丈高になつた金子ミネの片手に、職工のひとりかへらを握らせた、その職工の吉川幸次郎は、かつて坂井カタエの虫喰つた肉体から病気を染され、そのために支払つた百円を返済させたのであるが、病気はまだ治らないのである。

「突きさせエ、突きさせエ」

職工たちはゲラゲラ笑いながら、はやしたてた。その調手にのつて、金子ミネのへらを握つたまゝ逡巡した手は、アツという間もなく、坂井カタエの肌へところ嫌わず突き立てたギヤツという悲鳴とともに、坂井カタエは身体をころがして逃げ廻つた。

この工場には、いつからともなく性病が蔓延しているが、その源泉は、坂井カタエだという噂である。皆、安い賃金のため、この工場以外の女とは交渉をもたないのだから、坂井カタエだと口ぐちにのゝしりあうのである。

竹田トキはふと肉体に異状をおぼえた。処女とか、貞操とかいう言葉すら知らない彼女



であるが誰彼の経験を思いあわせて、これだけはよく知っている。あのたのしい快樂の後に、このような恐ろしい副作用が伴うとは、トキは医者にも見せず、捨てておいた。間もなく痛みがとまったからでもある。しかし彼女のからだからは、間もなく異臭がたぎり初めた。

## 四

今村あき子はこの工場の女事務員であつた職工あがりの工場長である利倉駒太郎の妾だというもつぱらの噂であるが、真偽のほどはわからない。職工あがりの利倉駒太郎の妾になるには、今村あき子は自尊心の高い女である。しかし、工場長の利倉駒太郎は、これまでたびたび女工に手を出した男で、シヨート、タイムが百円という相場つくり出したのは、ほかならぬこの利倉駒太郎であつた。ともあれ今村あき子が工場長の信用を得て事実上この工場の実権を握っている女であることは確かである。

彼女は眼鏡をかけていて少し嶮があるが、この工場では泥中の蓮ともいふべき美貌であつた。女子大出の学歴を持ち、小金も溜めて、いるという話である。暇なのか、それとも就

職難のためか、こんな場末の工場の中で働いているが、こんな工場で働くには全く惜しいような女性である。あき子は三十をいくつか過ぎて、戦争未亡人であつた。

この工場には、どのような圧迫や強制を加えても、ストなどついぞ起つたためしはないが、職工の賃金を釘づけにしているのは、ほかならぬ彼女であつた。又、仕事を怠けたと云つては、女だてらに大の男に鞭を鳴らすこともあつた。賃金が少なければ、パンパンをせよと女工たちにひそかに教示するのも彼女であつた。

そのような今村あき子が突如、この工場の職工のひとりである竹田幸之助と同棲したのである。竹田幸之助はいくぶん低脳で、年令は彼女よりひとまわりも若く、その容貌、風采、経済力、学歴、等々、すべてにおいておよそ彼女のような女の相手となるような男ではないのである。何よりも今村あき子が、女子大出の上層中産階級出身者であるに反し竹田幸之助は下層階級出身者で、小学校もろくに出ておらず、十才位のと時から製本屋に奉公している男だつた。

それがどういふ風の吹きまわしなのか、同棲するまでの過程にも、二人の仲が特に親し

かつたという事実がないのである。そればかりか、今村あき子は鈍重で、万要領がわるく、無能な職工である幸之助のあわれな背にしばしば鞭を鳴らしたではなかつたか。彼女に鞭打たれながら幸之助はさながら奴隷のごとくおとなしくうずくまつていただけだつた。幸之助も男であり職工である以上、相当力もあるわけだが、彼は無気力な、意久地のない男で、長年の虐待のためかマゾヒズムの傾向さえあつた。幸之助はひどい近視で、紙に眼をくつゝけんばかりにして、折りをしたリ、丁合をしたりしているが、その恰好は、まことに陰惨なもので、このひどい尙僂男の何処に、今村あき子ほどの美貌の女と同棲するほどの魅力があるのか、さつぱりわからない。

色はタドンの黒々と、どんぐりまなこその下に、いずまいくすダング鼻、綿どつさりの厚ぶとん、二枚かさねし唇の、あいだを洩るるらんぐい齒——滑稽なほど愚鈍な容貌の持ち主なのである。

二人が同棲しているという噂は、パツと工場内にひろがり、工場長の利倉駒太郎をはじめ、職工たちを啞然とせしめたのだつた。

## 五

今村あき子はこの住宅難の折柄一軒家を持つてゐる女である。良人が戦死した後も、ずっと一人で住みついている。小さい家であるが、世帯道具はひととおり揃い、小金を溜めてゐる女である。

彼女は以前、××商事会社や大学の研究所などの高級な仕事に携つていた頃、家を持つてゐる彼女と結婚したが、つた若い男も沢山あり、男と交渉をとつたこともいつさいでないが、彼女は遂に誰とも結婚しなかつたし、同棲もしなかつた。そして何を好んでか時代から置き忘れたような、封建的な職人組織の町工場に入社し、低脳の竹田幸之助ごとき汚い職工と妙な同棲生活をはじめたのである。それは何という奇妙な同棲生活であつたらう。ふたりのあいだには、もとより愛情も信頼も何もなく、ただアブノーマルな加虐、被虐の戦慄すべき世界が繰りひろげられていただけなのである。

「馬鹿、お前はあたしの奴隷なんだよ」

あき子は幸之助に風呂を焚かせ、三助をさせた。三十を幾つかすぎたあき子の身体は、まさに女ざかりの豊満さで、幸之助はいそい

そと背中にシャボンの泡をぬりたくり、お尻や脚の裏まで洗つた。

風呂からあがると、あき子は幸之助に自分の全身を拭わせるのだが、幸之助の指が、少しでもじかに自分の身体に触れると、

「きたないッ」

と彼女は怒つた。

「ここもお拭き」

彼女は殊更邪険に足を彼の眼の前につき出して指の股の間まで、たんねんに拭かせるのであつた。

だが、二人の変態生活はそればかりではない。あき子は女だてらにひどい乱暴もするのだつた。幸之助のズボンを脱がせ、尻をマル出しにさせて、焼火針やコテで折檻を加えた上、素ツ裸にして、幸之助のひどい恠の背老人のようにいびつた曲つた醜い脚、家庭や社会からいつも虐待された瘦せたみじめな肉体を、あたかも心驕れる女王が、奴隷に対するごとく、あき子は鞭を鳴らすのだつた。

「お前のその子供みたいな小さいのがさ」

成る程、幸之助のは小さくて、人並でない。

「あたしや、男を苛めるのが好きなのさ。あたしは男にひどい目に逢つたからね。死んだ

亭主だつて、戦死じやない。あたしが責め殺したようなものさ。あたしは男でも女でも、愛憎の問題を離れて、虐待するのが好きなさ。あたしのはサディズムというのとはちよつとちがう。あたしはお前さんが別に好きじやないんだからね」

あき子は眼を細めて、糞を吹き流した。素ツ裸にされ、麻縄でぐるぐる巻きつけられて部屋の片隅にころがつてゐる幸之助にあき子はピシヤリと鞭を鳴らした。

「大勢を苛めるより、個人を苛める方がたのしいわ。しかも力のある大の男をね。どう、お前さんも女に苛められて嬉しいだろう」

あき子はまた、鞭を鳴らした。

しかし、幸之助は毎夜の鞭の折檻を加えられながら、自分のような者は普通では女を満足させることは出来ぬから只大人しくして言うがまゝになつていようと、奴隷の根性を丸出しにするのであつた。

すると自分のような醜い低脳が美しい女に いじめて貰えるという喜びがふつ／＼と沸いてくるのであつた。

——おわり——



# アブノーマル・プレイ

獄

収

一

この前矯正院へ投獄されさんくな体験をし遂にはマゾヒストにされてしまい、三ヶ月後にやつと釈放されて元の学校に復校出来た事は書きましたが、その後私が獄中で芽生えたマゾヒズムにほとんど100%マツチする級友Tを得てTと種々心ゆく迄アブノーマル・プレイをした事について書いてみましょう。

入獄前は私の体格は身長一七〇釐、胸囲八五、体重六〇キロあり、ほど良好の部に入っていました。が、獄中で三ヶ月間さんくに鍊

えられたので出獄当時は胸囲が五釐少なくて体重も五〇キロあるかなしで全く見る影もなくやせ、首、この腕等には、はつきりとした縄ずれが残り、誰が見ても獄中生活のひどいと言ふ事がわかる様な体でありましたが一ヶ月間休養したので、どうやら或る程度回復して来ました。

Tは私の入獄前とほぼ同一の体格で非常に筋肉の発達した体の持主でありましたが之がどうしたものか、正反対の男性を縛つてみた

くてたまらぬサディズム的なくせを持つていましたので私と全くよい組合せにならざるを得なかったのです。

Tの家は製箱工場を営んでいたので家へ行けば倉庫もたくさんあり、二人でアブノーマル・プレイを楽しむに丁度よい場所はいくらでもありました。

材料をしまう倉庫は元事務室にでも使用していたのでしよう、丁度三帖位の大きさの板間の部屋を見付けた時は二人共絶好の場所を得た事についてよろこび合いました。その翌日より早速二人で外部から絶対に見えない様に窓という窓にはボール紙をはり床も雑布でふきました。そして戸外部から開かない様錠前を施しました。その部屋を私達は「牢屋」と呼ぶ事にしました。この牢屋の位置は何しろ大きな倉庫の中の一室南側のすみでありしかも南側は今一つの倉庫があり南側からは絶対に内部が見えず、他の方角は倉庫の扉さえしつかりしめておけば中で鞭を用いても絶対に大丈夫でした。普通の日にアブノーマル・プレイをするに裸になる日が多いので、と言うのは学課中体操があり、この時水泳でもあったらそれこそ大変ですから絶対に行わぬ事にし、祭日の前日と土曜日の午後からは心ゆ

く迄楽しむ事にしたのです。Tは私と写真をやるから暗室に倉庫をかりして呉れと両親に話して両親をごまかしていたようにした。事実我々の牢屋では色々のポーズで写真をつくったのです。

先ず土曜日学課が終ると一緒に連れだつて私の家へ行き私はTの家へ勉強に行くと言つて家を出ます。そしてTも例の通り両親をごまかし鍵をかりしてもらい二人で倉庫の、中へ入り内鍵します。この時よりアブノーマル・プレイが始まるのです。つまり、Tと固く約束した事は倉庫に入る迄、又は出た時は絶対にアブノーマル・プレイの事について一言も語らぬ事、但し倉庫の中へ入り内鍵をしたからその時から私はTの囚人であるから何事も行う事、しかし物をたべさしたり口の中へ糞尿を入れる事、又つば、たんを入れる事、又首から上は絶対に物をつけたり縛つたりしない事又鞭打つ時は背と尻だけは良いが胸、腹、背骨はさける事、以上のような鉄則をお互に守る事を約束しました。

大きな倉庫の鉄の戸をギョーとあけて入りTが戸をしめ内鍵をし私に向い「では、獄、約束通り囚人として取扱うから用意してくれ」

と申します。私はすぐ着ている服をぬいで素裸になり私の大好きな赤の肌をしめるランニングシャツを着、赤のパンツをはき用意をします。一方Tも裸になりきりつとした水泳パンツ一つになります。そして右手に私を縛る捕縄をもつて私の前に立ちます。私はTの前に倉庫のコンクリートの床の上に正座をし両手について

「ではよろしくお願いします」  
とおじぎをします。これがアブノーマル・プレイのあいさつです。

丁はすぐ私を後手に縛り「歩け!」と必ずどんと背中を縄尻もつた右手でつくのです。そして押されて牢屋へ引たてられ戸を開け中へどんと尻をけこまれます。後手に縛られているのだからたまりません。まともに前へひつくりかえります。その時この腕をしめている縄が肌へ喰い込みますがその快さといつたらマゾヒストでなくてはわからないでしょう。

やがてTは私に正座させ柱



につなぎ牢屋の戸をしめ外から色々私に獄中でうけた拷問について語らせませす。それをくわしく聞くのです。そして一寸でも言うのをこぼもうならすぐ今迄の話の中一番Tに気に入った拷問を私にためすのです。始めはTは私を縛つて牢屋に入れて話をきいたゞけで興奮の極に達してつまらぬ事おびたゞしかつたのですが、その中お互に研究しあつて方法を鞭打にしたり時期をはかつたりして心ゆく迄たのしみました。

やがて計画的に楽しむようになりました。



今週はTの好みのように来週は私の好みのようにと言った工合です。

最後迄他人に見えられた事はありませんでした。ひし／＼と肌をしめつける縄の味も格別です。鞭打ちは始めそのまゝで行ったのですがとかく傷をおいやすいので色々研究しました所、鞭打たれる時私は赤の六尺褌をきつちりしめ予め鞭打たれる所にオリブ油を肌に塗ってもらうのです。こうすれば皮鞭を用いても絶対と言つてよい位大丈夫です。同好者の方に申し上げておきますが鞭打ちの時は絶対にVベルトとチエンは用いてはなりません。色々やつて見てもらいましたがVベルトやチエンは痛いばかりで少しも快くありませんし第一非常に危険です。

私の用いたものは竹を二本用意し八〇糎に切り合せて床のロープをといたものでたてに竹をくるみその上を包装用の紙ひもで丹念に巻きたいわゆる江戸時代の鞭打に用いた鞭のにせものが一番よかつた様でした。余り音もせず手も足も縛られて身動き出来ない身体へにぶい音でびしりと来た時は全身がしびれるようでした。しかしオリブ油なしで行えば昔の刑罰そのものとなり非常に痛く、悪くすると放尿等してしまい少しも快くありません

し又鞭のあとが紫色に一週間は残り工合がとても悪いです。又マゾヒズムを楽しまれるのはのべつまくなしではなく特定の時間に限られた方がよく他の時間は一般の社会人の生活をされる方がよいでしょう。

どうもくだらぬ事を書いてすみません。話を元へ戻しますが私はどうも鞭打ちもよいですがそれより縛られる方が余程よいのです。が例の極に来た時、全身に力を入れて硬直する時一度腿に縄をかけてもらつた事がありますが腿を縛るととてもより以上快いです。腿といつても尻と腿のつけ根をきつく縛るので結局私の場合どこと何処を縛れば一番よいかと言う事を考え自縄の出来る様バンドを作りました。バンドは絶対に皮でないといけません。これを私は「MSバンド」と名付けて居ます。つまりマゾヒストバンドの事です。このMSバンドについてもいつか発表させて頂こうと思います。

さて私の想出の中で一番好きな一枚を送ります。之は今より約九年程前のものですがよくとれていると思います。場所は私達牢屋の中で例の赤のランニングシャツに赤のパンツをはいて縛られている写真です。之は全身であるのですが色々考えましたが、一部の無理

解な人の為飛んでもない誤解をまねく恐れがありますので甚だ残念ですがほんの一部だけしか出されません。こんな風な物は相当コレクションしています。捕縄の肌に喰い込んでいる処をごらん下さい。この縛り方は「くひんもどき縄」といゝ江戸時代重罪人を縛つたものです。

次に私の一番好きなのは五月号の捕縄雑考のカットの姿に縛られ床の上にあのようになっているのがされTに乗つてもらつた事でした。首二の腕をしめる縄、そして足をぐつと縛られているので張切つた弓のような所へTに乗つてもらいますとTは前にのべましたようにきりつとした海水パンツ一枚で私の二の腕に両手をかけ背にぐつとしめ弓なりの足の上に腰をおろすのです。そして私が苦しめば苦しむ程ます／＼私の背に彼の胸をつけこの腕をしめつけるのです。

#### 読者の告白談、体験談を募る

読者の皆様の雑誌である本誌をより強く皆様に密着させるため、努めて諸氏の作品を掲載したいと思ひますので、御遠慮なくドシドシ御寄せ下さい。文章の巧拙、枚数や用紙等は問いません。誌上匿名は御自由です。

## ☆ 苦悶する裸像 ☆

福田 英 一

(一)

白い可愛らしい指の股にきゅつと赤い鼻緒が食い入って居た。

これは、と思つて眼を上げた時には娘は既に彼の横を通り過ぎて、形のいゝ後姿ばかりが夕日の中をゆら／＼と消えてゆく。素足には薄ら寒い秋の日であつたが、恐らくは粹好みか、それとも己が足を秘かに誇つてか、着ているものは紫の矢がすり、これが又、ぴたりと似合つて、下に着ている赤い長襦袢から薄桃色の肌襦袢、さては伊達締め、腰のものに至る迄、もし之が秋の風にはら／＼と落ち散つたならば今その百貨店の催し場で見て来た院展の裸像の様に均整のとれた身体をしているだろう。彼、野田三郎は今にもそう言つた光景が出現するのでは無いかと怪しからぬ事を妄想しながら茫然と後姿を見送つて居た。

終戦後の混乱に乗じてゴムの闇ブローカーから身を起し今では三十になるやならずの若さで資本金二千七百万円株式会社野田商事の社長。かてて加えてタイロン、パワーの如き美貌に物を云わせ、娘だろうが人妻だろうが女には食傷している筈であるが、此のまあ阿

呆面は何とした事であろう、赤い鼻緒に白い指が余程気に入つたと見える。

「ちえつ、俺もやきがまわつたかな。」

彼はそう呟き乍らべつと地に唾を吐くと柄にも無く赤くなつた。

既にその時は女の姿は御堂筋を難波の方へ將に消えかかろうとしていたのだが、彼の足は釘付けにされた様に動かない、後を追おうと言う意志と、いや追うまいと云う意志とが相い等しく、相殺されて零となり彼の頭の中から消え失せてしまつていたのだ。

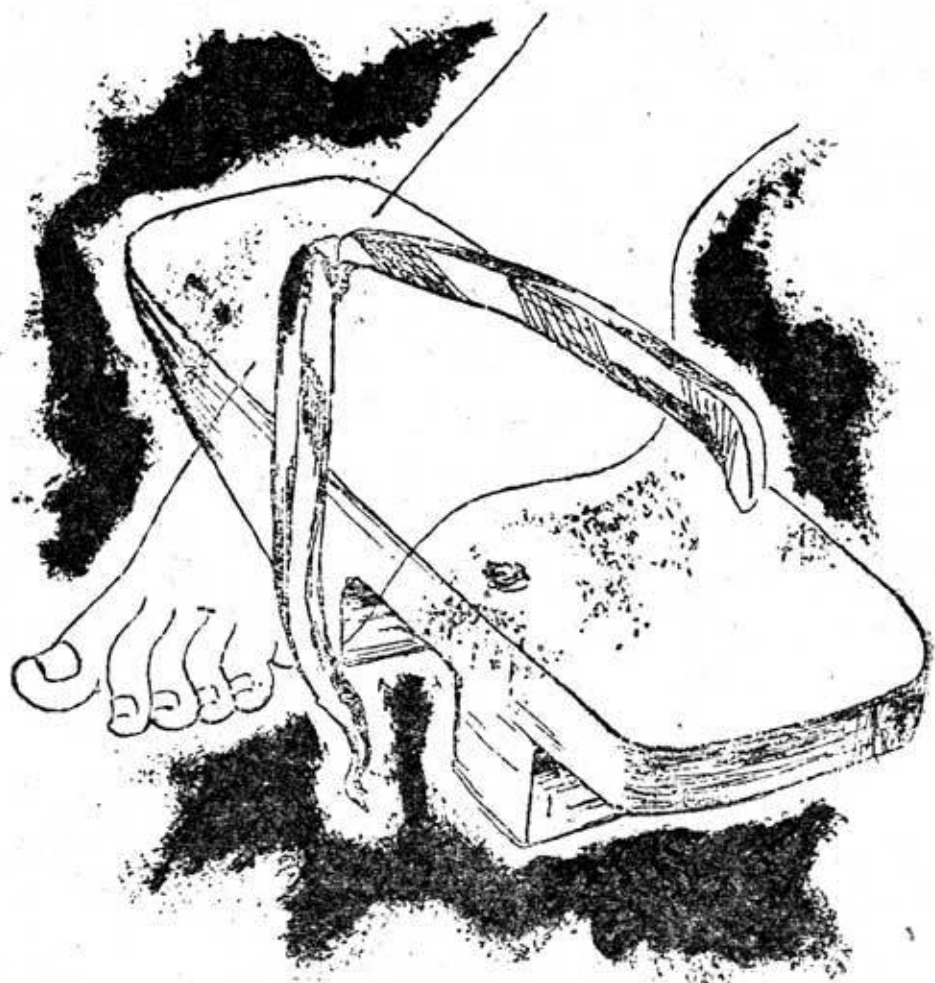
後を追おうと言う心は彼の好色から来るのだが、追うまいと言う殊勝さは一体どうした事か。それは彼の意地つ張りから来ているのか。衆人環視の中で赤い鼻緒と白い指に惹かれて御堂筋上にぼんやりたたずむのさえ既に大いなる屈辱であるのに、今更その女をのこ／＼と追つて膝下に哀れを乞うなんか彼の意地が許さなかつた。

女が消えてしまふと彼は空虚な気持を抱いて近くの道頓堀橋の欄干に身を支えた。此の彼を嘲る様に眼の下を道頓堀川が、意地の悪い光を放つて流れていく。

彼は柄に無く院展等を見に行つて事を後悔した。あんな所へさえ行かなかつたならば、



何も妙な妄想を抱いて立ちすくむ事等はなかつたのだ。赤い鼻緒に白い指を見てこれとは思つた瞬間くるりと身翻して女の後を追つた事だろう。後はいつもの通り難なく自分の物になつたのだ。元はと云えば死んだ女の肉体に恋々としていた事が悪かつた。何故、過去は過去として葬り去つてしまう事が出来なかつたのか。すべての過去を葬つて現在から未来へ生きて行こうと云うのが彼の主義ではな



いか。其処迄来て彼は

「あつ！」

と危く口から出掛つた声を押さえた――過去と現在のつながりに。思い至つたのだ。

彼の胸の中では捨て切れぬ過去の残渣がげぶくといやらしく騒いだ。見れば眼下の橋脚に引つかかつた赤い古びた緒が淀んだ川の面で鈍い光を放つてゐる。彼は瞬間それが恋しい屍体の様に思われた。その気味の悪い腐りかかつてぶよくした恰好は、院展にあつた石膏の裸像よりも生前の女の姿を髣髴とさせたのである。

女の名前は井関艶子と云つた。艶子の身体は脂肪でたるみ切つて此の赤い緒の様にぶよくしてゐたが、その肌は先程会つた娘の素足に男を惹きつけずには置かない不思議な白さをしてゐた。その意味でなら、峯吉の物した変に底光りのする白い石膏像も彼女の姿を再現してゐたと云えるかも知れない。そうだそう云えば女の肌はいつも石膏像の様にひやりと冷たかつた。

「手の冷たい人は心を温いんだそうですね」  
女が峯吉の手から彼の手に移つた夜彼はそう呟いて自らを慰めた。

峯吉の有力なパトロンであるとか言う或る実業家が京都の自邸で催したクリスマス・イヴのダンスパーティーに招かれた際に彼は峯吉とその妻である艶子に初めて会つたのがその時はまさか、四十を二つ三つも出ていそうな艶子が峯吉を捨てて彼の元に逃げて来ようとは夢にも思わなかつた、それから時々誘われて踊る機会があつたけれども何か捉え所のない軟体動物の様な女の身体に彼は戸迷いするばかりで誘われるのに寧ろ迷惑を感じてゐた位だから突然押し掛け女房然と彼の家へ現われた時にはさすが好色な彼もたじたとして眉をひそめる他はなかつたのである。そうとすれば色の白より他取り得のない女の手を握つて半ばやけ糞に齒の浮く様なせりふを述べたとしても無理からぬ事であろう。

「ふふふ」

女はその鼻先で笑つた。それはその眼の下を流れてゐる道頓堀川の嘲笑にも似たものであつた。

「あたしの冷たいものは手だけじゃ無いわ。」

「え？」

驚いて見返る彼に女は黙つてその事実を示した。今その女は裸像となつて人々の眼前にその姿をさらけ出している。そうしてその白い冷え／＼とした石膏の肌だけが彼女の命を再現しているのだ。彼は井関峯吉と言う名札をちらと見ると急いでその前を通り過ぎた裸像は黙然とつたつていたが後から壁土の様な匂いがひんやりと彼の鼻を打った。

そうだあれは湿り気のある洞窟の匂いだ。彼は宝塚から福知山線で少し北へ行つた所にある小さな温泉場の事を思い出した。子供の頃母に連れられてよく行つた温泉である。其処には人一人入れる位いの狭い洞窟があつて周囲の石の冷いにも似ず中はしつとりと温かつた。まあ、云つて見ればあの泥んこの川の水が流れ出して来る戎橋のアーチの下だつて快い温かさが有るかも知れない。

——何の事だ。彼は眼の前にある橋のサーチの形から洞窟の事を想い出しているのだ。帰する所壁土の匂いは女の秘密な匂いだつた。女も肌の冷さに似ず温いものを持つていたのだ。峯吉が女

の陰れ家を血眼になつて探し歩いたのも、又野田三郎ともあろうものがかかる女を隠すのに我を忘れていたのも皆此の為であつた。

(二)

「何故、また主人の所から逃げたりなんかなすつたんです？」

朝になつて三郎は始めてドン、フアンの地位を取戻した様に思つた。だがその思い上つた様な言葉は再び鼻先であしらわれたのだ。「ふふふ」

と女は含み声で笑つた儘、後は先程の石膏像の様に黙然としていた。

過去は過去として葬り去る主義が彼女の様なものにだけ当てはめる事が出来なかつたのはどういふわけだろう。

あゝ、そうか、問題はあの前の戎橋のアー

チにあるのだな。全くそうだ。壁土の匂い、温泉場洞窟の温さにあるのだ。見る、あのアーチの下を歓楽の名残りを止める汚物が川の面を浮きつ沈みつ、ぶか／＼と流れ出して来るではないか。或いはあれは彼の会社で取り扱つてゐる製品かも知れない。何処までもまつわりついて来る過去、彼は云うべき言葉もなかつた。

そうして、又、あの赤い緒が女と切つても切れぬつながりを持つてゐるのだ過去とはそう云うものであるうか彼には過ぎ去つた総ゆる事実と言う事実が身動きの取れない程びつしりとつまつてその中のどれ一つを取り去つても橋の上にいる現在の彼は泡沫の様に消え去つてしまふ様に思えた。

例えば走り去る自動車の尻の青い煙を嗅いだという事も、山百合の雌しべの強烈な匂い

を吸つたと云う事も、彼にとつては抹殺する事の出来ない性質のものになつてゐるのだ。全く、過去の如何なる微小なる一事と雖も現在に關係のないものはない人々はこれと呼んで宿命と云う。





所で赤い緒は彼の宿命に如何なる役割を演じたろうか。今眼の下にゆう／＼と漂っている赤い緒は彼に前の女の屍体を蘇らせたが過去に於ける赤い緒は冷い石膏像の肌を彼に知らしめる契機となつたのである。

石膏像は展覧会に運び込まれる時、恐らく荒縄でがんにがらめにされた事だろうが、もしそうとすれば女は何処迄も縛られる宿命から逃れられなかつたと云わねばならない。赤い緒は彼の宿命でもあつたが、女の宿命でもあつた。そうだ、あの赤い鼻緒が先程の娘の指の股に食い入つていた如く赤い緒は夜もすがら艶子の肌に食い入つていたのだ。たとえ艶子自身、それを欲する様になつたとしても、それを以て彼女が宿命から逃れ得たとは云い得ない。何故なら主として彼女の意志でどうにもならない脳下垂体前葉ホルモンのしわざだつたからである。

「あたしねえ、峯吉とあれ以上一緒にいると殺されると思つたの。」

艶子は彼に赤いしごきを手渡し乍らこう囁いた。彼が艶子を縛つてやる事を覚えてから二ヶ月目、云いかえれば彼が艶子と一緒になつてから三ヶ月目に女は始めてその秘密を打ちあけた訳だ。然し、その時には峯吉から女

を通じて移植された彼自身の病状も相当昂進していた。最初、女から縛つて呉れと云い出された時にはさすが尻込みした彼も終いには彼の方から釘を持ち、鋏を持ち、鞭を振り上げて責めなさいなむ様になつていたのである

「僕だつて、殺すかも知れない。」

彼は女をごろりと転がすと石膏像に対する如く残酷に取り扱いながら呟いた。

「ふふふ。」

と女はそれが癖の様に片頬に薄笑いを浮べて彼の方を見たが、その時懼れていた様にそれから間もなく女は死んでしまつたのだ。もとより直接彼が殺害した訳ではなかつたけれども、その死因となつた傷は彼が作らした様なものであつた。

「いじめられるのは関わないけれども、殺されるのはいや。絶対にいやよ。峯吉つたら本当に間違いに近かつたんだもの。」

女は苦しい息の下から峯吉に変わつてサド侯爵の地位についた彼に囁くやう云つた。それは暗に峯吉程に彼の病勢が進行すれば逃げ出すぞ、と威している風であつた。ああ、その姿勢は今、眼下の橋脚にひつかかつて、淫らな身をくねらせている赤い緒にそっくりではないか。苦悶する女の裸像を描いた峯吉の作

品……それに淫らな此の赤い緒しごきでぐる／＼巻きにされたありし日の艶子の身体——瞬間、過去と現在が入り乱れて彼の頭の中で火花を散らした。鋏や鞭を始め、手錠、猿ぐにわ、拍車、などから太い頑丈な鎖、犬の首輪に至る迄凡そ責め道具という責の道具は総べて揃えて艶子の隠れ家へそれだけは彼自身で持つて歩いたのだが今はもうそれも空しい想い出に過ぎない。あの温泉場の洞窟の如きを艶子以外の如何なる女に求めようと云うのか。彼は今更に己れの性癖を後悔した。

艶子の死んだのを何処からか聴き知つた峯吉は狂気じみた熱心さでその仕事に没頭していたと云う噂であつたが、その結果があつた作品だ。

それは「苦悶する裸像」と題されていたので女が艶子だとは想像出来たが、石膏の冷やかさ以外ちつとも艶子らしい所はなかつた。第一顔さえはつきりしていないのだ。——顔さえ。

「だがそういう俺自身、奴の顔を憶えているだろうか。」

彼はその点に思い至ると思わず苦笑した。馬鹿げた事にはその輪廓さえ浮んで来ないのだ。

通りすがりの女にでも似た顔はないだろう  
か。

——彼はどうしても想い出せないので苦し  
まぎれにふと顔を上げて周囲を見廻わした。  
すると、どうだ。暮れ易い秋の日はもはやと  
つぷりと暮れて空の一角には月が白々と輝い  
ているではないか。

「ちえつ。俺とした事が、つまらぬ思いに耽  
つたものだ。——所で一体何時だて。」

月明りにすかして時計を見るなんかも又お  
つなもんだなどと勝手な事を考えながら時価  
三十五万円はすると言う彼御自慢の宝石入懐  
中時計を取り出そうと徐ろにチョツキのポケ  
ットに手を入れた彼は今度こそ口を押える余  
裕もなく「あつ！」と大声を挙げて驚いた。

## 女性の切腹例

次にあげる女性の切腹例は小生の知友H氏  
が満州で終戦時直接初から終まで見ていた貴  
重なる実例です。

(一) 終戦時満洲某市にあつた十八才の未婚  
婦人の珍しい切腹の例。

三浦某女一八才(満) 小学校時代より両親に

何の事はない。御自慢の時計は鑽もろとも

奇麗さつぱりすりとりられて影もなかりけりだ  
畜生、畜生、どうして呉れるか。警察につ  
き出す位じや気がすまない。手錠をはめて引  
きずりまわし、又もあの腰紐でがんじがらめ  
だ。それから鞭と焼火箸と拍車だ。そうやつ  
て責めて責めぬいた挙句の果てにはお艶の様  
に犬のオモチャに呉れてやれ。又、ぱつくり  
と白い胸に大きな口が開く事だろう。よし、  
これから直ぐにも追いかけて、——白い足に  
赤い鼻緒の娘だ。そして顔は、——ええ、瓜  
実顔でもなかつた。丸ぼちやでもなかつた。  
さあ顔はどうだ、顔は——。

彼は再び女の顔で行きつまつて橋の上で地  
団太を踏んだ。一体これはどうしたと言う事

死別し親戚に育てられ比較的内気でどちらか  
といえば優柔不断の性格、体格は五尺二寸程  
脂肪質で体重十六貫位年の割に乳房も大きく  
豊満な体軀をもつていた、日本が形勢不利と  
なつてからは常に日本が敗けたら早く死にた  
いと口走つていたが、八月に入つてからソ軍  
の侵入を極度に恐れ始終おどくしていた。  
死の直前は六畳間にぼんやり座つていたが隣

だろう。つまり彼の記憶には赤い鼻緒のきゅ  
つと喰い入つた白い可愛らしい指の股しかな  
かつた訳だ。艶子の場合でも彼は女の身体を  
除いて顔には記憶が一向にない。そして峯吉  
も亦彼女の顔に対しては一片の記憶もなかつ  
たと云い得るであろう。

成る程、それで顔のまずい女でも男から溺  
愛される事があるんだなあ。待てよ、それは  
あの娘にも艶子の様に温い部分があるのだろ  
うか。——野田三郎はもはや娘を追う事は断  
念した様にいつまでもいつまでも橋の上に立  
ちつくしていた。心の底では娘の手が艶子の  
手の様に冷やかだつた事を思い乍ら。

——完——

人があわたゞしくソ軍が街に近ずいた事を知  
らせてくれると急に眼を血走らせて立上り頭  
髪をかきむしりながらあわたゞしく室内を往  
来したが急にボタンをひきちぎるようにして  
上衣とシャツを脱ぎすてズボンの紐もとかず  
ぐつと下に押下げたので紐が切れてズボンは  
ずる／＼とぬけおち白地の腰巻一つとなつ  
た。退却の支度のため室に入つたH氏があま



りのことにぼんやりしているとき、つづくように机の上の脇差（刃渡り一尺余鉄つば付）をとり右手でスラリと引抜き左手のサヤを投ずるとその手で柄頭を押え止める間もなく膝下一寸、三寸程左の腰巻の紐際にグ

サツと突立るとアアツと悲鳴を立てながらよろ／＼と後によろめいて壁にもたれかゝつた両足をやゝ開いてふみこらえ眼をとじ齒をくいしばりつゝ刀を引こうとするが刃が斜右下に向いその上柄の先端を握っているため思うように引廻せず、わずかに斜下に一寸ほど押したかと思うとふら／＼とよろめいて畳に崩れ座つた。この時は多分右脚はわずかに曲げ太腿を外転し左脚は完全に曲げて不完全なアグラをかいたような形だつたと思う。壁に沿つてズル／＼と座つたため、腰巻はまくれ前ははだけて見える下腹部へ血がひものようにどろ／＼と流れている。こゝでやつとH氏は吾に

## 女腹切の考察と

## 女性の切腹例

田 谷 敬 生

かえつてバタ／＼とそばへかけよると彼女はとじた目をカツと開いて彼をにらんだので彼はゾツとすると二三歩後へ退つてしまつた。彼女は苦しそうに二三度ハツハツとあえいだ彼女が左手をなす指をふるわせ乍ら脇にぬぎすてゝあつたシヤツをとり、両手で刃を包んで突立てた切先の側をにぎると刃をギリツと上に向け更に一寸ほど深く突込むと蒼白になつた顔に脂汗をうかべ乍らウームと悲痛なうめき声を立てつゝ一氣に右脇までかき切つた。血が二、三ヶ所からシユツと下腿や畳に二尺位もとびちると創口に白い脂肪層が一寸ほどグワツと現われ血がセキを切つたように下腹

部一面を染めデルタから畳へ流れて行くあえぐ度に青い腸管がグツ／＼と傷口にあふれている。女は血しぶきによごれた手で刀を抜こうとするがもう唇は紙のようになり全く氣力もつき果てたらし／＼両手をはなして

前につくとすでに細かいけいれんの起つた体をやつと支えながら、苦しい!! 早く!! と低くつぶやくようにうめいた。今はこれまでとH氏は女を抱き起し刀を抜きとつて左乳房の下へ突立てた。女は二、三回強くけいれんするとパツタリ斜め右前にたおれて絶命した。腰巻は全く血に染りあふれる血が布の端からたれ落ちていて、腹部右脇からは腸が露出していたという。この例は全く男も及ばぬ凄惨な切腹の例で特に十八才の女性が殆ど全裸に近い姿で腸の露われる迄割腹したことは得難い例と思います。H氏は切腹をみたのが勿論はじめで、あり、しかもあまりの凄惨さに

その後永く夜になると血みどろの屍体の夢に悩まされたといっています。それに比べると第二例などは殆んど無感動でみていられたところで第二、第三の例は第一例ほどよく記憶していないそうです。

(二) 三才の婦人 この婦人はソ連兵に暴行を受けその夜H氏に後事を托し白布で胸を巻き室内に端坐してモンペの上衣とジユパンをくつろげ懐剣をとつて左脇臍の上の高さに五分ほど突立て臍の二寸ほど右まで引廻した。血は前例ほど多量に出なかつた。刃を抜きとると前屈みになつてしばし苦痛をこらえていたが、剣をとりなおしのどの左前から右後へ突通すとパツタリ前にたおれしばし手足をけいれんさせた後絶命した。

(三) 二五才の婦人H氏の一群と共に脱走中過度の疲労のため神経衰弱の気味となり一夜森蔭に端坐して上衣をぬぎすて、双肌を露わし短刀を臍の真下約一寸に突立て(深さ約一寸)右へ三寸ほどじり／＼と引廻し低くうめきつゝ刀を抜くと臍の上約二寸みずおちの下へ力一杯突立て切下げようとしたが一寸ほど切下げた時力つきてパツタリ前へたおれ刀は背中まで突通けた、しばらく苦悶した後絶命したという。

この三例でわかるように女が切腹する時は男よりはるかに強い狂燥状態にあり比較的冷静な場合は二例のように肌をあらわすのをいとうと共に切腹も皮切に止まるのではないかと存じます。

(四) 又H氏は女性切腹例を集める人があるのなら是非伝えてくれと彼が南支から帰つた某(A氏とする)から聞いた例を話してくれました。Aは軍人で男の切腹は二、三度見たそうですが女は一人だけであまり見事だつたのでよく記憶していると語つた由。

廿六才松田某、夫は軍人で南方で病死した。

昭和廿年八月上旬日本の敗北が決定的となるや自刃して国家の安泰を祈らんと決意し、夫の友人Aにその旨を打明けた。Aは言葉を尽して最後まで生き永らえることをすゝめたが彼女は聞入れず病死した夫に代り女ながら切腹したいから万一死に切れなかつた時介添してくれと依頼した。八月十一日朝彼女は入浴して白晒腹巻、肌じゆばんの上に薄絹のじゆばんを重ね黒無地の着物を着用し紅絹のしごきを前に結んで白足袋をはき、白サヤの九寸五分の短刀の切先四寸ほどを残して白布で厚く巻き六帖間に正座して東方を拝した後着物の前をくつろげ黒上衣のみ双肌ぬぎ薄絹のじ

ゆばんの上から短刀を押しあてグーツと強く押したがなか／＼切先が入らず三度目にやつとじゆばんが少し切れて血がわずかにじみ出た。婦人は刀を前においてうつむいていたがやがてAに失礼致します、と挨拶するとしごきをゆるめて少し押下げ腰骨の高さで堅く結ぶと二枚のじゆばんをするりと脱いで双肌を臍下からかなり下まで充分にあらわし脱いだ両袖を両膝下に押えて坐り直した。はじめ突いた傷は左季肋下で少し血がにじんでいたが婦人はじゆばんの袖で切先と傷口をかくぬぐいAに目礼すると再び切先を今度は臍下左脇腹にあてがつたが思い直したように切先を五寸ほど腹からはなすと唇をかみしめ下腹部に力を込めてグサツと突立てると一気に左脇までキリ／＼と引廻した。シユツシユツと注射器で水をとばすように血がはねとぶと傷口からドツと血があふれ出した。婦人はホーツと苦し気に息をついたが声も立てずグツと力を引ぬくと右手で刀をもつたまゝ右膝にあてがいやゝ前のめりになるといきなり左手を手首までグツと腹中に入れ血にまみれた小腸をズル／＼と膝の上へ引出した。この時はじめてこらえかねたようにウームと永くうめいた。しかし姿勢はくずさず血のたれる左手を



右手にそえ心臓に刀を突立てるとばつたり前に打ちふして絶命した。

以上の4例はいずれも聞いたまゝをできるだけくわしく書いたものですからやゝ表現が前後した点もありますが、真に貴重な記録と存じお知らせします。なおH氏も真実味あふれた切腹の図を作つてもらいたいと云つています。第一の例など半裸の娘が刀を腹に突立てゝ苦悶するところを是非想像して美しく描写して下さい。

## 女性の切腹死

筆者は偶然の機会から終始の経過をかなり詳細に観察された女性切腹例4例を資料として提供したが、次にこの例を中心して女性を主とした切腹の各要素を分析してみたので、その概略をまとめてみる。

### 一、切腹と失血死

欧米の医師にとつ

は日本人が切腹によつて死亡するという事実はなく、信用し難いものであるらしい。腹部の皮膚及び内臓は大血管に乏しくたとえこれを大切開して腸管が露出してそれだけで速やかに失血死することは全く不可能で、彼らは切腹の本来の死因が自殺者の頸動脈又は

心臓刺切による大失血或は第三者の介錯にあることを知らないのである。

一文字切腹を完全に行つても死亡しなかつた例はきわめて多い、たとえば東京医事新誌(昭23)に小南教授は某男子が割腹して腸を掴み出したが死ねないので腸を露出したまゝ投水しようと走つてゐる所を捕えられ、しかも創縁の縫合のみで治癒に向つた例をあげてゐる。成人女性は男性に比し腹壁特に(下腹部壁)がはるかに厚くしかもその大部分が脂肪層で筋層は薄く細小血管の分布が疎である。従つて女性の切腹は男性の場合に比しより大きな力を要し、しかも出血量は其に比例する程多くないという不利な点がある。その上女性の腹壁は男性に比し緊張度が少いたため一層切腹が困難となる。

次に切腹による出血量の問題であるが一般に切腹は創面が広いため出血が散乱し過大視されるきらいがある。たとえば前にのべた第一例(十八才の女)の場合下腹部大腿が血にまみれ、腰巻は血に染つてしたゝり落ちていたというが下腹部大腿位に血がまきちらされるのには一〇〇CC位の血液で充分であつて大柄の健康婦人が二〇〇CC以上を採血しても平気な例が多いことを思えば、出血そのもの

のが意識渇涸の原因になるとは考えられない恐らくこの例では恐怖心、裸体を露わすことの無意識な羞恥、腹をかき切るための苦痛、血を見た驚愕等々が重なつて反射的血管収縮を来し顔面蒼白となり貧血様になつたものと推定される。

もちろん初めの刀の突立て方が深く腸を切断し下行大動脈を切つた場合は全く別で切腹だけで速やかに死に至るであろう。しかし上述の原因からこのような切り方は女性には不可能とみて差支えあるまい。

### 二、切腹の行なわれる部位

一文字

切腹の多くの場合は腹部の臍の高さを中心として行なわれるようである。筆者はかつて女性においては上腹部(心窩部)を切るものが多いということを聞いたことがあるが(この事実の真偽については中康氏の説明を承りたと思う)果して然らばそれはむしろ腹部を露出することを嫌うか又は服装の関係で下腹部を露わし難いための変型にすぎまい。切腹の最も多く行なわれる部位は臍のやゝ下の部分ではなからうか、筆者の前にあげた4例も何れもその部分を切つてゐる。これは次の項にのべる感覚の問題と、両腕で腹部をかき切る場合力の最も入り易い状態は肘関節が直角

よりもわずかに大きい角度で曲げられている場合であり、これは成人の場合上記の位置に相当するからである。

### 三、切腹の苦痛

上述のように切腹はそれだけでは速やかに大失血を来さず、従つて意識の溷濁がおそいので自殺形式の中でも最も苦痛の多いものである。しかしそれならば切腹は全く特殊の人にしかできないかという点も必ずしもそうともいえない点がある。一体腹部皮膚は体軀前面の中では比較的知覚の鈍な場所であつて殊に下腹部は痛覚に比して触覚が発達し、それが性感と密接に関連している。従つて特に腹部性感の強い女性（マゾヒスト的傾向があれば尚更）にあつては、痛刺激がかなりの程度性的快感を助長するであらうことが想像される。切腹の描写に腹をなでおろすという状景があるが特に女性において死を決意した発揚状態において乳房、腹部を露出し下腹部を愛撫することにより以後の苦痛のかなりの部分を性的自己陶醉に転換できることは充分想像される。筆者のあげた女性切腹例のいずれも二〇—三〇代の性的成熟年齢にあることはこの関係を物語るものではないなからうか（この点については従来の文献を検討され誤あらば御教示願いたい）

次に問題になる点は鋭利な切創にあつては創傷の発生と疼痛の発生の際に若干の時間的ズレがあることである。手指のように知覚の鋭い場所でも鋭利な刃物で切ると出血してからしばらくして痛みを感じることは誰しも経験するところである。刃を突立てゝ引廻す動作が一気に行なわれるとすれば少くとも切る途中の痛覚は、全く耐えられぬものではあるまい。しかし刃を突立てゝから引廻すまでに時間があつたり引廻す速度がおそれれば痛覚の発生と共に腹筋は強く収縮し苦痛は著しく増大する。この点でももちろん繊弱な女性は男性に比し不利である。

### 四切腹時の体位服装

切腹本来の意義が自殺者の自己陶醉、英雄感覚の外に特に女性にあつては凄愴美の誇示が含まれると考えられるので女性割腹の多くにかなり服装の配慮があるであらうことは想像される。残念ながら多くの女性割腹例についてはその状況がくわしく記載されず、従つて男の場合のような一定の形式があげられぬようである。一般に日本女性が盛装する時は帯及び多くの紐を解くことなしに腹部を露わすことは不可能であり、又もしそのようなにして腹部を露わした場合衣服の着こなしは全く乱れ切腹時の苦痛

のため衣服、下着の裾が乱れ、大腿、腰部等が露出する虞がある。これを男子がハカマを着用して双肌ぬぐのに比すれば、その困難さは想像するに足る。しかし又浮世絵の女性割腹図にあるように幾重にも重ねた衣服の襟をわずかにくつろげて乳房下に浅く見える腹部に長袖を曳いて刃を突立てたとしてもほとんど刃を引廻す由もないはずである。筆者の例の3例にはモンペ又はズボンのため腹部が露わし易かつたようであるが、第4の和服の場合も帯をとき紐をしめ直して双肌ぬぎ腹部を露わしており、中康氏の吉村れつ例も双肌ぬいだとあるのはこれまでの考えからすれば当然であらう。この点については中康氏の詳細な調査をお願いする。

切腹が完全に遂行されるためには腹部が充分固定されていなければならない。いゝかえると体位が安定していなくてはならぬ訳である。切腹が端坐の状態で行われることが多いのはこの点からも納得できる。筆者の第一例のように立ち乍らの割腹はこの例のような発作的狂乱状態なでい限り女性には例が少いであらう。

尚一言附加えたいことは江戸時代の切腹浮世絵及びその後の切腹図についてである。浮



世絵は風俗絵に於て見事な描写力を現わしながら切腹図に於てはきわめて拙劣なものが多し。これは江戸時代切腹が形式的となり画師自身その本質がわからぬためであろう。前に述べた服装の点はもちろん、血のあふれ方などは全く無考である。割腹の際はじめの出血は血管より飛散しその後は上下創縁より溢出して流下するはずであつてH氏の点も大体その点で誤りなく観察される。従つて刀を左から右に引廻せば血は前の衣服、右手及び左前膊に飛び打俯すまでは上腹部が血に染ることはない。浮世絵の切腹図がいずれも腹部一面血に染めていることは全く誤りである。本誌五月号の八九頁の割腹しつゝある婦人の図についてと同じことがいえる。この婦人はおそらく右脇に刀を突立て、引廻している途中で完全に右には引廻していないところと思われるが鳩尾のあたりまで血にまみれているのは不可解であり、腕が左も右も真白である点もおかしい。又右膝を半ば立てゝいるのは力を含めてかき切つてゐる姿勢と解釈されるがそれならば上体は更に少し前屈しているべきであらう。更に前面より割腹の姿態が明かに示されるような美しい画を工夫してもらい度いものである。

## 検視記録から見た

### 女の切腹

小生某大学で明治廿八年以降の検視記録を集めたもの（関東、東北、中部のみ、それらすべての自他殺を含むものでない）をしらべてみたところ、案外少なからぬ切腹例があり（男四三名、女九名）驚きました。中康氏の集られた六〇例についても刃物、切り方、服装などわかつてゐるものだけでもまとめて発表して下さると男と女の切腹の対比上面白い結果がでるかもしれません。

六月号の記事の中で腹部を縦に切れば腸が露出せず、横の切開で溢出するとありました。これは腹部の筋の走向からみて当然と存じます。腹筋は上下に収縮する力が強く左右のそれは極めてよわいので横に切れば傷口は上下に大きく開き腹圧のため容易に内臓が流出するのに対し、縦の切開では傷口の開口は起りません。之に関連して面白いこと切腹の形式に横一文字、十文字はあつても縦だけの切腹がないことです。鳩尾から腹を深く縦に切れば、内臓の流出は妨げられ、肝からの大出血で介錯なしにでも死ねると思われるのに

この型がないのは切腹の本来の意味が苦痛に長く耐え自ら意識しつゝ内臓を露出させ自己の敗北感を和らげる点にあると考へたいのですが如何でしょうか、従つて後世行なわれた皮切の形式は切腹の本義を没却したものと思ひます。因みに小生の調べた男四三例中二八例は一文字（その中真一文字に一回で切腹したもの九例、一五例は十字割腹でその中六例は致命傷他の部位のなしに死んでいます。それに対し女は九例とも一文字）中二例は真一文字、他は二筋か三筋切つてゐる。女は縦の切下しをする余裕がないとも見られます。男の中十六例女の中四例は腸管が露出しており女も男に劣らず深く切つてゐます。致命傷は男女とも頸部多く次で左乳下、縊死水死なしも少しありました。

次に女性の例について、検視記録からいろいろの要項を分けて記録をみます。明四二の例は貴誌五月号にのつてゐるものと同じはずですが一例は一つ年がちがつてゐます。ちよつと何れが誤りかわかりませんのでそのまゝ書いておきます。

×

×

×

年度	明42	明42	大12	昭5	//8
年令	36	24	21	33	26
身分	主婦 (農)	未婚 (農)	主婦 (商)	同 右	未婚
自殺原因	家庭不和	継母との不和	家庭不和 病氣	家庭不和	神経衰弱
刃・物	草刈鎌	桑切り鎌	短 刀	脇差刃渡り約一尺	肉切庖丁
致命傷	頸部刺傷による動脈切断	同 右	同 右	同 右	縊切な腹死後し
服 装	紺カスリの野良着の帯と き腰巻の紐をゆるめ下腹部 を着物の外から紐でしばり 双肌ぬぎになる	木綿の和服、帯をとき腹部 を露出	ネルの寝衣、上腹部のみ露 出	和服、正装の上帯をときき れいにたゝみ、双肌ぬぎ長 じゆばんの袖で刀身を包む	浴衣のねまき裾をまくりズ ロースを下げて下腹部を切 つたらしく襟はきちんとし ていた
切 創	左脇季肋部より右斜下四・五cm 深さ二cm臍下に接し六cm腹膜に 達す、臍下三cmより右斜上に深 さ一cm約四cm鳩尾に刺傷4ヶ所 上腹部に刺傷1	左脇腹より臍に向い五cm、深さ 二・五cm、臍右下より十一cm腹 腔に達し腸管数条露出、外に左腹 部刺傷1、頸部に小刺傷2	臍上左脇に深さ一cmの刺傷3、 臍直上より深さ二cm、長さ八cm 頸部に小刺傷1	臍下約二cmの高さ、横十七cm、 右半は腹腔に達し腸管露出、左上 腹部及頸部に刺傷各1	臍下約五cm、横八cm、深さ二cm その上に深さ一cm、四cm長の傷 左乳下に小刺傷2



昭10	// 11	◎ // 18	// 20
40	37	19	25
主婦 (商)	“(農)	未婚 (農)	主婦
?	?	失恋 (心中)	家庭不和 夫死亡
出刃庖丁	短刀	“	刃渡二尺の日本刀 刃先より約一〇cm ら上を白布で巻き 麻紐がきつちり あつた
なし 後死 加療	左乳下刺傷	左乳下刺傷	頸部刺傷
和服、帯を押下げ襟を開き 上腹部のみ露出	洋服のまゝシユミーズをま くり上げて切腹	黒木綿ズロースのみ洋服は 全部ぬいでまとめてあつた	モンペ、上半身裸体
臍上約五cm、横六cm腹膜に達す その左に腹腔に達する刺傷2、胸 に4ヶ所小刺傷	臍下四cmの高さ、横十八cm腹膜 に達す 左乳下に小刺傷3	臍下約三cm左脇より中央へ七cm 深さ一・五cm、臍直下五cmに腹 腔に至る刺傷、その右上より斜上 へ一二cm、腸管露出 胸に小刺傷1	臍上一cm、高さ左脇腹に深さ一 ・五cm、五cm長の傷、臍直下に 約八cm、腸管露出、その右に腹 腔に達する刺傷

◎印……この女はマゾヒスト傾向が甚しく心中するのに自ら切腹しその後男も切腹したが未遂に了り病床訪問で死の経過がわかつています。苦しみながら自分で腸を引出し倒れた後男に起してもらつて乳下を突刺しています。男も女の苦しむのを傍観しかえつて性感を催したと答えており、やゝ異常と思われます。

(註) 各例共腹剖切創の部位を示すカットがついていましたが、誌面の都合で割愛しました。



## 夫婦愛の表現法としての

### 裸女緊縛について

西 澤 芳 造

或る特殊な階級の夫婦を除けば、我々庶民階級に於ける夫婦と言うものは、例外を別として殆んど細やかな情愛を捧げ合っているものである、夫婦間の情愛について書くのではないから、細い論は止めて気の許し合った夫婦が愛を交歓する時の前戯として首題の項目について研究して見たい。

元来、男には九〇%サイド性が潜在しているがその反面女はマゾ性を持つていと言われている。小生は此等の両性即ちサドとマゾが夫婦の愛の行為に併せて行われる場合、どれだけ、其の愛が悦楽の度を高められるかと

言う事を、自分自身で身を以つて体験した。

これは性感度の高揚が自己のみでなく、反復実行している裡に、相手方の女性にも、それが著しく見られるものである。夫婦間に於けるアブノーマル・アクションは、SとM（サジズムとマゾヒズム）の立場が、男と女亦是女と男と何れがサドになりマゾになつても一向差支へはないのであるが、小生は自己の体験を基にして此の文を書いたので、男性をサジズムとし、主として男が女を縛り虐める事により表わされる夫婦愛に就いて書くことにした。

小生は何時も妻の豊かな裸身を見る度に、世間一般の夫婦生活で、ありきたりな方法や極めて常識的な平凡単調な行為で満足しているノーマリテイな人々に同情している。それらの人々に言わすれば小生等の行為こそ縛つたり縛られたりして、それこれ変態ではないか、と馬鹿馬鹿しがり、或いは笑い種とするかも知れないが、小生等の行為こそ女性の美を他の角度から極度に發揮せしむることが出来、且つ男性の逞ましき、強さを象徴する現実的美学だと思う。

実際に、考えても、美しいカーヴの女体を鑑賞することもなく、否鑑賞するにしても、単に裸の儘眺めるだけとは、最も愚かしきことと言わねばならない、愛する女性を、思う儘に虐め苦しめた後、優しい愛撫を行うことの楽しさは斯の道に没趣味の人達には、およそ狂人恋態の行為としか考えられないかも知れないが、知る者のみぞ知る愉悦感激の絵図ではないだろうか自分こそその常態なりと自称する世の人には女性を縛ると言うこと自体が、



何か変な心理に陥るものらしいが、小生の場合、女を縛って手足の自由を奪うという事に又その間の経過が、何んとも言えない妖しい魅力なのであり、美しい女性を見ても何んの感情も起らないが、一と度縛られてゐる場面を想像する時、或いは雑誌の挿画等でちらりと見たりする時、涌然と性感が湧いて来るのである。

最初に裸にして縛り上げたのは、結婚後三ヶ月を経た頃であつた、其の際、一応は妻の承諾を得たのであるが、然し唯単に、

「裸になれ、縛らせろ」

なんてことは言い出せるものではなかつた。誰しも、同好の志には此の気持は分つて頂けると思う。そして又その言い出す際にも、先ず少々のアルコールは入つていなければ、この勇氣は出ない、そして何か妻の行動に失敗を見つけて、言い掛りの種にする。

「おい、お前はこれこれしかじか、駄目じやないか。罰として折檻するぞ」

位から始まつて、後は上つてゐるメートルの余勢を駆つて、妻の帯に手を掛けて、早業でさつ！と着物を脱がす。後へ手を捻じ上げると用意の細引で両手を背で縛つてしまう。この早技が三分で出来れば、野村胡堂氏の言

う様に新米の岡つ引位の腕だそうだ。縛られてしまふと妻と言うものは、落着いて、さアどうなりと、と言つたようにじつとしてしまふものである。尤も新婚早々なれば、こんな様にはいかないかも知らんが――。

さて妻を腰巻一つのまゝ高手小手に荷造用の綿ロープで縛り上げたが妻は顔を伏せたまゝ心もち赤らめていた。今度は女性として最も恥しい、厭な恰好になる様に両足を拡げてあぐらを組ますとか裸の臀を露出せしめて縄をかけるのである。縄は大抵胸を乳の上下に二本宛計四巻き位にし、上膊と胸の間へは縄を通して締めつける。余れば股から尻の割目へ二本を掛けて喰い込ませるが、これは軽い拷問としては女性にとつては応える縄の掛け方になる。そして妻の体が彼自身では転る以外に動けないようにすると、露わな臀部を突き出す姿になる。

小生は妻の臀のみにしか鞭打ちはしないことにしている。鞭は孫の手か物差しにする。数人の友人に聞いた処によると女を縛つて楽しむ趣味（悪趣味だと言われたことがあるが）は、殆んどこの者が異口同音に、「縛るなら後手が最も情慾を唆る。」と言つてゐるのには小生とても満腔の賛意を表するものである。

る。

最近、どんな女性でも、それが娼婦であるうと、妾であろうと、縛られると言うことは嫌がる、特に裸になつて後手に縛られることに極度の羞恥と不安があるらしい。だが一度縛られて見ると、無意識の技巧を発揮して、征服者の血を湧き返らせる。然し、小生は考へるが、縛られた妻或いは女性が、前戯としての良さは、肉体的精神的両面から見ても、不安そうな眼、羞かしそうな体の恰好、自由を奪つて、その上生殺与奪の権を握つてゐるという征服感等が、始めはお互い探り合う様に如何うしてやろうか、亦は一体どんことをされるのかしら？と言ふ心理に始まり、情況の進展につれて、女の方は縛られた縄目を少しでもゆるめようともがく、男はもがく相手に自己の嗜虐を刺戟されて、縛られた者に一層苦しめてやろうと思ひ、先ず着物の襟を拡げるとか裾を露わにするとかの小手調べを行う。裸であれば適当にくすぐる、つねると齒で迫害する、親しい女だどこもかも露出するのは耻しがらないが、肛門を見られるのを大変耻しがらるのがある。

# あるマゾヒストの手帳から (三)



## 第十八 満員電車の中で

終戦後一、二年間の東京の電車の朝夕の混雑ときたら経験した人でなければ想像もつくまい。少しでも収容力を増すために、混んで来ると座席の上にも土足のまゝ二列に人が立つのが当り前だった頃昭和二十一年の暮の話である。私は東横沿線田園調布のある家で一夜を送り、翌朝ラッシュ時田園調布駅始発の渋谷行に乗って、素早く一番端に陣取った。遅れて乗り込んだ中に二人連れの若い女性があつて、席をさがしつつ端の方迄来たが、席はすっかり塞つて私の前には人が立つているので、そのまゝその横の二つの吊手にぶら下つて話し始めた。女学校の同窓生らしく夢中になつて話し込んでいく。私のすぐ右前に立つた方は私が思わずハツとした程の美貌で、

沼 正 三

スラリとした背恰好も連れとは比較にならぬ。いゝ家の令嬢と見えて気品もあり、外套の好みも良かった。ハンドバックから何かを出すため片手の手袋を外すとマニキュアが見えた。貿易会社か何かで外人と常に応対する仕事をしているのかと思わせるような何か日本人離れした印象の美人だった。

次の駅で満員になり、その次の駅で又押込まれると、

「立て／＼」という声が一隅に起つて、腰掛けていた客が次々に座席の上に立つた。私の横迄立ち上ると、二人の女性は仲良く自分の前の座席に上った。私に近い方の令嬢の恰好の良い黒革の中ヒール靴が私の目に止つた。私は前夜の疲れに立ちたくなかつたが、一人丈掛けていると気がひけるので止むを得ない。前に立つ客の脚で座席に押しつけられている両脚を上には抜き出すため両手を尻の両側に



ついてふんばり、そのまゝ尻を浮かそうとした。その途端、今し方私の横の座席に上った例の令嬢が混み合った中でも連れと話し続けるのに都合の良い姿勢をとろうとして窮屈そうに足を踏み代え、その拍子に偶然片足が私が腰を浮そうとしてついた右手の甲の上に載り、私は令嬢の靴の爪先でグイと踏みつけられた。道の悪いところを通つて来たと見えて、靴底の泥が手の甲一面にべつたり押し拡げられたのが感ぜられた。

満員電車で美人に足を踏まれることはよくある。マゾヒストには悪い気持のものではない。然し普通なら足の下のグニヤリとした感覚は床と異なるから踏んだ方ですぐ気がつく。所が座席の上に立つと下がクツシヨンであるためこのグニヤリとした感じがなくて踏んでいる方では気がつかない。私の手は靴と共にクツシヨンの中に沈んでしまつていたのである。勿論踏まれた瞬間アツと叫んだのだが、混雑した電車の中だし、令嬢は自分の足が原因とは全然考えていないから気にもとめずに連れと話している。一言注意すれば勿論大いに恐縮して謝罪するであらう。

然し幸か不幸か私はこの美しい令嬢を衆人の中で謝らせ恥かしい思いをさせるには余りにもフェミニストであつた。いや私には、何も知らず愉快に連れと談笑している彼女の話を折ること自体が僭越と考えられた。私さえ黙つて我慢していればいいのではないかその中彼女が又足を踏み代えたらそつと手を退けたい、それ迄我慢してしよう。立つことができないが気分が悪くて腰掛けたまゝで

いるようなふりをすれば良い。そう突嗟に決心すると共に、マゾヒステイックな感興が油然と湧いて来た。令嬢は自分の靴の底に男の片手を踏み敷きながら何も知らずに話すのに夢中だ。私の手の痛みそれは彼女の無駄話をやめさせる丈の価値もない。彼女丈ではなく誰も知らない。車が空いているとすぐ人に見られるだろうが、満員すし詰め床の上に立つ客の目は座席に上った客のへその辺におしつけられてしまうので視線の自由はなく、クツシヨンに沈んだ令嬢の靴の下に何があるかは、私が叫び出さぬ限り気の付く人はない。

座席に二列に立つとあとから立つた方は可成り不安定な姿勢を強いられる筈である。電車の駅発着やカーブの動揺の度に、今にも踏み代えるかと待ち且つ恐れるが、彼女は妙に踏み代えず、その代りに身体の重心を左足にかけたり右足にかけたりして均合をとつていくらしく、時々私の手の甲を押す力が弱くなり。勿ち全体重がその靴先に集まつたかと思われる程の大盤石になる。しかも時々爪先を支点にして靴が廻転するので、そんな時重心ががゝつていようものなら、右手の甲の皮膚は筋肉ごと引き擦じられて、まるで拷問である。爪先の平らな部分だからまだよかつたが、もし中ヒールの踵の方が載せられてそれで廻転されたら、掌骨が折れるか、手の甲の皮膚が踵の下丈丸く剥ぎとられるかしてたかも知れない。重心のかかつてない時でも手の甲はザラザラの靴底に擦れ合う。泥の層は踏みひろげられて薄くなり、その下の靴底革に半分めりこんだようになつてい砂が皮膚にめり込んで来て、廻転の時に皮膚を破る。何と



痛く又何と楽しい感じであろうか！

火鉢で手を焙る丈で身体中が暖るものである。芥川龍之介の「世之介の話」を読むがいい。主人公は乗合船で乗合せた女性を、下船の時の動揺を利用して、その膝の上に自分の手をかけた丈で、充分に味つてしまう。手というものはそういう作用のある器官である。その手が令嬢の靴の底に泥にまみれて踏まれているということは、私の気持からは、全身が彼女の靴の下にあつて、床となつたに等しかつた。私は全身の感覚を右手に集中し、身体全体に彼女の靴の重みを受け、身体中の皮膚に靴の泥を感じ、ザラザラした靴底を感じた。それと共に私は靴の穿き主にマゾヒステイックな恋慕を覚えずにはいられなかつた。

私は全身全霊を以てこの靴——私を苦しめているこの小さな靴——を愛し、それを穿いている令嬢の足を、下肢を、全身を、感じとり愛した。マゾヒストたる読者諸君はこの時の私の宿命的な心の動きを同情を以て理解して下さるであろう。靴底から受ける肉体的苦痛が痛ければ痛い程、私はそれを「虐げられている」と感じ、令嬢は万事承知なのだと空想した。彼女は靴が醜い男の手の上にあることを知つてゐるのであつた。彼女は退ける必要を認めないから退けないでいる丈であつた。彼女の目にはこの醜い私の身体などは彼女の靴が踏む床や座席と同じ値打ちにしか写つてないのであつた。痛い。だが一体奴隷の痛みが主人の心に影響するものだろうか。すべきものだろうか……私は空想の中に令嬢を女主人として仰ぎ、この恐

るべき隷属の時間の少しでも長く続くようにと念じた。

渋谷迄の十分間は短くもあり長くもあつた。令嬢はとうとう靴を踏み代えなかつた。痛みをこらえるため私は額の脂汗をひつきりなしに空いた手で拭かねばならなかつた。それが病人らしく見えた故か特に私に対して「立て」と要求する人もなく、やがて満員電車は渋谷に着き、僅か十分間の中に私の心裡に女主人の地位を占めてしまつた令嬢は、結局私の手を踏んだことを全く知らぬまゝ座席を降り下車していつた。私は女主人は事情を知りつゝも、奴隷の手の痛みなどに氣をとめずにいづてしまつたものと考えねばならなかつた手にひどい痛みを感じたが附着した泥を人に見られぬ様すぐ手をポケットに入れ、駅の大便所に入つてソツト出して見た。押しつけられた泥が丁度膏藥でもすり込んだように皮膚を黒く蔽つている。その下に真赤に充血した皮膚が見え、砂粒で擦られて所々破れた所からは血がにじんでいた。支点になつて移動しなかつた部分を中心に不整形な靴底型の凹みができていた。私は泥まみれの血を舐めた名譽の負傷であつた。銃弾の前に女をかばつて負傷することが騎士道であるならば、連れと話し合う令嬢の感興を損ねまいと我慢を重ねるための私の負傷も騎士道ではなからうか。エリザベス女王の靴を泥濘から護るために自分のマントを犠牲に供したサー・フィリップ・シドニーの所為が騎士道であるならば、令嬢の靴の動きにこちらから干渉することを避けるため我身の安全を犠牲にして悔いずその靴底の泥をも手ずから拭い落した私の行為はそれ以上に騎士道





ではなからうか。

この話はこれで終る筈であつた。ところが、その年があらたまつてすぐ、ある婦人雑誌の巻頭の令嬢写真（戦前の古い編集の復活だと各方面から叩かれてやがて各誌ともやめてしまったことは御案内の通りである。）に私は彼女を発見したのだ。田園調布在住のある大会社重役の令嬢と分つた。「美代子様は」と説明文は書いていた「津田を優秀な御成績で御卒業後、GHQ関係に一級通訳としてお勤めになつていらつしやる明朗活潑な方。……これから御出勤遊ばす所を撮しました」高台になつた住宅の玄関から道路に降りる石段の途中で微笑んでいる彼女の服装は過日見たのと同じであつた。段の下から撮してあるので片足は靴底が見えた。それは私を痛めつけ又喜ばせたあの靴、サ・フリリップのマンツの代りに私の手を敷物としたあの中ヒール靴に間違ひなかつた。石段を降りようとして片足を上げた彼女の姿は、「奴隷よ。この靴でもう一度踏んで貰いたいの？こゝへ来るが良いわ、この石段の下へ。私は毎日この石段を踏んでいるのよ。お前はどの石段が美しくはないの？」と話しかけているようであつた。「そうだ。あの時私の肉体の一部は彼女の靴の下でこの石段と同じ状態に在つたのだつた」と私は写真の中の靴先にそつと接吻しつゝ、あの十分間を偲んだ。

以来年々紳士録で彼女の父の名を調べて、彼女の近況を知ることが常に努力したが、遂に一昨年他に嫁したことが分つた。今後、恐らく一生、私は彼女のことを怠らないだろう。彼女は

私が生涯に持った幾人かの女主人の中、一番奇妙な——というのは淡い一面的な関係でありながら肉体的印象が強烈だつた点で——出会い方をした人である。

## 第十九 マゾヒスト国王

谷崎に「金色の死」という短篇がある。耽美主義者の富豪が財力を尽して夢想の小天地を营造するという、乱歩の「パノラマ島奇談」の原型たる作品であるが、この中に人工樂園の女王の眠っている寝台を支えるため、四本の脚の代りに屈強な四人の男を蹲まらせている場面がある。詩人の空想と読む人も多からうが、事實は小説よりも奇なりとか、国王の身と生れながらこの「ベツトの脚」になつた人がある。

ワグナーのパトロンとして有名な近代の学芸王、バヴァリア王ルドヴィヒ二世（鷗外の「水泡集」を読み給え）の父、ルドヴィヒ一世は十九世紀前半を治世とした理想家肌の君主で、当時としては進歩的な自由主義者であり、学問を愛して詩文の著書もあつた人であるが、六十才に届いてから女に迷つた。（この辺は一寸唐の玄宗皇帝を思い出させる。）女の名はローラ・モンテス（Lola Montes）スペイン美人の舞姫といえど先ずカルメン見たいな女性を想像するが、あんな野性的な感じでなくむしろ貴婦人型であつたようだ。勿論当代屈指の美貌で、特にその黒瞳勝ちの明眸が有名であつた。寵を得た当時二十七才。この頃の彼女を外交官の娘として一目見たこ





とがあつたマツケンドルフ夫人は後年の回想録で「ローラ・モンテスの大きな輝く目を見たことは十七才の私にとつて一の事件であつた。私は「美しい女」を初めて見た。むしろ「女が美しい」とはどのようなことを初めて理解した。それまで周囲の人から聞かされていた彼女の悪い噂は、彼女の魅力ある瞳の光に消えてしまった。私は彼女が誰よりも好きになつた。」と書いてある。同性に対してさえこれ位魅力を持つものだから以てその美貌を想像できよう。「悪い噂」というのは勿論ローラが王を左右して国政に干渉することを指す。王が彼女に対しては思慮分別を失ひ、言いなり放題になつていたことは史家も認める事実である。王は蔭では「ローラ・モンテスの犬」とあだ名され、当時、ローラが狃ころまがいの国王に首輪をつけ鎖で曳いている諷刺画が画かれた。前記の回想録はいう、「バヴァリアを去つて後も私は彼女の噂をよく聞いた、中には信じ難いようなこともあつた。王は彼女の眠る寝台の脚の一つを取除いて、その代りになつて天を支えるアトラスのように坐するいうのであつた私は信じなかつた。彼女の明眸を知る私には信ぜられなかつた」とだが、私達マゾヒストはこれを信じるのである。六十才にもなつて女に迷い出したものがどんな狂態を演ずるか。彼がマゾヒストである場合どんな痴戯を案出するか。私達には分るのである。それにしても国王たる人がベットの脚となつて愛人たる美姫の眠りに奉仕するとは何とマゾヒスティックな思い付であろう。一寸断つておくが当時の貴人の寢床というのはよくコスチウム物の西洋映画に見られ

るような豪華なもので寢床の上方高い所に天蓋があり、それを四隅の太い柱で支え、柱と柱の間に帷帳が張られて内部を隠すようになつてゐる。その全体を指して寢床といつたのであるが、ここでいつてゐるのはこの柱 (Bettposten) ではない。回想録には「寝台の一脚 (ein Fuss des Betgestells)」とあるし、アトラスは天を肩で支えてゐるのであるから王のやつたのは「金色の死」にあるのと同趣向と思われる。この奉仕はローラが眠つてゐる間丈こつそりなされたのか。或は彼女も知つてゐたのか。むしろ彼女が思いついて王に課した愛の試練であつたのか。まさか一晩中ではなからうが一体どの位このマゾヒスティックな奉仕の姿勢を続けたのか。もしローラが課したとすれば、王は彼女が許すまでこの苦行を続けねばならなかつたのだらうか。そういったことは、私には一切分らない。ただ私には当時世上に存したこの風評が全くの根なしごととは思えないのである。

この風流なマゾヒスト王は、ローラとの醜聞を非難せられて、二月革命後の動乱の中で退位させられた。ローラ・モンテスの「大きな輝く目」は傾国の明眸であつたのである。

## 第二十 地獄の狂楽

マゾヒストはいわゆる春本を愛好しない。何故ならそれらは単なる性交場面の極彩描写に止まることが多いが、マゾヒストは性交自体にはそれほど興味がないからである。私も男性としての好奇心か



ら何冊か読んで見たが、私のマゾヒズムを満足させてくれるものは殆んどなく、失望のみであつた。戦後の傑作と称せられる「四畳半襖下張」の如きも荷風の作か否かは暫く描き、マゾヒストとしては全く読む必要のないものである。

然しこの種春本の中にもマゾヒストとして読むに堪える場面を含むものがないわけではない。私が友人の警察署長から借りて読んだ「地獄の狂楽」などはその一冊であつた。戦後の出版であるが猥褻文書として禁止を潜つて可成り頒布されたらしいのでお読みになつた方もあろう。以下の紹介はマゾヒスト向きの所だけである。

冒頭では、ある会社社長の邸宅で美しい夫人が腹心の者達と陰謀をたくらみ宴を設けて密談している。やがて客が帰る。召使に後片付けさせようとベルを押すと、女中の代りに十九才の美少年の書生（一彦）が現れ、命ぜられて食器を下げ始める。終つて次の命令を受けに来た少年は夫人がほろ酔機嫌でソファに身体を投げ出したまゝまどろんでいるのを見出す。その美貌に魅せられた少年はソファの前に跪き投げ出された夫人の脚にソツとさわる。深く寝込んでいたので、次第に大胆になり段々上へ上へとさすりながら、スカートの中に迄手が入る。（バルザックの「風流滑稽譚」中の一篇に同趣向のものがあることを思い出される方もあろう。）実は少年の所作にとうに氣附きながら虚眠<sup>そらね</sup>していた夫人は、少年が………上から………所を締めつけてしまう  
そして女主人に対する無礼をなじる。少年は真蒼になつて詫び、夫

人から「私のいいつけを何でもきくなら」と条件を出され、これを承諾して初めて許される。

夫人は彼を自分の私室につれてゆく。そして………を脱いだ上で、「先刻と同じことをもう一度してごらん。」と命じる。少年は………する中次第に顔をすりよせ、フト伸して犬のように………ともう夢中になつて………る。夫人はいつも夫から愛される時とは異つた肉体的感触に悦楽を感じ、心理的にも夫に対する受身の状態と違つて目下の童貞の美少年を自分の自由にし、積極的に玩弄するに似た面白さに目覚めて来る。彼女はいつか彼の顔の上に………いる。そして両手で彼のズボンを外して、………それに………ようとして………のまゝ身体を前に………てゆく、（この場面が終る。）

大分頁を繰つて、中頃で又この二人が夫人の寢室にいる場面がある。この場面になる迄に、二人の間にどんなことがあつたかは、巻末に近い所で一彦の口から洩れるが、それによると彼は夫人の為にマゾヒストに仕込まれ、裸にされて鞭打たれたり、縛つて吊下げられたり、夫人の身体中を犬のように舐めさせられたり、あらゆる訓練を受けて、夫人のサディスティックな情欲に奉仕させられ、自らもそれを喜ぶようになつてしまつたのである。然しこの一々の描写はされてはいない。さてこの場面では少年はすっかり夫人の奴隷となり、その淫欲を満足させるための生きた道具として扱われている。彼は全裸のまゝ後手に縛られ、床上に仰向けに横わっている。もう





今迄長時間にわたり夫人は彼の顔の上に、……彼の……用して来て、今一寸一服している所である。少年の口の中は……くなくつてゐるし、……て背中の中に縛られている手が千切れるように痛む。然し夫人はいつかな彼を解放しない。「さあ、始めるのよ。」と命じ、……せて……して彼に作業続行を強いる。彼は……出す。夫人は「苦しいだろ。だけどお前は苦しいのが楽しいんだろ。」とからかう。ところへ部屋の外から女中の注進で夫が急に帰宅したと分り、彼女は裸にして縛つたまゝの一彦を洋服簞笥に隠し、何くわぬ顔で夫を迎える。然し夫は妻の………  
……工合から彼女が男と楽しんでたのではないかと怪しみ、責め問いつつ暴力的に彼女に……。そして……に、簞笥の中から裸の一彦少年がころげ出る（この場面が終る）

この小説は数組の男女を描き、まだ他に色々の場面がある。シェークリームを………のまわりに塗りたくりそれからそのシェークリームを食べるなどという愉快な前戯もかゝれている。「地獄の狂楽」という題名の由来するスーハー場面や強姦場面もある。だがこれらはマゾヒスト諸君には（私にも）興味がないから全部省略した。なお、右の二人がどうなるか丈いうと、少年は追い出され、与太者の兄の所でやつと正常の性欲者に戻るが、夫人はおびき出されて少年の兄の一味に復讐の為輪姦され、氣絶し、結局身を亡ぼすという、とつてつけたような勧善懲惡的結末になつてゐる。（本項はメモなしに記憶によつたので多少不正確な所があるかも知れない）

## 第二十一 パリスの林檎

オリンパスなる神々の饗宴に一つの林檎が投げ込まれ、「最も美しい女神に」と記してあつた。そこでこの林檎の帰属をめぐつて、女神ヘラ、アテネ、アフロディテの三者間に争いが起り、各自が林檎は自分のものと主張した。争いを決定するため三女神はイーダ山上に羊を牧するトロヤの王子パリスに審判を求めた。そして、ヘラは地上の王たることを、アテネは戦の勝利者たることを、アフロディテは絶世の美女ヘレンを与えることを、それぞれ自分が選ばれた時の条任として申し出た。パリスはアフロディテを選んだ。女神は約によりヘレンをパリスに手引した。彼女は既にスパルタ玉メネラオスの妃であつたが、女神の助けによりパリスは彼女をトロイに奪い取つた。十年間に亘るトロイ戦争はこのために起つた。

これは有名なギリシヤの古伝説である。この話で誰でも疑問に思ふのは「パリスは何によつて選んだのか。」ということであろう。三女神の美はそれ丈で決定できる筈だが、申出は単に彼の氣を惹くために過ぎなかつたのか。つまりアフロディテが一番美しかつたから彼女を選んだのか。ヘレンを手に入れたいから選んだのか。この点は註釈家にも昔から議論のあるところだそうである。

条件を離れてアフロディテが一番美しかつたからだということが考えられる。アフロディテはローマ神話のウェヌス（ヴィーナス）であつて美と愛の女神である。これを一番美しいとするのはごくノ



ーマルであろう。然しマゾヒストたるものはこの決定には不満である。何となればマゾヒストにとつて美しいとは「マゾヒスト好みの魅力あること」を指すのであるが、その点でアフロディテはヘラ、アテネに必ずしも勝らないからである。アテネはローマ神話のミネルヴァであつて文と武の女神である。武装して戦えば戦争の神アレスをも打負すほどの勇武の女神であり、女性よりもむしろ男性に近い性格である。更にヘラは大神ゼウスの妃であつて、ローマ神話ではユピテルの妃ユノーにあたり、神々の女王として諸神に君臨する女神であり、孔雀の驕慢<sup>シュトルス</sup>を愛してこれに車を輓かせている最も威厳ある女神である。この勇武、この威厳と比較して、アフロディテの美貌に伴われる女性的な愛情は果してマゾヒストを惹きつけるに足るだろうか（勿論勇武も威厳も醜さに伴われては魅力にならぬ。私はこの場合いずれも美しい三女神について云つてゐるのである。卑近な例でいえば、原節子と高峰三枝子と山口淑子に優劣をつけるような場合である。ヘクラフト、エビングの診療したある患者は、マゾヒズムを簡潔に要約して次の命題とした。「真のマゾヒストはヴェヌスのような美女の抱擁よりも、平凡な女性の足蹴の方を躊躇なく選ぶものであります。」と意味深重ではないか。

だからパリスがマゾヒストであれば三女神中アフロディテを選ぶとは考えられない。マゾヒストであればというに限らず、こういう場合右の三女優について各人考えて見れば分るように、結局は各自の好みになつてしまふ。恐らくパリスは、優柔な性格でもあるし、

三女神の容貌丈からは一人を選ぶことができなかったであろう。そこで条件によつたであろう。

条件を考慮に入れ、これを基準として選ぶというのであれば、マゾヒストの選択は勿論ヘレンである。しかしマゾヒストはヘレンを己れの妻にするよりも他人<sup>ひと</sup>の妻であるヘレンに奴隷として仕える方を本当は望むであろう。英雄ヘラクレスが女王オンパールの宮廷に三年間の奴隷となつたように、パリスがマゾヒストであつたら、女神の助力で、メネラオスの宮廷にヘレン附の奴隷たる地位を得、彼女に仕えつゝ一生を送るのを理想としたであろう。

どつちにしても、パリスがマゾヒストだつたら、トロイ戦争は起らず、ホメーロスの二大叙事詩が生れて来ないことになる。ヘレンの名も後世に伝らず、ゲーテの「ファウスト第二部」に彼女が登場することもおぼつかない。パリスがマゾヒストでなくてよかつたナと春の一日、「イーリアス」を読みつゝ思つたことである。

## 第二十二 ヘクトルの馬

パリスの話のついでにその兄のヘクトルのことを書こう。ヘクトルはトロヤ第一の勇士で、ギリシャ軍もアキレス以外は誰も敵わない。ヘクトルの妻はアンドロマキである。トロヤ落城の後彼女はギリシャ軍の捕虜になり奴隷とされて一生を終る。ヘクトルがアキレスと闘うため出陣する時このアンドロマキが、夫の死、来るべき落城、自分の運命を予見して泣き、彼がこれを慰め励ます所は「イー





リアス」中有名な名文である。

この妻に優しいヘクトルは、今でいえば恐妻であつたらしい。性生活に於てもアンドロマキから馬にして乗り廻されていた。トロヤ版「痴人の愛」というところである。そこで、男が四ツ這の馬になり女が騎手になつて男乗りに跨るのを、ラテン語で「愛の馬」

(egus eroticus) というが、古代にはこれを又「ヘクトルの馬」といつた。ローマの諷刺詩人マルチアリスの詩中、夫が性的冷感症の妻に与えた

妻よ、この家を出てゆくか、それとも私のやり方に従うか  
という一行から始まる詩があるが、その中に次のようにある。

扉の陰ではフリギア人の奴隷共が自慰していた。  
妻がヘクトルの馬に乗る度毎に。

イタカの島中がいびきを立てているというのに、  
貞潔なペネローペはいつもそこで手を動かしていた。

ヴァン・デ・ヴェルデは、例の「完全な婚姻」の中の、女が仰向けになつた男に跨るいわゆる「乗馬位」という性交姿勢を論ずる章下で、右の「ヘクトルの馬」の一行を引用している。これは *Uxor* (妻) という単語で早合点したのだろうが、「ヘクトルの馬」の古典的用法を知らぬための誤解と思われる。尤もヘクトルの馬たるを愛する輩が性交に於て妻に乗馬位を取らせるということは当然考えられることである。「君が為には我れ馬に」という名文句を丸木砂士こと秦豊吉氏の文章で見たが、仰向けにせよ、四ツ這にせよ、所

詮馬は馬なのだから。そしてこれを私達の言葉に言いなおせば、マゾヒストは女を乗せたがるということである。(Sukkubismus.)  
これは別項で扱おう。だがらマゾヒストの奥様たる方々は、昼でも夜でもひっくり返して、縦横に夫を乗り廻して良いのである。

高橋鉄氏はいわゆる乗馬位なるものを更に幾種類かに細分しているが、同様にヘクトルの馬も数種の姿勢に分類できる。奥様方の御参考になることだが、詳細はやはり別項としよう。

## 第二十三 妻は天なり

私は天下のマゾヒスト諸君に日本の一古典を推薦したい。ちと逆説的なようだがそれは「女大学」である。

女大学は、女性に対して男性への無条件的服従を要求した徳川時代の封建的社会制度が、女性に対して従順の美德を教えるため強制した修身教科書であつた。ラフカディオ・ヘルン以来世界に名立たる自己犠牲的「日本婦人」は実にこの女大学の生産したところである。明治になると福沢諭吉は「女大学評論」によつてこの封建的な歪められた女性道徳を論難した。然し一朝一夕には変改し難いのが上層構造たるイデオロギイの特質である。女大学はいわゆる「良妻賢母」教育として生き残つて来た。その根がいかに深いかは今でも多くの家庭婦人が夫に対して敬語的言葉遣を用い他人に対して自分の夫を主人という言葉で表現しているのでも分ろう。両性平等の憲法下にも逆コースの風潮で、又女大学思想が復活するのではない



かと危ぶまれる。東北大学の中川善之助教授が近時「女大学の批判」を著した所以である。

私はマゾヒストであるから、女大学的思想の征伐にはもとより大賛成である。女性が男性の奴隷だなどんでもないことだ。ただ私が中川教授と違うところは、教授が男女同権、両性平等の立場に立つて、女性の隷従を批判されるのに対し、私はマゾヒストとして、むしろ正反対の男性の隷従の立場に立つて、女性の隷従を論難したのである。そこで女大学的思想を攻撃するという点に於ては教授と合流するけれども攻撃の程度性格には差がある。教授は「異性への隷従」道徳そのものを否定されるが、私は「異性への隷従」自体はこれを肯定し、唯それが「女性の男性への隷従」であることを不可とするのである。極左が極右と正反対に対立しつつも暴力を肯定する点で共通するようものだ。

こういう私の立場からすると、女大学は、これを「異性への隷従」を説く聖書バイブルとして読み味うことが可能であり、又かく読めば「男性の女性への隷従」を理想とする私達マゾヒストの拳々服膺すべき名言が決して少くない。私が諸君に一本を薦めるのはこんな理由からである。見本として有名な「夫は天なり」の一節を読換えたものを掲げて見る。婦人を男子と、夫を妻と、女を男と、男を女と取替えるだけで、次のように味わいの深い立派な教訓が出来上るのである。現在夫の地位にあるマゾヒスト諸君は、いずれ女性主権の時代が来れば、これはそのまゝ「男大学」の一節となるべき文章である

と心得て、熟読玩味しておいて呉れ給え。

「男子は別に主君なし。妻を主人と思ひ敬い慎みて事うべし。輕しめ悔どるべからず。惣じて男子の道は女に従うにあり。妻に対する顔色言葉遣い慇懃にへりくだり和順なるべし。不忍にして不順なるべからず。おごりて無礼なるべからず。妻教訓あればその仰せを叛くべからず。疑わしきことは妻に問うてその下知を願うべし。妻もし問うことあらば正しく答うべし。その返答疎かなるは無礼なり。妻もし腹立ち怒るときは恐れて順うべし。怒り諍いてその心に逆うべからず。男は妻を以て天とす。かえすがえすも妻に逆いて天の罰を受くべからず」

## 第二十四 白人崇拜症(white-worship)

日本人のマゾヒズムを研究する上に決して無視できないのは、それと日本人の白人崇拜症ホワイット・ワーシップとの関係である。皮膚の色の異なる種族間にかえつて特種の性的魅力が存する事実は広く承認されていることで黒人舞姫ジョセフィン・ペーカーの人氣などは半ばはその皮膚の魅力に基くなどといわれる。そしてこれを広義のフェティシズムの一種として説明する人が多い。例えばイワン・プロツホなどはその一人である。然し白人の場合にはそれは必ずしもマゾヒズムとは結びつかない、むしろ結びつかないのがあたり前であるらしいのに反し日本人の場合にはこれがマゾヒズムと結びつくのが比較的多いように思われる。有色人種一般についてそういえるかという疑問を生ず





るが、例えば中国人と白人とが夫婦になると家庭内の用語は中国語になるのが普通であるといわれのに反し、白人と結婚した日本人の男女は、私達がよく見聞するように家庭内では白人の母国語を使うのを常とすることを考えると、白人に対するマゾヒスティックな態度は必ずしも有色人種一般に共通のものと断定は出来ない。こういう日本人特有の現象になると西洋の文献は役に立たない。日本人が研究せねばならぬ。だが、「白人女性を妻とする日本人男性の何割がマゾヒストであるか、」とか、「日本人のマゾヒストの何割が白人崇拜症者であるか、」というテーマによる業績はまだ日本にはないようである。

私の考えではマゾヒズムと白人崇拜症の結合するパーセンテージは可成り高率であると思われる。谷崎における西洋趣味は、「痴人の愛」、「独探」、「アベ・マリア」、「人魚の嘆き」等に極めて顕著であるが、常に白人女性への拝跪をモチーフとするので、当然両者の結合の一事例とし見なければならぬ。(中村光夫氏の谷崎論などはこういう点の洞察が足りない。) 作品として自分の思想の発表をせぬ人でも、日本の女性より白人女性の方に魅力を感じるマゾヒストは可成り多いのではあるまいか。性雑誌「人間探究」の通巻第十二号に私は畜生道に堕ちたのか? という読者相談が載っている。今なら当然本誌に投稿されただろうと思われる深刻なマゾヒストの告白で、読者の一読をお勧めするが、この投稿者は近辺の接収家屋に住む英国貴婦人の犬になるのを最大の望みとし、彼女が現に

飼っている犬を嫉妬し、それを殺して自分がその代りとなつて飼われたいと空想するのであつて、重点は犬になることに置かれているが、私達は同時に英国婦人の犬という点に注目せねばならない。本誌でも昭和二十八年一月号に角田平八氏の書かれた「あなたのムチの下に」は、実話でなく創作であろうと思うが、日本の青年が白人女性二人の性的玩弄物となり、マゾヒストに仕込まれるというのであるから、角田氏も白人崇拜症者の一人と断じて良いであろう。

が、そのような二、三の事例を収集する文では結論はでないのであつて、もつと広範な観察が必要である。然し「キンゼイ報告」のようなものは当分は望めないから、せめて本誌の読者たるマゾヒスト諸君は、体験報告の際などには、そういった傾向の有無などについて一言言及されることが望ましい。

何故日本人のマゾヒストに白人崇拜症者が多いか。これについては社会学的見地からの一家言がないでもないが、ここでは割愛する。

一般論ばかり述べたが、私自身も可成り重篤な白人崇拜症者である。谷崎が「日本で王侯たるよりも西欧で乞食になつた方が良い」と書いているが本当に同感できる。というよりむしろ、白人崇拜症でない人、日本人は白人に劣らずと本気で信じてる人の気持が分らない。殊に皮膚の色から黒人を下等として輕蔑する人が、白人を優秀として尊敬しないのはどうも理窟に合わねように感じられる。体格



容貌、皮膚、体力、精神力、どれ一つをとつても白人、殊に北欧系の金髪碧眼には遠く及ばない。公平に観察してそう思う。彼等が強者として世界を征服したのも無理はないと感じる。この白人の優秀性（日本人に比較して）を否定するのは日本人の偏狭な愛国心だけだと私は信じている。偏見を捨てれば白人が私達より優秀な種族であることは誰でも納得しないわけにはいかないのである。例えば日本の女優とハリウッドの女優とを比較して見た人はこれに賛成してくれるであろう。日本敗戦後のアメリカ占領の時、いつそ日本が亡んで、アメリカの属領にされてしまい、日本人は戦争の罪亡ぼしに一人一人がアメリカの奴隷にされるのだつたらよかつたのにと胸中ひそかにささやく声を聞いたと告白しても、本誌の読者は私を非国民よばわりはなさらないであろう。

## 第二十五 山椒魚戦争

マゾヒスト、特に白人崇拜症者向きの本を一冊紹介しよう。昭和二十八年三月世界文化社刊、カレル・チャペック著、樹下節訳「山椒魚戦争」

チャペックは人造人間ロボットという言葉を発明した人で、これを扱った戯曲で有名であるが、この「山椒魚戦争」は彼の昨年の傑作、諷刺文字としては「ガリヴァー旅行記」に匹敵すると思われる。興味ある方は石川達三の「最後の英国」と読み比べるもよからう。これは偶然インドネシア諸島のある入江に発見された一種の山椒魚——直立し

出で作業し、感受性に富み、話したり読んだりし、理性を具えてい——の物語で、人間は先ずそれを真珠採集に利用し、次に水中工事に使用し、その高い繁殖率を利用して安価な労働力として広く利用するに至る。資本家は山椒魚シンデケートを設立する。山椒魚は次第に人間の技術を身につけてゆき、結局水中国家を建設して人類に敵対し、陸地を蚕食して入江にしてしまう……

この最後の部分は国際社会及びファシズムに対する批判となつてゐるが、それ以前の部分は資本主義、殊に独占資本に対する縦横の諷刺となつてゐる。そしてこの安い労働力として商品化される山椒魚が、帝国主義が東洋の植民地に発見した有色人種をモデルにしてゐることは解説をまたずして明らかである。私がマゾヒストとして最も昂奮を感じたのは、だから、山椒魚が人間によつて利用されることを敍した諸章であつた。前に（第九）私は奴隷であるよりも畜生であることの方が遙かにマゾヒストを満足させると述べたと記憶するが、山椒魚は正に畜生なのであり、畜生として扱われながらも理性を備えた存在として画かれることにより、下等の人間としてマゾヒストの感情移入の対象となりうるのである。昔アフリカの奴隷海岸でなされた奴隷狩のような山椒魚狩が行われ、これによつて、捕獲されて飼育場に飼われている山椒魚に対して作業のための訓練が与えられ、併せて「人間に対する尊敬を教え、山椒魚の幸福を父親のように願うほかに他意のない未来の主人への感謝、服従、敬愛の義務について」宗教的説教が行われる。……いやくだくだしい引





用は止めよう、きりがいいから。とにかくこの書物の中程数十頁の部分は、これを上手に読む人にとつては、立派にマゾヒズム文学として通用しうるであろう。(誤解のないように書きいておくが、この著者自身は読者にこの種の感化を与えることは全く予想してないのである。要するに読書法の産物である) 例えば次の一節などは山椒魚の三字を特種の奴隷を意味するものとして読む時、マゾヒステイックではないであろうか、――

「また最近、山椒魚の子は、いわゆる山椒魚ブルにさしむけるために、購入されています。つまりこのブルでは、敏捷なスポーツ用の山椒魚をよりわけた上で、訓練しているのです。さてこの山椒魚を貝殻形に作った平底舟に三匹ずつつなぐのです。山椒魚をつないだ貝殻舟競争は目下大流行で、パーム・ビーチ、ホルル、キューバなどでは、アメリカの女性に一番好まれる興楽となつています。そして「トリン競争」だとか「ヴィーナス、レガッタ」だとか呼ばれています。装飾をほどこした軽い貝殻舟の上には、丸裸とたいしてかわらない、豪華な水着をつけた競技者が、三匹一組の山椒魚につないだ絹の手網をにぎりながら立っています。最後にヴィーナスの称号が賞として授けられるわけですから……」

## 第二十六 ある植民地的風景

先ず次の文章を読みたい。

「去年の夏休のことでした。私は栗田さんといつしよに、山手へ絵を書きにいきました。教会のすこし前のしばふのあるとてもきれいな場所を見つけて、そこでむこう側を写生していると、アメリカの男の子がハウスキーパーの人につれられてこつちに来ました。男の子は小さな、顔のまつしろい、とてもかわいいお人形さんのような子でした。(中略)

私は「ねえ、アメリカの子と遊びたいんだけど、遊ばしてくれませんか」と思わずいつてしまいました。私は、アメリカの子がみんなでたのしそくに遊んでいるので、いつしよに遊んでみたかったのです。すると「むこうで遊んでるからいつてらつしやい」といつたので、おおいそぎでどうぐをかたづけました。心がわくわくしてきました。むこう側の外人ハウスの方へ行きました。

(中略)

「遊びましょう」と栗田さんが呼びかけると、みんなおくへいつてしまいました。私も栗田さんも、後をおうようにしていき、ごきげんをとるように「いつしよに遊ぼう」といいながら、ぶらんこにのつたりしました。すると、男の子が栗田さんの足へおしつこをしかけました。だが、ハウスキーパーの人たちは、わらつてみていました。みんなもわらつていたので、なぜおこらないんだろうと思つていましたが、はずかしいのとくやしきで、泣きたくなつてしまいました。栗田さんの顔も泣きたいような色でした。だまつてしまいました。(後略)」



これは横浜市の小学校五年生の作文である。(日教組が集めた基地の子の作文集にあるもので、朝日新聞にも昭和二十八年三月六日附で紹介されたし、これについての投書まで出たから、御記憶の方もあるう。) 諸君はこれを一読されてどんな印象を持たれたであろうか。日本人として。同胞の子供が、アメリカの子供から、このような取扱いを受けたことに対して痛憤を覚えるというのが大多数であろう。よろしい。諸君はノーマルである。右の痛憤と同時に、何か別な快感を感じるといふ人はいないか。本誌読者の中にはきつといる筈である。その人は白人崇拝症の患者である。少くもその素質があるといえる人である。(かようにしてこの短い文章に対する反応の有無によつて白人崇拝症者か否かをテストすることができであろう。)

ノーマルな人は、「一体この文章からどんな快感を感じるといふのか」と疑問に思われるかも知れない。これに答えるため白人崇拝症者の一人として、私自身の心理を分析して見よう。(私のよくいう読書法の一例にもなるであろう。)

この二人の子供は平生から「アメリカ人」に対してあこがれを感じている。勿論生活程度の差からであろう。(この際二人を貧乏人の子と考える必要はない。相当な中産階級であつても在日米人の生活程度とは格段の相異があるから、子供は当然落差を感じる筈だ) だから「アメリカの子と遊んで見たい」のであり頼んで許されると「心がわくわくして」くる。ここまでは普通の人にも理解できよう。

所がいつてみて、「遊びましょう」と呼びかけても向うは相手にしてくれないのである。健全な自尊心ある者ならここで大きな恥を感じ帰つてしまうのが当然である。所がこの二人はそうでない。皆が二人を相手にしないで、むしろ相手にするのをいやがつて遊び場所を奥に代えようと、自分達も「あとを追うようにして」ついてゆくこうなるともう普通でない、映画ファンがスターの家に押掛けたいにどうしても帰りたくないのである、だが自分がいるべきでない意志表示された所に止まる限り、小さくなつていなければならぬ。どんな反撃をも、どんな屈辱をも覚悟しなければならない、断られたのに後を慕つた時に、二人は自ら反撃を、屈辱を招くべき種を播いたに等しいのである。「犬と支那人は入るべからず」と立札された香港の外人租界の公園に入つた支那人、黒人、専用車が連結されている米國南部の列車で白人用車輛に入りこんだ黒人、……昔からあつたことだ。それが日本人にも起るようになったというに過ぎない。

歓迎されていないという自覚は二人を卑屈にし、二人は子供等の「御機嫌を取るようにして」遊ぶ。それは単に彼等の歓心を買つてその場で小さくなつて遊ぶことを黙認されようとしての行為でもある。が又進んで、彼等を面白がらせることによつて、滑稽なピエロとして彼等に認識され、この外人ハウスへの再度の入来を許されようとしての、二度目の御座敷を期待する幫間のような心理だつたかも知れない、ピエロは玩まれる、幫間は弄ばれる、二人は子供等





の御機嫌を取結ぼうとすることと進んで彼等の中にピエロとして、  
幫間としての地位を求めたことによつて、侮蔑せられる機会を重ね  
て招いたわけだ。

播いた種は刈られる、招いた者はやつてくる。二人が自ら求めた  
屈辱は、自身にも意外な事態として二人に与えられることになる。

「栗田さん」が「男の子」から「おしつこを掛けられる」のである  
人間の身体が故意に他の人間の小便で濡らされるということは、受  
身に廻つた側にとつては、実に大きな、面に唾せられるにも勝つた  
屈辱である。さすが恥知らずな、自尊心を忘れたようなこの二人で  
さえ、「恥しさ、悔しさで泣きたくなる」程のひどい屈辱である。

小さい男の子の所為だから、大人の所為と同様に考えることができ  
ぬというかも知れないが、苟くも一人で小便することを憶えた子供  
は、小便してよい所と悪い所は知つてゐる、少くとも人間の身体に  
小便を掛けて良いとは決して思つてゐない筈である、恐らくこの子  
は白人同志の少年少女に対してはそんなことは一度もしてないに違  
いない、それが「栗田さん」に対しては小便したのだから故意にな  
されたという点では大人の所為と変りはないのである、さてこの男  
の子が白人同志でせぬことを「栗田さん」に対してしたのにはそれ  
相当の理由がなければならぬ。これに私は三つの場合を区別しう  
ると思う。

第一は二人を普通の人間として人格を認めている場合である、庭  
で私が誰かと話してゐる時、野良犬がやつて来て物欲しそう奥庭に席

を移せば又ついて来て、足にじやれつく。私は「うるさい、あつちへ  
いけ」と犬を蹴飛ばすだろう。さてアメリカの子供の目にはこの二  
人のやつてゐることがその野良犬のようにうつらなかつたろうか、そ  
こで御機嫌を取るようになつてブランコにのつたりする二人に我慢が  
ならず二人を追払うのに、「あつちへいけ」と足蹴にする代りに、二  
人を侮辱して同じ効果を得ようとしたのである。それも一寸した侮  
辱では感じない程卑屈な奴だから、小便を掛けてやる。これによつ  
て自分の反感を表示したのである。自尊心があるなら、この屈辱に  
は堪えられないから、その場に居たたまれなくなつてしまふ。この  
処置は自尊心による行動を期待する点で人格を認めてゐるといえよ  
う。（私は男の子がその場でこういう省察をなしたというのではな  
い。意識的には「畜生奴！」位のものだつたかも知れぬ、それを分  
析して見たのである。）そして追つても去らぬ犬が足蹴にされても  
仕方がないように、禁断の園に許しなくして入つたこの二人は悪い  
のだから、アメリカの子供等が二人を罰するのは当然で、小便をか  
けられたからといつて同情するのは（日本人としての感情は離れて  
本来ならば）おかしいのである。「ハウスキーパーの人たちが、笑  
つてみてゐた」というのは、一つには、召使の身分としての主人の  
子供達への遠慮であるが、一つには二人が奥まで入つて来たのは二  
人が悪いと判断したからであらう。

第二に二人を幫間扱い、ピエロ扱いにしている場合である、相当  
に自尊心を認める点で前と同様だが、それに屈辱感を与えることに



よつて、自分の反感を表示するよりもむしろ自分が快感を味おうとする点で異つてゐる。二人の退場という主体的行動を予期する前の場合とは効果の帰属する主体があべこべになるのである。「此奴等は俺達におべつかを使つてゐる。俺達を面白がらせようとしている、玩弄物にされても良いから此処に居させて欲しいというのだ、よしそんなら望み通り玩弄物にしてやる、だが一寸位からかつて此奴等の自尊心には感じない、それじや面白くない。一つ恥かしさで真赤になる位なぶつてやるのが面白い。よし、小便ひつかけてやれ」こんな気持である。猫が鼠をなぶるあるサディズムは、弱い者いじめする子供等のサディズムに通ずる。迷い込んで来た犬を庭から追出すよりむしろその犬を取り巻いて皆でいじめようという子供等のリンチなのだ。歓呼する白人達の面前で黒人が鞭り殺しにされるように、僭越にも白人の仲間入りをしようとした日本人二人が白人の子供達の手で罰せられるのだ、男の子の小便は二人に対する最大の屈辱として浴せられる刑の執行なのである。「みんなも笑つてゐるので」と書かれてゐるのは男の子の行為が侮辱玩弄を目的とし、周りの子供達にもそのように理解され面白がられたことを示すのではなからうか。

が、尚第三に、男の子はそれほど反感や悪意を持つてこの行為に出たのではないと考える余地もある。樹陰で立小便する時、樹の根にひきかえるが坐つていたとすれば、私達は全く何の気なしに小便をその背中に注ぐだろう、又もし仔犬がそこで午睡していたとした

ら、何気なしではないにせよ面白半分それに小便をひつかけることもありそうなことである。何気ないという場合は極端であるが、この二人の場合をこれで推すことはできない、然し面白半分ということはありうるのである、面白半分という点では玩弄の契機を含みこの点で前の場合と同様だが、二人に対する悪意がなく、屈辱の契機を含めぬ点に於て異なる、幫間には紳士としての名譽心はないが、人間としての名譽心はもつてゐる、そこで幫間に対しては、なお人間としての自尊心を否定する余地が存し、従つてこれに屈辱を与えて快とするということがありうるのだが、犬の場合は否定すべき自尊心名譽心がそもそも存在しない、——尤も「名犬ラッド」などは犬なりに自尊心を持つてゐるかも知れぬが、人間がこれを尊重する必要は全くない。人間と犬とは価値を異にする。犬を戯弄することはあつても、犬を侮辱することはありえない。「さあ坊ちゃん、おしっこしまよう、クロにおしっこひつかけてやりましょうね、クロこいこい、クロ可愛いですね。シー、そろそろ、クロにおしっこひつかけちゃいましたね、面白いですね。」この男の子はひとりで小便できるようになるまで、メイドからこうやつておしっこさせられていたかも知れない、そうすれば彼は犬に対する悪意を全く持たぬ時にも、（むしろその犬に何か可愛いさを感じるからこそ、）ふざけ半分にそれに小便を引掛けるであらう。さて一方恐らく両親とハウスキーパーとの応対から、彼は白人と有色人種とが身分上の隔たりを持つことを理解し、有色人種を一人前の人格として認める必要はな





いのだと思つてゐるであらう、この二人の有色人種の子はだからこの男の子にとつては他の白人同志の子供達とは価値を異にするものとして認められ、男の子は、二人を犬同様のものとして別に侮辱するつもりでなく、からかい半分に小便を掛けたのであるかも知ない。この見方からすると、二人がこの家に入つたそもそもその時から、子供等は二人を相手にしてなかつた。皆が奥に入つたのもたまたま奥に用があつたからで二人を避け排斥したのではなかつた。二人はそもそも排斥する丈の価値のある存在として認められてなかつた。というような解釈をする余地もある。「遊びましょう」と呼びかけても返事しなかつたことは右の意味に理解するのが正しいかも知れない。

以上三つの場合のいずれにせよ、二人の子のこの外人ハウスにおける地位は犬同然のものだつたと理解することができるのである、つまり男の子が二人に小便を浴せたのは、憎らしい野良犬を足蹴にして追出すような気持からか、迷い込んだ犬をいじめる一方法としてか、それとも可愛い仔犬にふざけるような気持からだつたのか、そのどれかだつたに違いないのである、播いた種は刈り取られた、自ら求めた屈辱は与えられた、犬として小便をかけられることによつて。

さて小便を掛けられてもこの二人は反撃にも出ず、逃げ出しもしない。そして男の子の小便が終るまでじつと呪縛されたようになつていたらしい、それは一体どんな気持からなのか。小便を掛けられ

ながらどんな気持でいたか、掛けられ終つてから何を感じたか、皆に笑われてどんな気持だつたか。本当に悔しき、恥しき丈しか感じなかつたか。何故一言の抗議もせずそこを出て来たのか。……これらについても右に男の子の心理を分析した要領でいくらでも深く検討していけるがあまりくどくなるので、もう省略しよう。要するに、私はこの二人が米国の男の子から屈辱を受けた事態に、その時の双方の心理に、そしてその一人であるこの作文の筆者が自分達を凌辱したその男の子を敘して「顔のまつ白い、とても可愛いお人形さんのような」と礼讃している事実、甚だマゾヒスティックな昂奮を賞えずにはいられない、これが白人崇拜症者の味う快感なのである。

序でながら、いわゆる植民地において文化程度のより低い民族の中で特権的に育つことは、その民族に対する輕蔑感からの驕慢を助長し、屢々サディズムに導くものであることは見易いことで、本例での男の子にも、周りで「笑つて見ていた」子供等にも、それが認められるが、逆にその反射として、その文化の低い民族が特権者たる異民族に対してマゾヒズムに陥るといふ現象も、本例の二人の子の卑屈極まる行動や、男の子の所為を「笑っている」ハウスキーパーの心理などから明らかに看取しうるようである。そして、これは双方共に心身發育中の幼少年期にあたる丈に、決して輕視できないのである。日本の植民地状態が続けばこの二人の子のような日本人は嫌でも増えてくる。日本經濟がアメリカの發注だけに依存してい



ると、日本人は皆このハウスキーパーと同じ心理に墮してしまふ。端的にいって白人崇拜症者が国民の多数を占めて来る、国民の多数が心理的に外国人の奴隷たるを喜ぶ時、国の独立自体が保持し難いことはいうまでもない、日本は文字通りに米国の属領になつてしまひ、日本人は皆植民地土民特有の卑屈性を獲得し、遂には同胞の一人が白人からその身体に小便をかけられたと聞いても別に痛憤を感じないような民族になつてしまふかも知れない。そうなつたらおしまひである。マゾヒストとして、白人崇拜症者として、私はそれを望まぬではない。だがより多く、日本人として、私はそれを虞れるのである。

ちと脱線になつたが、新聞記事の引用から書始めた項目であるから、新聞小説の一節を引いて結びとしよう。丹羽文雄の「恋文」

(昭和二十八年三月二十一日附朝日夕刊)である。

「左手に赤土のどてが、ひかえていた。どてのうえに、日本人入るべからずと、立札があつた。

.....(中略).....

ふたりのまえに、おもいがけない風景がひらけた。自家用車がひっきりなしにはしつていた。(中略)東京中で、いちばん高級な、ハイカラな車だけが、はしつていた。

車が出入する旧代々木練兵場の入口に、日本人の門番が、三角の帽子をかぶつて、両側にたつていた、ワシントン・ハイネ

の入口であつた。

こつ然と、ふつてわいたような異郷の世界であつた。特権部落であつた、はでなシャツの青年が、足のながい犬を、あそばせていた、出入する女性は、紅毛だつた。

日本人のわかい女が、アメリカの子供に背をおされて、わらいながらあるいていた、メイドであろう。女のわらいかたは、卑屈だつた。

礼吉は、みをふるわせた」

## 第二十七 (手紙その二)

謹しんでお返事を差上げます。

奥様。私が従順な奴隷であることを期待していると貴女からはつきり仰言つて戴きました今日こそ、私は自分が「情無くも」次のような人間であることを告白しないではおられません、生れながらの常軌を逸した素質のため、私は少年時代から、奴隷として美しい女性に隷属し所有されることを、自分の理想の型に出来る丈叶つた女主人、即ち自分を理解して呉れる気位高く自負強き貴婦人から、全く彼女の奴隷として見られ、畜われ、扱われ、「古典的な原則と模範とに則つて」彼女の側近に仕えて身の廻りの世話をするよう「無遠慮に」仕込まれ、使役されることを無上の幸福とし、羨むべき運命として、夢みて参りました。(この身の廻りの世話をすること)「トヤカク云ウモノハ呪ワレヨ」であります。この際結局それが





どんな風な仕方になされるか、ということ丈が問題となるのであります。女主人の前に恐懼することを叩き込まれながら教育され、彼女への畏敬と屈従と極度の卑下とに慣らされた奴隷に対して、女主人として要求するのである以上、女主人たるものは奴隷にどんな種類の作業でも請求しうると私は考えます。

古代ローマの主婦達、百五十年前のロシア、ポーランド、ハンガリーの貴婦人達、六十年足らず前の米国南部大地主階級の令夫人や令嬢達、彼女等は成程婦人ではありませんでしたが、自分達の身の廻りの世話をするのを任務とする奴隷や体僕が男性であることなどは少しも気にかけませんでした、彼等は女主人を美しく愛らしい女性として見ることを畏れ憚るよう、その魅力ある容姿に男性の視線を注ぐなどいうことを敢てせぬように充分仕込まれていたのです。

これらの誇り高く支配することに慣れた婦人達にとつては、奴隷は一人前の男でも人間でもなく、ただつまらぬ物であり、家具であり、その所有に属する生命ある物体であり、理性を具えているので有用性の倍加した家畜であるに過ぎません、その唯一無二の使命は自分の所有者たる女性のために、可能と考えられる丈のあらゆる仕方、欲せられたあらゆる方法を以て、彼女の福祉健康を図り、彼女の氣随氣儘の希望や要求に応じ、彼女の安逸に、又当然のことながら彼女の情欲や悦楽に奉仕することにあるのです。

女主人にとつては奴隷は一般にみじめな無であり、しかも他方では全てでもありました、無であると申しますのは、奴隷は女主人を

ば、女であるがためにはんの少しでも遠慮させたり、氣兼ねさせたりすることができず、彼女は毎日の暮しに、人との交際に、道楽ごとや色々の習慣に、奴隷に対して婦人としての何等かの顧慮をなす必要は少しもなかつたからであります、しかも又奴隷は全てでもありません。即ち女主人が奴隷を何かあるものにしたいと欲すればその欲したもの、彼女が彼を何かあるものに使用できると信じればその信じたものに、彼女が折々の氣まぐれのまゝに、彼を道具にし、又材料にして何かあるものを作りたいと望んだものに、それが何であらうとあらゆるものになつたのでした。

愚鈍で単純でいやらしく不器用な女奴隷なんかよりは、多くの場合、主人の氣持の分る頭の良い学問のある奴隷が選ばれました、動植物の三自然界が産出する貴重な品々でも、驚くべき宝物でも、自分達にふさわしい貢物として、あたり前のように受取つてしまう、氣難しく驕慢な貴婦人達にとつては、高い門地に生れ、精神的にも肉体的にも高度の教育を受けていながら、一身の運拙なくして奴隷の身となつた人類の一員をば、奴隷たる地位において使用し、自分の身の廻りの世話をさせるのが、いけないなどとは理解し難いことなのでした。

まことに最良のものでなければ、氣位高く自負強き女性のお氣に召さないので。そして、奥様、御手紙から拝察致しましたところでは、貴女は、御自身で自分の奴隷とお定めになつた人間であることの私が、同時に素姓の良い者であつて、決して人の召使たる身分で



はない、ということ、非常に重視していらつしやるようでありませんが、このことは私の喜びとし、興味を感じるところであります。奥様が私の女主人となられますかどうか、私が奥様に奴隷として身を捧げますかどうか、これはもつとお互がよく知り合つた上で初めて確定されねばなりません。——私の理想に叶つた女主人を憧憬する気持が、奥様の御手紙を拝見して再び目覚めて参りました。御手紙にありますような積極的な御気持が、御婦人の方から自発的に出て参りました場合、それがまるで電気のように私に作用すること著るしいものがあるのです。

私の理想とする女主人の型は、御承知の常軌を逸した素質に基いて、私というものの中に、自分に正当な権利のある所有物即ち本来自分の奴隷たるべきものを認め、これを自分のものと請求する所の気位高く自負強く而して教養ある、そういうた婦人なのです。

然し私自身女主人を憧憬すること甚だしいのと同様に、私がこの方の奴隷にこそなりたいと願うような婦人は、彼女の方でも真に女主人たるの性質を持つていて戴きたいのです。——中途半端なことや茶番狂言は一切私は好みません。——私の女主人は単に女主人と名乗るのみでなく、実際にも私の女主人たる気持でいて戴きたいのです、私に対して女主人としての自己を主張し、貫徹することが出来る方、女主人としての自覚を持ち私に畏敬の念を起させることができる方であつて戴きたいのです。——命令に対して盲目的無条件的に服従すること及び彼女自身を尊敬して殆んど崇拜の域に達する

こと、これを私に義務とし第一の法律として課するような女性、私にはかかる女主人の奴隷になりたいのです。——私は女主人が、最初から彼女に対する極度の鄭重さを私が身に付けるように、私をば仕込まれることを、又彼女が自身の権威について指一本でも指されるのを潔しとせず、私から尊敬される女主人たることに充分気を配つていらつしやることを望んでおります。

最大の敬意もて署名致します。

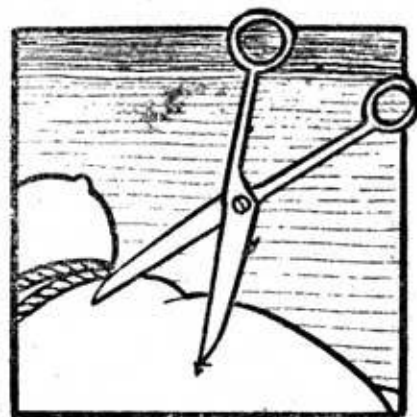
恭順なる奴隷（貴女が御望みならば）

× × × × ×

この「手紙」はヒルシュフェルトの「性病理学」にあるものの一つである、職業的女主人と奴隷契約を結ぶ直前の女主人への返事であることが分る。原文は一種の格調を具えた良い文章であるが、充分に訳し伝えられないのは遺憾である、殊に一番力を入れて書いている「奴隷が無であり全てである」という一節でこの感が深い。「身の廻りの世話」と訳した所は、——単に着物を着せたり食事の給仕をしたりする丈でなく、入浴や上廁の際のインチメートなサービスをも含む意味であると承知されたい。——「体僕」と訳したのは *Leibeigene*、*Sklave* と区別するため、こう訳するのが定訳になつてゐる。これはロシア等の農奴制に存したものであるが詳しくは別項に譲る。片仮名書きはフランス語の箇所である、その他別段解説を要しないであらう。

（未完）





# 悦 虐 秘 帖

信 太 蓉 子



一

四月号を御覧になった方は、私が如何なる女であるか、大体お分りになったものと存じます、私の告白が掲載されたことにより、私のマゾヒスティックな生活に新しい刺激が加えられ、此の頃ではかつてない大きな喜びを感じて居ります、惜しむらくは、家庭の監視によつて、気まぐれな自由行動が許されないことです、自由に飛びまわることの出来る素晴らしい機会に恵まれないものかしらと私の心の悪魔は私をそよのかすのです。

私が天涯孤独の身の上であつたら、きつと喜び勇んで、ストリップパーになつていたことでしょう。報酬など決して多くは望みませんわ、

目的はたゞ私の肉体露出欲を、満足せしめることにこそあるのですもの、大勢の男の観

客達の食い入る様な視線の集中攻撃を浴びながら、舞台いつぱい、花道の際まで踊り廻れたらどんなに素敵でしょう。想像したゞけで身体がうずくします。見物の中にはきつとサディストだつて何人かは居りますわ。

私は彼等の目の前で、あらん限りの情熱を込めて、彼等の加虐性を誘発してみたい。

たとえばサディストでなくとも、彼等をして私という女の肉体をしいたげてみたいと思う一時的な衝動を起させてみたいと思うのです。奇巧の読者の意見を読んでみますと、同じサディストであつても、概ね二つの型に大別されると思います。趣味程度の愛好者と、先天的なマニアと、前者は健康的幻想的ですが後者は病的で現実的です。私は強いて申せば、後者の方により強い興味を惹かれます。私の様な強度のマゾヒストにとつて、現代のマルキド・サド否、現代の関白秀次を以て

任ずる程の激しい加虐性を持った男の人は、居ないのかしら、そうですわ、絶対に男性でなければいけませんわ、女性のサディストなんて一寸考えられないし、また同性にしたいげられても異性の場合に於けると同様な効果が得られるものか、大いなる疑問です。

二

私は入浴を大そう好みます。露出狂の私には、全裸になつて衆人の目にふれることのできる銭湯は、海水浴場に次ぐ楽しい場所なのです。唯一つ、その衆人が全部同性であるという大きな不満を除きさえすれば――、

ですから男の人が番台に座つているときはいくらか張り合いがあります。でもあゝいう人は、女の裸になんか見あきていて、何の反応も示さないで癪にさわる程口惜しいんですが、その点、お金を出しながら、番台の向



う側から、ちら／＼と女湯を盗み見する男の人が居るので愉快ですわ、若い人よりも、むしろ中年の人に多いのには一寸呆れます。中にはとつても心臓の強いお客も居るものです。私は、男の脱衣場から、最も見られ易い位置で、いつも服を脱ぐことに決めています。其処ならば、お金を払う男の人が、少しばかり大胆に首を伸ばせば、私の裸がまる見えになるんですもの、私は見られていることに気がつかない風をよそおい、故意につまじやかな態度を取りつゝ、内心では男の人が、私のお乳や腿の辺りを見ていることを意識することによつて、うずく様な快感をむさぼっているのです。私は流しで、片ひざを立て、前かきみになつて足の先を洗っているときの自分自身のポーズをととても気に入つて居ります。身をかがめているので、お腹がくびれて、ブツクリと激しい円味をおびた下腹に限りないいとおしさを感じます。そしてふつと、妊娠してみたいなあという気持を覚えますの。もとより赤ちやんが欲しいんではありません。たゞ腹部の膨満感を味つてみたいからなのです。何の本でしたか忘れましたが、女体の真の魅力は、男子の精を受け、はらんだ後で三四ヶ月が最高の美しさであるということ

す。男性の皆様、本当にそう感じになりますか？しかし大勢の中ですから、女の私でさえ、見とれてしまう程の美しい裸体の人がよく見かけられます。みるからにすつきりとした、それでいて弾力のあるスマートな姿態の人を見つけると、健康的な意味で羨ましいと思います。自分で申すのも変ですが、私はどちらかといふますと、柔かい餅肌なのです。此の間はかつたら、五十一、二疋の所を針が示して居りました。前に身長を五尺三寸と書いたのですが、実際にはかつてみましたら約一米六〇〇厘でしたので、尺に直すと、五尺二寸八分程です。でも私は私の肉体に少なからぬ誇りを持つて居ります、丁度、水面に映つた自分の姿に恋をしたギリシャ神話に出てくる美少年ナーシナスの如くに――。

夜更けに鏡に向かつて座り、乳房や腹部を露出し、腰をくねらせたポーズを取り、鏡の中の自分自身をじつとみつめていると、心の底から湧き起るような歓喜に打ちふるえます。私はこんなに若く美しい人だといううぬぼれがそうさせるのでしょうか？それとも得体の知れない何ものか？………………。私はコケティッシュな微笑みを浮かべながら夢の中のサディストにそつとさゝやきます。＼どう、私の身体つて素敵でしよう？さあ早くこの張り切つたお乳を抉つて！この柔かなお腹をたち割つて！その時、私は実にこうこつとしてしまうのです。何もかも忘れてたゞ一途にマゾヒズムの世界に想いをはせるの。此んな所をもし、両親に見つかつたらどうでしょう、きつと気が違つたとも思うでしょう。激情が去つた後、静かな心で、再び鏡の中の自分をじつとみていると、しまいには自分という意識がうすらいで、私意外の女に思えてくるのです。此の鏡に映っているのは、蓉子という永久に救いがたい、いまわしい一個の狂人なのだ。此の白い肉体の奥底に狂つた悪魔の血がいつぱいに漲っているのだ、そう思うとたとえようもない自己嫌悪に捉われ次いで何かぞくぞく

くと迫つて来る鬼気の様なものを感じるのです。

### 三

私は女でありながら、いわゆる責めの写真や絵画などに強い嗜好を覚えます。といつても決して蒐集する程熱中しているわけではありません。第一どういう所から、手に入れることができるものかわかりませんし、直接買うことなんかとてもできませんわ。でも此の間曙書房にお願いして、例の写真集を送つて

いたゞきましたの、それはよいのですが、保管に一寸骨が折れるんです。袋に入れ丈夫な紙で包み厳重に封印をし、それをみるのは毎週一度と決めています。この頃では、私のさゝやかな喜びとなつている何枚かのヌードフォト、モデルになる人は本当に幸福だわ、としみじみ感じます。貴女の痛々しく縛り上げられた豊かな姿態がどんなに多くの男の人達の心をかき立てゝいることでしょう。私は彼女が羨しい。もし私が自由な環境にあつたらそれこそ明日にでも大阪へ行つてみたい。私



はその誇る肉体を奇巧の愛読者の目の前にさらしてみたい。私は切実にそう思つて居ります。あゝ、大阪は私のあこがれの地となつてしまつた。奇巧専属のヌードモデルになれたらと想像したゞけで本当に胸苦しくなつてしまします。

### 四

学校に通つていた頃、私は好んで江戸川乱歩の小説に読みふけたものでした、(夢多き乙女の愛読書としては何とまあ奇異なもの

であつたでしょう!) 恥ずかしに堪えて町の貸本屋に出入りしたあの頃のこと、今では妙になつかしく感ぜられます。

乱歩の一時期に於けるいくつかのグルーサムな作品は、私の変態的嗜好を、充分とは行かぬまでも或る程度満足せしめたのです。

その中、最も私を昂奮させたものは「妖虫」という作品でした、可哀相な(私にいわせれば幸福な?)犠牲者は「珠子」と呼ばれる美貌の令嬢

彼女は殺人鬼から死の予告を受けた後、巧妙に誘拐され、予め準備してあつた見世物小屋へと連れ込まれるのです。そして彼女はそこで様々の怪奇的な趣向をこらした恐怖のロウ人形をいやという程見せつけられ、生きた空もなく、やがてたどりついた或る場所には、女の人形がはりつけになつて居ります。両の乳房を深く抉られて、珠子さん、あれがお前の最後の運命だ、

あの人形の代りにお前の生身をくゝりつけて胸を突いてやるのだ、そして明日の朝、何にも知らない沢山の見物人は、まさか生身の



人間とは露程も気づかずに、何とまあ、美しい人形なんだろう、何とまあ、残酷な殺され方なんだろう、それにしても全くよく出来ている人形だ、まるで本当の人間の様だ、と感心しながら、お前の屍体をあかずに眺めているに違いない。珠子さん、どうだい、ぞく／＼する程嬉しいだろうねえ、よくみて御覧あの人形の顔はお前とそっくりじゃないか」

殺人鬼はそんなことをしやべりつゝ、珠子の恐怖を更におおるのです、彼女は余りの恐ろしさに気を失つてしまい、あわや全裸にされんとするとき、何とかいう探偵あの有名な明智小五郎ではないのです、彼はこの小説の後半に登場して、結局は殺人鬼に対して見事な勝利を得るのです、が飛び出して、その危急を救うのですが、夢中に惹きつけられて読んでいた私は、此処の個所で、なあんだ、と大いに失望してしまつたことを今でもよく覚えて居ります。折角作中人物の珠子に成り切つていた私にとつて、何て余計なことをしてかす探偵だつたでしょう？とんだ所に北村大ぜんとは河内山宗俊のセリフですが、珠子がはりつけにならなかつたことを、私は非常に残念がつたものでした。乱歩の作品に於ける犠牲者は多く若く美しい女性に限っているの

すが、その殺され方は余りぞつとしませんわ何故つて、蓉子の好む腹部を割くというようなどころは、一つとしてないんですもの。その点奇ク十月号に載つた岡田咲子先生の悪女には息詰る様な気持ちになつてしまいました。マゾヒストである若い人妻が、彼女と日夜変態的な遊びにふけつてゐる中に、すつかり加虐性を帯びてしまつた小間使のために、いまにも解剖されそうになるところがあるので。その小間使は赤く錆びたはさみを机の上に大の字にく／＼りつけられた若奥様の下腹部に突き立てようとしています。こんなことを書くとても恥ずかしいのですけど、すつかり昂奮した私は、おふとんの中で、お裁縫に使うはさみを自分の下腹に押しつけながら、読みつゞけ、しばらく快感を味わいました。

最近の奇クに連載された中康弘通先生の「切腹史談」は私に非常な興味を持たせました。意外にも多くの女性が、自殺の方法として「切腹」を選んでゐることは少からず私を驚かせました。中康先生は、切腹というものは絶大なる気力と体力とを要する最も凄惨で苦痛多きもので、かつ肉体露出的であるから、か弱い女性に於て、手易く遂行できるものではない。それにも拘らず、女性が敢えて此の方

法を実行するものとすれば、それはかくすべき玉の肌を露わし、最も女性的な器官を含む腹部を切り割くことによつて、マゾヒズムの極限を遂行するものである。という意味のことを述べて居られましたが、此の点私も大いに先生の御説に共鳴致して居ります。しかし私がマゾヒストで露出的であつても、自から屠腹することには余り関心がありませんの、関心がないというよりも、実際問題として、少くとも私自身には不可能であると思へますの。

切腹の真似事をして、それはあくまで単なる遊びに過ぎませんわ、相手がいらないので自分で自分の肉体をいじめる以外には、私自身のマゾヒズムを満足せしめる手段がないのです。したがつて、やつぱり、兇暴なサディストの手にかゝつてしいたげられるのでなければ、私の本当の満足は得られないんですの

# 五

私の風変りな習慣は、四月号にも書きましたように、枕についてから眠つてしまふまでの間、あれやこれやと、私という女が責めさいなまれる方法を、おかしい程真面目になつて考へていることなのです。

とても奇抜な方法があるのですが、私が如何に露出的であつても、それが如何なるものであるか具体的に説明することは、とうてい出来ません。空想はそれからそれへと、自由自在に頭の中を駆けめぐり、私の肉体は何回ともなく、真赤な血汐で彩られ、苦痛と快感とにのた打ちまわつていくのです。

十字架にかけられ、乳房を抉られることもあり、また股を左右に引き裂かれることもあります。或いは逆さに吊り下げられて、股の間に大きなまさかりを振り下ろされたかと思うと、今度は、鋸で胴体を裁断されてしまうのです。お乳を傷つけられることは、お腹の場合とは違った快感があるだろうと考えます。双つの乳房を、槍の穂先で横からズブと串刺しにされたら……

しかし私は、羽村さんの真似をするわけでは決してございませんが、仰向けになつた姿勢で、魚かなんぞの様にお腹をたち割かれることが最も望ましいのです。

殺される場面のみを断片的に想像することの方が多いんですけど、時には他愛のない小説風なものを書いて秘かに楽しんでも居ります。私に、岡田咲子先生のような文才があれば、もつと楽しいんでしようけれど、

とにかく私は女優のように、或いは昔のお姫様や腰元に、或いは現代の令嬢やダンサーになつて、私自身の幻想のスクリーンに登場するのです。そしてそのフィナーレはいうまでもなく、目を掩う流血の酸鼻を以て飾られるのです。私の作つたストーリーの中には次のようなものがございます。題名は「赤蜘蛛」というんです。大体の筋を申し上げますと主人公はRED・SPIDERと呼ばれる、丁度乱歩の作品に出てくる一寸法師の様なみにくい男なのです。所が彼は、非常に天才的な頭脳を持つた兇悪なサディストなんです。彼は若く美しい女性を次から次へと彼の獣欲の血祭として行くのです。その殺し方たるや犯罪史上に比類なき徹底的な残虐さで、地下に眠っているネロやマルキド・サドでさえ開いた口がふさがらない程の激しさなのです。無論警察はその総力を結集して、この稀代の淫虐魔の逮捕に努めるのですが、彼RSは人間業とは思われぬ神速さで、文字通り天馬空を行くの観があるのです。凡そ若い女性で他人から貴女はお綺麗ねとか君は可愛い、顔をしている人だねえなど云われたことのあつるものは、それこそ生きた空もない有様です。RSの犠牲者の中には勿論私も含まれている

のです。私は洋子という名前で、日劇のミュージックホールに専属のストリッパーなのです。洋子はその輝くばかりの美貌と豊満な肢体とを以て（といつてもこれはあくまでも想定なのですから、私がその様に魅力のある女であると思し召しになつては困ります）素晴らしい人気を持つていくのです。洋子はRSに羅致されてしまいます。

数知れぬ女の血を吸つてむとした異臭を放つていく屠殺場に、洋子とRSとは向い合つて居ります。

「洋子、今度はお前の番だ、お前のその柔かい肉を思いきり割いてやるのだ」

RSは分厚な唇をにゅつとゆがませて、ぞつとする笑いを浮かべるのです。

洋子はすなわち私は必死になつて逃げまわるの、私が敢えて、逃げまわるのは *Coltus* に於ける前戯と同じようなものですわ、要するに、解剖直前のスリルに富んだウォーミングアップとでもいふまいしょうか……私はとうとう全裸にされて大きなまな板の上に縛り付けられるのです。RSは聞くだに恥ずかしい言葉を口にしながらん限りの凌辱を身動きも出さぬ私の肉体に加えます。やがて私の口がこじあけられ、末期の水をたつぷりと



吞まされる。

お腹が張つて苦しいわ、でも快いのよ。そして私の口に濡れ手ぬぐいがしつかりとかまされる。だつてあんまり苦痛が激しくて、料理される途中で舌をかんでしまつたら、マゾヒズムの素敵な快感を味わうことができませんもの、RSは錆びついた短刀を右手に持ち、左手で私のお乳やお腹をしきりに撫でまわし「お嬢さん、覚悟はいゝかい、すつかり観念したものと見えるな、どこから料理してやるうか、此処がいゝか、それとも此処の所がいゝか」

そういゝながら、刃先が私のお臍に押し当てられます。私は本能的に息を呑み身体を縮めます。RSの異様に光る目が、私のお腹の一点にじつと注がれて居ります。

その右手には徐々に力が加えられて行きます。私は出来得る限りお腹を窩ませ、お腹の中の空気を出してしまうの、するとくぼませただけ刃先はなおもお臍にギューツと押しつけられるのです。切先はさびついていて中々刺さらないけれど、それも時間の問題に過ぎませんわ、私はもうそれ以上お腹を凹ますことができなくなつてしまうの。RSはいえれば短刀の切尖を私のお臍につけたまゝ、それ

以上は力を加えません。私が苦しくなつて息を吸い込むときをじつと待つてゐるんです。

息を吸い込んだらお終いです。私のお腹は大波の様にうねつて、その瞬間には短刀は肌に突き刺さるのです。十秒、二十秒、四十秒、私の意識は次第にモーローとなつていきます。過去の思い出が、肉親や恋人の顔が、私の脳裡をくるくるとかけめぐります。

あゝ苦しい、もう息が続かない、私は今こそ、私が心の底から念願していた最大の快楽と私の生命とを取り代えようとしているのです。

私はこの世に最後の別れを告げなくてはならない。さようなら！すべてのもの！

突然、激しい苦しさが胸いつぱいに漲つた途端、私は思い切つて息を吸い込んでしまうのです。短刀がプツリと私のお腹の真中に突き刺さり、真赤な血が肌を染めると共に、堪えがたい苦痛と快感とが、私の肉体の隅々までじーんとしびれさせてしまうのです。

## 六

私は時々、此の先十年二十年と年が経ち、やがては醜く老衰して死んで行く人間の運命というものを考えると、何ともいえず悲しく

なつてしまうのです。そうなるよりはむしろ私の肉体がその最高の美しさにある時期に私の最も好む方法で、生命をすてる代りに、あの素晴らしいマゾヒズムの極致を味つてみたいなあ、なんてとんでもない考えを起すのです。もし私が何らかの強い刺戟を受けてそのような気持になつたらどうでしょう。

恐らく激情のおもむくまゝ、恐しき死の谷いや私にとつては、甘美なる桃源境に飛び込んで行くことに、殆ど何らの逡巡も躊躇も疑惑も持たないかも知れませんわ。

あゝ私の夢は永久に果てしのないものでしょうか。それとも、私の知らぬ間に、現実の悪魔が私の身体をそつと狙つてゐるのでしうか私にとつてはどつちでも構いませんわ。私という女は結局なるようにしかならないんですの。(おわり)

## 責めのアイディアを募る

本誌の縛られた女の写真に対するポーズについて御意見御希望の方はドシドシ御遠慮なく御申出下さい。その際は必ず略画を添布願います。採用の節はそのポーズの写真を贈呈申し上げます。(編集部)



# クリスチーヌの受難

(三)

キドロドシュトツク  
吾妻新・訳

## 逃亡の試みと失敗の結果

アンリが前屈みになつて迫つてきたとき、私はもう絶対絶命だったので、この上はジュリイに憐れみを乞う外はないと思つたのです。ところが彼女の顔を見た瞬間に、私の声は咽喉につまつてしまいました。彼女は凄まじいほどの冷たい光を眼にたたえて、口唇に有るかなきかの微笑すら浮べているのです。

私はじりじり壁に追いつめられて、もうダメだと観念しましたが、アンリがさつと襲いかゝつたとき、夢中で横に逃げ、テーブルをまわりました。そのとき、ドアを背にしていることが電光のように閃きました。アンリとジュリイはこの部屋に集まつている。してみれば、あの監視部屋にはだれもない筈だ……。私はいきなりハンドルをつかんでドアを開くと、一散に廊下にとびだしました。「あつ！」という声が起りました。私は夢中で廊下を走り、監視部屋のドアをあけて飛びこみました。あとから二人の追う足音がすぐ迫ってきます。胸は早鐘を打つて、生きた心地もあります。ただ脳裡に閃いているのは、この建物から一步でも出さえすれば世間がある。そうすれば助かるのだという意識だけでした。

突嗟に二つのドアが眼に入りました。もはや一秒も躊躇してはおれません。私はその一つに飛びついてさつと







開きました。

あゝ神よ、何ということでしょう！それは出口ではなく、密売品らしい怪しげな品物を山と積んだ狭い物置だったのです。慌てゝいま一つのドアに駆け寄りました。が、そのときはもう遅かったのです。息を切らせて駆け込んできた二人は物も言わずに私をねじ倒し、ジュリイはすばやく私の口を掌でふさぎました。

「ひどい目に合わせやがつた」

「油断も隙もありやしない。もしも取り逃してごらんよ。私達はどんなことになったか！」

口々に言いながら、二人は私をひきずり起し、無二無三に廊下へ連れ出しました。あゝ、運さえ好ければ、ドアさえ間違わなければと思うと、私は無念さで胸は張り裂けそうになり、二度と返らぬこの機会に執着するよう暴れましたが、すでに疲れ切った肉体がどれほどの力をふるえるでしょう。ずるずると廊下を引きずられて、またもとの部屋に突き入れられたのです。

ジュリイはやつと口から掌を外すと、つゞけざまに平手打を加え、私の髪をつかんで揺ぶりながら、  
「なんて太々しい奴だろうねえ。お前さん、紐を取っておくれ。ひとつ思い知らせてやるから」と叫びました。

間もなく私を後手に縛り上げると、ジュリイはさつきボールの用いた革の鞭を拾い上げました。それは竹の柄の先きに細いしなやかな革をつけた鞭で、弾力性のある、吸いつくような音を立てるのです。

「こうなつたらウンとおもちやにしてやつてもいいよ。しかしその前に、二度と大それた考えを起さないように折檻してやらなくつちやいけないね。まあ、見ておいで」

そう言つて彼女は鞭をふり上げて、私の尻を叩きました。私は悲鳴を上げました。だが次々と鞭はふりおろされます。身をよじると、こんどは腿を打たれます。

「私は男の連中と違って甘くないよ。反抗すればどんな目に合うか、覚えとくといふ。さあ、もつとこつちを向くんだ。いゝ音を立てゝやるから」

「あゝ、もうやめて！」

耐えかねて叫びましたが、ジュリイはせせら笑つて、こんどは下腹から斜めに下方に打ちこみました。

「あーッ、どうか許して！もう……二度としませんから……」

「二度と逃げられて堪えるものかね。そう簡単に許せるもんじやないよ。口先きであやまればすむと思つてやがる





ふん、いいとこのお嬢さんはどんな名文句でも知つていらつしやるからね」

私は恥も外聞もなく詫びつづけましたが、なんの甲斐もありませんでした。その上、鞭打の響きと私の泣声とで、ジュリイはしだいに興奮してきました。

「どこまで本気に改心したか、言葉じやない。気のすむまでからだに訊いてやるからね。そのうるさい泣きごとはやめてもらおうじやないか」

そう言つて、今度は猿轡をはめました。それでもかすかに声は洩れるのですが、まだ声を立てると言つて彼女は責めるのです。

さつきからそれを見ていたアンリも、ふしぎな興奮を覚えたらしく、

「鞭はもうたくさんだよ、ジュリイ。俺にだつてこいつを自由にする権利はあるんだからな」

と上ずつた声で言うと、近づいてきて私をうしろから抱きこみました。そして右手で………りを………りま

す。私はうめき声を立てました。やがて彼の………這いまわり………、私が脚をじた

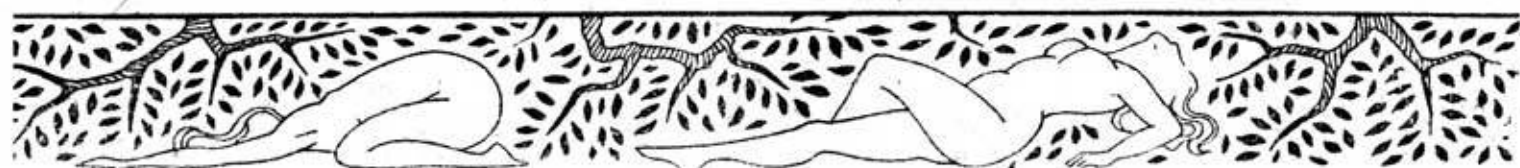
ばたさせるのを見るとジュリイが両脚をかかえて床に押し倒しました。

「きつちり縛つちや面白くない。やつと歩ける位にしておくんだ。そうすれば逃げ出せやしないからね」

アンリが命ずるとおり、ジュリイは足首と足首を少し離して縛りました。こうして私が僅かに脚を開いてもがく様子が彼らのお気に召すらしいのです。私はまた引き起され、ベットまで歩かされました。ヨチヨチ歩くのを男は笑い、女は鞭で尻を叩きながら、「さつさと走らないか」と追い立てました。もちろん走るのはおろか、急ごうとすれば倒れる外ないので、わづか部屋の一方から一方へ渡るだけでも、哀れな私のお尻はたつぷりと懲罰を受けたわけです。

ところが、折檻はこれで終つたのではなく、それからじまつたのです。外界から遮断された密室で無力な犠牲者に加えられる折檻なるものが、いかに破廉恥な性質を帯びるものか、人は想像もつかないでしょう。とにかく私は次のような方法で苛まれたのです。

まず私はベットに俯伏せにされ、両手を改めて両側に開いて縛りつけられました。脚はわずかに開いて縛られたままですが、その紐の中央にさらに長い紐を結びつけ、ベットの末端からマットの下に金具にくくりつけました。だから私の脚はまつすぐ延びたまま、いくら左右に動かせるだけですが、もがいて脚を少しでも縮めると、こんどは左右に全然動かせなくなります。猿轡は一度はずされ、口の中の布を半分だけ引き出してからまた







強く縛り直されました。これでいくらかは声が洩れるようになりましたが、彼等がそうしたのは慈悲でも憐れみからでもなく、次に分るように、いつそう残忍な目的からだつたのです。

さて用意が整うと、アンリはうしろむきに私の背中に跨がつて、両手を……まわし、その指先きをそろそろ動かしはじめました。と同時に、ベットの横に腰かけたジュリイは冷やかな声で「絶対にちがいない少しくあばれるときかないよ」と宣言しました。

「これから逃亡の罪を罰しなきゃならないが、お前もひどい目に会うのはいやだろうし、私だつて無理に苛めたくないさ。だから自分の悪かつたことを誠意をこめて詫びたら許してやることにしよう。どうだい。嬢さん！」その言葉の間にも、私はアンリの指先からなんとか逃れようと、必死に脚をちぢめ、尻を持ち上げ、くねらせるのですが、太い指はまるで独立の生物のようにしつこく、這いまわるのです。

「なぜもがくんだ！」とジュリイは私の尻を力まかせに叩き、振り上げながら、

「さあ、早く詫びるんだよ。誠心誠意をこめて、私を納得させるように言うんだよ」と命じました。

私はアンリの攻撃に眼もくらむ思いで、ひつきりなしに呻き声を立てていたのですがそれでも助かりたい一心で、

「私がわるうございました。もう二度と致しませんからお許しください……」

と、息も絶え絶えに言いました。するとジュリイは待つていたように、

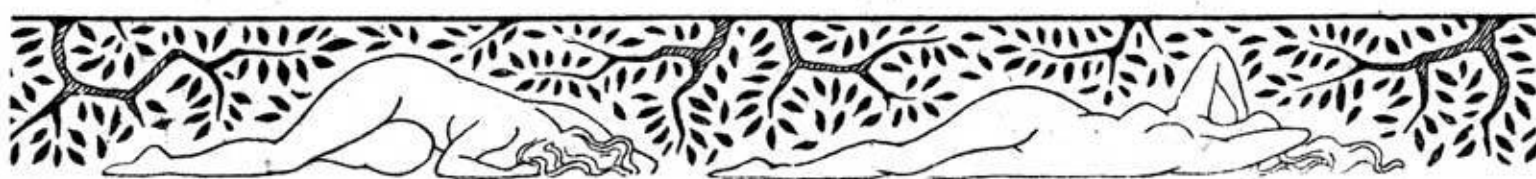
「なんて小さな声だ。まるで虫が鳴いてるようじやないか。もつとハツキリお言い！」

と言いながら、こんどは内腿に右手をさしこんで抓ります。私はほとんど絶叫せんばかりに同じ言葉をくりかえしましたが、猿轡の下から洩れる声が明瞭に響く筈はありません。

「ダメダメ。それじゃとても誠意なんかもつちやいない。もつとハツキリ言うんだつたら！」

なんという苦しみでしょう。私は不可能を強制されながら、それに一片の抗議をすることも許されず、それを口実にあらゆる責め苦を味わされるのです。部屋の中には鈍い平手打の音と、ジュリイの罵る声と、私の押し殺されたような哀願や泣声がいっまでもつづきました。

「強情な女だね。そんな、鼻声みたいな詫びごとをいくら繰り返したつて許すものか。もつとひどく、してもらいたいのかい」





「そら、また動く。どうして私の命令に抗らうんだらうねえ」

この奇怪な賤しい夫婦は、おそらく私が抵抗したくてもできないことにふしぎな喜びを感じ、いまでは私を虐めることに共通の興味をおぼえたりしいのです。そして、汚れたズボンがみじめな皺をつくり、むきだしの裸体を連想させる臀部から下肢へ流れる線が浅間しくのたうちまわるのは、彼らの視覚を刺戟するのでしょうか。もはや逃亡の罪は口実でした。かれらはただ私を責め苛むことに夢中でした。

やがて、私が呻き声も立てられなくなると、アンリは手足をほどいて、両手だけうしろに縛り直し、あおむけに転がして、猿轡の上からびつたり顔を押しつけました。

「ばか、ばか、ばか！」

ジュリイは顔を上気させ、罵りながら、野獣のように笑いだしました。苦痛と嘲りがハッキリ浮んでいました。

それは汚辱の深い深い泥沼でした。

### 奴隷宣告・さまざまな折檻

夜になつてポールが戻ってきたとき、夫婦はさつそく私が逃げ出そうとしたことを報告しましたが、自分たちのやつたことはただ二度と逃亡できぬように手足を縛つておいたただけだと誠しやかに語りました。そのとき私はベットの上に死んだように横たわっていました。昼間の責め苦が骨の髄まで浸みこんでいるので、それを否定することがどうしても怖くて出来ません。つまり、アンリとジュリイの気嫌を損ねたら、またポールの留守にどんなに苛られるかと思うと、弁解する勇氣さえ出てこないのです。

「それでお前はまだろくに罰も受けていないというわけだな。よしよし、あとで二人から十分にその罪を償わさせてもらえ」

とポールは怒りにみちた声で言いました。それから私の両手を縛つたまま、床の上にひざまづかせて、アンリとジュリイの見ている前でこんなことを宣言しました。

「今まではお前を手なづけようとしていたが、あくまで逃げ出そうとする以上はもうその気持も棄てたよ、クリスティーヌ。お前は今日から奴隷だ。もちろん最後のものは当分俺だけが自由にするから、その服は脱がせるわけ







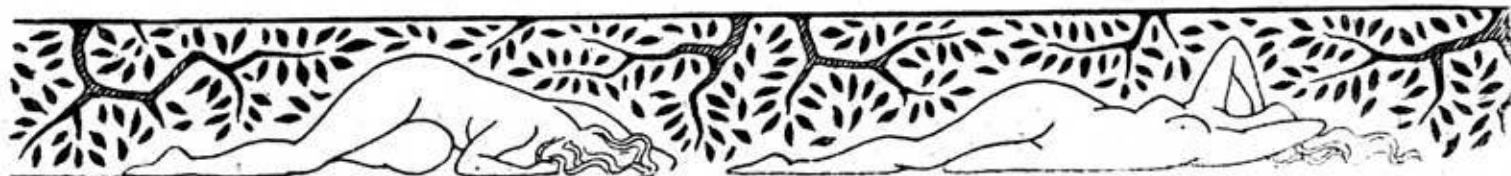
にいかないが、それ以外のことはすべて奴隷としてこの二人にも仕えなければいけない。お前たちもそのつもりでクリスティーヌを仕込んでやるがいい。そうすればこいつは、大家のお嬢さんだった頃と比較して、自分の犯した罪を思い知るだろう」

私は涙にむせんで声もろくに出せませんでした。一度逃亡しかけたということが、こんな結果になろうとは夢にも想像していなかったのです。今までだつてポールは獣でしたが、それでも私を従わせ、ゆくゆくは妻か情婦にする気はあつたかもしれません。だが今はそんな望みも捨ててしまい、憎しみを抱くようになったのです。彼は彼なりの愛情——それがどんなものかは告白したとおりですが——を裏切つた女として、私はヨリ以上の暗黒に突き落されることになったのです。

私はさつそくベツトに縛りつけられ、猿轡をはめられて、三人から代る代る鞭打を受けました。それがすんでやつと懲罰から解放されると、改めて足首と足首を三十センチほど離して細い紐で結ばれました。再び逃亡しないように、今後は昼も夜も解かれることはなく、私は絶えず赤子のようによめき歩くことになるのです。また恥かしい話ですが、便所にはもちろんポールのいる時でなければ行けません。それも一々哀願するのですが、彼は必ずジュリイに命じて背中の結び目をとき、彼女に付き添わせます。戻つてくると再び嚴重に細紐で結びあげて封印をし、生理的要求を果させた「手数」にたいして、十回以上の鞭を当てられます。だから私は我慢に我慢して回数を減らすように苦心しました。

人の性は善なりと私は教えられてきました。墮落した人々の心の底にも、傷ついた魂がひそんでいると信じていました。だが、この三人のような人間は、どう考えたらいいのでしょうか。私は、神の御意志に洩れた作り損いとしか思われません。私のいちばん恐れたのは、彼らに人間的良心のかけらもないことです。彼らは反省するどころか、その悪徳に酔つてしまい、次のヨリひどい悪徳を刺戟するのです。こうして人間性を踏みこむためにありとあらゆる手段が工夫され、その効果を高めるためにサタンの智慧が傾けられます。私の受けたことの一切は、良識の世界では、行為者自身を恥じさせるようなものでした。しかし彼らは明らかに、一種の快樂として行つたのです。

それにしても、何一つ不自由なく育つた私が、いわば選り抜きの怪物とも云うべき三人の手にかかつて弄ばれたとは、何という悲しい運命でしょう！ もし私が片眼か片脚だつたら、また醜い女だつたら、こんな不幸に陥らなくてもすんだのです。不幸にも私はリヨン一の美貌を歌われ、成熟した肉体は男の欲望を唆るに十分でした





それが二人の男を狂気にし、一人の女に嫉妬と復讐徳を植えつけたのです。

ひとたび奴隷と宣言されてから、もはや私は寸刻も安らぐ時としてありませんでした。たとえポールが苛めなくとも、他の二人が公然と私をおもちやにします。その上、私にはいろいろの用事が言いつけられました。たとえばポールは私に服を着換えさせ、靴を磨かせ、食事のときはお給仕をさせ、酒をのむときもテーブルの横に立つとサービスさせました。アンリは歌をうたわせたし、ジュリイは床を磨かせました。そして、小刻にしか歩けない私をのろまとかぐづとか罵り、その度にいろいろの罰を受けました。

アンリがポールに劣らぬ獣であることはすでに述べましたが、彼はいつまでたつても私を裸にできぬため次第に焦立ち、狂暴となり、閑さえあれば口実をつけて私を捕え、服の上から………しました。それは私にとつては裸体のときに勝るとも劣らない屈辱であり、苦痛でもありました。なぜなら、擬似的なやりかたで満足するのは、刺戟を十倍も高めねばならなかったからです。

いまでも忘れることができませんが、雨の降っている朝のことです。めずらしくアンリはポールと一緒に出てゆきました。二匹の狼がいなくなつたので、私はほつと一息つきました。それに、アンリさえいなければ、ジュリイが嫉妬する材料もなくなるわけですから、せめて帰ってくる間だけでも死の苦しみから逃れられると考えたのです。

ところが、これがたいへんな誤りだつたのでした。ジュリイは二人きりになつたとき、夫に邪魔されないので彼女流に思うさま私を責めようと待ち構えていたのです。その後だんだん分つてきますが、ジュリイは男たちよりもその点にかけては残忍で、しかも天才的な智慧をもっていました。

さて、彼らが出ていつたあと、彼女はさつそく私を呼びつけました。私はいそいで返事をする、その傍に近づきましたが、例によつて足と足を結ばれているので、早く歩くわけにはいきません。すると彼女はたちまち眼を吊り上げて怒りました。

「お前は私の私をバカにしてるんだね。なぜもつと早く来ないのだ？」

「脚が開かないから………」と、うつかり私は弁解しかけました。

「おや、生意気に口答えしたね。お前は奴隷だよ。奴隷は一切口答えできないはずだよ。よし、そういう了見なら覚悟がある」

「ああ、どうぞ許して。私が悪うございました」







と、あわてて私は詫びました。どんな無茶な理由にせよ、ひとたび怒りを買ったら最後だと思つたのですが、それはすでに手おくれでした。

「さあ、いいからベツトのところへ一走りして、紐と猿轡と鞭を持つておいで」

「かんにんして下さい。こんなにお詫びしているのですから、本当にゆるして下さい」

「命令だよ。きかないのか！」

激しい声で言われると、もう私には争う力もなく、ただ全身が痺れたようになり、それが私を責める道具だと知りながら自分で運んでくる外はありませんでした。

ジュリイはそれを受けとると、また動作が鈍いといつて鞭で二つ三つ叩いてから、

「今日は幸い二人きりだから、是非ともお前に言つてやることもある。よくも私の亭主を誘惑したね。そのお礼返しをしてやるよ」

と、飛んでもないことを言い出します。

「誘惑なんて、そんな」

「おだまり。私は何もかも見ているんだ。ひとの男に手を出した奴がどんなお仕置を受けるか、おぼえておくといい」

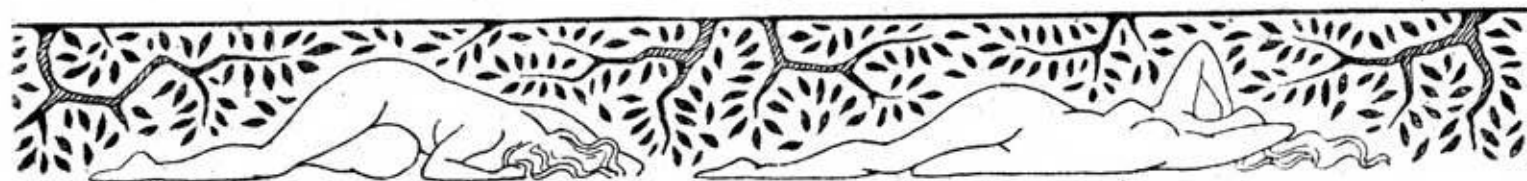
「身に覚えのないことですわ。そんな無理をおつしやらないで下さい」

「じやあ私が無理なことでお前を苦しめてるとでも言うのかい？まあ、なんて傲慢な奴隷だろう。いよいよ酷い目に合わせなくちゃならない」

「それはあんまりです。私は……」

と泣声を立てかけると、ジュリイは私の頬を抓つて黙らせました。それから、細紐で両手を縛り、猿轡をはめました。またどんな目に合うのかと思うと生きた心地もしません。やがてジュリイはもう一本の長い紐の中央をむすんで輪をつくり、私の首にかけます。そして前とうしろに垂れ下つた紐を、腰のバンドを通して股間で合せて結びはじめました。

この奇妙な思いつきを覚ると、私は思わず身をよじつて逃れようとしたが、しつかり紐を握られているので、それは絶対に不可能でした。やがて余つた部分を幾度も結んだために、その結び目は二インチもの大きさになり、それがピツタリと……に当るのです。刺戟を避けるには浅間しくとも両脚を開かぬばならず、しかも足





首をつなぐ紐は三十センチしかありません。

「本当なら丸裸にしてやりたいんだけど、それができないからね。でもいい恰好じやないか。さあ、それで少し歩いてごらん」

ジュリイは笑いながら、そう言つて私の尻をまた叩き出しました。

ああ、なんと思いう奇妙ないつきでしょう！ 私は眼を伏せてじぶんの縦に縛られた姿を一眼みたとき、羞かしさで死ぬ思いでした。汚辱のどん底とはこのことです。それも外観だけでなく、歩こうとすれば激しく刺戟されて耐えられません。つまり、アンリが……やることを、この女はあたらしい方法で、間断なく私に味わせようとするのです、私は二三步あるいて猿轡の下から呻き声を洩らしました。

「さあ、歩くんだよ、もつと、もつと！」

ジュリイは歡喜の叫びをあげて、鞭で叩きながら、部屋をぐるぐる廻らせます。身を悶えながら、私はこの淫虐な折檻をしばらく味わえました。

やがて。それにも飽きると、こんどは脚を上げて踊れと言うのです。心身ともに奴隷につきおとされた私は、この無理な要求に必死に応じようとしたが、つながれた脚はたちまち重心を失つて、前のめりに倒れてしまいました。すると。それがまたジュリイの新たな口実となつたのです。

「踊るのがいやで、すぐに寝ころぶんだねえ。アンリには歌をうたつても、私のために踊るのはいやなのかい。そんなに横になりたければベッドにおいで」

そう言つて、シタバタする私を抱えると引きずるように寝台に連れてゆき、またいつものように手足をひろげて縛り直しました。それから、顔の上に馬乗りになり、両手を下に廻しました。ジュリイの責めかたは二人の男とちがつて、もつとゆるやかに、もつと念を入れて、もつと恥知らずな方法で行われました。私がどんなにもがき泣き叫んだかのご想像にまかせます。しかし彼女は、少しでも声が洩れると、そのたびに罰だと称して、空いている一方の手で至るところを抓り上げました。

夕方おそくなつて二人の男が帰つてくるまで、ジュリイの折檻はつづきました。私はいまだかつて、これほどの苦しみを味わつたことはないということだけ申し上げておきます。

## 結 末







だがこんなことを幾つ並べてもきりのないことです。私は自分が救い出されるまでの経過をお話ししなければなりません。

これはあとで分つたことですが、リヨンの警察はその頃、大活動を開始していたのです。私の誘拐事件は小さな問題ではなくなり、近來にない怪事件として喧伝されるに至つたからです。町じゅうの辻馬車屋が風つぶしに調べられました。私の誘拐に馬車を傭つたろうという推測があつたからです。だがそれは不成功に終わりました。ポールは抜目なく、じぶんの持つてゐる馬車を用ゐるのです。

しかし、ポールは徐々に不安をかんじていたようです。もともと誘拐などという大それたことはいつまでも成功する筈はなく、彼は私を力づくで手ごめにすれば私が諦らめて彼の妻になると信じてやつたのですが、私は肉体は彼の意のままに弄ばれましたけれども気持だけは変らず、責められれば責められるほどシヨルジュへの思慕が燃えてゆくので、思惑がすつかり外れてしまつたのです。そうなる、誘拐した結果をどうしていいか分らなくなりしました。今さら私を手離せば身の破滅だし、殺してしまふには未練があつたのでしよう。

ポールはしだいに落ちつきを失ひ、気が荒み、自棄的になりました。が、そのため私はいつそう苦悩を増しました。というのは、痺れるような刺戟の中で我を忘れようとして、前よりも嗜虐的となつたからです。

彼はもう工場にもろくに行かず、家にもほとんど帰らなくなりました。それがシヨルジュの疑いを深めることは知りながら、蹴けられるのが怖かつたらしいのです。彼は朝から部屋に酒を運ばせ、よつぱらいました。そして夫婦を呼びつけ、自分の見てゐるまゝで私をいじめさせるのです。

折檻は次から次と、あたらしい方法が考案されました。それを考え出すのは、きまつて同性のシユリイなのです。この悪魔の天才は肉体および精神のあらゆる機微を心得ていました。たとえば、私のからだをひどく傷めることには反対しました。毎日折檻するのだから身体が弱つてはいけないし、第一、単純な苦痛は神経を麻痺させておもしろくないというのです。彼女は私の感受性をいつもするどく磨ぎすましておき、それを効果的に利用しようとした。それで、鞭打は気を失うまでつづけることをせず、間をおいて、少しづつ行いました。たしかに彼女は正しかつたので、私は最後の日まで鞭の苦痛に馴れることができませんでした。

その代り、精神的な汚辱には全力を集中しました。私はじぶんで脱ぐことのできない汚れた服を着せられ、足首と足首もつながれたままでした。朝起きると、彼女の考案した服装検査がはじまります。それは両手を頭上に組み、足をかるく開き、姿勢を正して立つのですが、シユリイは上から下までソロソロと撫でまわすのです。こ





の彼女の指先から逃れる箇所は一カ所ありません。それで少しでも姿勢が崩れたりもがいたりしようものならたちまちその場所を抓られます。したがって私の抓られる場所は、どうしても乳や下腹や腿ということになります。ところが、この検査は私の忍耐が破れるまでやめないのですから、結局は罰を受ける以外に道はないのです。そしてこの「不従順」が、その日一日じゆうの折檻のいとぐちとなるのです。

両手を高く吊して腋の下をくすぐったりするときも、決してひどくやらず、子供の悪ふざけのように、ちよつとやつては休みます。しかしそのために私は無感覚になることができず、近づいてくる手を逃れられない意識で必死にもがかずにはいられないのです。

例の、からだを縦に縛ることも、肉体的苦痛ではなくて、極度に羞かしめるためでした。これは男たちにもたいへんよろこばれて、しばしば用いられました。酔ったポールが私を四つ這いにさせ、下腹から出た紐をひっぱり。ジュリイがうしろから鞭で追い立てたこともあります。

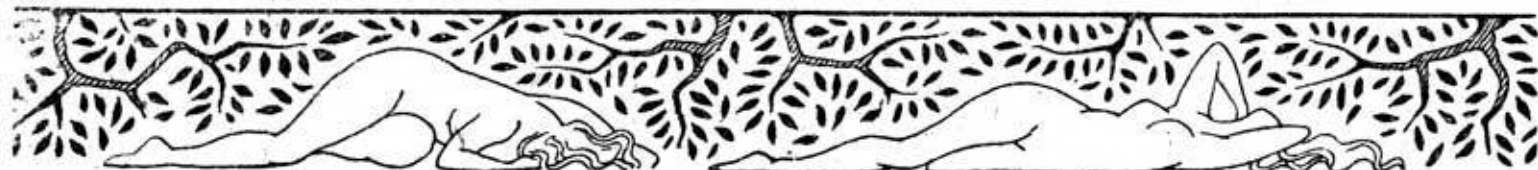
「鬼ごっこ」もジュリイが発明したのです。机や椅子を片づけて、この遊戯を始めようと言われると、私はいつも震えました。なぜなら、必ず私が鬼になるにきまつているからです。最初はポールが鬼になつて眼隠ししますが、ねらうのは私一人です。私は足と足とをつながれている上に、アンリとジュリイに押し出されるので、いつも簡単につかまるのでした。すると、ちよつと服装に触れば分るはずなのに、ポールは名を当てるために私を押し倒し、馬乗りになつて身体じゆうを探るのです。さて私が鬼になると、絶対に解放されませんみんなで寄つてたかつて髪をひっぱつたり、尻を叩いたり、乳房をつねつたりします。眼が見えず、どこから攻撃されるかに私がおびえているのが、彼らにとつては新鮮な慰みなのです。もちろん最後には床にころがされ、存分にいたずらを受けるのでした。

そうしたこと一切は、なんの理由もなく。ただ不安で荒んでゆく彼等の憂さ晴しとしてつゞけられました。私は生ける屍として、ありとあらゆる彼等の気まぐれの犠牲となり、毎日泣き叫ぶばかりでした。

最後の日のお話をします。私は朝から縛り上げられ、ポールの前に立たされていました。ポールはもう同じ折檻に飽き飽きしているので、ジュリイにあたらしい方法を考え出すように言いつけました。

「じゃあ、こうしましょう。旦那と私とで責める場所を分けてやつてみましょう。どつちが早くこたえさせるか競争ですよ」

「まあ、なんでもやつてみるこただ」







こうして、また恐ろしい地獄の一日が始まろうとしたとき、廊下に慌だしい足音がして、アンリが飛び込んできました。

「旦那、早くなんとかして下さい。警察から調べに来ました」  
とつさにポールの顔から血が引きました。

「うまく言つて追い帰せ」

「やつてみます」

アンリはそう言いすてると、いそいでまたドアの外に姿を消しました。

警察！——一瞬、なんのこともか私は分りませんでした。それほど泥沼に沈みこんで、救われる希望などは忘れていたのです。だが

「ジュリイ、早くクリスティーヌを……」

とポールが言いかけたとき、一切が明瞭となりました。世間が私の事件を忘れていなかったこと、警察が活動していること、そしてたつた今この家の戸口まで来ていることを理解しました。私の心臓は破裂せんばかりになり、夢中でこの部屋から走り出ようと思いました。

だが、何ということでしょう！私の両脚はつながれており、よちよち歩きしかできない上に、両手が縛られているのでドアを開けることも出来ないのをすぐに思い知らされたのです。ジュリイは悪鬼のように私におどろかしました。

「助けてえ！だれか来てえ！」

私は必死に叫びました。とたんに私はねじ倒され、息も詰まるほど嚴重に猿ぐつわをされました。

「ベッドへ、早く、早く……」

ポールは駆けよつて両脚を抱え、ジュリイと二人で大いそぎでベッドへ運びました。私もこの時ばかりは死物狂いで暴れたのですが、俯伏せに押さえつけられ、ありとあらゆる紐でギリギリにベッドへ縛りつけられ、その上から布団をかぶせられました。こうして官憲の眼をごまかそうとしたのです。私は無念の涙にむせびながら、身動きならぬ身を呪いました。すると、ドヤドヤと足音がして、多勢の入ってくる気配がしました。

「あッ」

とポールが叫ぶと同時に





「おお、ポール」

という声がしました。まぎれもないシオルジュの声です。

私の胸は早鐘を打ちました。マツトに押しつけられている顔を横にねじむけ、咽喉も裂けよと絶叫しました。猿轡の下で、それは幽かな呻き声となつて洩れました。

「ちよつと、寝台を……」

一人の警官が言いました。シオルジュは駆けよつて、一気に布団をめくりました。

「クリスティーヌ！」

そこにみじめな姿を見出した彼のおどろきはどんなだつたでしょう！ またそれによつてどんなことを想像したでしょう！ 彼は震える手で猿轡を取り、永いことかかつて紐をほどきました。そのとき私を鋭く刺したのはこんな恰好を恋人の前に曝している羞恥のくるしみでした。やがて彼の手に抱き起され、眼と眼が合つたとき、私はわけのわからない叫び声をあげて、そのまま気を失つてしまいました。

×

×

×

神よ、司祭ジューベ様のお言葉により、私はこの告白をなしとげました。しかし、すでに汚れた私はどのようにして救われるものでしょうか。

ポールもアンリもジュリイも、いま獄舎につながれ、重罪裁判所の判決を待つています。しかし父は私が助け出されるたつた一日前に、極度の心労がもとで亡くなつてしまいました。工場も邸も幸いポールのたくらみが進むまえに助かりましたが、私の悲しみは少しも慰められは致しません。

ただシオルジュだけがおります。彼こそは私がこの世で愛をささげた唯一人のひとでした。彼は十日あまりも私の床に付き添い——私は疲労のため弱り切っていました——夜も昼も看護してくれました。そして一日も早く恢復するように祈つてくれました。

しかし彼の眼に、深い慨きと悲しみの色がうかんでいるのを私は見逃しませんでした。私は恐ろしい体験を何一つ話しませんでしたが、彼も訊ねようとしません。だが二人がじつと見合つてるとき、同じ考えに耽つていることに気づいて、私たちはあわてて視線をそらすのでした。そのとき、私は耐えがたい羞恥に悶えるのです。

ある夜、私はじぶんが孤独になつたこと、この地上になんの幸福も望めないことを話しました。







「クリスチーヌ、僕がいるじゃないか」

とシヨルジュはさけびました。

「僕は君を救うために生命を賭けたんだ。そして成功したんだ」

「それは分つてますわ。でも、あなたの見つけたクリスチーヌは昔の私ではありません。何もかも手おくれたつたんです」

そう言つて、私は苦い涙にむせびました。

「しかし、僕は君を見棄てやしない」

「それは愛ではなくて、憐れみですわ。私はあなたに一生憐れまれて暮さなくてはならないのよ。でも、幸福になるには愛が必要なんです。私の受けた不幸は何ものもいやすることができません。もしもあなたが無理をなされば、きつと破滅するでしょう。だから、これ以上ご自分を苦しめないで下さい」

「僕はそんなつもりじゃないのだよ、クリスチーヌ」

その声は弱々しく、苦しげでした。私は、彼が再会以来、いちども接吻せず、結婚の話をしていないことを思い出しました。だがそれを批難する気にはなれませんでした。ポールが私を手ごめにした日から、一切のものは失われてしまったのです。私が病床を離れたとき、彼はパリに旅行すると言つて別れを告げました。もちろん一週間以内に二人は会うことになっていますが、私はなんの期待も持つてはいないのです。できればこの機会にパリで彼が若く美しき女友だちを得られますようにと祈つております。

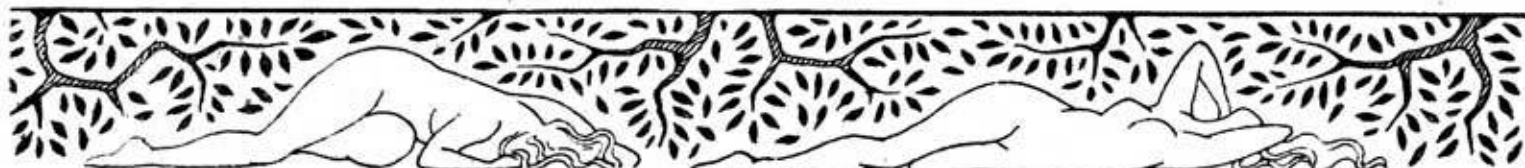
これからの私の生涯は、神のおみちびきに従いたいと存じます、裂かれた布は綴るに由ありません。けれども等しく人間として生れたものが、女なるがゆえになぜこのような十字架を背負わねばならないのでしょうか。いかなる摂理の下に、かかる責め苦が私に加えられたのでしょうか？

おお神よ、司祭シユーベさまよ！

(了)

「クリスチーヌの受難」 遂に完結！

三回に亘つて連載しました吾妻新氏の抄訳は流麗な文章と精緻な描写によつて本誌読者の熱狂的な讃辞の中に完結致しました。氏の全訳が企画されていますから、何卒御期待下さい。



奇譚クラブ最近号

主要目次

- 九月号 特集倒錯の告白○
- 十月号 特集切支丹迫害史○
- 十一月号 宗教刑罰戦慄画譜
- 十二月号 惑溺の愉悅特集号
- 口絵 フランス貴婦人の変態性生活
- 扉 甘き歡樂の後
- 耽美派小説名場面集 潤一郎の巻
- 折込口繪写真 縛つた女を写す辻村 隆
- 濁れる愛慕……松井 簫子
- 奴隷妻……片矢 薫
- 指の秘密……武山 武彦
- 男装龍姫伝……亀岡紬七郎
- 孤獨なファンタジー……芳野 眉美
- モンテカルロの侑僂男……モリス・ブルウジェ
- 中国艶話毛のない女の物語……赤塚与志夫
- 糊と泥と砂……長岡愛一郎
- 4Sクラブ探訪記……二俣志津子
- 非公開映画世界の闇房……藤安 節子
- 囚衣或る人妻の生活記録……古川 裕子
- 女囚私刑体験記……小坂多美枝
- セックスの記憶……綾 久江
- 錯乱の倫理……近東規矩也
- 夕映え燕の教訓……丘 正雪
- 狂い咲くカンナ其の後の告白……羽村京子
- ロマンチックなサディズム……森山 美歌

○新年号 縛つた女を描く○

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集

扉 愛の使徒 色刷口繪 椋鳥

口繪写真 縛つた女を描く

アブニストの記・らぶすれいぶ鬼山絢策

脱落者……小森 原平

徳川開門痴情録……的場 通

淫火(みだらび)……松井 簫子

戦争処女の手記……藤安 節子

長崎らしやめん考……花山 剣作

お国自慢・好色民謡……七条美樹子

人妻告白記・妻の復讐……辻 佳月子

桃色のベールに包まれて……川端多奈子

読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理

マゾヒストの果て……福田 英一

糊の執著……長岡愛一郎

鼻脚礼讃……升岡 金吉

変の字問答……浮家 鷹三

告白記 僕の記録……黒井 珍平

女の責場を描く時の心境……伊藤 晴雨

少年の恋……守田 雄二

貞操帯奇譚……シヨルジュエフカルトル

あなたのムチの下に……角田 平八

赤につかれた男……上村秀久雄

男色の花道……堤 行房

風変わりな作戦……笹田 豊

○二月号 責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口繪写真 恋に狂つたワン・カント

スペインの宗教裁判

妖 花(心の悪魔)……羽村 京子

夜開く孤島……岡 真史郎

淫 火(第二回)……松井 簫子

若衆散華(同性愛欲史譚)……戸崎 平馬

変の字問答(第一話)……浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回)……鬼山 絢策

燐 光……久留木 栄

女嫌いの種々相……仁比山 等

アレキシナの日記……鳥上 源一

女囚獄中記花井お梅さんげ談……小町右近

糞尿崇拜とトータム思想……三瀬 淑朗

処女崇拜と宗教売淫……島影 映

比丘尼開眼……久松 俊介

琉球の女達……木之下白蘭

悩ましのサディズム……森山 美歌

切支丹迫害史……漆島 迫平

死刑執行奇談……茂木 芳久

黒井珍平氏に答う……伊藤 晴雨

しいたげられるよろこび……林田 澄子

破つた日記帳……川端多奈子

硝子便所……芳野 眉美

つわもの哀史……吉井 川洋

映画とサディズム……雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ○

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口繪写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髓……吾妻 新

切腹史談……中康 弘通

同性的男性愛の謎……染田 玄

受難記(ある女の告白)……岡田 咲子

妖異集案第……戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第三回)……鬼山 絢策

女囚私刑体験記(其の二)……小坂多美枝

黒井珍平さんへ……羽村 京子

艶書通信(喜多玲子さまへ)……高野すみ子

文学歴史に現われたるサディズム

悲痛と快楽……仁比山 等

第七天国の夢想……波多野 新

伊藤晴雨先生へ答えて……黒井 珍平

屍 臭……丹波 太郎

色情の価値……角田 平八

猿轡 雑考……千葉 三郎

白い便器の幻想……芳野 眉美

伊藤晴雨氏の解答を讀んで……和泉としを

破つた日記帳……川端多奈子

緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉

アドニス灯……鷲巢 千芳

シブシブの性的生活……有馬 正秋

淫 火(第三回)……松井 簫子

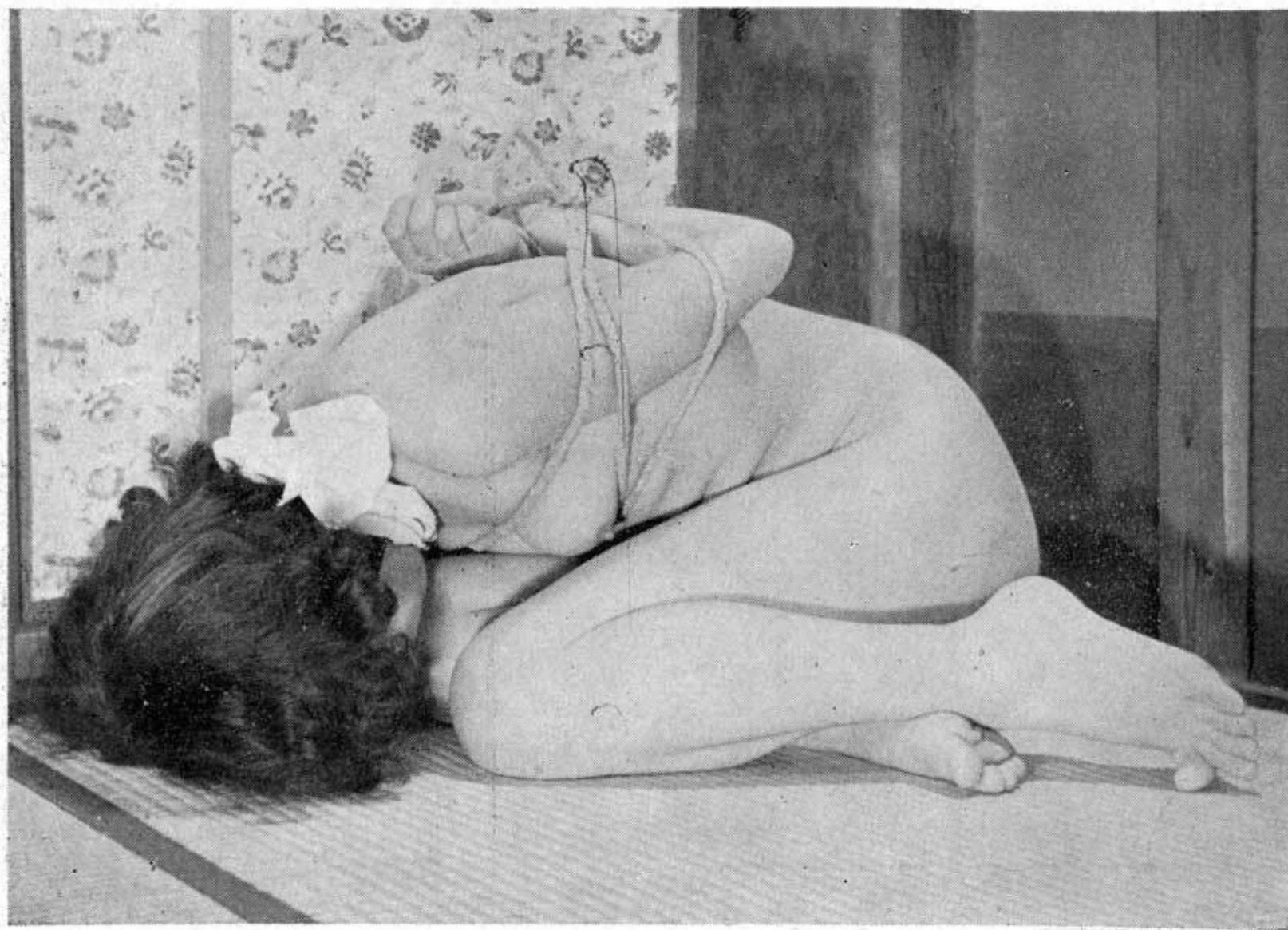


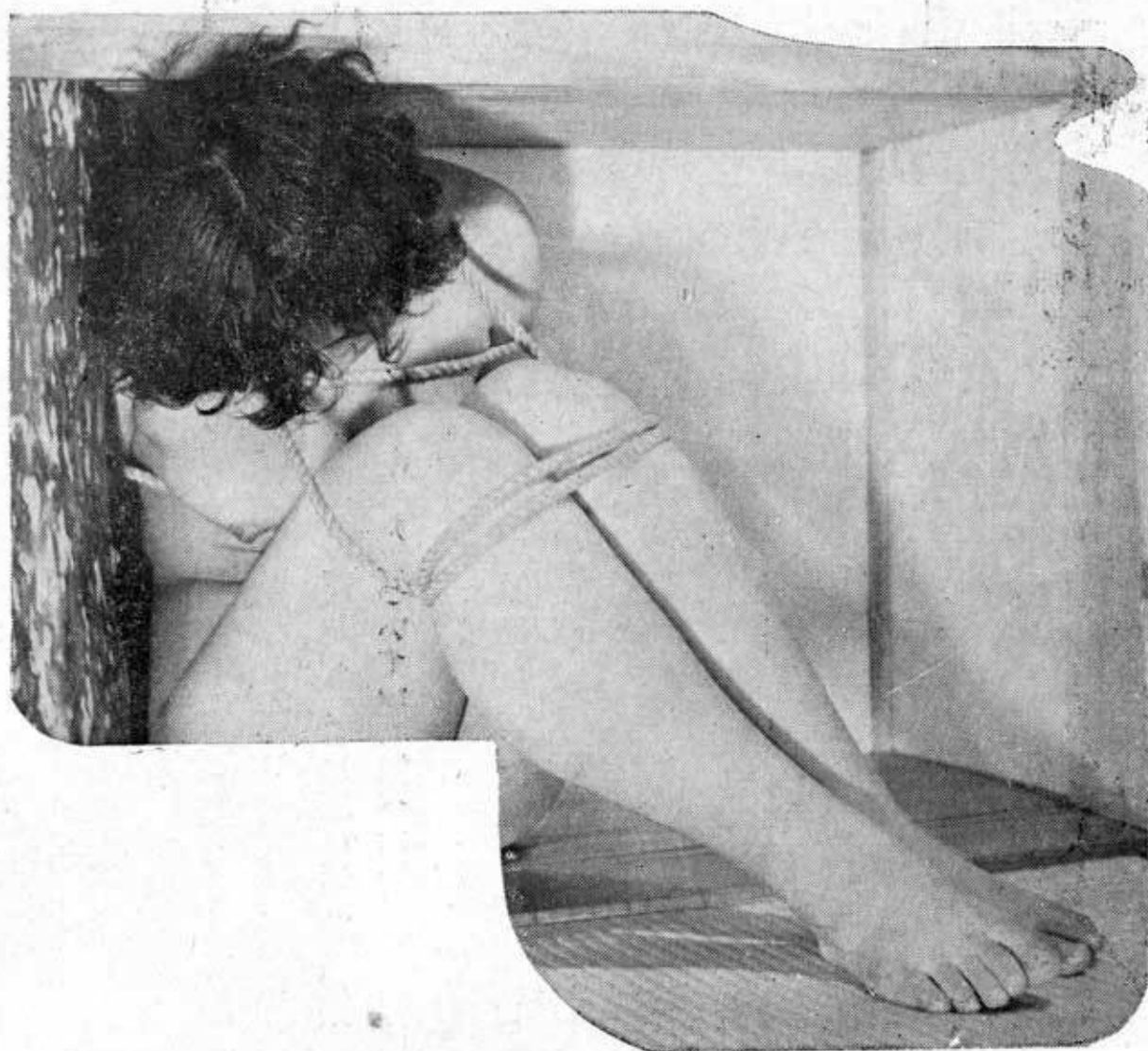
# ☆ 被縛女体の研究

辻村 隆・構成  
塚本 鉄三・撮映

本号では特に被縛について興味を持つて積極的に協力を申出て下さった村田那美子嬢を煩わして、女体を縛った際の雰囲気等についてザツクバランに考究してみよう。村田嬢は今まで本誌上で縦横に活躍をした川端多奈子嬢に匹敵するポリウムのある体軀の持主で、又、斯道についての関心も川端嬢に劣らぬものがあるのは喜ばしい。六月号で少し言及したように、モデル嬢の協力の如何によつて出来上りの写真に大に影響を与えるものである。

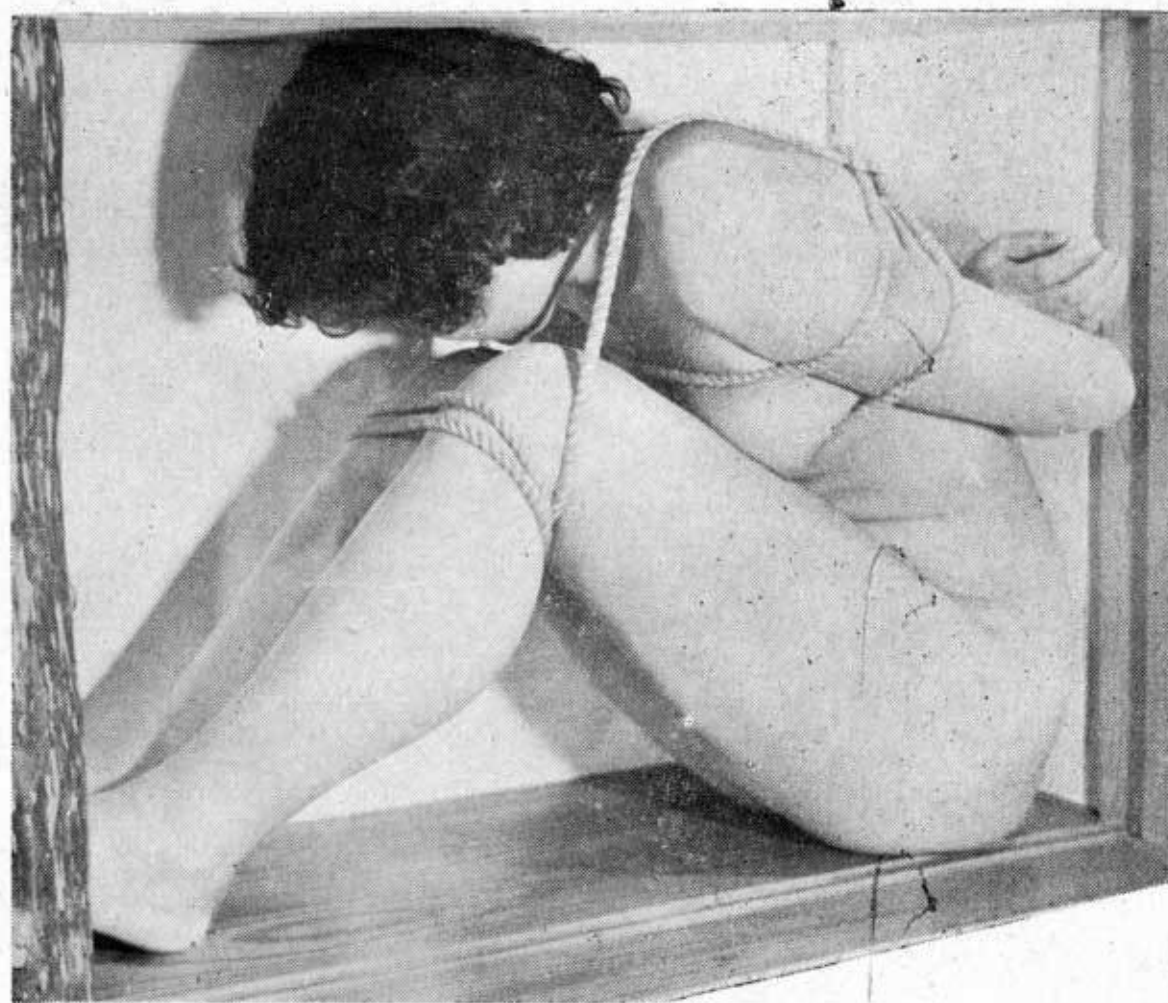
然し本号では、それとは別に被縛女体撮映の雰囲気について申し述べたい。〃女体の美しさは縄で縛られることに於て尽きる〃という熱烈な讃美者のある反面、女体を縛るといふ事について、とやかくの批判を加える者もないとは言えない。こゝに我々はよし縄を纏いながらも、そこに〃美しさ〃というものを発見したいと常に努力しているものであり、刑罰としての被縛とは自ら軌を一にしていけないのである。刑罰図譜





といったものは、一部の或る種のマニアには歓迎されるかも知れないが、我々のとるところではない。あくまで健康的で陽気な浪漫的なものが我々の狙いなのである。

かゝる意図よりすれば、モデル嬢は若くして豊満な健康体の持主でなければならず、又被縛については少くとも積極的な関心を持つていなくてはならない。予定の枚数の撮映が完了して、道具をしまおうとすると、



「まだフィルム、あるのですか、もしあるんでしたら、もう少しして撮つて下さいません。妾、こんなポーズを考えてみましたの」

疲れきつて、ぐつたりとしている時でも、こういう積極的な申出を聞くと、又俄然はりきつて、思わず縛る縄にも力が入るといふものである。





「妾の写っている写真、是非頂戴ね、焼増賃出しますから」つて、しつこく要求するモデル嬢がある。自分の被縛写真を一体、どうするのだろう、と後で聞いてみるとハンドバツクの底へ入れておいて、後々眺めるのだそうである。

「こんなに縛られて可哀そうな妾、けれど妾はこのテーマのヒロインだわ、そして悲劇の主人公なの」と呟やくというのだ。

「さあ、これから撮るよ」と準備の合図、待つてましたとばかり嬉々として洋服を脱ぐ天真爛漫、そこには何の險翳も暗いところもない。「今日は少々痛くつても我慢するからきつく縛つても構わないわ、此の間の写真見たら、なんだかうしろの方がゆるんでダブ／＼してたわ、あんなのお芝居じみていて面白くないわ、妾、うんと辛抱してみようかしら」縛られる方は只じつとして居ればいいのだが案外縛る方の側は疲れるんですヨ、「そんな表情じゃ駄目だ、もつと痛い、つて感じを出さなくちや」

「こうですの？」と一瞬顔面をしかめたかと

思うと、もう、ニヤ／＼と含み笑い、そして眼の表情はうつとりとした恍惚境、「仕方がないお嬢さんだね」「でも、もつと本当にきつく縛ってくれなくちや、おかしくつて痛いって顔なんか出来るものですか」

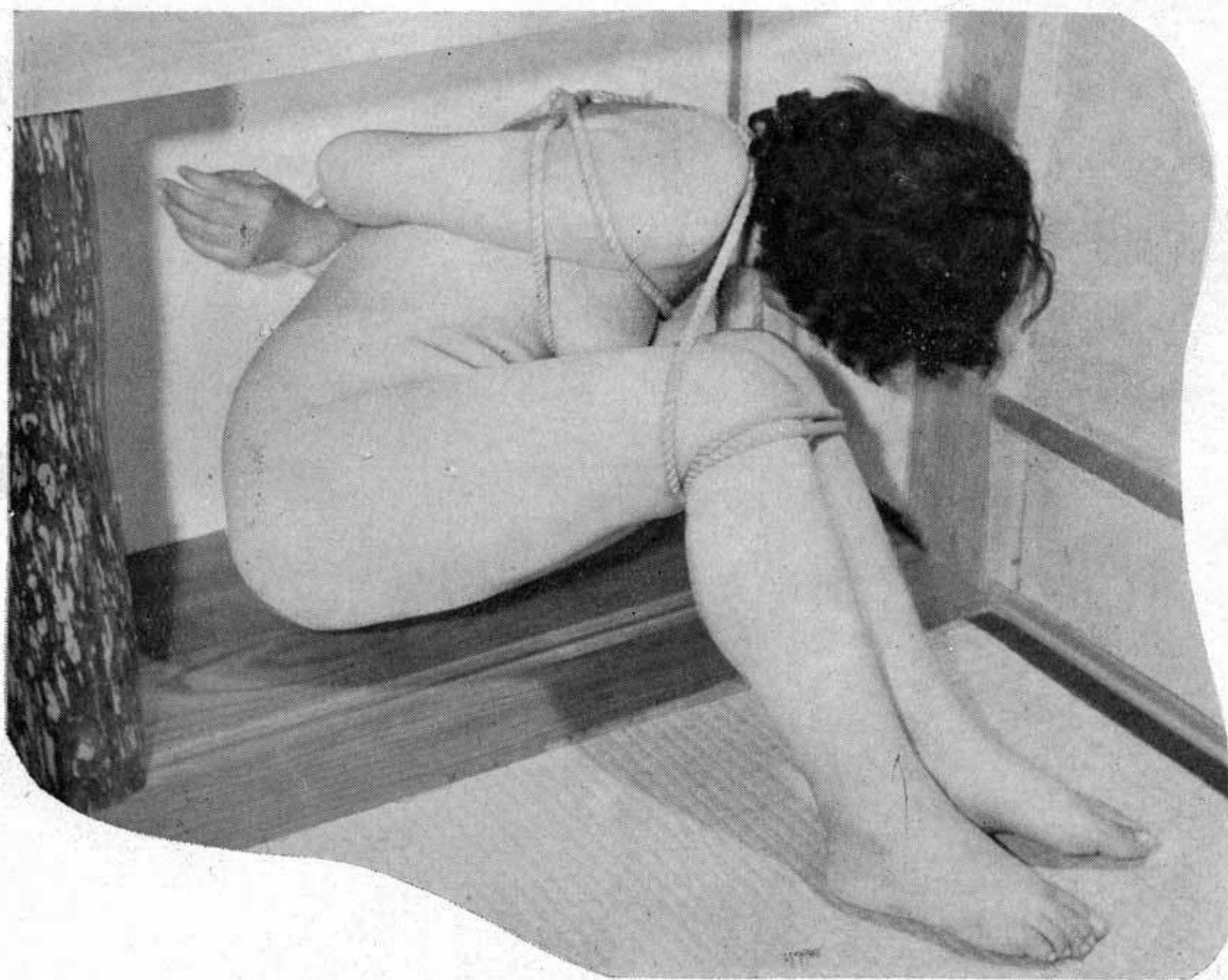
さて、本号の写真、そんなわけで、村田嬢に引きずられて、言われるまゝに、あつちへ転がし、こつちへ向けて、フィルムのある限り、時間のあるだけ撮つてみた。そして、雑誌の口絵に必ず掲載するという約束で――

「妾の写真を口絵に載せないんだつたら、写さしてやらない！」

「ハイ、ハイ、載せますから、どうか一つお願いします」

――題して檻の中へ入れようとした彼女

無邪気で天真爛漫、純情可憐な彼女、どうか余り口絵へばかり出よう等と言つて下さいますナ。



モデル・村田那美子嬢



## ○四月号 錯倒の告白特集○

口絵 くすくすられる女 喜多 玲子  
口絵写真 緊縛美の考察

後手と高手小手について

搾衣(続少年矯正院体験記) 獄 収一  
神の酒を手に入れる方法 沼 正三  
肥満体への郷愁 麻生津和夫  
乗馬服と長靴と鞭 森本 愛造  
不思議な拷問 有馬 稻高  
私の新婚生活 島村 康雄  
開花の契機 信太 蓉子  
キメラ愛好会 岡田 咲子  
妓の影 泉 辰之助  
交感 藤安 節子  
支配者と被支配者 波多野 新  
責めの美的表現 小此木蘭一  
らぶ・すれいぶ(第四回) 鬼山 絢策  
春婦哀歌(飛田の娼婦たち) 花村 鶴一  
新裸体狂奏論 七条美樹子  
続・囚衣 古川 裕子  
地獄繪行脚 長岡愛一郎  
美少年の死 岡 真史郎  
恍惚境と法悦境 高取 辰治  
切腹史談(一) 中康 弘通  
縛られた女優たち(一) 升岡 金吉  
風流懷舊 吾妻 新  
人獣交婚談異婚抄 山崎 浩平  
或る家庭教師の告白 角田 平八  
淫火(第四回) 松井 籟子

## ○五月号特集男性MASOO

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場  
口絵写真 荒縄による緊縛感のスポット

怪奇画集 塚本 鉄三

(ドイツのグロテスク画集より)  
マゾヒストの会 沼正三・沢  
風流責名態 吾妻 新  
捕縄難考 獄 収一  
僕の記録(完結篇) 黒井 珍平  
らぶ・すれいぶ(第五回) 鬼山 絢策  
家出の味 牧 さち子  
雌獣の手記 近見 啓  
女王様ごっこ 飛田 良二  
偽られる殉教者 成瀬 亮  
続・硝子便所 芳野 眉美  
道徳的な物語 笹田 豊  
私の飲び 瓜生 珠子  
少年及び女性の切腹 中康 弘通  
実験室にて 角田 平八  
淫火(第五回) 松井 籟子  
吊られた白鳥 川端多奈子  
魔都上海の思い出から 姫宮 四郎  
奴隷の安の記 中野安太郎  
縛られた妻以前 早川新一郎  
盲いたる手 藤安 節子  
真空地帯の挿話 鏡 六平  
暴帝イワン罪悪史 高取 辰治

## ○六月号

口絵 お小夜嵐 喜多玲子・画  
緊縛による一表情 塚本鉄三撮影

扉 夢はスカートの下に

口絵 地獄物語(往生要集)  
クリスチーヌの受難 吾妻新・沢  
虹の階段 泉 辰之助  
ヴァンプ女優列伝 朝見 速夫  
アブノーマル・ファンタジー 岡田 咲子  
責苦 竹谷 十三  
拷問と倒錯の根源探求 翁 要吉  
静安劇場後日譚 姫宮 四郎  
廓の灯影 片矢 薫  
出獄(少年矯正院体験記) 獄 収一  
縛られた女優たち(三)  
切腹問答(中康弘通氏へ)  
淫火(第六回) 松井 籟子  
由紀子のお仕置 大川由紀子  
若衆武士道 戸崎 平馬  
らぶ・すれいぶ(第六回) 鬼山 絢策  
暴帝イワン罪悪史(二) 高取 辰治  
あるマゾヒストの手帖から 沼 正三  
其頃を語る(一)新派劇の賣場伊藤 晴雨  
自殺の手段としての女性の切腹に  
ついて 池田 敏夫  
文芸に於ける切腹描写 中康 弘通  
我が告白の断章 須藤 律夫  
第二回読者座談会 松井籟子女史を囲んで

## ○七月号

口絵 百鬼夜行の図  
口絵写真 猿ぐつわ五態

クリスチーヌの受難(二) 吾妻・新沢

妻は縛らす 岡田 圭介  
切腹本願 亀岡絃七郎  
川端多奈子さんと信太蓉子さんへ  
祭壇に君臨する脚 羽村 京子  
淫火(第七回) 松井 籟子  
らぶ・すれいぶ(第七回) 鬼山 絢策  
片耳伝奇 窪村 弘  
女体緊縛美について 千葉 三郎  
囚獄の思い出 獄 収一  
歌舞伎とサジズム 宮内 義雄  
暴帝イワン罪悪史(三) 高取 辰治  
あるマゾヒストの手帖から(一)  
辻番附の話 沼 正三  
切腹願望 伊藤 晴雨  
変の字問答(第三話) 水内 武郎  
磔になつたお姫様 毛利 綾子  
四馬路界隈 姫宮 四郎  
我が告白の断章(二) 須藤 律夫  
くすくすられるよろこび 山本 百合  
女囚私刑体験記(三) 小坂多美枝  
私の主題 岡田 咲子  
一清教徒の日記(二) 栗島 洋  
曇後雨 川端多奈子  
新しいサディズム 吾妻 新

# 公妃の復讐

(キエフの流血の婚儀)

ザツヘル・マゾツホ 作

沼 正三・抄訳・解説



中欧ではオットー一世が華々しく活躍し、キリスト教が漸くロシア世界にも浸透しゆきつゝあつた頃のことである。当時ロシア人を統治していたのはキエフ大公国の大公イゴールで、その居城はキエフにあつた。公妃オ

ルガは才色雙絶、兼ねて権略に富み、大公を左右している。二人の間には一子スウアトスラオスがあつて、まだ幼なかつた。

西紀九四五年、ポドリエン地方のデレヴラン族の首長である侯マクが、キエフ国との和親友好の挨拶にキエフにやつて来た。マクはまだ独身の凛々しい青年だつたが、大公に拝謁の際、公の側にあるオルガの凄艶な美貌に心を奪われた。退出して来た彼は伴の者にいうのであつた「一人のヘレナのためにトロイ戦争が起つたというのも、あの美人を見ると本当だと思えて来る……」

大公はマクの招きによつて、デレヴラン族の首都イスコレッツク市に行幸した。恋に狂つたマクは、キエフ国に対して領土的野心のある貴族達を語らい、自ら先に立つて、この地で公を暗殺したが、公の愛馬は重囲を脱してキエフに還つて来る。そしてオルガの前に来て嘶くと精魂尽きて斃れ死ぬ。オルガは公の身に凶事のあつたことを悟る。やがて凶報がもたらされた。悲哀に凝結したようにオルガは独り一室に閉じこもつてしまう。

一方デレヴラン族は今やキエフ国に大公なく、ロシア人恐るゝに足らずと意気軒昂たる



ものがあるが、マクはオルガに対する野心があるので皆を抑えて結婚申込の使者をキエフに送った。オルガは表面は冷静に彼等一行を迎えさせるが、その夜蒸風呂に入れて蒸し殺させてしまった。

オルガはマクの申出を受け容れたようにしてデレヴラン族を訪問した。マクは有頂天になつて国境迄出迎え、彼女の前で馬から下りてその足許に身を横たえた。

「神々があなたの入国を祝福なさいますように」と彼は叫んだ。「どうかあなたの第一番目の下僕である私に、あなたがこの国土に御足を踏み入れられるに当つて、先ず私の身体を跨ぎ越されという御愛顧をお示し下さい」

然し胸に一物あるオルガは、この卑下した申出に対して、「私はこの土地に下僕をさがしに來たのではありません。夫たるべき人を求めに参つたのです」と答えて、彼を立上らせる。そして堂々たる王者の威容を示しつつ入都し、その地に故大公の盛大な葬儀を営む葬儀の終つた後、彼女はマクに結婚を承諾する。彼は狂喜して、「私はあなたの命令のまゝに服従します」と誓言する。彼女は約束のしるしに、接吻を許すが、その唇は死人のように冷たいのであつた。亡夫の死んだ土地

では嫌だからとの彼女の意向から、婚儀はキエフで行われることになつた。

## 二

翌九四六年吉月吉日を卜してキエフの宮城に婚礼の式があげられた。美青年マクも立派であるが、オルガが貂毛襖衣ヘルマリン（貂の毛皮で作られた帝王丈用いる外被）を纏つて立つた姿の神々しい美しさは此の世のものとも思われなかつた。若き侯は驚嘆と歓喜の叫び声を發して、この威嚴ある美女を両腕に抱こうとして馳せよつたが、彼女の冷静で誇り高い眼差しは彼を突き返し、彼女の足許に跪かせてしまった。式が終つて食事の時が來たが、何故か彼女は何も口にしようとしなかつた。

その夜が來た。マクと共にやつて來た五千人のデレヴラン人も式後の大宴会に賓客の接待を受け、美酒に酔い痴れて眠つてしまつた。オルガは閨房に入り、侍女を去らせてから、新郎マクを入らせた。マクが胸を躍らせつつ室に入ると、彼女は室の中央、段の上に設けられた寝台の縁に腰掛けてこちらを見ている。

「跪いてお前の勤めを果すがよい」公妃は王者の威嚴に満されつつ、冷たく命じた。侯は

段を上り、結婚の習俗に従つて彼女の長靴シュテーフエルを脱がせるために、花嫁の前に跪いた。初夜に花嫁が花嫁の靴を脱がせる勤めは、夫の妻に対する最初にして最後の屈從として、風習の命ずるところであり、これが終つた瞬間から夫は妻の主人となるのであつた。

オルガは片足をマクの膝の上に載せて、奇妙な、半ばおどすような、半ばあわれむような表情で、彼を見詰めた。彼は若さと情熱に全身をたぎらせて叫んだ、

「女主人様、私は今日あなたに対する最初の勤めを致します。然し決してこれを最後の勤めとは致しません。私はいつまでもあなたの奴隷のまゝでいたいと願うのですから」

「これがお前の最初で最後の勤めになるのだよ」オルガは無愛想に答えた。「けれどもお前は事実私の（花嫁でなく）奴隷なんだし、奴隷相応の扱いを受けるのがあたり前だよ。花婿取りで思い上つた奴。お下り！」そういうと同時に彼女は今迄彼の膝に預けていた足で力一杯彼の胸を蹴飛ばした。あまり不意だつたので、若い侯は段から突き落され、彼女の足下に横たわった。彼女はひらりと身を躍らせると枕許に懸ていた亡き夫の戦斧を執つて

その円盾を一撃した。

途端に城の鐘が殷々と鳴り出した。この合図で、振舞酒に酔い潰れた五千人の客人達に対する虐殺が始まったのである。そして閨房の扉が開いて公妃の衛兵達が入つて来た。マクは忽ち縛り上げられオルガの前に引き据えられた。

「裏切りだな！」とマクは呻いた。「私はあなたを愛しているのにあなたはそれを裏切つた」「奴隷の愛か！」さげすむようにオルガは笑つた。

「奴隷の愛なんて犯罪だよ、それも罰してやらなけりやならない」

そこへ階下の大騒動の阿鼻叫喚が聞えて来る。マクが驚くと、オルガが教えた。

「あれは婚礼の祝歌よ。あの世に在す大公イゴールに私が送る五千人のデレヴラン人が演ずる死者の歌劇は、故人をたたえ、下手人を罰するのには、まだまだ不十分なのよ」

「いつそ、殺してくれ」

「いいえ、殺さない。お前の伴をして此処にやつて来た者は皆死ななければならない。一人も残さない。けれどお前丈は違う。殺してしまつてはお前に慈悲を施すことになる。ところが私はお前には少しの憐愍おわれみもかけたくな

いのだよ。お前丈はどうあつても生かしておくのよ！」

五千人の中四千人以上がその夜の中に屠殺されてしまつた。残つたのはイゴール暗殺に関与したと見られる貴族達丈である。彼等は縛られてオルガの判決を待つ。彼女は彼等に対しては唯殺すという丈では腹が癒えないので、色々の死刑方法を案出して、それを云渡すのであつた。

或る者共は先ず手を切られ、次に足を切れ、その後で初めて首を打落された。或る者共は二枚の板の間に釘付けにされ、その板の上に乗つたオルガの女官達の身体の重みで徐々に窒息させられた。又幾人かの者は中庭の地面に仰向けに長く一列に横たえられ、四肢は鎖で小杭に固定された。そして公妃が夫が暗殺された時乗つていた純白の馬に打ち跨り、まるで復讐の女神のように美しくも戦慄的な姿で、この肉体で作られた道の上に馬を馳らせると、心驕つた貴族青年の騎馬隊がこれに従い、かくて横たえられた者共の最後の一人の呼吸が、馬蹄の下に踏み塞がれてしまふまで、この騎乗が続けられるのだつた。彼処に薪の山があつて、デレヴラン人の中の不幸な幾人かがその上で焚かれているかと思え

ば、此処では赤く灼かれた焙器の上に幾人かが載せられて、気の狂いそうな苦痛から野獣のようにほえたけつていた。一方庭には大きな坑が掘られ、十人宛束にして生埋めにされていた。身分の低いデレヴラン人の首は斬り落されて城門の両側に二つの大きな四角錐形ピラミッドに積み上げられた。

かようにしてオルガは亡き夫の霊を弔つたのであつた。今や残るのは下手人の張本たるマクへの罰丈である。彼女の命でマクは土牢の中に投込まれた。彼は風も通わず陽も射さぬ所で彼女の判決を待たねばならない。

### 三

オルガはポドリエン地方を征伐に出かける。マクと共に五千人の戦士を喪つたデレヴラン族は更に軍隊を編成して邀え戦うが、大敗し、兵は盡殺され、司命官オレグは捕虜にされた。オルガは彼をば自分の衛兵中の弓手達に、生きたまゝ弓の的に使えといつて下げ渡した。

オルガは勝ちに乗じてデレヴラン族の首都イスコレツク市に向うが、途中使者を遣わして、もし戸毎に三羽の雀、邸毎に三羽の鳩を差出せば、市に対する復讐を中止してもよい



と申入れた。意気沮喪した市民達はこの申入に従うことに決し、要求通りに雀と鳩とを差出した。するとオルガは一羽毎にその足に火縄を結びつけ、点火してから放させた。飛び還つた鳥共は、木造家屋ばかりで出来ていたイスコレツク市の各所から火を発せしめ、忽ち全市が炎上した。公妃は悪戯的な喜びの念に満たされながら、デレヴラン族の首都が一山の灰になつてしまふまで、この凄絶な見世物を観覧した。

それからオルガはペドリエンのあらゆる地方を火と剣をもつて押し巡つた。遂にデレヴランの全民族が、その貴族達を奪われ、戦に敗れ、掠奪され、打負かされて、彼女の前に屈伏した。捕虜にした地主や貴族達を彼女は奴隷にし、その一部を自分用を選んで、残りは家来達に分け与えた。家来達は彼等を馬の尻尾に繋いで連れ帰つた。ポドリエン地方にはオルガの代官がおかれて、彼女の名の下に厳しい統治がなされることになつた。

キエフに凱旋すると公妃はマクを連れて来させた。軍装のまゝ玉座に倚つた彼女の威厳に、跪かされたマクは戦慄したが、同時に、彼女を取巻いている奴隷達の中に、祖国の貴族達がいるのに気付いた。

「私がお前に言渡す刑罰は」と彼女は嘲るような微笑を浮べつゝ判決した「死刑よりも残酷なものだよ。ポドリエンの全土は打負かされて私に降参した。私はその兵をみなごろしにし、その貴族達を奴隷にし、その町々を焼き亡ぼした。大公イゴールがお前の手にかゝつてなくなつたイスコレツク市は、今は地と区別がなくなつてしまつたのだよ」

「あり得ないことだ！」愕然としてマクは叫んだ。

「本当です」オルガに奴隷と仕えているデレヴラン貴族達が彼女のことばを裏付けた。

「本当のことさ」公妃は繰返した。「そして謀叛人奴、お前を私はこうして罰してやるのよ。お前が自分の祖国の没落と屈辱に死に遅れて、この先生きてゆかねばならないという罰で。お前は私の奴隷になるのだよ、いいえ、もつと賤しいものに、四足で這い廻る畜生に、道で逢う誰からも足で蹴り退けられる賤しい畜生に、お前はされるのだよ。さア言いつけておいたとおりに、此奴を処置しておやり」

かくて、この残酷な女性は、デレヴラン侯の手と足を斬り落させた。そこで彼はそれから後死に至る迄、公妃オルガの食卓の下で自

分の舌でパン屑を拾つて生きねばならなかつた。オルガの方は大公イゴールの遺児スウアトスラオスの摂政として、長年月君臨した。その統治に示した智慧と力は、キエフ大公国のロメア人にとつて男の支配者に、英雄に劣るところがないものであつた。彼女の治世は栄えた。キリスト教はこの間にロシアに入り彼女は西歴九五五年にコンスタンチノブルに行つて洗礼を受けた。彼女は九六九年にすべての人に悼まれつつ没した。ロシアの大編年史家ネストールは、彼女を「救世の星」とよんだ。歴史は「賢者」と、ロシア人の伝承は「狡猾い女」と、そして教会は彼女を「聖オルガ」と、よんでいる。

### 解説と鑑賞

#### 一

マゾツホ小説紹介の第一着として本篇を選んだのは長さの短い割に、マゾツホ小説の持つ魅力がよく味わえる一篇だと信じたからである。

原題は、ここで副題にした方で Die

Bluthochzeit zu Kiew である。(私の持

つての本ではそうなつてゐるが、イワン・ブルツホの「現代の性生活」附載のマゾツホ著

作表の二六番には、*nu* の代りに *von* となっている。然しこの小説の妙処は、貴族等への惨刑よりもマクに対する酷刑にあるので「公妃の復讐」とした方が紹介の際の訳名としては適当していると思つた。

訳文第一章は原文第一章乃至第四章で梗概に止めたのはオルガの復讐を眼目と見たからである。第二章、第三章にあたり、ダイジエストに止めた数箇所以外は原文に即して訳してある。オルガの美貌と威容についての描写がもう少し多いと考へて戴くとよい。

## 二

内容についてだが、除村吉太郎訳「ロシア年代記」中に参考になる所があるから、抜き書きしておこう。

「（オルガがドレヴリヤシン族に対してイーゴルの死の復讐を行う）」

（第一の復讐）ドレヴリヤシン族はいった「今ルーシの侯を殺した。彼の妻オルガを我等の侯マールの妻として迎えよう。そしてスヴァトスラフは我等の望むまゝにしよう」と。そして二〇人の勝れた士を舟で遣した。……オルガは歓迎する如く見せ、そしていう「今日は汝等の舟で大威張りでねるがよい、我は

明朝汝等を迎えにやるであろう、すると汝等はいうであろう、——馬でいかぬ——、徒歩でもいかぬ、舟のまゝ我等を運べと、さすれば汝等を舟のまゝ運ぶであろう」と。そしてオリガは大きな穴を堀らせておき、翌朝舟のまゝ彼等を投込み生埋めにしてしまつた。

（第二の復讐）今度はオリガの方からドレヴリヤシン族に使いをやつて、本当に我を乞い受けんとするなら大いなる名譽の中に嫁げるよう、重だつた人士を遣わせという。そしてやつて来た重だつた人達を蒸風呂に入れたまゝ焼き殺した。

（第三の復讐）又使いを遣して「今我は汝等の所へ行こう。町のほとりのわが夫の殺された所に沢山の密酒ミョードを用意せよ。そこで供養を行おう」と。そして出かけ、墓場を作り、次で酒を飲ませ、酔が廻つた所で自分の年少親兵達ボクシに打ち殺せと命じ、五千人殺させた。そしてキエフに帰り国土の整備をした。

（第四の復讐）スヴァトスラフの治世の初め世界開闢紀元六五五四年（西歴九四六年）会戦でドレヴリヤシン族は打ち負けた。そして町々に籠城した。オリガはその子と共にイスコロステニの町に向つて進んだ……一年間攻めたが町は取れなかつた。そこで使いをやつて

「もう自分は復讐を考へてない。貢物を取ればよい、それも些少でよい、一軒につき三羽の鳩と三羽の雀とを与えよ」と。……それを兵士達に一羽宛渡し硫黄を小さな布切れに包んで糸で結び附けさせ、そして放つた。町は焼け、人々は町から逃げだし、オリガは彼等を捕えることを命じた。町を取つてそれを焼き、町の長老達を捕え、その他の人々は——或は殺してしまい、或は奴隷としておのれの家来達に与え、残りの者には貢納を納めしめた重い貢納を彼等に賦課した。」

そして右の本の註によると、これを単に口碑伝説程度のもものと見てゐるようである。ロシア史の書物も二三読んで見たが、キエフ・ロシアについては極く簡略な記載しかないの、一寸判断しかねるけれども、マゾツホが作中オルガが貴族達に色々の死刑方法を施す所に自ら註して「すべてこれらの怖ろしい行為のすべては、いずれも、歴史的に正しく記述してある。」といつてゐるのは註目される歴史上実際に行われたことがあるという丈の意味なのか、特にオルガの行為として正しい史実だという意味なのか一寸分らぬが後者とすれば、マゾツホ自身がグラーツ大学で歴史を教へていた人であることから見て、根拠



のあることではないかと思われる。オルガがコンスタンチーノブルで洗礼し、ヘレナの洗礼名を授けられた当時の記録はビザンツ帝国側には詳しい史料が残っていることで、これから推しても、単に口碑扱いはできないのではなからうか。

又マクに対する刑罰の残酷さが、リアリテイを缺き詩人の空想にすぎぬように思われるかも知れないが、人間の手足を切つて畜生にして飼うというようなことが古代では必ずしも珍らしくなかつたことは

例えば旧約聖書士師記第一章に

アドニベゼク<sup>おほゆび</sup>いいけるは七十人の王たちかつてその手足の巨指<sup>おほゆび</sup>を斬られて我が食机の下に屑（英訳聖書では meat とある）を拾えり神わが曾て行いしところをもてわれに報い給えるなりと

とあるのを見ても分るとおりである。異教時代のロシアの公妃に帰せられている事蹟を単にそのことの内容自体から虚構視すること



は却つて真実を誤ることにならう。

誤解はないと思うが念の為書いておく。右に口碑か史実かを問題にしたのはオルガのこの小説に描かれた行為についてであつて、オルガや、イゴールや、スウアトスラオス自体の存在については殆んど争いはないのである。オルガが亡夫の弔合戦に外征し、後長く摂政するところは、日本の神功皇后の事蹟に酷似しているけれども、この点では、神功皇后よりもずつと伝説性は少いのである。因みにオ

ルガは原文では Czarina となつており、コンスタンチノブルで元首としての待遇を受けたことから普通は「オルガ女公」としているのであるが、これを公妃と訳したのは、一つには女公の字面が女王、女皇見たいに熟していないからであるが、又一つには神功皇后の称号の例えの連想があつたことによる。

### 三

マゾヒストとしてこの小説を鑑賞してみよう。

先ず女主人公（文字通り女主人である）のオルガである。オルガは、亀井勝一郎の表現を借りれば、「美貌の皇后」である。これ丈でもマゾヒストは参つてしまう。右にいつたように原文には Czarina（ロシアの皇后、女帝）とあるのであつて、公妃といつても、ロシア人の首長として、最高貴の身分に在る女性である。従つていわゆる「シユトルツ」を

十二分に備えていることは文中所々に見える通りである。加うるに理智的な美貌を以てする。男と生れてのマゾヒスト冥利にはこんな女性の前に跪いて見たいと思う。

殊に嬉しいのはオルガには少しもケチがついていないことである。この種の小説で主人公が最後に失脚したりして何か歓善懲惡的な結末になる位後味の悪いものはない。マゾツホの小説中にもそういう失敗作がある（例「ゴザツクのプロメルニツキイ」）。所がオルガはこんな残酷を行いながら令名噴噴、「聖オルガ」とさえいわれているのであるから、この点何の幻滅感もなく、それ丈マクの悲劇が引立つというものである。

さてマクを見よう。本当にこの小説を味うためには徹底的にマクの身になり代つてみる必要がある。マクはデレヴァン人の首長たる侯<sup>クニヤージ</sup>であつて、ロシア人の首長たるイゴールやオルガと本来対等な人間として登場する。これは大切な点だ。というのは、彼がオルガと同等の王侯のシュトルツを備えているということは、後の顛落に於ける彼の屈辱感がそれ丈大きくなることを示すといえるからである。

侯として、一人の男として、彼はオルガを

恋した。その眼にはイゴールは恋敵でしかない。だから彼はイゴールを殺した。オルガへの彼の身を焼くような恋がこの小説の全低音をなしているのだ。だがこの恋は失恋に終るオルガは単に拒絶するに止まらず、彼が彼女を愛すること自体罰すると言明するのである。そしてイゴールに操を立てて彼に復讐する。いいかえれば彼は恋敵に敗れたのである。自分の愛する女が自分の愛を踏みつけにして他の男を愛するのは想像しうる最大の苦悩の一つであるが、マクは未亡人たるオルガの下に在る間生涯それを味わつたわけである。

一つにはイゴールの死に対する復讐として一つには彼が彼女を愛するの不遜を敢てしたという罪に対して、彼はオルガから罰される身分上の対等関係と一旦成立しかけた夫婦関係は忽ち消えて、上下の支配従関係と変わるだがどこまで顛落させられるか分らぬ中に彼は先ず祖国の滅亡を知らされる。新らしく成立する支配従関係が、祖国を滅ぼした不具戴天の仇敵への隷従なのだということは、祖国の首長たりし身にとつては殆んど無限の苦悩である。

然しそれはまだ最後ではない。問題はその

上下関係の規定である。オルガは彼にどのような隷従を考えているのか。「お前の奉仕は最初にして最後だ。」と初夜の晩宣言した時いやその前に「半ばおどすような、半ば哀れむような」眼附でマクを見やつた時、オルガの脳裡には既に四肢を断ち切られて這う彼の姿が浮んでいたに違いない。臣下となり、奴隷となること、それ丈でも既に王侯のシュトルツを持つ男にとつて堪え難い苦悩である。だがオルガは彼から人間としてのシュトルツさえも奪つてしまひ、畜生として生きること強制するのである。上下の距離は今や公妃という最高位とその家畜という最下位にまで開かれる。顛落の苦悩は従つて愈々大である二重、三重の苦悩。

だが、さてマクはマゾヒストである。だからオルガからかような罰を加えられてながらも、その愛は愈々狂熱的になつて行つたと見なければならぬ。右のような人間として堪えられぬ恥辱を忍び、苦悩に堪えて生きていた以上、それは彼のオルガへの愛が彼を生に執着せしめたからと見る外ならないのである。自分をあらゆる点で破滅させた女をどうしてもあきらめることができず、human bondage（人間の絆）に縛られて屈辱に甘ん



ずる、このマゾヒストの宿命を、マクは最も極端な形で象徴してゐるのである。

所で、一旦かようにマゾヒストたるマクの身になつてみると、事態は何と羨むべきものであるか。あらゆる苦悩、あらゆる屈辱は、それがオルガに由来するが故にマクには愉快と変る。彼は「美貌の皇后」の家畜として飼われるのである。それも四足の真似をしてゐる薄汚ない空想上の家畜ではない。女主人の意志に従つて手足を切られ、四足で這うことしかできない徹底的家畜化である。〃美貌の公妃の犬となつて生きる〃、考えて丈でもマゾヒストにとつては胸がキューとなる位の幸福の境地ではなからうか。

マクはオルガを愛し続けている。その恋はいや増すばかりだ。だが、既に畜生の境界に貶された以上、彼の愛は畜生の人間に対する愛でしかない、犬の女主人に対する愛としてしか通用しない。

そこでオルガの気持を考えてみよう。食卓の下にマクの姿を見る毎に、オルガは「罰せらるべき人間」としてのマクを思い出して蹴りつけるであろう。が時が経つ中に、「罰せられた姿」の非人的なるが故に、「人間としてのマク」を思い出すことは次第に減じ、無

関心になつてしまふ。つまり憎らしくも何ともない単なる家畜として、飼犬の一匹として見るようになるであろう。そしてその間マクが犬として自分を崇愛していることも分つてくる。マクが奴隷の分際で夫たろうした時オルガは彼を厳しく罰した。だが今は犬となつたマクが犬としての分際を守つた愛情を持つことは別に彼女の氣に障りはしない。そしてマクを犬として扱うことはむしろ復讐の意図に沿うものである故に、オルガは何年か後には、「犬としてのマク」に犬に対する愛を感じるようになる。夫を熱愛する妻が別に愛犬を持つことが不思議でない以上、犬のマクを可愛がることはイゴールへの操に反するものではない。

かくてマクはオルガの愛犬になる。一人前の男としてオルガを恋して失恋した彼は、かようにして一匹の犬として遂にオルガの愛情を獲得する。終始一貫していた彼の恋は或る意味ではかなえられたのだ。勿論その頃には祖国の滅亡などは念頭を去つてしまつてゐるであろう。かつて侯であつたことも忘れてゐるであろう。かりに思い出したとしても、一国の首長として勞多い人生活を送るよりも、オルガの犬として可愛がられる今の生の方をよ

り幸福であると肯定するだろう。そしてそれはマクに限るまい、美貌の公妃の愛犬となつて生きる幸福の前に、他の人生を喜んで捨てないマゾヒストが一体あるだろうか？

さてマクがかように幸福だつたとする、オルガの復讐は果して成功したといえるだろうか？

(おわり)

### あるマゾヒストの手帖から

(六月号の補遺と訂正)

第七「舌」で西太后に寵せられた宦官の名をあげてなかつたが、これは「李蓮英」であつた。

### 【読者通信】

(投稿歓迎)

自分の容貌を乙上とつけて4Sクラブ探訪記以後、婚約者と東山公園旅館で事実上の結婚を夫君には処女である事の勿体をつけて致されたる由、物凄く体験記を書いて御目見えする志津子を応援せよと予告され、そして新婚の思い出濃厚なのを、とあつて読者を引きつけておいて、さて、それつきり筆を断つたとは、でも、何んと割れきれない芽出度しであり、あつけない二俣志津子さんのカラストロフィであつた。読者は啞然たり。

(加佐和天恩)

○二俣志津子さんからは編集部宛いろ／＼お手紙を頂いておりますが、家庭を持たれると特に新婚の間は纏つたものが書けないそうです。皆様の御意向は十分伝えましょう。

# 被 虐 の 愛 情

若 林 啓 子

私は今、青酸カリを夫の机の抽出から取出しました。夫が時計の鍔を洗落す為に使うこの劇薬を私は掌に載せて、自分の口の中へ投げ入りたいという強い欲望を制しきれずにあります。

今宵は夫が酒に酔つた余り夕飯の中に私の髪の毛が入つていたといつて怒りお膳を引つくり返して筑波風の吹きすさぶ夜中オーバも着ずに出て行きました。後に只一人取残された私は熾炭火鉢の上にかゝつた薬罐から迸り出る湯気を眺め乍ら、乱雑に取散らかつた器物を取片づける気も起きず、急に押寄せた寂莫と感傷が過ぎ去つた回想と共に私の心を死へと近づけて行きました。

私が十六才の時、母に連れられて駒込神明町の春駒という芸妓置屋の門を潜りました。

母と弟と私の三人の家庭でその日暮しがやつとの生活でしたが三月に小学校を卒える只一人の弟だけには中等教育或は其れ以上の学校へ上げてやりたいと母と相談した結果近所の染物工場へ勤めて日給五十五銭を





貰つていた私は遂に芸者になることにきめました。

五十を過ぎたばかりの円顔の小づくりの女主人は私の顔を見ると、

「お母さん、この子は立派な芸者になりますよ。緞量はいいし、気立は優しそうですし。」

と直ぐ私を抱えることを承諾しました。母と私の前に出された半紙に、私は小学校を卒業以来始めて持つ毛筆で、金百円也の借用証書をしたためました。母はその金を受取つて弟の中学へ入る為に必要な洋服や教科書等を買える嬉しさの反面、私の横顔を見て涙を落したのを私の目に強く映じて忘れることが出来ませんでした。

その日から芸妓見習の私は、一日中こま鼠のように働きましたのでお女将さんからも一本の芸者さんからも可愛いがられました。中でも私より二つ年上のキユーピーさんと皆から呼ばれている半玉さんは、お金があれば近所の御好み焼やおそばやへ連れて行つては御馳走してくれました。

弟から無事中学に入つた。姉さんのお蔭で入れたのだから一生懸命勉強するから姉さんも頑張つて下さいという簡単な葉書が来たのは梅雨の霽陶しい日でした。

見番、たいこ持、とかいろくの言葉を覚える中に私も手踊りやら三味線のひき方を習い出し、半年目に半玉として御座敷に出るようになりました。見番には夢香という私の名の札がかゝり出してから私は毎夜の様に御座敷がかゝりました。こうして派手やかな御座敷に出ては太鼓を叩き或は踊っていると、世間でいう程芸妓というものが辛い稼業だとも思えず、幾分なり共出来た御小遣を母に送つたり、キユーピーさんと御好み焼屋へ足を運ぶ様になりました。一年半は踊りも仕込まれ一通りの踊りは何んでも出来る様になり、三味線もひける様になつた私は、一人前の芸妓として御座敷へ出るようになりました。

世にいう水揚げの客は、私が半玉時代からいつも可愛がつてくれた大村という三河島の方の鉄工所の主人でした。背は余り高くはありませんが、小さい時から鍛き上げられたというのか肩幅の広い筋骨の逞しい五十近い人でした。その夜の感想を回顧して見るのは私の今の気持ちに比較して見ると商売とは言いやら儚ない悲哀も交わりつゝも清らかな一夜だつたと思つて居りますので、深く思出して見る気が起きません。然しその大村の為に私の暗い人生が始まろうとは運命とはいえ余りに

も無残でした。私が一本になる二月程前から日支事変が勃発して大村は益々軍需景気に煽られて金廻りがよくなりました。

私が一本になつてから大村は毎夜のように通いつめて来ました。普通のお客の様に多勢の姉さん芸者や半玉さんと呼んではくれず、いつも私一人でした。

私が大村と床を共にする六度目の夜でした。

夕食もすんで待合の女中さんも床を敷いて引下つた後、

「これは少いけど当座の小遣だ」

といつて百円札を二枚私の手に握らせました。私は心の中で百円は母に送つて、残りの百円で買いたいものをあれこれと考えていると、大村が隣りの寝室へ行けと目配せしました。その時の眼はいつも笑うと童顔の様な大村と同じ人物の眼かと思う程険しい獐猛な眼をしているのでぞつとしました。未だ九時を少し廻つたばかりで時間も早いのにと思いましたが大村は既に立上つていたので抗う訳にもいかず仕方なく四畳半の部屋へ入りました。前二回の葵の間と違つてこの桐の間はこの夕月の待合の一番奥の座敷であることは半玉時代から知つてはいましたが、この

四畳半に入ることとは始めての私は大村に教えられて襖の鍵を閉めました。

小さい時から内気で素直だった私は促されるまゝ帯をほどき御座敷着を脱いでえもん掛けかけて長襦袢姿になると突然大村が背後から飛びかゝつて来て私を羽交締めにしました。

「あッ悪ふざけはよして。」

「何をいつているんだ、今夜は一寸変つた遊びをするんだ」

「乱暴はよして島田が崩れるから」

「髪なんか何だ。こわれたら又直せ。」

余りにも荒々しい大村の態度と言葉に一本になつたとはいえ未だ数日か経つていない私の胸には何かしら不安と恐怖の念が犇々と迫つて来ました。

大村の手を振りほどこうとしてもがくと彼の足が私の片足を掬つたので折重なつて蒲団の上へ横倒しになりました。彼は膝で私を押えつけたまゝ私の両手を後手に締めあげると腰紐で固く縛り上げ、そして自分の鞆の中から麻縄を取り出すと再び両手首を強く縛り直して今度は胸から両腕へかけて喰込む程三重三重と完全に後手に縛り上げました。

「何をするんです。早く縄をほどいて」

半玉時代から春画を見せられたり、姉さんやお女将さんからそれとなく智識はうけてはいましたが、こんな乱暴な真似をされるとは夢にも考えていませんでしたので、必死に口で反抗しました。

「うるさいことをいうな」

そばにあつたハンカチを取り私の鼻をつまんで無理矢理に口の中へ押込み、帯上げでその上を縛りとう／＼完全に猜轡迄かけられてしまいました。大村は今夜私をこんな目に逢わすことを予め計画していたのでしよう。鞆から太いのと細いのと三通りの麻縄を映画に出ってくる御用聞が結んである様にした其の縄の一端をもつてする／＼とほどくと私の縛られた手首に再び太い麻縄を縛りつけ、私の体をかゝえこんで床の間の柱に身動きも出来ぬ程に括りつけました。もがけばもがく程長襦袢と肌襦袢に包まれた私の瘦腕に縄が喰込んで来て苦痛と羞恥に私は呆然としてしまいました。大村は予定の第一の行動が終つたのか紫煙をゆつくり吐き乍ら私の顎に手をかけ薄気味悪い微笑を漂わせて次の行動にかゝりました。残りの二本の縄をほどいて私の片足首に固く縛りつけ股が裂ける程引張つて隅の柱に括り、今一方の足も同様に引張られ別の柱

に括りました。

羞恥、忿懣、あらゆるみじめな姿態を大村の眼前に晒け出した私は反抗の力も失つてぐつたりした後やつと縛めを解かれたのも束の間、長襦袢から肌着から腰のもの迄とられ、その四畳半の隅に設けられた洗面所へつれこまれ大村の眼前で用を足さなければなりません。如何に金で客に買われた自分の肉体とはいえ、これ程迄に無残な極刑にあつた私は縛しめを解いて貰つたらすぐにもこの部屋を飛出すつもりでいましたが再び座敷へ連れ戻された私は床の中へ入れられ、凜然と抓られて、悲痛なうめき聲をあげ続けて遂に不眠の一夜を過しました。

翌朝乱れに乱れた髪をどうやら手で束ねてやつと春駒へ帰つた私はすぐに床に入つて、悪夢に呻され乍らも幾分か休養をとることが出来ました。髪結さんに行き銭湯へ入ろうと肌から繻絆をすり落そうとした時、私の腕には未だ昨夜の縄目のあとが歴然と残っているのにびつくりして急いで着物を着直して忘物があつたふりをして銭湯を飛出しました。春駒へは風呂へ行つたと見せかける為、動坂松竹館の看板を見たり本屋で頁を繰つたりして時間を潰して帰りました。夕方から降り出し



た秋雨は次第に激しさを加え、二階の窓から色街に降りそぐ雨の風情に見とれ乍ら芸者稼業に身を沈めてから始めて味う己が身の佗びしさに私はとめどなく溢れ出る涙を押えることが出来ませんでした。

「夢ちゃん、夕月さんから御座敷だよ」

階段を上りつめた所に両手をついて女将さんが呼びました。「あゝ又大村」と私は未だ見果てぬ悪夢に再びさいなまれることを考えると、

「お母さん、私身体の具合が変なの、アレらしいから今夜は休ませて」

「そうかい、それじゃ仕様がな、蒲団を敷いて早くおやすみ」といつて下へ降りて行きました。そして其後大村からの御座敷は断り続けました。

二年前に百圓の前借りで身を沈めましたのに半年の半玉見習時代と、半玉時代の僅かばかりの花代と最近の御披露目に使った費用の為に三千円近くの借金のある私は現実には芸者稼業の辛さを知つても母の許へ帰る訳にも行きませんでした。

体の具合が悪いからといって二日ばかり寝込んだ私にお女将も水揚げが終つたばかりで体の変調があつたものと思つたのでしようか優

しく枕元へ来ては色々と言葉をかけて呉れました。起きてからは半玉さんや朋輩衆と一緒に御座敷へは出ても、大村からの御座敷は何んとか理窟をつけて断りつづけてました。

が、執拗な大村は春駒屋へ度々足を運んで参りました、私は顔を見合わせるのが厭で勝手口から勝手下駄をつゝかけて裏道から逃げては、時間を潰して居りました。が戸日お勝手女中のお弓さんから大村が私を身うけすると云う話をしにきていると聞いて思わず冷いものが背筋を流れる様な気味悪さでした。

誰があんな男の許へ、と固い決心をしてはいても所詮金と義理に束縛されているこの世では、あんなに優しいお女将さんでも矢張り金にはかえられないのでしよう、又今金廻りの良い大村に多額の金をつかまされたのか或夜私の借金を最後の切札として大村の妾になることをすゝめて来ましたが、三千円という借金のために私はついに大村の許へ行かなければなりませんでした。

大村が私の為に用意してあつた家は東京の北東部、東京と千葉県の境界を流れる江戸川のはとり、帝釈天で有名な柴又町でした。

庚申という日は水商売関係の人々の守護神といわれているらしく粋な姐さんや派手な衣裳の人や老人の姿が見られる所で東京とはいつても殆んど農家で静かな環境と江戸川のせゝらぎは大村の悪魔の手さえなければ恐らく幸福に恵まれた平和な生活を送ることが出来たと思われまふ。

その住居に移つた日は私の母も呼んで三人で夕食を食べ、大村は、

「お母さんには毎月三百円づゝ御小遣をあげますから、まあ歌舞伎なり温泉へ行くなり、のんびりお暮しなさい」

といつて三百圓の金を与えました。母は大金を貰つた嬉しさに腰も落着かず、長居は無用とそゝくさと歸つて行きました。

そしてその夜から彼の残酷な行為は始められました、この家は大村の好みによつて建て直したらしく二階の六畳は梁が五六本むき出しになつてはられた天井が可成り高い部屋で下の八畳、四畳、四畳半の木の香りも澄々しい簾簾や鏡台や人形の飾つてある美しい部屋とは比較にならない陰鬱な部屋でした。

二階へ上つた途端彼は私の片腕を後手に捻じ上げて、

「おい、よくも貴様は俺を騙したりして逃げ

ていたナ、これから逃げようがどうしようが俺は貴様を掴まえて、いじめて苦しませてやるからその積りでいろ」

既に覚悟を決めていた私は夕月の場合の様に声をあげませんでしたがいゝと締め上げる腕の痛さに耐えかねて遂に悲鳴をあげました。

「何だこれ位で音をあげるのは未だ早いぞ」

私の帯を解き、紫檀紅青赤と五色の色彩が入乱れて舞う中に足の白さが自分の眼にもはつきりと映じて来ましたが、既にその時は着物も剥がれ、長縄絆の乱れた姿に両の乳房までが浮び上つて居りました、荒縄で忽ち後手に縛り上げられた私の体は梁に宙吊りにされました。

細い竹棒は唸りを生じて私の腰や背中に躍りかゝつて来ましたが、私の悲痛なうめき声は断続に彼の耳に快よく響いたのでしようか。

梁から下された後は手首の間に竹棒を挿し込まれて締め上げられ、彼の片腕は私の髪の毛を掴んで後へ引倒そうとします、小一時間も続けられ、私の身体は既に疲労のどん底に陥込んでゐる時に、荒縄の儘床の中へ担ぎこまれました、秋のさえざえとした月の一夜は終わりました。其の翌朝彼は帰りぎわに金をお

いて、今日中に高島田や結綿等の日本髪のかつらを買つておけといつて出て行きました。何のためにかつら等を買わせるのか問い糺す余裕もなく彼は去つて行きました。

浅草の仲見世へ足を運び彼の言いつけ通り日本髪のかつらを買求めてその店へ預けておいて映画街へ足を運びました、相変らずの雑沓と人波の間に連らなつて歩く中に、ふと公園劇場の前の立看板を見た私は、途端に電気につれた様に身体が震えて立止り滝つぼの中へ吸込まれる様に木戸銭を払つて座席に腰を下しました。

座席に坐つてから三幕目に、立看板の現実の姿が舞台上で繰り広げられました。

旗本くずれの男の前に美しい娘が後手に縛られて引すえられ、弓の折れで叩かれは悶える姿に暫し恍惚とした私は悶え苦しむ娘の姿の美しさに激しい魅力を受け段々とその男が大村、娘が私の様な錯覚に陥りました。

難しい医学や精神作用の術語を知りませんが私の心の有様を端的に表わすことは出来なくても私もこうして男から叩かれ虐めつけれることに血潮の興奮して行くのに感ずいて参りました。何かしらかつらを買求めた理由が解つて来た様な気がしました。

重いかつらを持つて柴又へ帰りついた私は念入りに化粧して初々しい結綿のかつらを冠つて大村の来るのを待つ自分の心の変化に自分自身でも驚きました、秘かな私の期待は空しく其の夜は急用でも出来たのか大村は訪れては来ませんでした、空しい一人寝の佗しさをかこつた私は、そつと自分の両腕を後に廻して床の中を二転三転と空しく転りました。

其の翌日の午後大村は訪れてきました。

小一時間ばかり酒を飲んだ後、大村は二階に上つて行き、私は念入りに化粧して結綿のかつらを冠り、一番派手な大柄な牡丹模様の大長縄絆と着物を着て階下の戸締りを全部して二階へ上りました。

同じ階段へ昇る一昨日と今日の私自身の気持の変化は恐ろしい程でしたが、それを表面に現すことの出来ない程私は内気でもありません。真昼ではありますが、大村は既に雨戸を閉めて百ワツトの電灯が輝いて居りました。

「覚悟は出来てゐるんだろうな」と私の姿に満足したらしい苦み走つた笑いを浮べ乍ら、「どうだ、今日はお前も力のある限り反抗してこい、只俺のなすがまゝでは俺も面白くな



い着物なんか買つてやるから心配するな」

私も突嗟に思いきり彼の腕に噛みついてやりたいと思いましたが。肯きはしませんでしたが心の中は彼の提案を受容れました。

私もあらん限りの力を振絞つて抵抗しましたが、小さい時から鉄工所で鍛えた彼の力は私の帯、着物と剥ぎとり、すつかりはだけた長繻絆姿のまゝ荒縄で後手に縛り上げられ柱に括りつけられました、昨日劇場で観たあの場面が再現された様な不思議な喜びに浸るのでした。

さすがに彼も疲れたのか、例の竹棒を杖にして激しい息使いをして居りました。

私の頸に竹棒を強く押付てお定りの毒舌を振つた上、今度は私の両手首を天井から吊し腋の下を操り私の苦悶の絶叫を堪能すると、例の如く素裸にして荒縄で後手に縛り上げ、私の肉体のあらゆるものを自分の所有にして



しまいました。

彼の歓喜を想うと、あれ程迄に嫌い抜いていた大村の暴虐行為に私自身が次第に打込んでいつて行くのを不思議にさえ思いました。

大村も恐らく大胆に又奔放的に自分の望む行為が出来る事にすつかり満足しきつたのでしようか、本宅に帰ることも忘れて連日連夜

二人の気狂芝居は続けられました。

今日は高島田、今夜は銀杏返し、今日は結綿と私を様々な人間に架想してそれなりの責めを私に加えて参りました。

様々な縛り方、様々な責め方、大村も私も只二人が責め責められる事が、人生のすべてでもあるかのようになり熱中しました。大村も私が大村の思う儘になる事に満足し、どんな事があつてもお前を手放さないといつて泣き叫んだこともありました。

やがて師走の風も吹き募る或朝玄関に一人の見知らぬ中年の婦人が訪れました。

其れは大村の奥さんでした。奥さんの話では大村は全然家に寄りつかず其の為女手一人では多数の荒らくれた職工を使い切ることも出来ず、或る一日大村が三河島の宅へ帰つて来た後をつけて来てこの柴又の家を探しあて

「今日三河島に珍らしく腰を落付けている隙を見て尋ねて来たとのことでした。」

私はこの奥さんの話し方が静かで強圧的に別れる、手を切れというのではなく恰も物を乞い憐れみを籠めた態度に私は今は勿論大村に変則的ではありませんが愛情の芽生え初めた時ですし始めてお逢いした奥さんにも女性同志の情愛を感じ、如何にすればよいか私には突嗟に判断する程の理性を持合わせては居りませんでした。

天ぶらそばを二人で食べて世間話の幾つかを語りあう中に、お互いに女性の弱さというものに恐らく同情し合つたのでしょうか、世にいう本妻と妾の醜い対立は微塵もなく時の経つのも忘れて二人は話合い、奥さんは私と同様内気な人らしく話の結末迄に進められないらしく、結局私が自分から進んで大村と別れるという約束をしてしまいました。始めてもあり最後でもあつた奥さんとの面接はこうして終りました。京成電車の柴又駅まで送つて行き、お別れしてから柴又帝釈天へ参詣して江戸川堤へ出ました。

筑波風の寒風が土堤に立つた頬に強くあたりました。市川国府台の里見の森が夕日に映えて紫色に立ち、江戸川の菱波が川下へ押合

い押合い流れて行く中に一そうの小舟が川上へ懸命に漕がれて行きます。筑波山が薄鼠色に浮んで見えて、尚眼を左に転ずると常磐線の鉄橋がこの巨大な川に跨り、雌伏の冬を迎えて江戸川名物の桜並木も足許の川原のすみきも色あせて緑の色はいずくにも見当りません。只一人佇む私の心には愛慾にも金銭にも負けなかつた心の片隅にも感傷的になり易くなる人間の清純さが宿つていたことに、ひそかな喜びを感じ私の顔に幾月振りかで微笑が漂いました。

あゝ然し頸をかえして振向いて土堤を降りようとした時にすぐ眼下にはあの家が見えるではありませんか、あの二階も――。大村と別れようと固く決心していた私の心にも妖しいざわめきが潮騒のように起つてくるのをどうすることも出来ませんでした。

それから三日後に大村が訪れました。余りいける方でない大村も今日は珍らしく三合ばかりの酒をのみました。私は酒の酎を仕乍ら、奥さんの来たことを言わずに別れ話を持ちかけました。大村も今日は何か考えがあつての事かじつと私の話をきいておりましたが、

「別れたらどうするんだい、又神明町へ行く

のかい」

「まさか、そんな事出来ないわ」

「じゃ、何うやつて暮して行くんだい」

「そんな事迄考えてはいないけど、只こうしている、貴方にも奥さんにも申訳けなくつて、年も変るし、生れ変つて真面目に働いて見る気持なの、今なら仕事は贅沢を言わなければ何だつてあるんですもの」

大村も私の決心の固いのに一応自分の決断のつかない気持を私に引ずられた恰好で二人の別れ話はこゝに決まりました。再び巡り合えないかも知れない、又逢つてはいけない私達二人の最後の夜のすさまじい光景はこゝに申上げられる勇氣もありません。

「俺は何故こんな狂暴な性質に生れて来たんだらう。親をうらんでよいのか、俺自身がどうすればこんな気狂染みたことをしないで済む様になるのか解らない。お前と別れたら俺は生きる楽しみもなくなつてしまう。厭だ厭だ。お前と別れるのは」

と私を抱き締め乍ら男泣きに泣いておりました。

歳末の押迫つた三十日、柴又を引払つて四ツ木の母と弟の家へ帰つた私は何年ぶりかで親子三人の水入らずの正月を迎えました。



軍需景気の最中で正月の廿日、私は本所平川橋の鍍金工場へ女工として入り、一生懸命に研磨工として働く中に、その工場の営業係をしていた現在の夫に結婚を迫られました。

私より七つ年上の彼は、色々と親切に私をかばってくれますが、私の過去を知らないだけに、清い恋愛というものを行う資格が私自身にはないのだと決めこんでおりますので彼の求愛をうけ入れることが出来ずにおりましたが、或夜彼のアパートへ誘われて夕飯を御馳走になり乍ら自然に私の歩んで来た過去の生活を話しましたところ、それでも彼は力強く私を抱きしめました。そして其夜遂に私は彼の情熱の懷に溶けこみ、生れて始めての心から愛し愛された一夜をすごしました。

私の第二の男、最初の夫たる讓二も私と結婚して一月程は優しい夫でしたが、段々と神経質なそして我儘な性格を出し始め、可なり優れた時計の技術を持つて居乍らも、内職に他人から預つたものを修理もせずに幾日も机の上に投出した儘毎夜深酒を飲み、二日おき位に工場の方も休む様になりました。

然し私は讓二のそうした生活態度よりもっとく私自身に不満足な事がありました。

それは大村の為に教え込まれたあの行為を讓二は決して行いませんので、私自身が夜の生活に満足感を得られなくなり、必然讓二にもそれは感ぜられ、彼の持前の神経質に尚拍車を加える結果となつてしまつたのだと思います。いつその事讓二にその事を打明けようかと幾度か思いましたが、あの淫らな様相をどうして新婚の家庭の中へ巻込むことが出来ましようか。

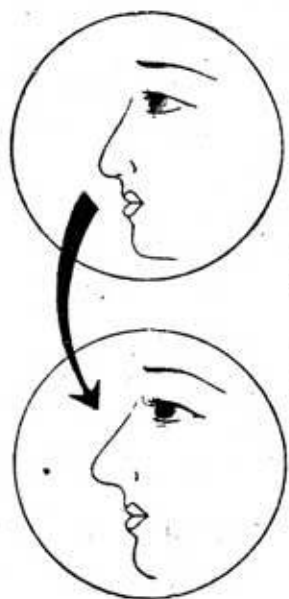
今宵のこの出来事、私は讓二にすまないと思つて居ります。私が大村という人間の為に夫婦の最も大切な務めが満足に行えなくなつた私自身に、どうしてよいのか解らなくなつて来ているのです、こうした事を一体誰に相

談したらよろしいのでしょうか。

小学校だけか卒えていない私には私自身の慾望と意志と理性を巴と交らして見ても教養のない為か、慾望のみが昂進して居ります只昂進するその慾望が満たされないものだから、そして意志も理性もなかつたら一体私はどうしたらよいのでしょうか。

私は意志の弱い女です。こんな事位で死ぬ等と考へたりして——でも、この手紙を書いている中にすっかり気分が落ち着いてきました。此の薬品はやはり夫の机の抽出へしまつておきます。そして又明日から諦めと忍苦の生活を続けて行こうと思います。

## 美容整形の榮呈



術前

術後

# 永久不変

## ・ 内 容 ・

隆鼻、短身、豊頬、二重瞼、わきが、キズアト、はげ、シワ若返り、肥り過ぎ、やせ過ぎ、過小乳房、不妊症、更年期障害、脳下垂体移植

大阪市梅田新道交叉点  
東一丁電車站

三 山 醫 院



# 女のズボンについて

— 沼正三氏に —

吾妻

新

沼正三氏のマゾヒズム資料は毎号面白く拝見していますが、前号のスラックスの説明は根本的に誤りがあるので、これを機会にすこし述べさせて頂きます。

第一に、風俗として女のズボンとスラックスとを混同されていますが、これは言葉の争いでなく、歴史の意味がちがうので、区別しなければなりません。スラックスは氏自身が述べているようにアメリカで作られた流

行に限定されるべきで、すでに流行を越えて女の服装の重要な一部分となつた今日ではズボンと呼ぶべきです。スタイル・ブックなどで例外なくスラックスという言葉が用いられているのは、デザイナーなどというものがいかに衣服に無知であるかを示しているにすぎません。

専門的議論は本誌と関係ありませんから別として、ごく、簡単に要点だけ申上げると、女の服装の変遷は正確に女の社会的地位と比例しています。男女ともにスカート形式であ

つたヨーロッパ（アジアでは反対に男女ともズボン形式が起原。その理由は略します）で男がズボンを採用したときなぜ女がスカートを守せざるをえなかつたかは、父権制の確立と、女の社会的地位の低下から説明されます。そして、ひとたびそれが風俗として固定されると、逆に、女はスカートを穿かなければならないような観念体系ができあがり、その頂点に道徳がつくりあげられます。一千年の無形のこの教育は、女の地位の低下とむすびついて、女みずからが非活動的で不合理な



スカート形式を唯一の「女らしい」服装と思  
いこませるに至つたのです。

保温、防護、活動という衣服の三大機能か  
ら言つて、スカートがいかに不合理なものか  
はおわかりでしょう。とくに最後の活動性とい  
う点で言うならば、男とおなじ構造の二本  
の足をもち、おなじように交互に動かして歩  
くものを、別々に包まず一枚の布でくるむこ  
とはバカげた話です。

だが、だれでもわかるこの不合理を、はた  
して女は一千年も気付かずにあつたでしょう  
もちろん気付いていたのです。しかし「スカ  
ートは女のもの」「ズボンは男のもの」とい  
う鉄則が一切の改革をゆるさなかつたので  
だから現在女がズボンを採用するようになった  
のは、個々人の自覚によるものではありません  
。まして流行ではありません。流行はす  
でに、流行しうる社会的条件を前提とします。  
マダム・ボンヴァードールやジョルジュ・サン  
ドがズボンを穿いてみても、それは男装つま  
り男の奇矯な真似として、流行にはならない  
女のズボンが男装でなく、男のまねでなく、  
健康な服装として用いられるようになったの  
は、女の経済的地位が高まつて、男に隷属し  
なくても生活できるようになつたときです。

第一次歐洲大戰で、はじめてヨーロッパの  
女が大量に職業戦線に進出したとき、スカ  
ートは一挙に五寸みじかくなりました。ズボン  
は部分的に用いられたが、潜在的要素でした  
しかし女の自活と服装の合理化とは内面的に  
むすびついており、ズボンはようやく流行の  
社会的素地をつくつていつたのです。私はそ  
の当時からロンドン、パリ、ベルリン、ニュ  
ーヨークの流行の写真を年代順に蒐集しても  
つていますが、偶然にみえる服装の流行に一  
貫した法則のあることが立証できます。

ズボンが女の服装としてはじめて確立した  
のは第二次大戦以後です。もちろん防空服装  
で馴れたということも表面的なひとつの理由  
ですが、それが風俗として固定した最大の理  
由は、女の地位が向上したことによります。  
この間の事情は、新聞や雑誌に書いたことも  
あり、信越放送局の女性教養講座で四日連続  
で放送しましたが、いずれ私のライフワークと  
して著書の形で発表するつもりであり、ここ  
ではただ私の独断や一時の思ひつきではない  
ことだけを信じていただきたいと存じます。

## 二

そこで私の言いたいのは、女がズボンを穿

くのを喜ぶのはマゾヒスティックだという氏  
の意見についてで。たしかにフックス・キン  
トやカルテールの述べているように、十六世  
紀のフランス版圖で夫婦がズボンを奪い合う  
のは、男女の主権の争奪を諷刺したものです  
だがそれらはすべて女はズボンを穿くべから  
ざるものと信じられた時代の歴史的真理なの  
で、現在には通用しません現在の女のズボン  
は、便利で暖かくて活動的な服装として一  
般化しつつあるので、それを穿く女の心理も  
不当な抑圧から解放されています。強いて言  
えば、あまりにも歪められた従来の女らしさ  
から恢復したということは申せましょう。だ  
が私はハツキリ主張したいのですが、それは  
女の人間性の恢復であつて、男性化はちがい  
ます。どんなやさしい女の子でもズボンは穿  
きます。

二十年前に私は結婚しましたが、その最初  
の日に私は妻にズボンを穿かせ、写真にとつ  
ています。当時、女がズボンを穿く風俗はな  
かつたので、妻はおどろいていたようですが  
私の衣服研究は廿五年前からはじまつていた  
ので、「これが必ず将来の女の服装になる。  
勇氣を出すべきだ」と教えました。もちろん  
私はマゾヒストではありません。マゾヒステ

イツクないかなる行為にも興味を抱けません。また妻はどんな意味においても——肉体的にも精神的にも——男性化していません。私の信ずるところでは、女のズボンは衣服の合理化という点でのみ、一般化され社会化されるのであつて、特殊な男性化された女の性的プロテストとしての試みから普及されることはありえないのです。

したがつて、沼氏が奥さんにズボンをはかせて、そこに男性的なものを感じるのは、氏がマゾヒストだからです。氏は、ズボンをはくことが女にとつて一つの反逆であつたところの古い「ズボン即主権」を特異な心理と結びつけ、いわば自己のマゾヒズムを刺戟する材料として利用しているにすぎないのです。だが、一般の人々はもはや特殊な眼でズボンを感じなくなつています。これは、女が羞恥心を抱かずにズボンを穿くようになったことの裏返しの実事です。だから、沼氏がどのような感ずるかは自由なのですが、それを一般化して、現代がマゾヒズムの世界だとか、女のズボンを喜ぶのはマゾヒスティックだとか考へられると、非常に危険です。

では、私が女のズボンに魅力をかんずるのはなぜだろうか？これは私のサディズムとな

んら関係がないので、純粋な服装の問題となつてしまいます。つまり、女のズボンはキモノやスカートに比して、ずつとあたらしい美を表現しているからです。

女が男とおなじように経済的独立を勝ちうるにつれて、男が独占していた機能的なズボンを採用するようになったことはすでに述べましたが、だからといつて、一部の人々が誤解するように、ズボンはただ実用的な働くための「余儀ない服装」ではないのです。もしそうだとすれば、なぜヨーロッパでパジャマが発達したのでしょうか。パジャマは昼間の労働服ではなく、夜の寝室のための服装です。美と魅力のための、快楽のための服装です。しかもそれは、一般にズボンをはくようになるよりもずっと前から、女は平気で用いていたのです。

興味のあるのは、無意識の中にズボンの魅力が流行の間に認められはじめたことです。その一つはビーチ・パジャマ（海岸を歩く服）として、いま一つは社交界の試みとして、夜ひそかに用いていたものが公然と白昼大衆の眼に曝されはじめたことです。ビーチ・パジャマの競技会は毎年各国で盛大に行われるようになり、あらゆる形態のズボンが試みら

れるに至りました。これは夏季のしかも特殊な場所という条件がありますが、社交界ではそれが四季に拡大されます。

今から廿三年前の一九三〇年に、ニューヨークの社交界にズボンが進出して、人々の注目を惹きました。これはすでに単なる試みでなく、将来の傾向への無意識的な踏み出しなので、同じあの保守的な英国の年一回の流行展ではズボンが優勝しています。翌年この大勢はパリに移つてモツシー、セーラー型、ゴンドラ型その他のズボンが喝采を拍し、ついにベルリンでズボンを穿いた貴婦人が街頭に進出しました。その後年々の傾向はこのあたらしい魅力を追う一方で、昭和六年アメリカの有名なデザイナーのラッセル・パターソンは、近い将来にスカートは影をひそめ、パジャマ・スタイルの服が流行すると予言するに至りました。同年、シカゴでは、結婚衣裳にまでズボンが現われています。

事例は限りがないのでやめますが、ただ、衣服を社会的に分析も考察もしない一般社会が、未来の女の服装をどのように感じていたかの面白い例を一、二あげましょう。昭和四年、ロンドンで開かれた模範家庭展では、女が断髪で美しいズボンを穿いています。さ



らに以前の大正十四年、フオックスで作られた「地球上最後の男」という映画では、最後に残る女たちは足首をくくったエロティツクなズボンや、腰や尻の線のクツキリみえるズボンをはいていました。特筆すべきは昭和五年、上野松坂屋で未来の東京のパノラマ展をやりましたが、そのとき六十年後の東京の女の服装を示すため、モデルの少女たちにオーパーウル式のズボンをはかせています。

これらを企劃し立案した人たちは、女のズボンの普及の歴史的社会的背景も意義も知らず、ただ美と魅力の点から注目しはじめたことを考えると、非常に興味があります。

服装の美や魅力が永久不変のものでなく、時代と共に変化すること、その変化は着ている人間の内容とかたくむすびついていることを知るべきです。キモノはいまの女も着ますがキモノ本来の美を最も發揮するのは封建時代の奴隷道徳で養われた女が着た場合で、それは忍従や弱さや脆さと内面的に結びついて完全な魅力となります。明治になつて、庇髪に海老茶袴の女学生が出現すれば、それはあたらしい魅力として若い青年達の憧れの的となりました。関東大震災以後、女の職業の普及につれて洋装がはじまると、それは海老茶

袴に取つて代る新鮮な魅力となります。そして、現代の最大課題はすでに古くなつてしまつたスカート形式にたいして、ズボンが敵手として現われてきたことなのです。

### 三

ズボンの美は機能的な美です。それは従来のいかなる服装よりも女を活動的に、自由にさせます。そのフレツシユな美は、女のいきいきした会話や動作、ハツラツとした大胆な行為や感じかたと必然的に結びついています。例外はあるでしょうが、原則的に言えば、日本髪にキモノを着て帯を高々としめあげた姿を愛するのは、奴隷のごとくかしづく柔順な女を愛していることなので、それが容易に得られない人々は花柳の巷でイミテーションを探し出し、過去への郷愁を満足させるわけです。人にはそれぞれの時代感覚があり、趣味がある。それを批難することは不当です。ただ、キモノよりも洋装にパーマネントを愛する人が「ふえた」と同様に、スカート形式よりも更に自由なズボン形式を愛する人々が「ふえる」ことは明らかです。これは、柔順一点張の女よりも個性のある生き生きした女の魅力を理解する人々が多くなると完全に

比例するでしょう。

ズボンの美は機能美であるとともに、形態美でもあります。もしも近代の美の追永が、肉体の線をかくすよりも發揮することにあるとすれば、二本の脚を一枚の布で包むより、別箇に包んだほうが理想的であることは明らかです。だからスカートの変遷をみると、こまかいアクセサリーの消長は別として、平凡な正面にタツクを入れたり直線を引いたりして分離の錯覚を起させることが不変の無意識的衝動となつていゝのです。

ズボンをはくと腰の線がハツキリするから醜いという人は、潜在的羞恥感から肉体をかくそうとつとめていゝか、実際に肉体が醜いかでしょう。しかし、醜い肉体はなにを着ても醜いので、服装の魅力は美しい肉体を前提として語るべきです。ズボンは女の腰線ばかりでなく、股や尻の線までハツキリ示してくれます。ズボン以外のいかなる服装も、最も異性にとつて魅力のあるこの部分をこれほど自由には示してくれません。

「オヴァランダース」その他の最近の映画で女優の穿くズボンは、腰から太腿まで吸いくようにピッタリしていますが、この場合は下腹から股間へ落ちこむ線、ハチ切れそうな

臀部の二つの半球と神秘的凹み、円柱のような腿が、われわれの視覚を百パーセント満足させます。しかもそれは裸体ではない。したがって極めてリアリスティックであると共に本質はロマンティックです。そしてロマンティックイシズムは尽きざる夢であるが故に、われわれを永遠に倦ませないのです。

パジャマが広く愛用される理由もそこにあります。肉体は常に隠され、しかも常に見えるのです。アメリカの大きな商会（女のスボンばかりを売る店がたくさんあります）の広告に、特殊な薄い絹製のパジャマがあります。それはゆるやかな仕立てで足首を縛り、半ば透けて見えるもので、「アラビアン・ナイトの夢を偲ばせる快楽」と宣伝してあります。序でながら言いますと、足首を締めるのはそれがアクセントとなり、密着感を与えて性的刺激を高めるからです。私も妻のパジャマの裾にゴムを入れていますが、ピッタリした腰から尻と、この足首の密着感のために、魅力はきわめて深いものとなつています。

ズボンはキモノやスカートのように単純ではない。人それぞれの好みに応じて、どのような変化を加えることもできます。アラビア

の女のスボンのように豊かなものはロマンティックな人のお気に召すし、乗馬ズボンのように密着したものはよりリアリスティックな趣味をみたくします。だから「南北戦争」の主人公のような好色な男が、妻の乗馬服に新鮮な魅力を感じてその服装のまま撫でたり抓ったり叩いたりもするのです。また泰豊吉がフランスの劇場でみたジョルジュ・サンドの女優のスボンみたいに、前から股間を通して尻の上まで太い鮮やかな線を入れて楽しむこともできるし、股間を中心として前とうしろに倒三角形の別色の布を縫いつけることもできます。さらに、われわれの愛撫する指は、なんの抵抗もなく肉体を感じ、その隆起に沿って深く辿り下りることもできる。しかもそれを、確実に眺めることができるのです。

いかなる美しい裸体でも、裸体それ自体は容易に馴れてしまつて、刺激は低まります。私の友人で、妻を熱愛のあまり、一糸まとわず抱擁する男があつたが、半年足らずで倦怠期に陥りました。そのとき私は、服装によるテクニクを教えたのです。あらゆる魅力は最後の一点を残し、それを濫用しないことです。私は二十年間、ただの一度も倦怠を知りません。なぜなら妻は、裸体に触れられるこ

とは稀であり、そのときは電気に触れたように感ずるからです。しかもズボンを通して私は、他のいかなる人よりも妻の肉体を多く眺め、味わっている筈です。

#### 四

沼正三氏のように、女のスボンをマゾヒズムの刺激に利用できると同様に、それはサディズムにも利用できます。それはズボンが特にマゾヒスティックまたはサディスティックだからではなく、肉感的だからです。

森嶋外は「掠鳥通信」のなかで、明治四十三年（一九一〇）二月十八日のパリ通信からパリの薬剤師ジャン・パラの事件を引用して報告しています。彼はサディストで、妻を鉄の鎖で柱につないでおいたのが発覚して訴えられたのですが、そのとき彼は鎖のついたズボンを穿かせていました。ゴンクウル兄弟の「日記」一八五三年のなかには、ギヤヴァルニがあるブルジョア夫人の家に出入りしていたときの描写があります。

「この家には十七になる娘がいたが、これが一寸法師でやつと十二位にしか見えなかつたところで俺はこの娘が俺の友人に惚れているんじゃないかと疑つていた。しかも、娘の



母親は、恋の競争者は御免だとばかり、娘に子供のズボンをはかせ、無理矢理に縄飛びをさせたり、夜は夜で毎晩はげしい音をたてては鞭で娘を叩いていた」

また、ドン・ブラナス・アレラの「奴隷祭」というサディズムの小説では、身分のある美しい白人の娘をあつめて種々の責め苦を樂しむのですが、二人づつ馬車に縛つて鞭打ちながら曳かせるとき、やはりズボンを穿かせる場面があり、表紙にそのシーンが描かれています。キドロドシユトツクの *Stays and Gloves* にもズボンをはかせて鞭うつ描写と口絵があります。

だが、こうしたサディストと私のちがう点は、ひとしくズボンの魅力を利用する以上にそれが直接肉体を傷けないからです。女の肉体に傷痕を残すことは私の審美観を裏切ります。私は美しい肉体を醜くしたくない。たとえば鞭打一つを例にとつても、拘束され鞭うたれることそれ自体にすでに十分の効果があるので、ズボンの場合にはいかに鞭音高くともまず傷害のおそれがありません。また、もつと心理的に言うならば、裸体は自由であるがズボンはそれだけですでに一種の拘束です（本来はもつとも自由である服装が、裏返し

されてサディズムに利用されます。）どんな汚れきつたものでも身につけねばならないこと、それは汚辱の有力な手段であること、しかも密着しているために腰から足首まで感覚を刺戟されること、裸体同様に視線を避け得ないこと、用便の場合にも脱ぐ許可を要すること、その上から縛られるのは痛さよりも「締めつけられる」拘束感が強いいため、苦痛で羞恥感が麻痺してしまわないこと等。いずれ具体的な実例をあげて書いてもかまいませんが、ここでは読者の想像に訴えるだけにとどめておきます。

結婚二日目に、私は妻を裸にして慎重に胴と脚の長さを計り、脚の長いことに満足しました。しかし風俗としてのズボンはスタイルのよさを求めますが、性的遊戯に利用する場合には、脚の長さは必ずしも重要ではありません。なぜなら興味を中心は下腹から腿までの間に集中するからです。私の意味するようなサディストにとつては、極端な肥満型や瘦型をのぞき、大抵のタイプはズボンを穿かせることによつて魅力を増すでしょう。そして私自身は、将来余裕ができるにつれて、あらゆる種類の空想をみたすズボンをつくり、穿かせて、快楽に倦むことがないでしょう。

以上、沼氏の所論に便乗していささか自己を語りすぎましたが御寛容下さい。この種の世界の研究者は少ないのですから、今後もつづけて氏の研究を発表して下さることを、心から願ひ、楽しみにしています。

おわり

### 【読者通信】

（投稿歓迎）

私は毎月書店で貴誌を購入している熱烈的な愛読者ですが、家庭の都合で写真とかKK通信を直接送つて頂くことが出来ずいつも残念に思つて居ります。外にも私と同じ様な人が居られると思います。が、そういう人達の為に何か考へて頂けないでしょうか、郵便局留置という方法があるようですが、それについて誌上にて我回答願ひします。（桑名市榎生）

【お答え】本誌は勿論の事、KK通信や其の他代理部扱いの物でも、外部から絶体内容に内容の出来ぬよう厳重に包装してお送り致して居りますが、若しお内へ直接お届けすることに支障がございますのでしたら、最寄りの郵便局を指定下さつて局留にて送れとお書き下されば直ぐお送り致します。到着すれば局へお名前を申出られてお受取りになればいいのです。但し局留置の期間は十日間ですからその期間内にお受取りにならない時は差出人に返送されますから期間内にお受取下さい。（発送係）



## 或る被虐性愛者

### の手記より

天 泥 盛 榮

#### 第一章

この物語は私の友人の物語である。私はその回想に別に紛飾を加えたわけではない。たゞ、一つのまとまった断片として総合し、分類し幾つかの異つた内容を持つ章に分類しただけである。人々に、浪漫的と名付けられる魂が存在する限り、オスカー、ワイルドの幻影とヴェルレエヌの強烈な異端を思う人々は絶えないのであろう。変質というに余りにも深刻、異常と呼ぶに余りにも高貴な精神の存在の故にこそ、かゝる変態性慾者の、性愛に対する憧憬にも似た、熱愛が生れるのである。換言すればワグナーの音楽に感激を覚え

るものは常にワンダの出現を希み又フツチイの甘美に酔う心は、サロメの心理に繋る。芸術は常に、不健全と変態強烈な病と耽溺と不断の努力によつて偉大である。私は変態に悩むすべての人々に訴えたい。変態は健全なる常態より常に高貴であると。次に始まる物語は主要三つの部分に分れてゐる。仮に私は一つ／＼に標題を付して、概要を分類した。第一章、女猛獣使い、第二章、女調馬師、第三章、秘密倶楽部。そうして参考写真数葉をお送りする。以下「私」と言うのは友人の事である。

この事件の起つた国と時期について、特に某国某市の一九四〇年代の事として置きます。そうして会話は全部日本語に書き改めておきます。

○区の夜は淋しい上に、深い木立が益々陰気な雰囲気を加えて居りました。政治的な大變動の為に、私達は恐怖に掩われた生活を辛うじて続けねばなりませんでしたし、勝利者の大軍に港に溢れて敗者の入る余裕は何処にも見当らなかつたのです。そういう状況の下



にあつては、夜道の淋しさは一入身に沁み入るのでした。緊急に開かれた総会で私達の身の上につき協議して、夜遅く帰途についた私はうすら寒い陽気になつたさびしさも加つて恐る／＼足を動かして居りました。もう五分もすれば自宅に着くという頃、前方が急に明るくなつたと思うと一台の小型自動車が横丁から突然現われ、運転手が私の姿を認めたのでしよう。私の方に向つて直進して来ました。私は面倒な事にならねばよいがと思い乍ら、猶も歩を進めました。自動車は私の傍を徐行して通り過ぎました。恐怖感に襲われた私は唯真直に前方を直視して歩きつゞけて居りました。よかつた何事もなくてすんだと思つた時でした。凄まじい爆音と共に自動車は戻つて来ました。そうして私のすぐ後に来ると静かに徐行しながらついてくるのです。私は血の凍る思いでしたが振かえつてはいけなと言われた先輩の言葉を思い乍ら冷静を装つて居りました。数十米も歩いたでしょうか、それが一里以上の道程の様にさえ思われたのでした。が、突如、「止れ」と声がかゝりました。而もそれが三人位の女の声だつたのです。しまつた婦人兵士だと思つた瞬間私は後頭部に一撃を食ひ昏倒しました。唯遠くの方で自分が

何かに積込まれた事、がや／＼と言う女の声併もそれが日本語でも英語でもない言葉だつた様なかな感じがしただけでした。暫くの間ゆら／＼とゆれていた身体が、静かになつたと思うと誰か力強い手で私を抱き上げてどこかへ運びます。それは確かに男の手の様でした。その男は無造作に私を地上に（尤も下には何かしいてありました）投げ下ろしました。再び私が意識を取り戻す迄に一体どの位時間が経つたのでしょうか。とにかく女の声で私は目がさめました。煌々とした電灯の光がまばゆい程に目にしみて暫くの間、私は室内の何処に何が在るかさえ判りませんでした。しかし目がなれるにつれて私は私の傍らに中肉中背、幾分か太り気味の半東洋的な皮膚を持つた女士官が微笑み乍ら腰かけて居るのが判りました。彼女はR国の軍服をつけて居り日本で言う大尉なのでしょう。その階級章をつけて居りました。R国は極寒の季節を持つた国です。男性の如く彼女はカキ色の上衣と乗馬靴とを着て居ました。それがこの国の士官の正装でした。彼女はゆつくりと腰を上げて言いました。

「さあ、もう気分はいゝのですか。」

そう言い乍ら彼女は机の上の手鈴を振りま

した。すると途端にドヤ／＼と三人の女士官が入つて来ました。そうして物も言わずに私を押え、手取足取りの末、私を全裸体にして立たせ、四方八方から眺めまわすのです。そうして五分程も何か語りながら私を触つたりつねつたりしながら直談して居ました。

始めの士官がやがてポケットから何かを取り出して私に近づくと素早く、私の首にそれをまきつけてしまいました。それは丁度犬の首輪の様なしかし、もつと頑丈で巾の広い革製のものでした。そうして革を編んだ太い長さ五米近い紐がついて居るのです。女士官はその片方の端を机の下につなぎました。私は全身戦きながら精一杯の勇気を揮つて言いました

「一体私をどうしようと言うのですか、帰して下さい」

彼女達は一度に笑い声を上げ乍ら答えました。

「帰して上げるよ、用がすんだらね。しかしお前は私達の仕込む芸を覚えなければいけないのよ。覚えたらすぐ帰して上げるよ。芸を覚えてしまった男なんか、私達は興味がないのよ」

女達の中、最初の女を残して皆元来た所か

らゾロ／＼と引き上げました。最初の女はにや／＼と笑い乍ら言いました。

「私は戦争に出る迄M市でサーカスに居たの、他の人達だつてそうよ。私はロバを使うのよ、ロバが死んでしまつて戦争に出されたのよ、けれどあたしには何時もロバが要るのよ。そうしないと私が幼い頃から覚えた馴らし方を忘れてしまいそうなのよ。お前はだから芸を覚える迄ロバよ、いゝ？これからあたしは生れ故郷の言葉を使いますよ。そうすればロバと同じに言葉だけでは判らないでしょう？いゝの、私の馴らし方は一寸烈しいけれどすぐ馴れるでしょうよ」

言い乍ら彼女は部屋の際の洋服ダンスの扉をさつとひらきました。

何と中には美しい舞台用の短い上衣、白皮で出来た細いズボン、何本ものそれ／＼色の違つた軟かい長靴、数え切れない程の色々の靴、等がぎつしりつまつて居るのでした。彼女は部屋中の扉に錠をかけると実に驚ろくべき速さで上衣とズボンをぬぎ捨て全裸になりました。そして白革のピッタリしたズボンをはき黒い踵の高い長靴をはき、金色の輝く上着をつけ矢張り白皮の長い手袋をはめました。そして、長いしなやかな革鞭を一本と

り出して、二三度空中で試して、見てから、私の方へ近寄りました。

「最初は逆立ちよ、そら」

私は無意識に逆立ちしましたが長い間はつゞきません。二三分すると足が地についてしまいました。雷の様な怒り方で彼女は怒鳴りました。

「何だその位の事なら、犬でも猫でもするよ怠けると承知しないよ、女の革の痛さを覚えておいで！」

革鞭がつゞけ様に鳴つて私の背中に喰い込みました。痛さの為に私が床に転がると、その長靴が烈しく蹴出すのです。

「真直ぐ立て！」

もう一度、力一杯の靴が身体に打ち下された途端、私は逆立ちしていました。

倒れそうになると、ピシツと音を立て、床を鞭が叩きます。何か彼女が言いました。私が出つと逆立ちして耐えていると今度は再び滅茶苦茶に革鞭で打ちのめされました。

「いゝつといつたらいゝんだ。馬鹿みたいに何してるのさ！矢張りお前には革が一番きくね、それじゃあいゝ事を想い出したわ」

と言ひ乍ら戸棚から太い牛を打つ鞭を取り出して床を烈しく打ちました。恐らく私の身

体はその一打ちで血に塗れるでしょう。

私とその次に仕込まれたのは両腕で身体を支えて机の上で水平になる事でした。彼女は之をフランス語で「ラ、ターブル」と名付けていました。太い牛追い用の革鞭が彼女の手握られて私を馴らししました。私はそれから色々の芸を教え込まれましたが奇妙な一つの芸は常に新しい芸を教え込まれる時に彼女の支配に対する服従の意味を込めて行われたのでした。その奇妙なと私が言うのは次の様な事です。

彼女は高く鞭を振り上げて呼びます。「お坐り」そして片方の長靴で私の肩をしつり踏みつけて椅子に腰をおろして、もう一つの靴の裏をなめさせるのです。私が一寸でも躊躇すると肩の上の長靴の高い踵が力まかせに肩に喰込み烈しい怒声と共に私の背中は革鞭を受けるのです。而も、その時間が長いのです。私は徹底的に疲れますが、全く苛酷な目的の為にのみ彼女がはく長靴の加虐的な連想によつて性的な昂奮を感じました。

すると彼女は部屋の壁際へ私を連れてゆき壁を背にして私を縛りつけてから先程の牛追いの用の革鞭を振るうのでした彼女の鞭は私の最も苦しみ方の烈しい所を狙つて打ちこえる



のでした。

「さあおしまいだよ、私のやり方は判ったね  
皆がすんだら又も一度仕込んであげる。私の  
長靴を脱がせなさい。そうしてそれがすんだ  
らお前が世話になつた此の二本の鞭に接吻し  
て元の所へ片付けなさい」

私がそれをすますと又言います。  
「私の軍服を持つておいで」  
忽ちの中に彼女は勇しい軍装をつけ女士官  
になりました。そうして出て行く時再びその  
乗馬靴で私の身体中を蹴飛ばした末接吻させ  
ました。  
彼女の番は之で終つたのです。私は次の女  
士官が一体何を好むのか慄え乍ら待つて居ま  
す次最も小さな身体つきをした士官が扉をあ  
けて入つて来ました。  
(未完)

## 【読者通信】

(投稿歓迎)

今年の一月偶然店先で奇譚クラ  
ブを見かけその後すっかり貴誌の  
ファンになつて毎月愛読させてい  
たゞいております。まだ私にはす  
べての記事の味はよくわかりませ  
んが三月号から六月号の切腹の記  
事、とりわけ女性の切腹のところ  
はほんとに身体が熱くなるみたよ  
うな気がして、何度もうりかえし  
て読ませていたゞきました。私高  
校へ入りました頃から時代小説を  
みていて悲壮な割腹の描写があり  
ますと胸がときめくような気がし  
一人でお風呂に入つてゐる時など  
急にふつくらしてきた下腹へ刀を  
思うさま突き立てゝ紅の血が流れ  
るさまを幻想したりして、一時は  
自分は気が変なのかと心配してい  
ましたが、四月号の信太様の記事  
を見てほんとにうれしく思いまし  
た。勇かんにこうした告白をして

下さいました信太様はほんとにえ  
らい方ですわ、五月号で女の方が  
上半身裸になつて刀をお腹に突立  
て腹一面血があふれているさし絵  
あんな絵をもつと沢山に出してい  
たゞけませんかしら？毎号目次の  
次に女の責めの図が出ていますけ  
ど、あそこにも時々切腹の図も  
入れていたゞけたらと思います。  
責めの図を喜んで見て下さる方な  
らきつと切腹の図も喜んで見て下  
さると存じます。特に女の切腹は  
自己加虐の極致ですもの。六月号  
の文芸に於ける切腹を見ますと腸  
があふれる位深く切つてもあまり  
血が出ないように書いてあります  
が何だか信じられません。あの絵  
のように一面血に染まるのが本当  
ではないでしょうか

(横浜 橘 芳子)

私東京のある病院に勤務いたし

ます看護婦でございます。先日店  
頭で偶然貴誌五月号を買いました。  
容の面白さにびつくりしました。  
特に女性の切腹についての中康先  
生の記事には本当に息づまる位興  
奮するのを覚えました。それとい  
うのが終戦の年八月十七日の早朝  
やはり切腹してなくなられたので  
よけいひしひしと身に迫る思いが  
したのでございましょう。この方  
は廿年五月に空襲で家族全部をな  
くされ、長野県の御親戚に疎開し  
ておられました。八月十七日の  
朝暗い中に髪をきれいに後に束ね  
薄化粧して双肌ぬぎになり胸から  
腹部へかけて香水をまきお母さん  
の遺物の懐剣で腹を二筋切り右脇  
腹から肋骨の下まで真直に切上げ  
て机に倒れかゝつて死んでおられ  
たそうです。後から私にいたゞい  
た遺書では「戦に負けた日本には  
生きたくない。日本人らしく女な

がら立派に切腹して死にますとし  
てございしました。貴誌を拜見して  
おりまして女性の方の十字腹は大変  
少いようでございします。特にお  
知らせする気になりました。まだ  
当時女学校四年十六才でよくも切  
れたものと感じいたしております  
御誌のさし絵の女の方が左脇腹に  
刀を突立てゝ引廻そうとしてゐる  
姿をみますとユキさんが懐剣を突  
立てゝ美しい顔を引つらせながら  
引廻しているさまが目にもえるよ  
うで身がひきしまるようござい  
ます。批評を申しては失礼でござ  
いますがついでに絵について申し  
添えますと、絵では左脇に突立て  
ゝいるだけで腹一面血に染つてい  
るようですが、下腹部はたとえ腸  
が出るほど切りましても傷の上部  
まで血があふれることはございま  
せん。

(東京 愛川晃子)

時 代 小 説

片 耳 傳 奇 (二)

窪 村 弘

三 條 春 彦・画

お 連 さ ま

將軍家齊に美女を獻ずる——それは如何に身の榮達を計る手段とは云え、父親までも拉して、拷問に等しい責苦をあたえるとは、お

篠には納得がゆかなかつた。

何か、他に深い意味がある!と、そう信じられてくるのだ。

その意味? 含蓄? お篠は緊縛された、

抗し難い姿を横たえた儘、じつと<sup>まぶた</sup>瞼をとじていた。

なるようにしかならぬ運命の支配に、観念の身をまかせて、しもとの苦痛も屈辱も、





若い身に耐えて、耐えられぬことはないであろうが、病いの父藤吉への苛責のしもとは、どのように、亦、運命を急転させるであろう父だけは助けたい！ 母親のない、たつた一人の父親の愛が、お篠の心に、唯一途の念願となつて燃え上つて来た。

「父を帰して下さい。父に何んの罪がありますよう、帰してやつて下さい！」

お篠は身を起そうと焦り乍ら、曾根権三へ哀願の声を振りしほつた。

「――」

権三は答えない。お篠の乱れた裾へ、あらわに覗けた脛へ、太股へ、その視線は、激しい肉慾の悶えとなつて、じつと注がれる。

大刀を持つた権三の手が、微かに震えてきた。

自制の激しい叱咤と、堪え難い煩悩の叫びが、彼の心を動揺させるのであろう。

権三は暫し、齒を噛みしめて、小さな呻きに似た声を洩らしていたが、突然、人の気配を背後に感じて、ギョツとしたように振向いた。

「ホツホホ、曾根さま、大分お迷いの御様子でありますこと――」

格子戸の外に立つて、あでやかな笑い声を

投げかけたのは、お高祖頭巾の下に、真ツ白な繻帯を覗かせた、豊艶な年増女であつた。

「おツ、此れはお連さま――」

権三は虚を突かれた形で、狼狽の色を見せたが、

「曾根さま、何故もつと強く責めませぬ。よもや、美しい女子の肌に魅せられた訳ではありませんでしょうねえ」

お連様と云われた女は、格子を引あけて、権三の傍近く歩み寄つた、その手には弓の折れが持たれていた。

「何を云われますお連様――」

「曾根様、あなたは其処にて御覧なされるがいい。責めると云うのは、どのようにするか、妾がお目にかけましょう」

お連は男のように荒々しく、倒れている藤吉に近付くと、胸倉をとつて、グツと引起した。

「鼠使いの藤吉とやら、此れを見るがいい」

お連は、衣類の袂の中に、隠し持っていた一体の小さな木彫りの像を、藤吉の前に、まるで叩きつけるように投げやつた。

藤吉は、それを物憂げに見やつたが、

「おツ！」

と呻きに似た低い叫び声を上げた。

藤吉の傍近く転がつたのは、一体の木彫りの坐像――それも三猿の一ツ、聞か猿の姿で左右の耳を押えている、何んの変哲もない粗末な、古びた物であつた。

藤吉の視線は、聞か猿の坐像から、お連の面上へ移動したが、その唇は激しく引歪み、両眼が忿怒と驚愕にカツと見開かれた。

「ホツホホ、妾の顔を知らぬとは云い切れぬでしょうねえ。妾に仇なした酬いは、どのようなものか、思い知らせて上げましょうぞ」言葉と同時に、お連の手の弓の折れは、唸りを生じて、藤吉の左肩先へ、砕けよとばかり振下された。

「ウツウウ」

藤吉の体が、グラツと動揺した。

「曾根さま、此奴に声をたてられては、うるそうてなりませぬ。暫く猿ぐつわを噛ませて置いて下さいませ」

お連は、用意して来たらしい手拭いを、無造作に藤吉の肩の上へ投げかけた。

権三は云われる儘に、藤吉の肩から手拭いを取ると、齒ぐきも砕けよとばかり、犇と藤吉の口を覆つた。

「藤吉、良く見ておるがよい。そなたにしもとを加えるよりも、そなたの娘の肌に加える

方が、そなたにとつては大きな苦痛となりましょう。まず、此の鞭で、その柔い皮肉がさけて、血潮の流れるまで打ちましようか。それとも、左右の耳を斬り落し、一生涯、人前に出られぬ片端者にしましようか——」

お連の紅を含んだ唇が皮肉な冷笑に妖しくほころびた。

藤吉の声のない呻きが、咽喉の奥にかすれて、不規則な荒々しい呼吸が鼻孔もさけんばかり続くのである。

「まず打ちましよう。そなたの愛しい娘の苦しむ姿を見たら、己の非が少しはこたえるでしょう」

お連の、いったん斯う云い切つた言葉に、躊躇はない。

一と振り。風を切つた弓の折れが、お篠の腰へ、ピシツと激しい音をたてた。

「ウツ！」と声を吞んで、お篠は臉をとじて身をよじつたが、次の瞬間、苦痛をこらえてお連の顔をじつと見た。

仄暗い行灯の灯影に、陰影を投げて白く浮かび上つた濃い化粧のお連の顔は、お篠には全く初めて見る顔であつた。

何故に、此の女までが、かかる残酷なリンチを加えるのだろうか？

しかし。お連が、父親藤吉に浴びせた言葉の裏から考察して、お連と父藤吉との間に、一連の秘密が、介在されていないと、誰が保証し得よう。

「お待ち下さい。あなたはどなたです？何んの為に、私達親娘を此のように苦しめるのです」

「いらぬ事です」

お連は鋭く云い放つたが、不意に齒を噛み合せて眉をしかめた。多分、何処か体の一部が痛むのであろう。

お連は、その激痛と戦うように、キリリと眉を釣り上げて、

「藤吉、見ているであろうのう、聞いているであろうのう、そなたの娘の肌の音を——。此れも、みんなそなたの犯した罪の酬いなのだ」

藤吉は唇を切れる程噛んで、臉をとじている。お連の目は、常人のそれでない。

狂いに狂つた、残忍の目の色であつた。

お篠の膝へ——あらわに覗けた柔かな肉の上にとんだ弓の折れは、生々しい紫の一線をサツと描いて、胴へ、肩へ、背へ、所きらわず振下される。

噛み殺しても、洩れる悲鳴は、麻痺された感覚と共に絶えて、お篠はガツクリと意識を失つてしまつた。

此の時である。黙念と臉を閉じていた藤吉が、獣のような呻きを上げたと思うと、立上りざま、猛然とお連の体へブツツかつていつた。

中風の病に、不自由の身を横たえて、娘の優しい手にみとられて来た、此れがその藤吉であるのかと、怪しまれるような素速さと激しさだつた。

「あッ！」

お連はさける間もなく、藤吉の激しい体当たりを受けて、傍の板壁へ、嫌と云う程叩きつけられたのだ。

「あッ、此やつ！」

仰天したのは権三である。油断と云えば油断であつたと云えようが、藤吉の此の奇襲は全く予期しない突発的な行動であつたのだ。

権三はよろめいた藤吉の脾腹を、追ひ継りざま、大刀の鐙で突き飛ばした。藤吉はウツ！と息をつめた儘、行燈の上へ覆いかぶさるように倒れて行つた。

## 迷いの謎

つつが虫——一名あか虫とも呼ばれるあ



怪異な毒虫が、可憐な美女、屋台小町と呼名されるお篠の衣類に、どうしてたかつていたのであろう。

出羽越後は別として、他に余り寄生を知られていないアカ虫が、江戸佐久間町に住むお篠の衣類に着いているなどは、不可怪なことである。右近は八丁堀百坪屋敷の座敷に坐して、黙然と腕を組んでいた。

（あか虫は畑鼠の耳介内に寄生すると云う）すると――

そうだ、お篠の父藤吉は、嘗ては鼠に珍芸をさせる大道芸人である。

今こそ中風という病のために、大道芸人なる業に身を投ずることが出来ぬとしても、尚再起を願つて、鼠を飼育しているときく。

その畑鼠の耳介内に、あの恐るべきアカ虫が――。

間違いない。

それ以外に、どう想像出来ようか。

しかし。

藤吉が、何んのためにアカ虫などを？

いや、それは藤吉自身さえも、知らないでいるのかも知れないのだ。

その鼠を手に入れる時、偶然、耳介内に寄生していたアカ虫が、奇蹟的に生を保ち得て

現今に到つたとすれば、誠に藤吉やお篠にとつて、危険であつたと云う一方、毒虫の害を受けなかつただけ、大きな幸運と云わねばなるまい。

だが――。

藤吉が鼠を飼育している以上、何時、如何なる時、あの毒虫の害が、彼の父娘に及ぼされるか、極めて危険な状態にある訳である。右近は慄然と身を震わせたが、それと、今一ツ、彼の脳裡を去来する不可怪な事件が、その触角さえも見せぬ儘、重苦しく神経をいらだたせているのだ。

それは、そも何か？

人間の片耳を斬つて落す怪異な事件。と云えば、江戸市民の胆を冷すに充分である。

まず犠牲者の名をあげれば。

牛込白銀町の、大工留五郎の娘お葉。

深川八幅横の芸者おせん。

本郷の旗本、五千石の太夫、根岸武太夫の愛妾で、大根島に住むお連さま。

と、何れも年令に僅か乍ら隔りはあるとは云え、容貌の美に於ては、勝るとも劣らぬ粒揃いであつた。

変態性痴漢の悪戯か？

あるいは――。

報復の悲願か？

想像を逞ましゅうすれば、最限がないが、免に角、右近はもとより、八丁堀、御用聞も躍起となつて、事件の全貌を明るみに出そうと活動をしているが、今だにその一端さえも掴み得ないのだ。

右近は、夜になるのを待つて出掛けた。

耳斬りの事件に対する活動もさる事乍ら、一ツ刻も早く、アカ虫の害毒の危機から、藤吉親娘を救いたい念願で一杯なのだ。

白昼はお篠が留守である。お篠が帰宅した夜を見計つて出掛け、親娘に良く話しておこる。

そう思うと矢も楯もたまらなかつたのだ。

道を急いで、佐久間町のお篠の住居の裏手へ廻つて見ると、灯影も見えず、中はシーンと静まり返っている。

はて留守かな？と右近は一寸眉をひそめたが、たとえお篠が居らなくとも、父親の藤吉は病臥している筈である。だが表へ廻つてみてもその人の気配も感じられないのだ。

（可笑しい！）

右近は二、三步、オボロの月影を碎いて、その場を往復し乍ら小首を捻つていたが、思

い切つて、障子を引あげた。

中は真ッ暗だ。しーんとして、空氣のそよぎも感ぜられない。

だが、その中から右近の鼻孔に滲み込んで来た異様な臭氣。

ムツ！と右近は眉をひそめた。が、

（生血の臭氣！）

と氣付くと、躊躇もなく、ツカ／＼と座敷へ上つた。

火打鉄を鳴らして行燈を発見すると、素早くそれに灯を入れた。

「おッ！」

右近は其処に何を見出したであろう。

敷きはなした夜具の上に俯伏せに仆れているのは藤吉だ。

何物かに脾腹を抉られたと見え、其処から流れ出した血潮が真ッ赤に夜具を染めていた

右近は藤吉の体を抱え起した。藤吉は既に冷くなっている。苦悶に歪んだ顔であつた。

（何んと言ふむごい事をする奴であろう）

右近は暫し瞑目してから、改めて藤吉の顔を見つめた。が、

「オッ、此の痕は？」

頬から頤へかけて、首筋から胸へかけて、紫紺にはれ上つた、幾条かの痛々しい傷痕を

認めたのだつた。

右近は、此れが激しい苛責の鞭痕であることを直ぐに覺つた。と同時に、脾腹の傷口からの出血の量から考察して、一つたん息絶えた屍の上に、しもとを振つた人間か、或いは別の者かが、第二の冷酷無残な刃をかざした事も考え及ぼしたのであつた。

（何故に藤吉がかかる無残な罰則に伏さねばならなかつたのか——？）

もとより、藤吉の歩んで来た過半生を知らぬ右近には解けぬ謎である。

右近は、注意深く行燈をかざして、辺りを物色した。

と——。

部屋の片隅に、踏み潰された一ツの檻がある。改めて中を覗くまでもなく、その中に死んでいるのは二匹の鼠だ。

全身茶褐色の肥大な鼠であつた。

（此れだな、藤吉の飼育していた鼠は！）

そう思つて、今度は近々と覗き込んだ。

（一般家庭に生棲する鼠ではなし、溝鼠とはもとより違う。紛れもない、此れが鼠鼠であるのだろう）

すると。

お篠の衣類にたかつていたアカ虫は、此の

耳介内に寄生していたのだ。

（それにしてもお篠は、父親のかかる無残な死も知らず、一体何処に行つてゐるのだろう？）

狭い土間を覗いて見ると、屋台店に使用する諸道具が、土間の一部と釣棚の上に整然と並んでいる。

右近は直ぐに勝手許へ行くと、流しを覗き布きんを手に取つて見たが、一滴の水分も含んではおらず、よく乾ききつてゐる。

今こそ。

藤吉は云わずもがな、お篠までも、今日一日——いな、夕刻に到つても、お勝手許に姿を見せなかつた事になる訳だ。

右近がお篠の屋台店、柳の森稻荷前の小梅屋に、悪同心曾根権三と共に、顔を見せたのは昨日の夕刻の事である。

（するとお篠は、昨日いつたん帰宅して、屋台店の道具を片付けて、それから後、自ら何処かへ出掛けたか、何者かに拉せられた事になる！）

そうより以外に考えられないのだ。

右近は座敷へ引返すと、再度其処此処を見廻したが、不意に、その儘の姿勢で、じつと耳を澄ました。全神経を集めて——。



突如!

右近は、まるで蹴開くように裏戸を引あげた。

彼の感に狂いはなかつたのだ。同時に、路地から通りへ、脱兎のように走り出した人影がある。

「待て!」

右近は追い廻る通りへ出ると、オボロの月光が、相手の姿を照らした女であつた。それも昨日の夕刻、柳原の屋台店の前でお篠に人間の耳の

入った紙包みを渡そうとして、曾根権三に付き、慌てて逃げ出し、更に右近に、その紙包みを投げつけて、姿を杳ませた、あのお高祖頭巾をした娘なのだ。

「またぬか!」

絶叫し乍ら、右近は追い迫つた。



身軽いようでも、娘の仕度は、足の捌きをさまたげる。距離は僅か十間余。と、見えた瞬間、娘の足が、大地を踏みにじつて振返つたと見ると、右手より投げられた懐剣が、右近の面上を望んで飛び来つた。

「おゝッ!」

まさに一髪の差で、右近は小首を捻つたが僅かな体の崩れは、大地を踏み滑つて、ザザツと草履の横緒を踏み切つて、よろめいた。走る者の間隔は、僅かな体の崩れでも、意外な距離を引離すものである。

右近が横緒の切れた草履を振り捨てて、走り出した時には、お高祖頭巾の娘の姿は、既に、其処の角を曲つていた。

其処は一直線の広い道路だ。両側は、町家の板塀が長く続き、咄嗟に身を隠す場所とてないのだ。

それなのに、右近がその道路へ走り出て、キツと前方をすかして見たが、娘の姿は、忽然とかき消えて、唯一挺の町駕籠が、右近の横をトツトと走り過ぎたのみである。

「うぬ、貴奴、あの駕籠の中に——!」

右近の頭の中を、此の想像が、電光のように閃めきすぎた。

「その駕籠、暫く待て!」

右近は踵を返して、駕籠を追い抜くと、棒鼻を抑えて突ツ立つた。

「な、何をしやがるんでえ」

たたら踏んで、駕籠尻がドサツと大地へつくと同時に。

「如何が致したのだ?」

駕籠の垂れが僅か上つて、覗くように顔を見せた一人の武家。

(オツ、根岸武太夫！)

右近の面上に、颯と驚愕の色が拡がった。

本郷に広大な邸を持つ五千石の大身、旗本根岸武太夫その人なのだ。

「此れは根岸の御前、唯今挙動不審の女を追跡、ツト姿を見失いまして、もしや此の駕籠の中にでも——と思ひまして、失礼つかまつりました。拙者は八丁堀同心、大村右近と申しますもの——」

右近は一步退つて、いんぎんに一礼した。

「存じている。巷に酒を追う風来同心とな」

「はッ、此れは——」

「ハッハハ、して疑いは晴れたかな？。晴れば参るぞ、急用ある身だ」

「暫くお待ち下され、御前の膝の上に居られるように見受けられる女人は、どなたであられましようか？」

垂の間は僅かではあつたが、其処に見える華やかな色彩を、右近は見逃がさなかつたのだ。

「此の武太夫に耻を語れと申すのか——」

武太夫は冷く笑つて、

「そちも多分聞き知つてゐるであらう。此の

わしは精力絶倫、愛妾の四、五人は居ると云う噂を——。ウハッハハ、若い独り者の眼には、毒、どく」

武太夫は、事もなげに大笑すると、パラリと垂を下してしまつた。

「駕籠屋やれ！思わぬ暇を費した。急げ！」

「へーい」

武太夫の戸と一緒に、駕籠は上つて、威勢よく走り出した。

(まさしくあの駕籠の中には、あの女が——うぬ、何んの為に武太夫め——)

右近は遠去かりゆく駕籠を睨んで、キツと唇を噛んだが、やがて、引返すと、お高祖頭巾の娘の投げた懐剣を探し始めた。

大事な証拠なのだ。暫くして右近は、町家の板塀へブツリと突刺つてゐる懐剣を発見した。

## 冷酷な血

何者かに、激しい苛責を加えられて、無残にも息絶えた藤吉の脾腹を、更に刃で抉つた曲者は、お高祖頭巾の娘と明白なのだ。

右近に投げつけた懐剣の柄には、血潮が付着して、刃は一面の脂であつた。

疑問は幾重にも重なりあつてくる。

お篠の行方？

お篠の父藤吉に加えた残酷なしもの主？

息絶えた藤吉を、更に懐剣で刺した娘の素

姓。

藤吉に加えた無情のしもの主と、懐剣で

刺したそのお高祖頭巾の娘と同一人であるか？

昨日の暮れ方、娘の手から右近へ、右近から曾根権三へと渡つた紙包み——人間の片岡と娘とのつながり。

八丁堀の役人に追われるが如き怪しき娘と知り乍ら、殊更批護しつつ去つた旗本根岸武太夫と、娘との関係？

と怪奇な雲は、暗く低く、明光な心の鏡の上へたれ込める。

が、しかし。

疑問を分類せずに、一括して、それに想いを馳せれば、凡て耳斬り事件と関連なき点はない。

今こそ根岸武太夫に面接を求めて、その言語態度から秘密の一端なりと、掴む一方、下ツ引を使つて、被害者のお連、お葉、おせん

の素姓を洗うことが、尤も賢明な策となつてきた訳だ。

そして、同時に、お篠の行方も探し出さな



ければならない。

右近は翌朝ただちに、下ツ引のオボロの文次を、お連、お葉、おせんの身許調査に突ツ走らせておいて、單身本郷の根岸武太夫の邸を訪れた。

玄関に立つて案内を乞うと

「おゝ、来たか右近、何れそうくるだろうと実は待つていたのだ。まア上れ！」

右近を迎えて突ツ立つたのは、武太夫自身であつた。

「此れは御前御自身のお出迎え、恐縮に存じます」

右近は微笑したが、心の中は、颯と緊張した。

特別親しい間柄でもなく、まして、八丁堀の一人人に対して、五千石の大身が、自ら出迎える事など、絶対に考えられないことなのだ。

それを武太夫自身が出迎えたばかりか、言葉の中には油断の出来ぬ含蓄がひそんでいる、招じ上げられて坐が定まると、

「御前、此れには、お見覚えはございませんか？」

右近は懐から細長い布包みを取り出すと、その布を解きほぐした。

出て来たのは、鞘のない抜身の短刀である昨夜、お高祖頭巾の娘が投げた血のりの着いた懐剣なのだ。

武太夫は、それを予期していたようにシロツと一瞥したが、

「此れを、如何程で手離そうと申すのだ？」

と、右近の顔を鋭く凝視した。

「いや、お言葉ではありませんが、此れは、鼠使いの藤吉を殺めた下手人の持ち物。大切な証拠故に、お譲り申すことは出来ません」

右近は、手早く元の通り短刀を布に包むと懐へしまひ込んだ。

武太夫とお高祖頭巾の娘との特種なつながりは、最早疑いをはさむ余地はない。

武太夫は、苦々しく眉を寄せて、あてもなく視線を横へ反らせたが、

「右近、そちに良い物を見せてやる。わしの後に跟いてくるがよい」

無言で右近も立上る。

武太夫に跟いて、長い廊下を幾曲りか曲ると、武太夫は、部厚い嚴重な格子戸の前に立止まつた。

「右近、内部を覗いて見い」

武太夫は右近を振返つて顔をしやくる。

右近は云われる儘に、格子の内部を覗き込

んだが、ハツと息を呑んだ。

仄暗い板敷の上に、腰布一枚の美女が、後手に縛られて、ガツクリと倒れているのだ。

屋台小町と評判の高いお篠であつた。

（うぬ、さては武太夫が拉して来たのか！）  
まして、そのお篠の肌を見よ！縦横に走つた紫紺の痛々しい傷痕は、冷酷なしもとの痕である。

「どうじやな右近、よもや知らぬ女では済まされぬであらう。うわごとにも、そちの名を呼び続けている可憐な娘だ」

「御前、如何なる罪を犯したかは存じませぬが、余りにも残酷な仕打のように見受けられます」

右近はキツと武太夫の顔を見つめた。

「愛しいと思うであらうな、わしも流石に気付かなかつたぞ、そちと屋台小町と——ハツハハハ」

武太夫は大笑したが、フト真顔に返ると、

「ところで右近、そちの持つている懐剣と、取引をする気はないか？」

「取引——？」

「それと、今一ツ、此れを最後に、此の事件から手を引く事だ」

（武太夫め、いよく本性を現して来たな！）

右近は武太夫の言葉に答えず、再びお篠の姿をじつと見やつた。

まるで、死んででもいるかのように、お篠は身動きもしない。

何んの為に武太夫がお篠を拉致して来て、かゝる残酷な折檻を加えたのか？

あの山王神社の祭りの日より、將軍家齊の執著は熱く、脇坂淡路守を通じ、根岸武太夫までが、栄達を計つて、お篠に大奥行きをすすめていると、話には聞き知っていたが、その目的を達する為に、拉致して来たものならば、かかる残酷な行いをする筈はなく、（やはり此れも、耳斬りの事件に関係があるのだ、此の事件から手を引け——と云つた武太夫の言葉から考えても、それより以外に考えようはない）

その底深い怪奇な事件をあばく為に、お篠を見捨てるか、お篠を一秒でも早く、責苦の地獄から救うために、キツパリと事件から手を引くか——武太夫の言葉に、寸豪の妥協もないとすれば、此の何れかの道は、判然と右近に示される訳である。

勿論、お篠をも救い、事件もあばき得ればこれこそ願うべき事ではあるが、武太夫の顔色から察して、決して此の願望は両立しそ

もないのだ。

右近の心は、此の分岐点に立つて乱れた。

「よもや武太夫とでも、お篠を殺すような事はしまい、そうだとするならば、一時お篠の方は此の儘にして置き、一ツ刻も早く事件をあばく事が、自分の職責からしても妥当の道ではなからうか」

そうは思つても、お篠の無残な姿を眼の前に眺めると、此の儘見捨てて去るには忍びないのだ。

まして、自分に寄せるけがれなき心の中を知っているだけに、直更にそれが一時にもせよ、冷淡な心に右近はなれなかつた。

「如何がだな右近、勿論無理にとは申さんが——」

武太夫は意味もなく、其の場を、三、四歩行きつ戻りつしていたが、立止まつて、右近をシロツと見た。

「お断り致す——と申し上げたら——」

「面白い舞台を見せてやろう、そちがわしの意見に従うか、お篠がしも

との下に息絶えるか——ハツハハ右近、愛しい女が、責苦に悶える姿も、亦興深い見ものだぞ」

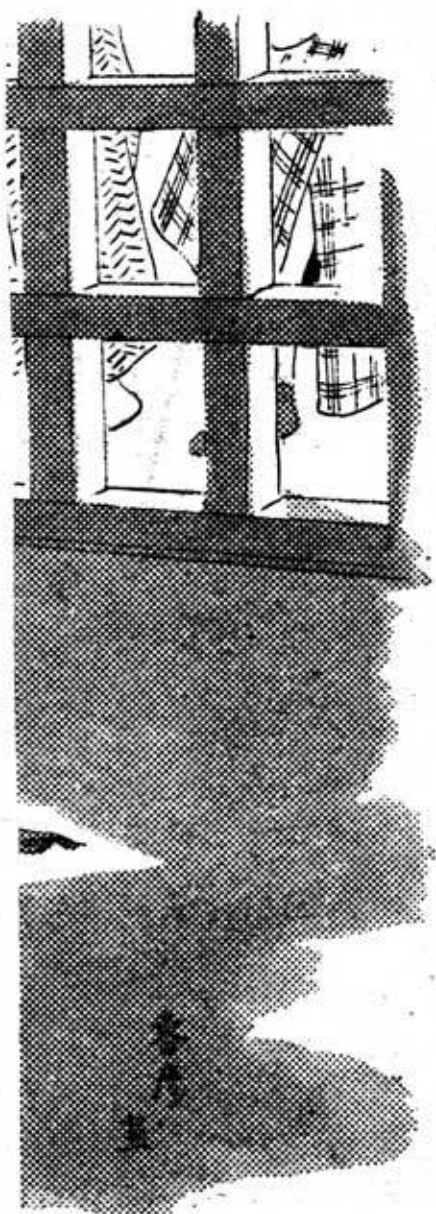
「——」

「それとも、龍の口へでも訴え出るつもりとでも云うのか」

「いや、それは無駄と思いまする、御前のお人柄から、考えましても、五千石のお家柄をむざ／＼取潰すが如きたわけな政策をなされる筈はないと存じます。よつて、当然御前も御関係あると見られます此の度の事件には、手前あくまでも取組み、合せてお篠も無事手前が頂戴致す所存で居ります、ハツハハ」

右近は冗談らしく、快活に笑つた。

「流石は噂に高い男だけあつて、その氣骨は誠にたのもしい。しかし、右近、見事此のわしを向うに廻して勝ち得る心算か？」





「もとより——。と申し上げたき事乍ら、何しろ相手が御前、いささか自信も揺らぎまする」

「心憎い事を申す奴！」

武太夫は、右近の自信ありげな微笑の顔を見ると、フツと片頬に苦笑を浮かべたが、  
「右近、そちが破れるか、わしが敗を喫するかまず手初めにそちの女を責めて見ようか」  
武太夫はそう云つて、手を三ツ打鳴らしたと——。

その音の響に応ずるように、廊下を踏み鳴らして近寄つて来たのは、八丁堀同心曾根権三であつた。

（うツ、曾根権三！）

右近は思わず息を呑んだ。

（貴奴、武太夫の手先となつて行動していたのか。）

以前から、しばしば出入りしていたことは聞き及んでいたが、買収されて、自己の職責を放棄し、邪悪な道に暗躍しているとは、流石の右近にも考え及ばなかつたのだ。

何時かの日、柳原のお篠の屋台店の前で、右近から渡された——斬り取られた人間の耳のは入った紙包みを持つて、不思議なお高祖頭巾の娘を追つて行つた権三は、その事件が

武太夫に関連を持つ事件と知るや、その儘、事件から手を引き、反つてその裏面で、よこしまな行動を続けていたのであろう  
右近は判然とそう断ずる。

「大村、貴公もそれ程野暮ではあるまいから、それ位の事は知つているだろうが、如何に我々でも手を入れねばならぬ事件と手を入れて益ない事件とがある、悪

くは計らわぬ、此の度のことは根岸の御前の云われる通りにしてはどうだ大村——」

権三は侮蔑の目に冷笑を漂わせて、右近の顔を凝視した。

「お断り致そう、曾根氏は曾根氏、拙者は拙者の道を歩むつもりだ」

右近はキツパリと云つた。



此の男に、正邪の道をといへても、無駄なことである、それよりも自己の力を以て正邪の道を披瀝し、世間の批判に訴えるより他、方途はないであらう。

「やめる曾根、云うだけ無駄だ、巷に評判高い風来坊右近、めつたな事で自己の信念を翻す筈はない、それよりも、共に相慕いあう女

を、眼の前で一と責め責めて見せる事だ、よく右近が、おのれを責められるより苦しいその責苦を、眼を閉じて我慢し得るか、亦はわしに勝を譲るか、面白い場面だのう」

根岸武太夫は、冷やかに右近を顧みた。

曾根権三は、合鍵で錠をはずすと、格子戸をギイツと引あける。

——事件から手を引く事は職務上断じて出来ぬ！と云つて、此の儘お篠を見殺しには直更出来ない。

今は権三、武太夫を取つておさえるより他心の苦悩を救う道はないのだ。

「待て曾根！」

右近の体が隼のように——。

だが。

「動くな右近！」

権三と右近の間に立つた武太夫の右手に、握りしめられた短筒が、右近の跳躍をハツと牽制した。

「殺すには惜しい男だが、動けば容赦なく撃つ。まず静かに、お篠の体に加えられる鞭の動きを見ることだ」

武太夫の眼の色から見て、けつして脅しではありえないのだ。

右近はギリツと歯を噛んで、身動きもなく

突ツ立つた。

その間に曾根権三は、格子内の片隅から拾い上げた弓の折れを高く振り上げた。

「見て居れよ大村、男の肌の音と、女の肌の音は斯う違うものだ」

手加減のない弓の折れが、ビシツとお篠の背肉に音たてた。

此の美しい娘が、相手もあろうに、若僧の右近に恋心を寄せるとは——と思うと、権三の心は、嫉妬に真ツ黒になるのだ。

嫉妬は敵愾心と呼び、お篠を責めることによつて、右近に報復しようと企てる権三の心は、情、無情の度を超越した、恐ろしい残酷さに燃えるのである。

最初のしもとの下に、死んだ者の如く、身動きもしなかつたお篠が、ムムツ！と苦悶の呻きを発して、体をよじると、グツと臉を開いた。

「ハツハハ気付いたかお篠、貴様の好きな風来坊右近が、心配して其処に來ているぞ」

権三はお篠の体に喰い込んだ縄を持つて、彼女の体を引起した。

お篠は答えないが、その眼は何ものかを求めるように、じつと格子の外を見つめた。

憔悴した蒼い顔、氣力の失せた両眼は、生

あるものの眼の色ではない。

「お篠！」

右近は思わず叫んだ。

何んの為に此れ程までに？まだ、その理由は判然と判らぬ。だが、鬼畜にも勝る恐ろしい行いだ。

「お篠、大村右近だ。俺が判るか！」

お篠は右近の声をきいた。顔を見た。

「あゝ、う右近様！」

此れ程激しい感動が、またとあろうか。お篠は叫んで、思わず立上ろうとしたが、疲れきつてゐる体は自由が利かず、ガツクリと俯伏す。

「打て、わしが勝つか、右近が勝つか？」

武太夫は、右手の短筒で、右近を抑えて、

権三を頤で促したてる。

権三の手の弓の折れが、再びお篠の肉体に激しい音をたてた。

「ウツウウ！」

お篠は苦悶に、えびのように体を反して一転した、腰布もはだけて、あられない姿だった。

一とむちごとに、権三の眼は妖しく燃えてくる。

右近の顔は蒼白に変つて來た。

(つづく)



## 古川裕子さんへ与える

## 佐 治 須 十

裕子さん、貴女の本誌十二月号の「囚衣」及四月号の「続囚衣」を読ませていただきました。それに就いて簡単な私感を貴女にお送り致しますよう。

実際の処、「囚衣」を読みました時は、異常な感覚に襲われ、一気に読破したばかりでなく尚数十回反覆し、裕子さん御夫婦の生活を想像したり致しましたが、「続囚衣」の時はいさゝかがつかり気落ちして「囚衣」の時程興味も湧きませんでした。何故だろうかと色々考えて見た結果、大体次の様な事を考えました。

即ち、吾妻新さんが、「サディズムの精髓」の中で言つて居られる「洗練されたサディズム」が「続囚衣」の中では、期待に反して味わえなかつたと言う事です。それは貴女の最愛の御主人が亡くなられた事が、大きな原因でしょう。貴女自体の「マゾ」に対する遍歴が、焦りが、洗練された智的なものを失わしめたのだと思います。

それは「虐いたげられたい」と言う貴女の

持前の精神的マゾが、激しい愉悦を求める余り必要以上に貴女の感覚を娼婦の世界に追いやり、貴女の肉体がそれを阻止出来ないばかりか進んでこれに従従して行つたのでしよう。普通は肉体の誘惑を感覚が阻む可きなのでしようが倒錯の世界は全ゆる場合にも倒錯します。そしてその愉悦の中に貴女は満足して、放浪していられるかも知れません。然し「続囚衣」の中にも書いて居られる様に、貴女の感覚から呼びかける二つの相反した声は貴女自体の肉体を責めている事も事実です。そこにハムレットの悩みを持つには、貴女の女体は余りにも三十女の肉体であり過ぎたのです。

私は「続囚衣」の中に於ける裕子さんからは、何等美的なものを感じず、反つて悲惨を感じ顔をそむけたくなりました。若し貴女が「続囚衣」の中に於ける自分に喜びを感じあの様な状態を望むのならサード公爵の残酷の時代にお行きなさい、されば殺傷の終末が貴女を迎えてくれるでしょう。

然し私はその様な終末を求める貴女ではな

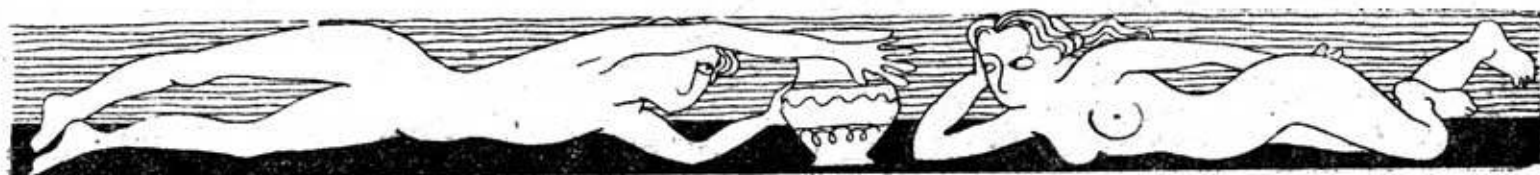
いと信じたいし、文章を通じて見た貴女はもつと智的な人だと想像しています。貴女が肉体を通じて体験したふくよかな妖しい迄に美しい偽らざる告白文学の花は、これから爛熟すべきです。そして静かに妖花の香りを放つ可きです。

貴女はむごたらしい、しかし甘美な凌辱の幻想と期待とを大阪のH氏に送つたと言つていますが、大阪は如何でした。もう今頃は大阪から御帰りの事と存じます。大阪での状態を是非お知らせ願いたいものです。

大阪の今宵は雨が降つております。貴女は又囚衣のゴム引のレインコートを来て、フーを冠り、貴女が責めらる可き記念の責道具の入つた小さな革カバンを持つて雨に打たれ乍ら何を考えているのですか。

何れにしても貴女はマゾの牢獄に於て、終身刑を運命づけられた女囚です。そしてその囚獄の懲罰執行者を求めなければならぬ終身女囚である事を意識すべきです。

女囚古川裕子は雨に濡れた囚衣をまとい、深編笠であるフードを冠り、目に見えぬ手錠足枷に縛められ、衆人の中を無形の鞭に追われつゝ今宵も又悦虐の刑場へとぼく／＼と歩んでいる事でしよう。



アブニストの記

# らぶ・すれいぶ (8)

## LOVE SLAVE

鬼山 絢 策

紺の格子柄のズボン！

それは言わずと知れた大槻でした。

「どうしたんだい。もう止めたのかい」

大槻はツカ／＼と部屋へ入つて来ました。徹がサツと身構えた様子が、足のひらき具合で分りました。

「おいアンちゃん、手前本ツな真似するじゃねえか。この女にやちつとばかりうるさいヒモがついてるこたあ承知の上のことなんだろうな」

大槻は春美の傍へ寄ると

「春美！ 俺がいつか言つたことを忘れたのかッ！」

ピシヤリッ！

あゝ呪われてあれ、我等のクインのふくよかな頬に、大槻は無残な平手手ちをくれたのです。

春美は右手で頬をおさえて、ジつと大槻を睨みました。大

槻はそれに構わず

「おい若けえの。春美と俺との仲は十二年越しの古いもんなんだぜ。俺ア恋女房にチヨツカイ出した野郎を黙つて見逃してるような甘い男じゃねえんだぜ」

「春美さんの夫は下条さんです」

「馬鹿野郎、下条は男の働らきを持つてねえから、俺が承知で貸したんだ。春美の真の亭主は俺だぜ。お前は俺にどう言う挨拶をする気なんだ」

「恋愛は自由です」

「小生意気なことをぬかしやがるな。なる程、恋愛は自由かよし、そんなら俺も自由に振舞おう。此の野郎！」

大槻の右手がガン！と徹の顔へとびました。徹の身体は隅の洋服ダンスヘドタンと打つかつて倒れました。彼の顔は憤怒に歪み、サツと立上ると、猛然と大槻に飛び掛つて行きま





した。

大槻はそれを待ち受けたように第二撃を彼の口に放ちました。徹の口許からタラ／＼と血が流れ、洋服ダンスを背にしてやつと倒れるのをこらえた所を大槻は飛込んで行つて、

「野郎ッ、この野郎ッ」

左右の拳が徹の顔面に乱打を浴せました。彼の一撃々々に徹の身体は後の洋服ダンスに大きな音をさせて打つかり、ピストンのような連打にズル／＼と大槻の足もとに崩すおれてしまいました。

大槻は足をなげて、靴のまゝ彼の肩や、頭を蹴りとばしました。

徹はその時、サツト両手を出して大槻の足を掬いました。ドスンと大きな響きを立て、大槻は部屋の中央へ仰向けにひっくり返りました。

然し徹にはその上に飛びかゝつて行くだけの気力はもうありませんでした。

素早く立ち上つた大槻は

「この野郎、やりやがつたなッ！」

ポケットからピカリと光るジャックナイフを出して逆手に振り上げました。

「あ、あぶないッ、サブ！やめて！」

春美が後から組みつききました。

「うるせえ、お前は黙つて見てろ！」

大槻は春美を振りどろし、ナイフを構えてシリ／＼と徹の傍へにじり寄つて行きます。

「止めて、サブ、殺したらお前も只じや済まないよッ」

徹は恐怖の頂上に追いつめられて、身動きも出来ずに大槻を見上げて居ます。

あゝ何たることでしよう。私の妻に対して、二人の男が命のやりとりをして居るのです。

私と言う夫は、それを承知して居ながら、その渦の中にさえ入ることを許されず、傍観者への端役に甘んじて居るのです。

私にも勇気があつたら飛出して行つて、二人共思いきり殴りつけてやることでしよう。

然し私の腕力も気力も、徹にさえ及ばないのです。そしてどうなることかと。ベットの下からハラ／＼して見て居るだけがせい一ぱいなのです。

「おい立て！ 向つて来いッ！」

大槻はナイフを構えて叫びました。徹は、足を投げ出したまゝ黙つて大槻を睨んで居ます。

「フーン、このドスが恐いのか。意気地のねえ野郎だ。やい立たねえか、てめえの胸を真二つに切裂いてやらあ」

大槻は又徹の頭を足蹴にしました。

何をされてももう徹には抵抗する意思を失つて居ました。

大槻はベットの傍の電気スタンドのコードを素早く外すと徹をおさえつけて、そのコードで後手に縛りあげてしまいました。

「ハム、ざまあ見ろ」

徹の首筋を靴で踏まえて、グイ／＼と踏みにじり、大槻は



片手でポケットから煙草を一本抜きとり、ライターで器用に火をつけました。右手には依然としてナイフが冷たい光を放つて居ます。

「春美！ 此方へ来い」

春美は大槻が徹を刺さなかつたので稍安堵したものゝ如く部屋の中央に据えてあるテーブルへ腰かけました。

「お前の気持をはつきりと聞こうじゃねえか。斯うめんと向つて面を突合してしまつちやあ、此の場でケリをつけなきや納まらなくなつちまつた。サ、俺が好きか、それともこの若僧の方が好きか、此処でキツパリとどつちを取るか言つてくれ」

「もし徹の方を取ると言つたら、サブ、お前はどつちにするの」

「何！」

サブのナイフを持った手がブル／＼と震えました。

「ハムムム」

春美は上を向いておかしように笑いました。

「バカ。こんなケツの青い野郎は、妾のほんの気まぐれだけのものさ。それにお前がムキになつて、刃物までひけらかすから、おかアしくつて仕様がな」

「じゃ俺の方に決めるんだな」

「分りきつてることじゃないか」

「じゃあ、今後はこの野郎とキツパリ手をきるんだぞ」

「そんなに恐い顔してムキになるもんじやないよ。サブの男がすたるよ」

「イヤ俺はお前にはつきりとしといて貰いてえ、俺はお前が

他の男とふざけるのを黙つて見て居る程のお人好しじゃねえんだ。どこかの旦那と違つてな」

「ブン勝手なことを言つてやがら。てめえは勝手にいろんな女をひつかけておきながら、妾が一寸浮気すると生かすの殺すのつて、お前の頭は古いよ。今の世の中じゃアそんな専制的なこたあ通らないよ」

「ひとは通らなくても俺は通すんだよ。お前に手を出す野郎があれば、俺は必らずその野郎をバラしてしまうぜ。お前だつて只はおかねえ。指の一本位は詰めさせるぞ。お前が十人情人を喰らえて見る、お前の手の指は綺麗になくなることを覚悟してろよ」

「御大層な殺し文句ね。私の恋人が十人共お前より弱いとは限らないよ」

「そんなこたア問題じゃねえ、俺はお前にや命を賭けて惚れてるんだ。相手の野郎に俺がやられりや俺の運がねえのさ、何でもねえことじゃねえか」

「兎に角あんたは勝手だよ。エゴイストよ」

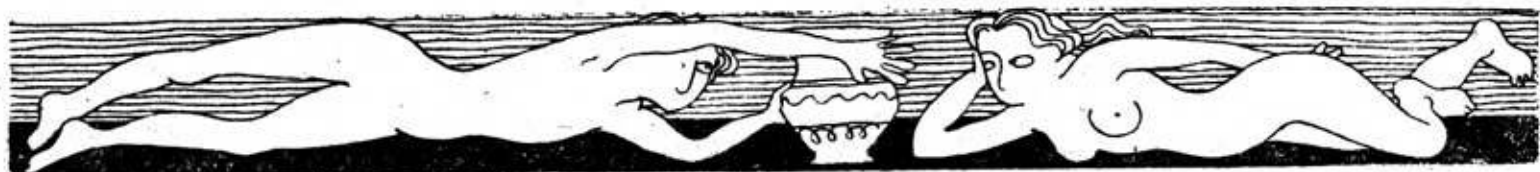
春美は大槻のポケットへ手を突込んで煙草を一本抜きとると大槻がライターで火を点けてやりました。

春美はテーブルに腰かけたまゝ両手を突いて、煙草の煙を天井へ向けて吹きあげました。

そのポーズは映画に出てくるヴァンプそのまゝでした。眼を細めて一点をみつめて居る春美の美しさはいかなる映画女優も及ばぬ妖しい魅力がありました。

徹は齒を喰いしぼり、足をバタ／＼させて、縛られたコー





ドを解こうともがいて居ました。

「この野郎！」

大槻の足が上つて、徹の肩を蹴とばしました。

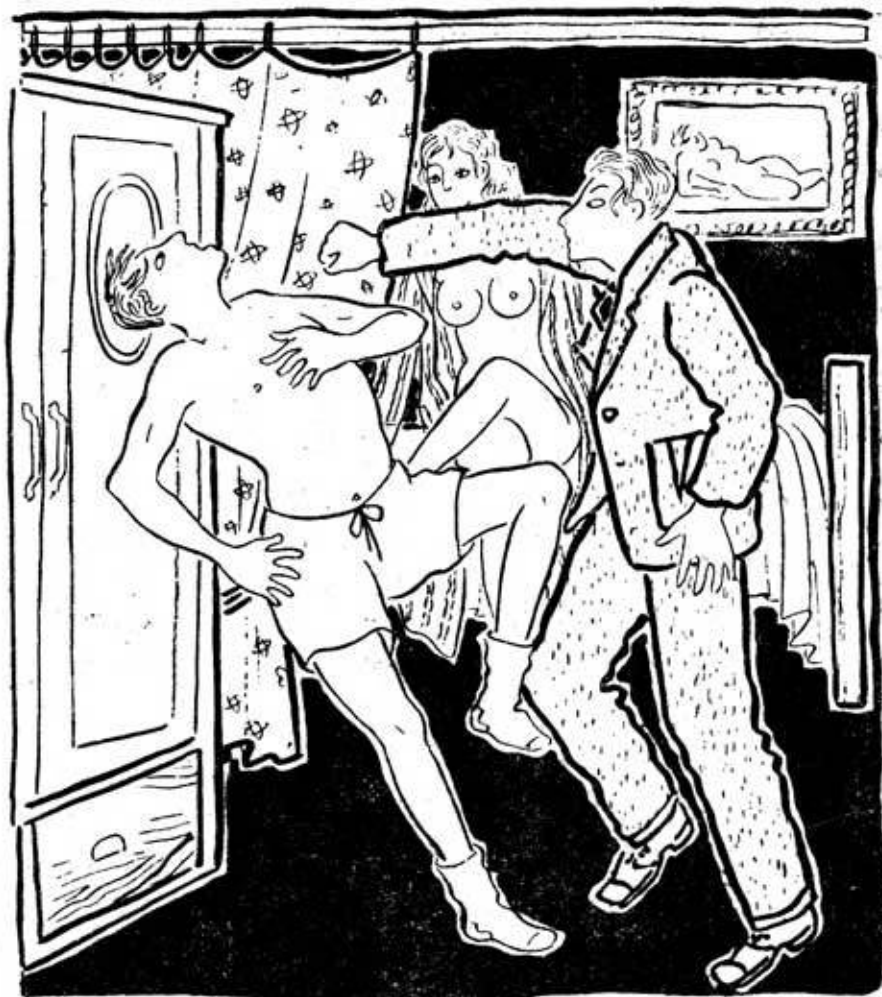
「てめえは運のいい野郎だ。春美があの時止めなけりやぶつた斬つてやろうと思つたのに命拾ひしやがつて、だが命だけは助けてやるが、このまゝじゃあ済まされねえぞ今迄春美といふ思いをしただけちつとばかり痛い目に会わしてやる。此方へ来い。」

洋服ダンスの前から、徹の頭へ手をかけてズル／＼とテーブルの傍まで引きずつて来ました。

大槻はこれからどんな私刑を徹に対して行うのでしょうか。春美には私と言うれつきとした亭主がありながら、姦夫同志が命がけて争つたり、勝つた方の男はまるで自分が夫になつたようなつもりで敗者に制裁を加えようとして居ます。

それを真の夫たる私は、相も変らぬ傍観者の位置に立つて、高見の見物／＼をして居るのです。

二人の男には私と言うものが眼中にないのです。私などよりも目の前の相手を強敵として憎み合つて居るのです。それを私はまるで他人の秘事を覗き見るような気持でベツトの下か



ら秘かに窺つて居る……私の心には――

どつちが勝つたつて構やしないんだ。負けた方はうんとひどいめに会えбай――と言うような対岸の火事／＼でも見るような弥次馬的氣持さえ起きて、大槻がどんなリシチを行うかに興味をさえ持つのでした。

何と言う情けない私の心情でしょう。

そう思いながらも、私の好奇心は言い知れぬ昂奮と期待にわな／＼いて居ました。

大槻はテーブルの傍へ徹を仰向けに倒すと、その身体の上に椅子をのせました。

そしてその椅子へ自ら腰を下しました。

四本の椅子の足が、徹の胸と太股へ喰い入ると、徹は苦しさに身悶えしました。

グラ／＼と椅子が重心を失つて、腰かけて居た大槻は危うく転がりそうになりました。

「畜生、シタバタせずと、おとなしくしてろい。」

いくら言つても、徹は眉をしかめ、身体を左右に捻つて暴れるので、椅子は一瞬の間も安定して居ません。



立上った大槻は、椅子の位置を、あちこちと、徹の身体の上で置き換えて見ましたが、結局どう据えて見てもだめだと分ると、徹の身体を心持ちテーブルの下から離して、その徹の身体とテーブルの間に椅子を置き、椅子の後の二本足が中間の床の上に、前の二本足だけが、徹の胸と腹の上へ来るように置きました。椅子はかなり急角度に傾いて居ましたがその背中をテーブルの辺で支えて居ました。

そうしておいて大槻は、椅子の上へどつかりと跨がりました。

今度は徹はどんなにもがいても、椅子はグラつきませんでした。

「ハ、ハ、ハ。どうだ野郎、ちつとは骨身にこたえるか」

大槻は椅子へグイ／＼と尻に力を入れて重味を加えました

「痛いッ、痛いッ、骨が折れるッ、骨が」

徹は首を左右に振って必死にもがきます。

大槻はそれを椅子の上から気持よさそうに見下して居ましたが、

「春美、此処へ来い」

春美は先刻からテーブルの傍で黙って見て居ましたが、大槻が両手を拡げて呼ぶと、ニツコリ笑って、大槻の膝の上に腰かけました。

大槻は後から春美をギュツと抱き締めました。

「ウウウ」

二倍になつた重量に、椅子の足は徹の胸と腹へグイとメリこみ、苦しさにうめく苦悩の聲は、彼がマゾヒストでも何で

もない人間だけに、苦痛と憤怒と嫉妬が渦を巻いて、堪えきれず出たうめき声だつたでしょう。

大槻は、春美をグイと抱き締め、両手に春美の……うな……を……て、横向きの春美の頬に接吻の雨を降らせました。

「アハ、ハ、くすぐつたいわよう」

春美は椅子の上で脚をバタ／＼させます。パジャマの裾が乱れて、肉づきのい／＼白い脚が、太股の上の方まで露出しました。大槻は頸から肩へかけてキツスしたり咬んだりして居ます。

額に玉の汗を浮かべながら苦悶する床の上の徹は、この二人の狂態を真下から見上げて居ます。

春美は気持よさそうに、徹を尻眼に見下して笑って居ます。その時大槻の足が徹の額の上にのせられ、春美を一ぱい抱き締めると同時にその靴の先にも力が入って徹の顔を踏みつけました。

徹は遂にうめき声さえ立てなくなりました。

「オヤ、野郎ノビちまやがつたかな？」

大槻は靴をどかして徹の顔をのぞきこみました。

徹は顔中を一ぱい皺にして、眼を開いて居ました。

大槻はその顔を見下して勝利者の愉悅に浸って居るようでしたが、彼の出張つた頬骨と、残忍な光を持った眼と、口を歪めて笑う口の辺りにサディストの表情があり／＼と浮んで居ました。

微笑んで一緒に見下して居る春美の顔の美しさ！





春美も確かにサディストの素質を備えて居ます。

彼女がサディストであつたら、必らず私の傍から離れぬ筈です。私は何かホツとした心強さを覚えました。

大槻は春美を抱いて立上りました。

徹の上に二本足をせた椅子を、乱暴に足で蹴とばして、転がしました。

「どうしたい、眼あいてるとこ見るとノビた訳でもねえようだな。」

「フン、意気地がないのねえ、思つたよりだらしない男だわ」

「愛想がつきたか」

「ウン、こんな骨なし野郎だとは思わなかつたわ」

「よし、じゃあ二度とお前に手を出さねえようにな、愛想づかしをしてやれ」

「どんなことするのさ」

「今度はお前が俺の代りにこの野郎を虐めるんだ。」

「妾そんなことできないわ」

「できねえことはねえだろう。お前は毎晩下条を虐めてるじやねえか。あの通りやりやいゝのだ」

「だってこの人はマゾじやないもの」

「マゾでねえから愛想尽かしになるんじやねえか。お前が真底からこの男を見限つたんなら、やれるだろう。俺アこの野郎の命迄貰おうとした位憎い野郎なんだぜ、それをお前が止めたから、勘弁してやつたんだが、腕の一本も折つてやろうと思つてる位憎い野郎だから、もう少し懲らしてやらなき

や俺の腹の虫が治らねえんだよ」

「もうこの位責めたらいいじやないのさ。この辺で勘忍しておやりよ」

「だめだ。俺アまだ疑つてるんだぜ。この先お前が又いつ此奴が可愛いくならねえとも限らねえとな。だからよ、お前が二度と此の野郎に手出しをしねえと言う愛想づかしの手証が見てえのさ。俺の眼の前で、その証拠を見せろつて言つてんだよ」

「じゃどう言う風にすりやいゝのさ」

「その野郎の面へ小便でもひつかけてやれ」

「あんたも随分変態なのね」

「変態じやねえさ。俺はお前の愛想づかしをするとこをこの眼で見ねえうちは承知できねえから」

「フン、うまいこと言つてら。ほんとは妾が男を虐めるところが見たいんだろ」

「そう言う訳じやねえが」

「かくさなくたつていゝよ。じゃあ見せてやるわよ」

春美は徹の傍へ歩み寄ると、その顔の傍へ膝をつきました。「徹さん、あんたもえらい性悪の男に睨まれて、ひどいめに会つたわね。御免なさいね、妾のためにこんなめに会わされて。でもこの人の命令だと思つたらあなたも口惜しいかも知れないけど、もし清二の命令だしたら、あなたは、その位の責めを受けても仕様がないうでしょう。そう思つて諦めるのね。可哀想に、顔が腫れ上つてるわ」

春美はタオルで出来たパジャマの袖で、大槻の靴に踏まれ



た徹の顔を拭いてやりました。

「あんたとの仲も、今日限りで清算しましょうね。これ以上妾とつき合うとあんたの命が危ないからね。このサブつて男はほんとに殺しかねない男なのよ。」

「何をぐずぐず言つてやがるんだ。早くしろい」

大槻は焦れて傍の椅子を蹴とばしました。

「もういゝじやない。これだけ痛めつけてやりや」

「だめだ！。この野郎はそれ位のことと勘弁できる奴じやねえ。お前がやらねえんなら、俺がもつと痛いめに会してやるぜ。腕の一本位へし折つてやらなきや承知しねえ」

大槻が二人の傍へ歩み寄つて来ました。

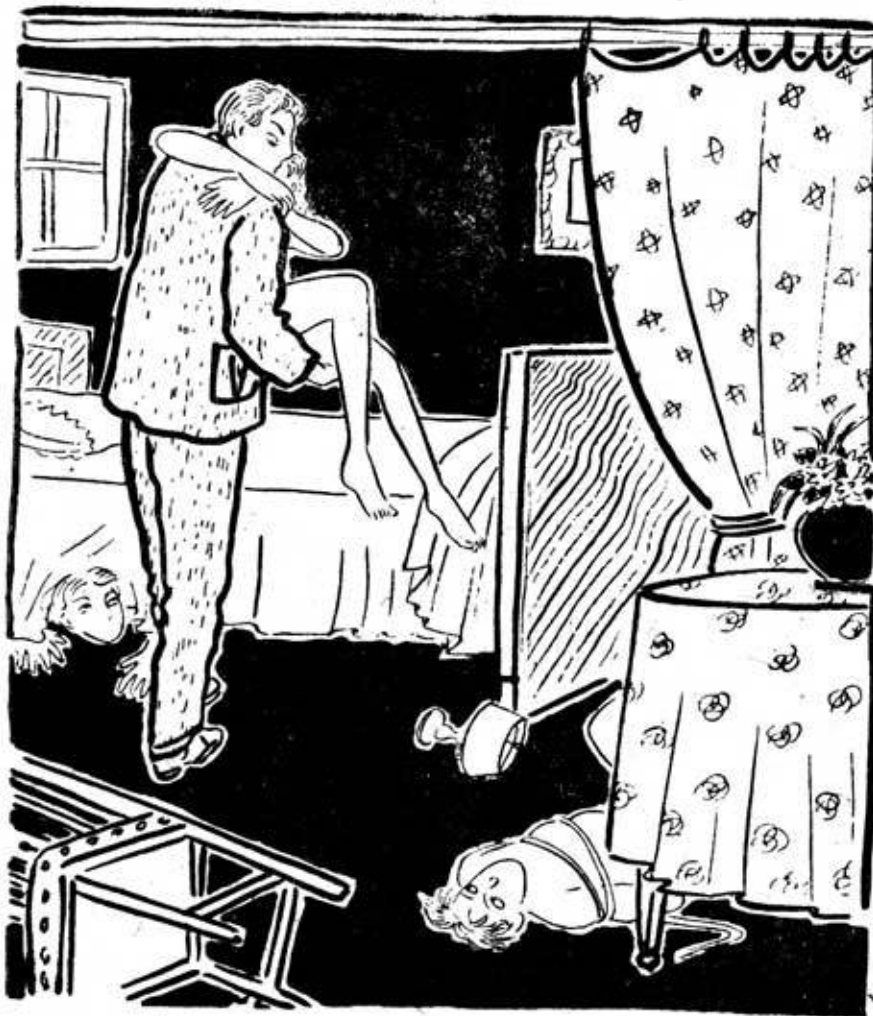
「いゝよ。妾がやるから……」

その時春美はパジャマの裾を蹴して徹の顔の上へ踏みました。

「痛いめに会うより、妾の方がいゝだろう。妾や痛くないようにやつたげるからね」

春美は恰度徹の方へ真正面に向いて、豊かな肉線を露わしました。

私は途端にクラクラと激しいめまいを覚えました。



春美は無表情で羞恥を忘れた女のように徹の………いました。

「こうすりやいゝんだろ」

ニツと白い歯を見せて大槻を見上げた春美の表情の美しさ！ 大槻は、眼を光らせ、ジツと春美の………睨みつけて居ます。

大槻がこんなにも物凄いサディストだとは、今の今迄知りませんでした。

それから三十分。

大槻は春美にいろ／＼な命令を下しました。春美は、美しい雌獣のように大槻の命令を

次々に実行して行きました。

私は見て居るうちに、堪えられなくなつて遂に………てしまいました。

春美のこのような狂態を傍観者の位置から眺めたのは、今日が始めてでした。

何と言う素晴らしい息の詰まるようなシヨウだったでしょう。私はもう只夢中で、喰い入るように見つめて居ました。

春美は最初のうちは至極無表情で………したが、そのうちに段々………きたと見





えて、……な……が、生きて来て、大槻の意志でなく、春美自身の意志を卒直に現わして居ました。

そうなる大槻はもう命令を下さず、シツと息を殺して見下して居ました。

「アハハハハ。くたびれちゃった。この位でいいだろ」

春美はこの「やわらかな椅子」に……たまゝ、両手を後へついて、上半身を、仰向けにそらすと、トロソとした眼を大槻に向けました。

「フム。野郎いゝ加減参ったようだな、だがおい、てめえ俺でなくて、春美がやつたからこれ位で済んだんだぞ。春美に感謝しなくちやいけねえぜ」

大槻は春美のムキ出しにされた丸い膝をグツと片手で掴み片手を腋の下へ入れると、

「おい、春美！」

荒々しく抱き起して、そのまゝベツトの上に抱え上げました。

徹は意識不明になつたかと思われましたが、二人がベツトの方へ移ると、首を稍曲げて、半開きになつた眼の瞳が、こちらへ注がれました。

白痴のようにボカンと口を開けて居た徹が、口を閉じると唇のはしから涎のよう……て口を伝つて耳の方へ、たれて行きました。

ベツトの上では、二人が徹の世にも哀れな顔つきを見て、「ハハハハ。羨やましいか。てめえの負けたことがはつきり分つたらう」

「モルヒネ中毒者によくあゝ言ひ顔があるわよ。フ……」と嘲笑を浴せて居ます。

春美の大胆な……した大槻の力は、物……く……ほしい迄の激しさが、私にはひし……と迫つて感ぜられました。

あゝその時……

春美が曾つて聞いたことのない……るのを耳にしたのです。

大槻の激しい……は、私の耳もとで……るように直ぐ傍で……しく聞えました。

徹は横ざまに倒れたまゝ、シツと瞬きもせず、ベツトを見上げて居ます。その半分眠つたような瞳の底に深い、憎悪の光がかくされて居ました。

大槻と春美の二人は、まるで……言うものを知らない畜生のような気持になつてしまつたのでしようか。

徹と言う男の見て居る眼の前で、……せてはならぬ……て居るのです。

それとも二人は、徹を人間と思つて居ず、畜生が見て居る位に思つて居るのでしようか。

大槻が徹の眼前で勝利のしるしに春美を……気持は、サジストとして、非常に愉快なのでしよう。

然し春美迄が、別に拒む風も見せず、……さえあげて大槻……に……に……居るのは、やはり春美にもサジストの性質がたしかにあるのだと思ひました。

「おい若けえの、女を可愛がるには、こう言う……るもんだ。分つたか。後学のためによく見ておけよ。お



前も一かどナオコマシ（女蕩し）になるにや、この位女を………ようにならなくちやあだめだぜ、ハムムム」

大槻の毒舌は、一々徹の胸にこたえたでしよう。徹は齒を喰いしばつて、大槻を睨んで居ます。その無念の形相は、まるで自分の妻を目前で………居る夫のようでした。私には彼の面に現したもののからでも窺えるような激しい怒りは、曾つて一度も感じませんでした。

私こそ真の夫でありながら………

ベツトの上では、春美と大槻が何かヒソ／＼と囁き合つて居ます。

私は氣になつて、耳をすましました。然し何を喋つて居るのか聞きとれませんでした。その中で

「もうこうなりや仕方がないよ」

と言う大槻の聲や、

「大丈夫、喋りやしない事よ、妾がうまく………」

と言う春美の聲が聞きとれる程度でした。

「じゃ兎に角出かけようじゃねえか」

と大槻が大きな声で言うと、春美のスナリした脚が、ベツトから下つてきて、足の先でスリツパを探しました。

床へおりた春美は徹の傍へツカ／＼と寄りました。此方を向いた春美は、全裸の上にパジャマの前をひらいて、もりあがつた乳房から、足先まで、露わして居ました。

「ねえ徹ちゃん………」

徹は首を横に向けて、眼を閉じて居ます。

「おい、お前清二に今日のこと言うんじやないよ。言えばお

前の今迄のことも分つてしまふんだからね。そうなたら清二は怒つて何をするか分らないよ。池崎の所だつて勿論クビだよ。だから池崎にも勿論サブのことは黙つてるんだよ。分つたね」

徹は依然として瞑目したまゝ無言です。

「おい分つたかい」

春美はスリツパの先で徹の頭を小突きました。徹は首を起して、春美の裸体を下から見上げました。

「フ、ン、お前はりこうだから、その辺はよく心得てるわね」

## 【読者通信】

岡田咲子様へ

岡田 圭介

七月号の「私の主題」を面白く拝見しましたが特に貴女が女学生時代、テニスコートでお友達のため藤棚に縛りつけられたというところは、私の胸にドキリとつき当らせるものがありました。

というのは、つい最近、私も同じような場面にぶつかったことがあるからです。

先月、S県の大宮公園で県下高校生の総合体育大会が開かれたときのことです。N女子高校といえ、県下切つてのバスケットの名門高校です

が、その選手控場のところを通りすがりに、キャツキャツという歓声がするので、フト覗いたところ、なんと一人の選手が運動服姿で、多くの仲間の女学生にとり抑えられているではありませんか、事情はアトでわかつたのですが他校の選手を引卒してきたコイチ格の大学生と親しそくに口を利いていたのを追求したところ、どうやら恋人同志であつたことが判明したらしく試合が終つてから、かくは岡崎半分のフザケ責めに合うことになつたらしいのです。しかし、責めです。何くわぬ顔で横眼づかいに彼女たちを観察していたのです。とこ





春美は袴らかにその肉体を誇示し、徹の顔を跨いで洋服ダンスの扉をひらくと、パジャマを脱ぎ捨て、洋服に着替えた。

大槻もベッドから下り立つてズボンをはき、ネクタイを結ぶと、春美が、

「もう放してやつたらどう？」

「いや、帰ってくるまで斯うしておこうよ」

「でも清二が帰って来たら困るわよ」

「じや物置きにでも抛り込んどころ。わめき立てるとうるせえから音をとめておこう」

大槻は洋服ダンスから春美のマフラーを出してきて徹の顔に巻きつけようとした。

「あ、汚ない、それよして、フム、これ」

春美は慌てゝとめると、ベッドの上からタオルをとつて大槻に渡しました。

「ハ、ハ、ハ。こりやお誂えむきだ」

あゝそのタオルは今二人が使つたばかりのものです。大槻は、徹の半身を起すと背中を廻つて、タオルで口をギユツと縛りました。そして徹の身体を軽々とかつぎ上げると、部屋を出て行きました。

電燈のコードが尾を引いて、ズル／＼と二人の後について行きました。

春美は鏡台の前に立つて、化粧を直して居ます。やがて戻つてきた大槻は、上衣をひっかけると、

「うまく行くかな」

るが。思いがけず、彼女の腕を抑えていた一人が「縛つちやおう」と叫んだものです。私は思わずツバをノミこんだ次第ですが、そんなことにおかまいなく、OKとかなんと云いながら、他の連中が走り去つて間もなくロープを持つてきました。「いやいや、ごめん／＼」と言いながら、彼女は力を振つて逃げ出そうとしましたが大勢の力には敵いません。手どり足とり抑えつけられると、手首から胸にかけて、ギツチリ縛りあげられてしまいました。「さあ、どうだ、白状するか」と一人が彼女のアゴに手をかけると他の者が彼女の腋の下をくすぐります。彼女は身をもんで苦しがりますが、足をバタバタさせるだけでどうすることもできません。あぐくには、足首もタオルで縛られてしまい、苦しそうな小声で白状をしてしまいました。

これまで私は、女同志がこんな風にフザケ合っているのを見たことも聞いたこともなかったものでそのとき受けた印象は痛烈でした。だが岡田さんの書かれていたように女同志の責めは実に美しいと思いました。綾子さん、由紀子さんのお二人が責められているのを想像すると、一寸たまらない気持です。出来れば傍觀者としてでもよいから、お二人の遊びの仲間入りをさせて頂きたいものです。もちろん男性一般に不信を抱かれる（？）お二人の手によつて、あらかじめ私は縛られていてもよいのですが、もつとも、たとえお許しを頂いても、とてもそちらへ行くことは出来ませんが、――

余談になりましたが、岡田咲子様に一つお願いをいたします。

女性としての立場から、他の女性を縛つたり、或は縛られたりすることは比較的機會をお持ちになられると思います。その際、ルポ式に詳細に書いて頂くと共に、写真によつても出来るだけ誌上に発表していただきたいのです。

綾子、由紀子のお二人も岡田さんとなら緊縛遊戯をなさるんではないでしょうか。



「フン、細工はりう／＼さ。妾のうでを知らないね」

春美とそんなことを話しながら部屋を出て行きました。

私はベツトの下から這い出ると、大きくノビをして部屋の中を一わたり見廻しました。

何か空巢にでも忍び込んだときのような気持です。

今日は珍しく部屋の中はかなり乱れて居ました。

ベツトは、シーツも蒲団もクシャ／＼になつて居ましたし電気スタンドは、床に転がつて居ました。パジャマも脱ぎっぱなしで、放り出してあるし、椅子も横に倒れたまゝです。

いつも整頓してゆく春美が今日に限つて、こんな風にして行つたのは、どう言う訳なのかしら？……

私は言いようのない不安に襲われました。

倒れた椅子を起してそれに腰かけ、私は考えました。

徹を助けるべきかどうかを。

漸く私は決心して、徹を助けるべく、物置きへ行つて見ました。

物置の戸へ手をかけて、もう一度考えた後、私はがらりと戸を引きあげました。

リング箱の重なつた蔭に蕪が二三枚かぶせてあります。その下から靴の先が出て居ました。

私は蕪をはぎとりました。

うなだれて居た徹が首を上げて私を見ました。

タオルで顔半分を掩われたその眼が一瞬驚愕の色を見せました。

私は先ず手を縛つてあるコードをとき、それからタオルを

とつてやりました。

「どうしたの？……」

徹は土間に両手を突いて、下を向き、激しく鳴咽おえつしました「一体何事が起つたの」

徹は、両手を突張つてうつ向いたまゝすゝり泣いて居ます私は足の方に廻つて、足先を縛つてある縄を解いてやりました。

「済みません。……」

「帰つて見たら、部屋中が目茶苦茶だろう。何事が起つたのかと思つて、家中調べて見るつもりで此処へ来たたら、今度は君が縛られてる。泥棒が入つたのかね」

実は私はこう言うつもりではなかつたのです。

（ひどいめにあつたね。徹君、僕は何もかも知つて居たのだよ）

と言うつもりだつたのが、その場に来て、こんな風に知らない風をする氣になつてしまつたのです。

徹が私に打明けるかどうか試してやろう。

そう思つたからです。

歩けないかと思つた徹は存外元気で、一緒に部屋へ戻りました。

徹は台所で顔を洗い、嵐の終つた部屋へ入つて来ました。

（続く）



## 手記

## 妻は縛らず (二)

岡田圭介

松飾がとれても暫くの間、役所には正月気分が尾を引く。〃新年会〃と称する飲み会が部課ごとで連日のように開かれるのも、二三日の休暇をとつてスキー行を楽しむ者が増えるのも、この頃のことだ。

だが、私は妻の出産を目前に控えて、かなり忙しい目に合わなければならなかった。電車や汽車に乗つて二時間近くかゝる妻の実家への往復や、知人友人をかけずり廻つての金策やで、「縛られた女体美」の探究も思うにまかせなかつた。

一方、飯山康子は、あの日以来、私の傍から一刻も離れたいといった風情であつた。無邪気な、というより傍若無人なほどの態度

で私に接近してくる、役所人種は口さがないものだ。まして男女関係の事ともなれば、この上ない噂のタネとなる。康子のあたり憚らぬ態度は、たちまちにして彼らの関心を惹くところとなり、好奇の眼は四方八方から私たちをとりかこんだ。

職場の恋愛は概して好評をもつて迎えられない。あけつびらであればあるほど反感を招く。妻ある男の恋に至つてはゴウ／＼たる非難を招くものだ。

私たちもその例に洩れなかつた。とりわけ悪いことには、私の場合、妻が出産期にあることだつた。

生理的な欲求を、世間知らずの娘を使つて

処理していやがる——ととられても、抗弁に窮するのだ。

しかし、私の場合、事は全然別だ。私はただ「縛られた女体美」の追求者であるに過ぎない。それも、康子が現れるまでは、絵画や写真や、或は文章の世界でのみ夢を追ひ空想を楽しんできたに過ぎない。康子という、現実の対象が現れるに及んではじめて「縛られた女体美」を現世に実験すべき欲求に到達したのであつてそれは妻帯の有無、ましてや房事云々とは全く関係のないことなのだ。

あの日、成熟した康子の裸体が、ひしひしと縛められた縄目の中で苦悶している姿態を見て、「美」の追求をもつてしては満足できなかったことは事実だ。その身体の上にバンドを振り、燃え上る意欲を発散させようとしたのは、単なる「美」の追求の埒外に出でた行為であつたかもしれない。しかし、結局まで、彼女の処女性に、私は一指すら触れなかつた。少年時代、縛られた美女の絵を前にして行つたように、自らの手をもつて緊張を解きほぐしたのも、彼女を汚すことを恐れたからにほかならない。

繰り返していうが、私はただ康子を縛りたかつただけであり、それ以上のことは何も康

子から求めてはいないのだ。

だが、こんなリクツは世間には通らないであらう。彼女を縛るために彼女を誘惑したその行為のみが、またそれに応じた彼女の愚かさのみが、悪意に満ちた噂と中傷に翻弄されることになったのだ。

職場のオールドミスたちの悪意一ぱいのいじめ方、親しい友達の中からなる忠告、無責任な人たちの放言——これらに心を乱されながら、否乱され、ば乱されるほど、康子はひたむきに私をたよりとした。私は、女性からこの時ほど思いつめて慕い寄られたことはない。

といつても、私はこゝにのろけ話を書くつもりは毛頭ない。いいたいことは、愛情という要素がからまることは、私の「縛られた女体美追求活動」にとつて、プラスとはならないということなのだ。康子の滑らかな肩、張った胸、脂肪の乗った腹、大腿、腕、脚——それらが縛られるべくいかにふさわしいものであるか。そのみに私の観点と意欲があつただけで、それ以外のものは、むしろ邪魔であり無用でさえあつた。

妻の出産も間近いというのに、私はたしかによき夫とはいえなかつた。妻の身を案じ、

やがて生を享けてくる者を祝福しつつも、私はわずかな暇をつくつては彼女を縛る仕事に没頭した。しかり、それはまさしく仕事と呼ぶにふさわしい。なぜなら、女を縛るということは私にとつて美的創作活動にほかならなかつたから。

康子は、嫌がらずに、私のいう通りの恰好で縛られてくれた。ガストローヴの横に。肌を赤く反映させながら、一糸もまとわぬ身体に、幾重にも縄をまきつけさせた康子。後手の縄尻をとられ、風呂場までの冷い廊下を曳き立てられた康子。高手小手に縛られ、座敷の中で用を足させられた康子。手足と一緒に縛られた姿で風呂桶の中に入れられ、身体がすみ／＼まで捕縄者に洗い立てられた康子。これらの情景は、思い返している今も、私の血潮を沸騰させる。特に、康子は、私以外の者の眼に縛られているところを見られるのを好んだ。映画館の中で私に縛らせ、「与太者みたいな人に縛られた」と申出て事務室の人を驚かせたり、夜学校の校門のところで私に縛らせ、「変な人に縛られた」と称して小使に室に駆けこみ、老夫婦をびつくりさせたりすることをよくやつた。温泉旅館へは、女中やボーイに見られるため好んで行きたがつた。

部屋に入るなり衣類を脱ぎすて、グル／＼巻きに縛られた康子が、女中たちにビールやサイダーを云いつけた思い出は、今でもたのしくなる。

だが、二人の不幸は、私と康子とお互いに求めるものが根本で喰違つているところにあつた。私は康子を縛ることで満足し、康子は縛られることで満足しなかつた。康子が私に求めたのは、縛られること以上に愛情であつた。

二人の異性を同時に愛することはむづかしい。私は、妻を、やがて生れてくる子供を愛した。その心の中に、康子を入れてやる余地はなかつた。

この喰違ひは、やがて康子と私の間を引き裂くに違ひない。私は康子の心が私から去ることを別に惜しいとは思わない。が、彼女を縛れなくなることは耐えられそうもなかつた。彼女が愛情問題を一切抜きにして、私の前に裸身をさらし、縛めに応じてくれることが、私の望むすべてであつたが、今にして思えば、それはあまりにもエゴイズムであつたかもしれない。縛られるだけで満足する女性はいない。「縛られた女体美」の追求は、それらの人の中から対象を求めるべきであつ



た。

康子との破局は、かくして、時間の問題であることが私には理解された。縛られるだけで満足する女に康子を仕立てることはすでに遅かった。彼女は、すべてにおいて私とつながる者となることを欲してしまつたのだ。

かくして、彼女を縛ることに限らない魅惑を感じつゝも、私は次第に後ずさりしていつた。

妻は男の子を産んだ。小柄な妻の身体から一貫目に近い赤ン坊が生れたことは驚異であつたが、同時に云う術もしらぬ喜びであつた。赤児は健かに育ち、私と妻とは前にも増して相和した。

梅が咲き、桜が散つた。康子と私に関する噂は、とりとめもなく消えていつた。

役所の連中は春の旅行を熱海伊豆山に試みた。私はこれに参加せず、赤ン坊と遊び暮した。康子が、他の課の若い男とつき合ひはじめたという噂を聞いたのはそれから間もなくであつた。私はむしろ康子のためにそれを喜んだ。一抹の淋しさはもちろんあつたが。……康子がかえつて、私に挑戦的であつた。私と眼が合うと、殊更らしく顔をそむけた。

それからしばらくして、康子は急に役所を

退いた。例の若い男も寝耳に水といった顔をしていた。二三日して康子の住んでいた家へひそかに行つてみると、見知らぬ人たちが移り住んでいた。

思いもかけず、一月近く経つて、役所気付

で康子から手紙が来た。文末に「もう一度あなたに縛られたかつた」と書いてあつた。住所は書いて無く、郵便局の消印も判読できなかった。私は、その上に涙を落した。(終)

次

号

(九月号)

予

告

### 断然他に類例のない本誌の特種揃い

京子の生活と意見から	羽村 京子
絵看板の咄(其頃を語る四)	伊藤 晴雨
或る家庭教師の告白(二)	角田 平八
女闘長詩 矢筈山順子	加茂三千彦
両棲動物——(男色夜話)	岡真 史郎
神風連と大東塾	中康 弘通
大阪陸軍幼年学校	白石 悠
あるマゾヒストの手帖から(四)	沼 正三
淫 火(第九回)	松井 籟子
片耳伝 奇 (三)	窪村 弘
らぶ・すれいぶ(9回)	鬼山 絢策
甘美なるアリスの降伏(二)	寒川 緑訳
虐待の記録(中共引揚者)	前島 芳雄
我が告白の断章(三)	須藤 律夫
幸福なる隷属の告白	鐘坊 巡
特権者の手記より	助原 英太

外に八月号に予定してゐて掲載出来なかつた鞭打たれる外国の少女達、黒のハイヒール、女装男子の告白等満載!

The Sweet Surrender of Alice

# 甘美なるアリスの降伏

(第一回)

珍 書 紹 介

寒 川 緑・訳



## 第一章 復讐の動機

私は、アリスが私の胸に復讐の芽を植えつけるに至った経緯をクドクと述べて、読者の時間を奪う様な事は致しますまい。その復讐は、結局、私の試みた方法に依つて一つの結末を産み出し、私がお話しようとする主眼もそれにあるのです。

アリスが、冷酷且つ不当にも私を見捨てた

と云えばこれ以上何も云う必要はありませんまい。ですが、私にはどうしてもその間の事情を、極く簡単にでもお伝えしなければいけない義務がある様です。

残酷に、そうです。私は彼女の一語に依つて目の前が暗くなる様な屈辱に喘がされ、叩きのめされ、治りかけた傷口からは新たな血がドクドクと流れ滴り、私は再び癒しようのない痛手を受けたのです。

靴屋の息子！  
そうです。これが私に投げつけられた、あの時の彼女の言葉だったのです。その言葉に通う忌わしい記憶の故に、私が常に心の奥深くに貯え、それに似た語調の響きすら私をギクと脅やさずにはおか



ない呪われた言葉なのです。それが、選りに選つて信じ切つていたアリスの口から聞かされようとは！

靴屋の息子。それは、〃人殺しの息子〃の同義語でした。

私は今でこそ、ロンドン目抜き市街の一角にガソリン、スタンドを経営し、莫大とは行きませんが、上流の下日常を送つて痛痒を感ぜない程度の収入を得て、避暑、避寒に別荘の二つも持つ身分ではありますが、素性を質せば、しがた田舎町に露店を張つていた靴屋の息子でした。

それだけならまだ、靴屋の息子のさゝやかな出世話として少しも恥じる所はない筈なのですが、ハイ・スクール三年の時私は人殺しの息子と交つてしまつたのです。ふとした、酒の上の口論から、父は相手の男に商売用の鑿を振つて、一撃の下に刺し殺してしまつたのです。平生は温厚篤実な父なのですが、酒が入ると、内攻した鬱憤が爆発して、人が変つた様に極端に物に角を立てる性質でした。

その父が獄中に病死し、後を追う様にして母も此の世を去つた後、私のまだ伸び切らない背中には、まるで世間の怨恨は残された息子が背負つて立つのが当然の不分律の様に、

あの呪わしい記憶に満ちた名前が貼りつけられたのでした。

靴屋の息子！ 人殺しの息子！

私は、そうした中を、私の境遇に同情を寄せる唯一の血縁である叔父の仕送りを受けて寄宿舎に入り、其処から学校に通いました。私の性格はいじけて行きました。親切な隣人の優しい眼にも、その奥に何時現われるかも知れない蔑みを猜疑して、私の眼は白く光り唇を頑なに結んで、不愉快な印象を与えるのが常でした。学校に於ても同様、何時も一人他の笑いさぐめく若い群から逃避して、運動場の片隅に日向ぼっこをするか、本を読んでいる私でした。こうして私は人を意識的に憎悪し、又他人からも嫌悪されて、益々孤立して行きました。

学校を卒業し、ロンドンの叔父のガソリン・スタンドで働くことになつた時の私の飲ぶは一般の人達の想像を超えたものがありました。何よりも、此の陰惨とより言いようのない町を出られる。四六時中、私の背中を追いかけて廻した。それ一言で相手の人格を頭から無視する、忌むらしい呼び名から解放されるのです。町を歩いても、おれ達は何でも知つてゐるんだぞと云いたげな、無智な悪意の籠つ

た皮肉な笑いに遭遇しなくてもすむのです。

それからの十五年の才月の流れの中に、私は今のガソリン、スタンドを叔父に代つて経営していました。叔父は死に、私が天涯孤獨の叔父の遺産を相続して、二代目の経営主となり代つたのです。そして、十五年の才月は過去の呪われた記憶を幾分か回想の絵の中に溶けこまずに役立つた様でした。

こうした時に、私はアリスに此のスタンドで会つたのです。彼女は美貌でした。彼女の姿態に就いては、後に刻明にお話する事です。が、けれど私を惹き付けたのはあながち容貌の故ばかりではありませんでした。彼女の優しい物腰、言葉は、その一つ一つが今迄の私の佻しかつた生活の汚点を洗い落し、春に芽生える緑の下草の様に私の心に生新の気を注入して呉れたのです。何気ない普通の客に対する会話が始まつた二人の交際でしたが、何時か私には何物にも替え難い貴重な、生命の燃焼する様な一時となりました。

暗いジメ／＼した過去を持つ生命に曙光を与えてくれた彼女は、私にとって正に天使の存在でした。猜疑に満ちた私の心を、アリスに接すれば、陽光に映える春雪の様にしとどに洗い浄められるのでした。私は、天使の喜

々として奏でる楽調に耳を澄まし、甘い天上の花粉を胸一杯に吸いこむのでした。

こうして晩春に始まった晩蒔きの私の青春が秋を迎えました。秋は刈り入れの時、又「枯木」の節。収穫と同時に万物凋落の時でもあります。私の恋の芽に蒔いて秋の収穫を約束してくれましたなら、今筆をとる復讐談も或いは此の世に現われなかつたかも知れません。何れが幸で、何れが不幸か、神のみが知ろし召すのです。

育つべき土地に蒔いてこそ秋には獲られ、不毛の地に蒔いてなんで収穫を期待出来ましよう。一方的な肥料のみで育たないひ弱な芽は秋に黄色く枯れ朽ちる外はないのです。私の場合も同断でありました。結婚を目的とせず青春謳歌の単なる一駒として結ばれた男女の仲は、一方の献身的愛情があつたとして、所詮、枯木の運命にあつたのです。あれから数えて丁度半年目の秋の夕、映画を見ての帰り道セピア色に暮れなずむ山の端に、きびしかつた残暑の陽がつるべ落して沈む空を眺め乍ら私はその燃える陽の真情を籠めてプロポーズしたのでした。

得られた答えの何んという冷たさ。そして、火と燃える悩天にグサリ氷柱をた

ゝきこまれた様な別れ際の言葉でした。

「——それで、私、調べたのよ。靴屋の息子さん」

私は呆然と日の落ちた街を足早に歩み去るアリスの後姿に眼を送っていました。

私は復讐を決意しました。痛恨の心を抱いて私は誓つた事でした。何時の日か、彼女を捕える機会が来た時、私はこの失意の代償としてあらゆる返報を加え、渴望も久しい新郎の特権を力づくで奪い取つてやるのだと。

## 第二章 氣狂い部屋

けれど、こうした感情は、一切表面に出す事はなりません。アリスと私は、お互い、現密な友人を数多持つていましたが、彼等は、此の二人の間の不和を知つてはいなかつたのです。

で、さし当り私達は、何んという事なく、お互い頻繁に顔を合せていました。万一、彼女に対する私の意図の片鱗をも気取られもすれば、それは、私が贏ち得た一か八かの極めて危い成功のチャンスに取つて、正に、致命的なものだつたのです。私は寛容の仮面の下に彼女の行為を受け容れ、首尾よく感情を隠

蔽致しましたので、私が芝居をしているなどとは、毫も考え及ぶことはありませんでした。（これは、後日彼女が認めた所でもあります）

然し、諺にもある通り、待てば海路の日和あり、とか。

可成りの日数が経過致しました。その間、私は、復讐の念を放棄した方が賢明ではないかと迷う事再三でした。と申しますのは、私達の日常生活の環境が、私の目的にとつて都会の良い場所、又は時間的条件の下に、アリスを獲得する機会を絶対と云つてよい程約束してはくれなかつたのです。

ですが、私は、歯を喰いしばつて充たされない慾望と、漸増する憤怒の責苦に堪え乍ら只管、機会の得られる事を祈り隠忍を続けたのでした。

其の後、私は、たま／＼住居を変更する必要に迫られましたので、新宅を物色して居る中に、手頃な一続きの居間と二つのベッドルーム付きの家を見付けました。それだけで結構私の気に入つたのですが、更に家主は番小屋とか、物置とか呼んでいる部屋があるがそれも一緒に借りては貰えまいかと提案してきましたのです。私は此の追加を断りました。が



余りに執拗に申しますので、一応の検分だけすることにして案内を頼むことになりました。その部屋は入口、体裁といふ、共に非常に変つた造りを持つていました。入口は階段を登り詰めて廊下を少し行つた所で、両端に素晴らしく調和のとれた扉が取り付けられてありました。室内は大体四角で適度の広さを持ち、天井は高く、壁も完全で毀損されて居ず、出入口が一つ附いていました。光線と外気は、引窓、或は四本の頑丈な太い柱で支えられている天井の大部を占める天窓から流れこんでいました、更に壁の塗りは厚く、鉄環が四囲の壁に二列に一定の間隔をとつて取り付けられ、その一方は床面に接近し、一方は床上約8フィートの高さにありました、天梁から是一对のロープが柱の間に垂れ下つて居りました、廊下が部屋の中迄入りこんでいるため扉の側に出来た二箇所奥まつた所は、丁度格子で部屋他の部分と分離されている様で恰も独房の感を与えて居りました。

実際、部屋全体の構図の余りにも奇異な印象を与えますので、私はその由来を審してみました、家主は次の様に答えて呉れました。現在此の家の建っている物淋れた一角が、その昔流行の一中心地であつた頃、私立の癡癪

病院として建造されたものであつて、今我々の居る部屋は、狂暴な患者が幽閉されていた昔日の「気狂い部屋」に外ならず、患者達が発作を起して荒れ狂つた時、門や鉄環、ロープが彼等の自由を拘束し、壁の塗装や二重扉は部屋を完全な防音とし、其の狂奔が近隣の人達に迷惑を与えない様に考慮したものである。——家主は、更に付け加えました。防音装置の件は、造り事ではなく、現に疑い深い訪問客が何人ともなく試したものですよ、と。

電光の様に或る考えが頭に閃きました。何んと此の部屋は私の復讐成就にとつて願つてもない場所ではありませんか。而し首尾よくアリスを誘ひこむことに成功すれば、彼女はもう完全に私の薬籠中のものとなつてしまふのです、救いを求める悲鳴は聞える由もなく、却つて私の快感を助成する因ともなりましょう、それに門、鉄環、ロープ等、又、恰好の二、三の家具は、私の望む姿態を強要し括り上げて、彼女の肉体を享食する事が出来るのです。

斯うした妄想に狂喜した私は、此の部屋の追加を快く承諾したのでした。

私は凡ゆる場合を考慮に容れて考えを練りプランを立てました、直ぐと、密かに道具を

調製させました。それは、私とその肉体に征服慾を覚えた全ての女性を観念させるべく、特に設計を凝らした事実上の偽装機械で、而も、外観は飽くまで美しく気持ちよく見える家具でした。床には厚地のペルシヤ絨氈や粗羅紗の敷物を敷き詰めました。アルコーヴ（壁部屋）は名ばかりの写真現像室に仕立て臨機にトイレットと更衣室になる様設備致しました。

こうして受入れ態勢は整いました。

此の「密室」（私はそう呼びました）は、外観上、全く誰の目にもサツパリと美しく、居心地良さそうに見えるのでしたが、裏を返せば化粧した拷問部屋に外ならないのです。さて、此処で私はハタと計画の難点に逢着致しました、如何してアリスを罠にかけるかということでした。生憎と彼女は、ロンドンを少し離れた所に住んでいました、既婚の姉と一緒に暮して居て、姉同伴以外には殆んど云つてよい程此のロンドンにはやつて来そうにありませんでした、従つて焦点は、私が慾望を果すに足る充分な時間どの様にしてアリス一人だけを手中にすることが出来るかという事でした、私は此の問題に頭を絞りました。姉妹は社交上の義務や、買物なぞに不

規則的にちよい／＼とロンドンの市街に姿を現わしていました。私は「黙したる誠実さ」の方針に従つて、休息と気晴らしのために二人を歓迎しては部屋に招じ入れ、私の住居を利用して呉れる様勧めていたものでした。

そして、幾分は、私が缺かさず供応する豪華な食事のために、然しその大部分は、喧騒と轟音の陥する街を逃れて、此の「密室」に体を投げ出し、部屋の絶対的な静寂が醸す、心を和げる様な安らかさのために、やがて、彼女等が街へ来た時は、格別の要務もない限り必ず、ランチやお茶を採りに、友達と打ち連れて此の家を訪れる光栄を与えて呉れる習慣となりました。

此の訪問が、私に復讐成就の機会を齎す様祈つた事は附言するまでもない事でしよう。けれど、此の数ヶ月というもの、運命は失意と直結しているものゝ様でした。

私は、アリスを凌辱すべく手配した部屋で無邪気にも私の官能を刺戟する様に身をすり寄せ、又、意のままに身体を奪つてしまふ秘密装置の上に横たわるアリスを目のあたりに見、而も、姉マリオンの存在のため決行し得ずにいる時、あの「タンタラスの責苦」を身を以て経験するのでした。

（註ギリシヤ神話にして、ゼウスの子、タンタラス王が怒りに触れ罰として湖中に投ぜられ、其の飢えし時、己が頭上に懸る美果を取らんとすれば、其の果忽ちに退去し、以て、苦しめり、と伝ふ）此の状態は余りにも堪え難いものでした、拳句の果てに私は姉妹を二人ながら生捕りにしようと目録むに至りました。そうです、アリスを対象にして立案した刑罰にマリオンも加えるのです。そして此の考え自体、決して不愉快なものではなかつたのです、何故なら、マリオンは、身体つきはアリスより大柄ですが、気品もあり、其の容貌は、典型的な女性の美を誇っていました、私は真剣に此の筋書を秘めて頭を練りました。

私は一脚の脇掛椅子を造らせました、椅子の隠れた掛金を外しますと、自然、座を占める人間の体重が作用して機械が活動し、椅子の両肘が内側に折り畳まれ、身動き出来ない様に束縛してしまふ仕組でした。贅沢なアクセサリーや、掛金の取り付けを終わりますと、此の椅子は人を惹きつけずにはおかぬ素晴らしいものと生れ変わりました。そして、アリスは一日此の椅子を見ますと、我が身の自由を奪う恐ろしい機械とは露知らず、楽しげに腰

を下すことでしよう。私はその間にマリオンを襲つて捕えてしまふのです。けれど………あゝ、此の絶望的な手段を行使する前に、私の忍耐は報いられたのでした。

或る晩のことです。私の友人が訪ねて参りました。明日、姉妹が街にやつて来るが、お宅にランチに寄るから、との言伝を齎してくれたのです。所が驚いた事に、翌日、所定の時間少し前になつて、アリスが一人姿を現したのです、聞いて見ますと、友人に言伝を頼んだ後になつて姉のマリオンが熱を出し、一晩中工合が悪く、直つても到底街へ出る事は不可能となり、然しアリスにとつては、買物仕事は仲々の要事であつたので、それで一人で来たのだが、私に一応事情を説明するためにお寄りしたのだ、というのです。そして、これから何処かでランチにお茶とトーストを採りに行く、という事でした。

私は此の無視に強く抗議致しました。ですが、実の所、果して彼女を引止めて招じ入れる事の不自然性を我々ら痛感するのでした。が、其の時都合良く、気のきいた俄雨が降り始めました、全く恵みの雨です、此の雨は彼女の辞去を躊躇させました、雨で着物が台無しになつてしまふのです、とう／＼彼女も、



食事が済んだら直ぐお暇しますからと前置きして、私の家でランチを採るのに同意したのでした。

姉妹が私の家に立寄った時は何時も使用する予備のベッド、ルームに彼女がいる間、私の昂奮は頂点に達しました。アリスが私の部屋に一人で居るのです、事実にしては事が旨すぎる様でした、けれど思うのでした。私★



★は彼女をあゝの密室に導かねばならないのです。然し刻下の急は、彼女に警戒の念を起させないという一事でした、私は非常な努力の末、高ぶる昂奮を抑えつけました。アリスと食堂で顔を会せる迄には、私は平生の自分を取り戻していました。

ランチは直ぐ始められました。最初の程は、アリスは何んともなく窮屈そうにしていますが、私の巧みな会話運びは、やがて、彼女の気分をほぐし、常と変わりなく陽気にお喋りする様になりました。

私は故意にアリスの背が窓に面する様座席を定めておきましたので、彼女には窓外の大雨が目に見えて激しさを加えて行くのに気が付きませんでした。私は空模様が益々險悪な

様相を加えて行くのを充ち足りた思いで眺めました。ですが、一方、何時天候が逆戻りするか判つたものではありません。従つて、彼女を密室に連行するのが早ければ早い程、事態は私に有利に展け、そして、彼女に不利となつてくるわけです。で、私は、凡ゆる手段を講じてはランチのコースを早めました。

アリスは、至つてのんびりとコーヒーを楽しんでいました。と其の時、降りしきる雨が窓ガラスにバラ／＼当つたかと思うと、続いて気色の悪い雷鳴が高音響を爆発させました。アリスは、椅子から飛び上つて開き窓へ跳んで行きました。

「まあ！御覧なさい、此の雨！」

彼女は仰天して叫びました。

「ほんとに、今頃になつて降るなんて！」

私は窓辺に彼女と並んで立ちました。

「実際、生憎の雨ですね」

と答えました。そして、

「この雨じゃ、止みそうもありませんね。貴女に午後、此の雨の中をずつと済ませなければいけない大切な御用がなければいゝと思うんですが」

私が言い終つた途端、目も緩な稲妻が一閃したかと思うと雷鳴が轟き亘りました。アリ

スは、顔色を失つて後ろによるめきました。  
「あゝ！」

と叫びました。明らかに彼女は、怖いので  
す。しばらくして云いました。

「私とても雷が怖いよ。ほんとに、怖い」  
「それでは、書斎に逃げ出しましょうか」

私は、家の主人らしい心遣いを示して申し  
ました。

「あの部屋だったら稲妻も見えないし、絶対  
に雷も聞こえませんか。防音装置になつてい  
るんですからね。行きますか？」

アリスは躊躇していました。或いは、彼女  
の守護神が、私の表面他意なげな提案を受け  
容れた場合の運命を予告していたのでし  
ょうか。ですが、あゝ、其の瞬間、強烈な雷光が  
閃いて目を奪い、殆んど同時に破れる様な  
轟音が降つて参りました。之が事態を有利に  
導きました。

「えゝ、えゝ」

云うが早いか彼女は走り出しました。私も  
直ぐと後に続きました胸がドキ／＼高鳴りま  
した。彼女は慌しく二重扉を通つて密室へと  
入つて行きました。念入りに仕掛けた罠の中  
へ。

音もなく外扉に門を掛けますと、内側の扉

を閉めました。もうアリスは私のものです。  
遂に私は罠にかけたのです。今や私の復讐は  
完成されようとしているのです。彼女の純潔  
を誇る処女性性は、私の淫火に焼き踏み躪られ  
嫌恥なく色情の犠牲となるのです。焼こうが  
煮ようが、全く私の意のままなのです。  
私は直ちに残酷な意志を彼女の上に実行に  
移し始めたのでした。

### 第三章 罠に陥ちた小鳥

怒号する嵐に悩まされた後で味う此の部屋  
の神経を慰撫する様な静謐は、彼女には余程  
有難いものと見え、安堵の息を深く吸いこみ  
ますと、私を振返つて大きな声を張り上げる  
のでした。

「まあ、不思議ね、此のお部屋、ジャック。  
あそこの天窓にあんなに強く雨が当っている  
のに一つも音がしないのね」

「えゝ、その通り」

私は答えました。

「完全な防音なんですよ。僕の特別の目的に  
は、此処より恰好な部屋は、ロンドン中捜し  
たつてないと思つていゝんですよ。」

「特別の目的？何あに、ジャック、それ」  
彼女は興味を覚えて質問しました。

「貴女を私の意のままにする目的です」  
私は彼女の顔を真直ぐ見ながら、静かに答  
えました。

「君の処女性が僕に降伏することさ！」

彼女は撲られてもした様に飛び上りました。  
怒りで顔色が変わりました。自分の耳を疑う様  
にまじ／＼私を見詰めました。私は、冷たく  
立つたまゝ冷やかに見返しました。やがて、  
忿怒と屈辱の感情が彼女を押し包みました。  
「そんな事仰言るなんて、貴方は気が狂つた  
のね！」

烈しい憤りに語尾がブル／＼震えていまし  
た。

「あなたは自分を忘れていらつしやるのね。  
私達の間の友情をよくお考えなさい。そして  
分別を取り戻したら此の堪らない侮辱に対し  
て謝罪なさい。私、嫌らしい貴方なんかのい  
る所から出て行きますから、ダクシ」を呼ん  
で頂戴！」

其の瞳は、瞋恚にキラ／＼光っていました  
私は含み笑いをしました。

「君は、僕が実際正気をなくしたとでも考え  
ているのかい？君が最近、僕にした事で二人  
の間には済ませなくてはいいけない支払勘定が  
何んか残つてはいないかね？其の決算日が



今日やつてきたのさ。アリス。君は自分の役を僕の出血に於いて享樂した。今度は、僕がそれ以上のことを君に求めているんだ。君は僕の心を弄んだ。僕は、君の肉体を弄ぼうと思っているんだ。」

アリスは無言のまゝに、驚愕と恐怖に満ちた眼差しで、私の顔を穴のあく程に見詰めていました。けれど、私の冷静な、断乎とした態度に会つてよろめきました。その過去に言及した時、顔色は蒼白と変じ、将来を暗示した時、痛ましくも紅潮しました。少しの間を置いて私は、再び続けました。

「僕は慎重に此の復讐を計画した。此の部屋も僕の計画に素晴らしく好適なればこそ借りたのだ。そしていろんな場合を予測してそれに、準備したよ。例えば、力づくで君を征服する場合にしろ、勘定に入れてある。見なさい——」

斯う云うと私は、アリスの驚倒する眼に、家具其の他に取り付けてある機械器具を指し示しました。

「もう君は、僕がいゝと云う迄は此の部屋から出られないのだという事が判つたと思う。御承知の通り、君の救いを求める叫びも悲鳴も聞えはしない。そこで、君は進退を決める

んだ。二つの選択権を与える。二つ切りだ。どちらかを選ばなければいけない。——素直に僕の言う通りになるが——それとも、暴力か、だ」

アリスは、憤慨の余り、その可愛らしい足で地団駄踏みました。

「よくも貴方は、そんなこと私に云えるわね！」猛り立つて詰問してきました。

「私を子供だと思つてゐるの？　すぐ外へ出して頂戴！」

こう云いますと彼女は、恐ろしく毅然とした態度を取つて、扉へ向つて突き進んで行きました。

「君は子供じやないさ」

私は、残酷な笑を浮べ乍ら応じました。

「君は、僕の憧憬するものや、僕の慾望を満足させ得るものは皆んな持つてゐる、うつとりする程美しい女だよ。——だが、時間の無駄費いはしてもらまい」

此の午後まる／＼費いても、私の酔狂、妄想、経済にとつては充分な時間ではなかつたのです。

「もう一度尋ねる。従順か、それとも、暴力か？　若し時計が三十分の鐘を鳴らす迄に服従の意志表示をしない場合は、猶予なく僕は、

求めるものを、力づくで実行に移すという事を承知して貰いたい。さあ、あと君に残された時間は三分だ。此の三分間を有効に使用し給え」

こう云つて私は背を向けました。私は室内の手筈を整えました。暴力を以て事を運ぶ結果を楽しみ待つように。

感情に圧し潰された様に、アリスは戦く両手で顔を蔽い、眩掛椅子へ崩折れました。彼女は、今自分のおかれてゐる恐怖すべき立場をはつきり自覚したので。とは云え、どうしてムザ／＼私に屈服する事が出来ましよう。けれど、其の時は暴力があるのみです。そして、恐らく身震いする様な屈辱を受けねばならないのです。私は彼女を一人にして、その傍を離れました。準備を終えますと、静かに椅子に掛けて彼女を見守りました。

やがて、柱時計が三十分の時を告げ亘りました。即座に私は立上りました。と同時にアリスも、素早く椅子から飛び出し、部屋の隅の大寝椅子——その上に、伸べ上げたアリスの姿態を鑑賞しようとして心に描いていた様子です——に突進して行きました。私に抵抗し、争おうとの意志は明白でした。そこで、私は彼女の此の決定を歓迎して迎えたのです。そ

の決定は、私が淫情を最大限に活用する上に充分な理由を与えて呉れたからです。

「さあ、アリス、どうする。大人しく云うことを聞くか」

或る感情が、突然に彼女の胸を押しつゝんだようでした。彼女は、怒りに燃える眼で、私を真正面から睨み据えました。

「嫌！ 嫌!!」

激しく叫びました。

「私、軽蔑するわ！どんな事でもおやりなさい。脅迫すれば貴方の好色の犠牲になるとでも考えているのね。もう一度だけ御返事するわ。嫌！ 嫌!! あゝ、貴方は卑劣な獣よ、畜生よ！」

彼女は蔑みをこめて、ツとソツポを向いて金属的な嬌笑を上げました。

「お気の済むまゝ」

私は冷く申しました。

「笑つて気が済むならお安いことだ。誓つて申し上げますが、君は三十分以内に絶対且つ無条件に僕に身体を提供した上、降伏へ申し入れをすることになるだろうね。こいつは観物だよ」

「そうよ、観物よ、観物よ！」

寸刻を容れず、私は飛びついて捕えようと

しましたが、アリスは忽ち身をそらして逃げ出しました。私は猛烈に追いかけてました。しかし彼女は身軽に蝶の様に家具の間をあちこちと飛交つて、巧みに私の手を逃れていました。が、それを束の間のこと、私は、部屋の隅に追いつめてしまいました。確り掴み抱えこみますと、半ば引きずり、半ば抱き上げる様にして、電気仕掛の一对のロープが下つている柱の間に運んで行きました。

彼女は、死物狂いで跪き、救援の悲鳴を上げるのでしたが、一切お構いなく、両手首を捕えて縄をキツチリ巻きつけますと、釦を押ししました。ロープはピンと緊張して、徐々に抵抗を許さず、アリスの両腕を頭の真上に引上げ、両腕にかゝる引力は、容赦なく彼女を直立させてしまいました。

もう、彼女は全くの無力と化し、その衣服に包まれた肉体の神秘を訪ね、そこに侵入しようとするムズ／＼蠢く手を払いのける事も出来なくなつてしまつたのです。けれども、激しいシヨックと斗争とに、彼女の神経はひどく昂ぶつて居りました。落着く迄暫らくソツとしておいた方がいゝ様でした。やがて彼女は自分の受けるべき屈辱を一層はつきりと感知するのです。

さて、私はこゝで、アリスを観念させ、征服する目的の下に、種々装置した機械器具に就いて、説明を加えておいた方がいゝ様です。天井を支える各柱の間には、梁中に取付けの滑車が自在に操作出来る強靱な一对のロープが下つています。電気仕掛けです。仮に、アリスを真直ぐ立たせようと思えば、たゞ縄を彼女の両手に巻きさえすればよいのです。両手は真直ぐに引張られて頭上に位置し、彼女は、無理矢理棒立ちにされてしまい、同時に体位は無防禦と化し、私の意の儘となるわけです。又、柱そのものは、アリスを身動き出来ぬ様に縛りつける鉄環が取りつけてあり、その儘鞭打ち柱として利用出来ました。柱の側近くには、真珠の様に美しい乙女の裸像を此の上なく引立たせるに違いない暗いレザー張りの巨大な寝椅子がありました。八本の太やかな脚が支え、各支脚の後部には、レザーの中に隠れた電動装置の滑車に依つて伸縮する丈夫な鞣皮の紐が巻いてありました。滑車の上には、幾種類ものクツシヨンが良く調和されて重ねてありました。

アリス、マリオンの二人は、此の「トルコ寝椅子」(二人はそう呼んでいました)の上でその真実の目的が、アリスの処女を愛の女神



に供える犠牲の祭壇とは夢想だもせず、夢を結んだものでした。革紐の役目は、アリスが運命に順応しない場合、私の都合のよい体位に彼女を縛ることにありました。

グラランド・ピアノの鍵盤の傍には、これもレザー張りのピアノ連弾用椅子が置いてありました。高さを調節する装置は、普通のものと変りなく、異点といえば、たゞ、常のそれより、伸張度の大きい位のものでした。然も此の椅子の特徴は、その尋常でない長さにあつたのです。それは、楽に6フィートもありまじょうか。私は、何時でしたか、アリスの好奇心に迫られて、此の椅子は、ピアノを弾く人達が疲れた時なんかには、寝そべって体を休ませるのに工合いゝ様に造つたものだ、と苦しい説明をした事がありました。けれど、真の使用目的は遙かに現実的なもので、隠蔽された機械が自由に活動する一種の拷問台であつたのです。革紐が幾条も巧妙に張り廻らされて居り、私は、其の効果をアリスの優婉な肉体の上に試みんものと、期待に胸を躍らせているのです。似而非肱掛椅子に就いては先刻説明済みの所です。

読者は、もう恐らく私がアリスを身動きならす、どんな恰好にでもさせることが出来、

又その肉体に粹な意志を働かせている間もそのまゝ自由を奪つておく事が出来るのだという事がお解りになつた事と思います。ロープや革紐には全て、廻転式の鈎状締金がつけてあり、此の金具にアリスの四肢を繋ぐには特に注文して造らせた、極く柔軟で強い絹の輪索を使用しました。二重にした紐を彼女の

## 画帖 時代物責繪卷

極めて豪華な責めの色刷画帖が  
安価に皆様のお手元へ届きます

極彩色美術オフセット  
多色印刷特アート使用  
繪の大きさB5版  
画帖の大きさA4版

七月中旬完成予定  
五百部限定版・限定番号入

特價 二百円

(送料五十円)

○各葉説明文句入り○  
○絶対市販は致しません○

手首、足首に廻すのは造作ない事です。先ず一方の紐の端を、他端に通してグツと引張ります。その先を金具に引掛けてパチンと締め。如何程暴れもがいた所で、此の縄目を弛めることは出来ないのです。そして、柔い絹はアリスの纖絹たる肉体に擦り傷や、傷痕を留めることもないのです。

(続く)

## 画彦春三

- 一、山法師と靜御前
- 二、女スリと岡引き
- 三、淀吉と千姫
- 四、犬公方と侍女
- 五、八百屋お七の最後
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左エ門と腰元
- 八、小紫と惡旗本連

従来本誌に寄せられまじた多数愛読者の要望をとりいれまして時代物の責の画家として定評のある三条春彦氏に委嘱いたしました。こゝに八枚の極彩色の責繪卷の完成を見ました。何れも同好者の垂涎おくあたわざる傑作揃いであり、広く本誌読者の愛好の方々へ頒布いたします故何卒一本を御求め下さるよう、お待ちいたします。

## K K 通信大好評

見本一部二十円  
半年分 百円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として発足しましたK K通信は号を追って発展、今や特別会員の連絡誌としての母胎になりつゝこゝに第十一号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非K K通信も併せて御覧下さい。

## 特別會員募集

愛読者の強い要望に応えて特別會員制による諸行事を企画しました。会則の詳細はK K通信第七号に掲載、申込用紙は郵券添え申込下さい。

## 原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に適當と思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相當の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮って御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

## ◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に関して (塚本鉄三)
- 二、男子同性愛の件について (染田 玄)
- 三、縛られた女の件について (松井簫子)
- 四、編集方針の一般について (箕田京二)

## ◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年九月号以降より毎号若干保有して居りますが、八月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の分は一部送共九十円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。K K通信第五号以前品切れ。

## ◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封をお願いします。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尙理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願ひます。

## 先ず書店へ 御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

## ◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円  
半年分六冊(送料共)六百円  
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

## 奇譚クラブ

第七巻 第八号  
毎月一回一日発行

八月号 定価 百円

昭和二十八年七月三十日印刷  
昭和二十八年八月一日発行

編集人 箕田 京二  
印刷人 上田 庄之助  
発行人 吉田 稔

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。